神ノ原遺跡発掘調査報告書

2006

大　分　県
佐伯市教育委員会

序　　文

本書は、中山間地域総合整備事業、神ノ原工区圃場整備事業に伴い佐伯市教育委員会（旧直川村教育委員会）が大分県より委託を受けて実施した、神ノ原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

神ノ原遺跡の所在する佐伯市直川地域（旧直川村）は、佐伯市の西部の山間部に位置し、平成17年３月３日に佐伯市と直川村を含む８町村が合併して新「佐伯市」となりました。直川地域では清流番匠川の支流である久留須川が流れています。また、近隣に上ノ原遺跡・源六原遺跡があります。

調査の結果、縄文時代の層からは集石や土杭などの遺構や縄文土器、中世後期～近世の層からは、多数の柱穴や土壙墓、その他陶磁器類が出土しました。これらはそれぞれの時代における貴重な資料であり、今後佐伯市及び周辺地域の歴史を解明していくうえで役立つものと期待できます。

最後に、この発掘調査に深いご理解とご協力を賜りました大分県佐伯南郡地方振興局耕地課、大分県教育委員会文化課、元直川村教育委員会教育長鴨尾利夫様、地元神ノ原地区をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成18年３月

佐伯市教育委員会

教育長　　武　田　隆　博

至：大分

至：宮崎

直川中心部空撮写真

基本層序

有舌尖頭器

李氏朝鮮系白磁碗

例　　言

1．本書は、中山間地域総合整備事業　神ノ原工区圃場整備事業にともなう発掘調査報告書である。

2．遺構実測は、後藤一重・吉田和彦・下森弘之のほか、一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。そのほか塩濱浩之・永田裕久・秋吉博美・高瀬真矢・長田伸子・中牟田真由美・東みどりの協力をえた。

3．出土遺物の整理作業は、佐伯市教育委員会直川事務所（平成17年３月3日の合併まで南海部郡直川村教育委員会）でおこなった。

4．出土遺物の実測は、石器を清水宗昭・小畑三千代・森　隆重、土錘を宮田剛が、そのほかは吉田がおこなった。

5．遺構・遺物の浄書は、石器を清水・小畑・伊藤千里が、そのほかは吉田がおこなった。

6．出土遺物の拓本は、吉田および今崎真樹がおこなった。

7．出土遺物のうち、石器および礫の計測は、清水・稗田智美・大隈　慈がおこなった。

8．なお、本報告書での被熱の記載は、肉眼観察による。

9．遺構写真は吉田が、遺物写真は塩濱氏の手を煩わせたほか、吉田がおこなった。

10．第１章１を戸高浅生、第２章を竹中伸吾が執筆し、石器の一部に関しては清水宗昭氏（別府大学）、人骨に関しては田中良之・石川　健氏（九州大学）、馬骨に関しては加藤久雄氏（愛知学泉大学）にそれぞれ玉稿を賜った。そのほかの執筆は、吉田がおこなった。

11．本書の編集は吉田がおこなった。

12．発掘調査・報告書作成に係る図面・遺物・写真は、佐伯市教育委員会で収蔵・管理・保管している。

13．発掘作業およびその後の整理作業では下記の方にお世話になった。

下森　弘之・玉川　剛司・手柴　智晴（以上、別府大学大学院）

安藤　　高・今崎　真樹・岩切ケサ子・岩崎多美子・宇戸さゆり・梅田　拓典・大隈　　慈・大塚　和樹・大塚　利明・大畑キミエ・大畑記美代・小野　英義・甲斐ケイ子・甲斐　水江・河村　健二・高田フジノ・羽明しづか・稗田　智美・泥谷　新吾・泥谷　　政・平井　清源・広瀬　宏子・深田　誠二・村谷　侑亮・柳井　清水・柳井チエ子・柳井　秀子・山下　慎二・山下八重子・吉田　禮子・渡辺　辰生・渡辺　淑子

14．そのほか本遺跡の調査および報告書の刊行にあたっては下記の方に、ご教示および遺物実見等でお世話になった。記して感謝いたします。

今田　秀樹・荻　　幸二・小倉　正五・遠部　　慎・小林　昭彦・後藤　宗俊・坂本　嘉弘・佐藤良二郎・塩地　潤一・渋谷　忠章・下村　　智・金丸　武司・神田　高士・木村幾多郎・高橋　信武・竹野孝一郎・橘　　昌信・坪根　伸也・西　　哲弘・槇島　隆二・松本　　茂・松本　康弘・宮内　克己・柳田　裕三・吉田　　寛・綿貫　俊一（敬称略）

上記の方々のほか、狭川真一・白木　守・徳永貞紹・中島恒次郎・降矢哲男・美濃口雅朗・山村信榮各氏を含む第３回中世墓資料集成研究会（於：熊本）にご参加の方々。

目　　次

第１章　はじめに

１．調査にいたる経過 …… 1

２．調査体制 …… 1

第２章　地理的歴史的環境

１．位置と環境 …… 3

２．歴史と環境 …… 3

第３章　調査の成果

１．調査の概要 …… 4

２．基本層序 …… 4

第４章　遺構と遺物

１．縄文時代早期の遺構と遺物 …… 9

縄文土器 …… 23

縄文時代の石器 …… 32

２．縄文時代前期～晩期の遺構と遺物 …… 47

３．弥生時代の遺物 …… 47

４．中世前期の遺物 …… 48

５．中世後期以降の遺構と遺物 …… 48

第5章　自然科学的考察

神ノ原遺跡出土人骨について …… 64

大分県佐伯市（旧直川村）神ノ原遺跡出土のウマについて …… 66

第6章　まとめと考察

縄文時代早期

土器・礫などの分布について …… 69

土器について …… 69

石器について …… 70

集石について …… 73

中世後期～近世初頭

土師器椀について …… 81

掘立柱建物について …… 81

墓について …… 81

墓と建物について …… 82

図版目次

第１図 佐伯市直川の遺跡分布図 …… 2
第２図 神ノ原遺跡調査区位置図 …… 3
第３図 神ノ原遺跡遺構配置図 …… 5～6
第４図 土層図 …… 7～8
第５図 1区1号集石 …… 9
第６図 3区1号集石 …… 9
第７図 3区2号集石(左)、4号集石(右)および出土土器 …… 11
第８図 3区5号集石 …… 12
第９図 3区6号集石 …… 12
第10図 3区7号集石(左)および4区1号集石(右) …… 13
第11図 4区2号集石(左)、3号集石(右)および出土土器 …… 14
第12図 4区4号集石(左)、5号集石(右)および出土土器 …… 15
第13図 2区焼土 …… 16
第14図 2区1～3号土坑、および3号土坑出土土器 …… 17
第15図 4区1号土坑 遺構図および出土遺物 …… 19
第16－1図 接合関係図および縄文土器の垂直分布図（下） …… 20
第16－2図 石器の垂直分布図 …… 21～22
第17図 縄文時代早期の土器(条痕文および刺突文・口縁部) …… 24
第18図 縄文時代早期の土器(条痕文・胴部) …… 25
第19図 縄文時代早期の土器(無文・口縁部) …… 28
第20図 縄文時代早期の土器(無文・口縁部および胴部) …… 29
第21図 縄文時代早期の土器(撚糸文および押型文) …… 30
第22図 縄文時代早期の土器(底部および土器加工品) …… 31
第23図 剥片石器実測図 …… 33
第24図 大型剥片石器実測図 …… 34
第25図 石核・礫器・凝灰岩加工品実測図 …… 35
第26図 片刃礫器実測図 …… 36
第27図 片刃礫器実測図 …… 37
第28図 片刃礫器・両刃礫器実測図 …… 38
第29図 両刃礫器実測図 …… 39
第30図 磨石・敲石・石皿・砥石実測図 …… 40
第31図 縄文土器(前期以降) …… 47
第32図 4区2号土坑 …… 47
第33図 弥生土器実測図 …… 48
第34図 3区1号墓および出土遺物(上) …… 49
第35図 3区2号墓 …… 50
第36図 3区9号墓および出土銭 …… 50
第37図 3区10号墓(上)と3区5号土坑および出土遺物(下) …… 51
第38図 3区4号土坑および出土遺物(上)と3区8号土坑および出土遺物(下) …… 52
第39図 1区性格不明遺構 …… 53
第40図 3区掘立柱建物 …… 54
第41図 1区および4区掘立柱建物 …… 55
第42図 土師質土器および輸入陶磁器実測図 …… 57
第43図 近世陶磁器実測図 …… 59
第44図 土錘実測図 …… 60
第45図 3区馬埋葬遺構 …… 61
第46図 1・2区道路痕跡 …… 62
第47図 3区6号土穴および出土遺物と3区道路状遺構 …… 63
第48図 神ノ原遺跡出土石器対比図(剥片石器・石核) …… 70
第49図 神ノ原遺跡出土石器対比図(礫石器) …… 71
第50図 神ノ原遺跡出土礫器の分類 …… 72
第51図 神ノ原遺跡およびその周辺地域の有舌突頭器 …… 73
第52図 集石の構成礫の計測(その１) …… 76
第53図 集石の構成礫の計測(その２) …… 77
第54図 縄文早期包含中の構成礫の計測(その１) …… 78
第55図 縄文早期包含中の構成礫の計測(その２) …… 79

表目次

第1表 神ノ原遺跡の石器組成 …… 32
第2表 土器観察表(その１) …… 42
第3表 土器観察表(その２) …… 43
第4表 土器観察表(その３) …… 44
第5表 土器観察表(その４) …… 45
第6表 石器観察表 …… 46
第7表 神ノ原遺跡出土のウマの歯についての基礎データ …… 67

写真図版目次

馬骨 …… 68
調査区および1・2区全景 …… 84
3・4区縄文包含層検出状況 …… 86
3区最終サブトレ・4区1号土坑 …… 88
集石 …… 89
集石・2区焼土・2区土坑 …… 93
1次検出面（柱穴群） …… 94
墓 …… 96
性格不明遺構・3区土坑 …… 98
馬埋葬遺構・3区道路・3区6号土坑 …… 99
1区掘立柱建物、1・2区道路、柱痕ほか …… 100
遺物 …… 101

第１章　はじめに

１．調査にいたる経過

佐伯市は大分県東南部に位置し、豊後水道と山に囲まれた県南部の拠点的都市である。今回発掘調査を行った直川地域（旧直川村）は佐伯市の西部に位置し、周囲を山に囲まれ、清流番匠川の支流である久留須川が貫流している。平成１７年３月３日、佐伯市及び南海部郡８町村が合併し、現在は佐伯市となっている。

旧：直川村は平成１０年に中山間地域総合整備事業の指定を受け、産業振興のため様々な事業を実施してきた。平成１６年度に周知遺跡である神ノ原遺跡が含まれる神ノ原工区ほ場整備事業を実施するに当たり、大分県教育委員会文化課による試掘調査を平成１６年３月２日～平成１６年３月５日に実施した。その結果、縄文時代早期の遺構を検出した。遺構が発見された箇所の取り扱いについては、大分県教育委員会文化課、大分県佐伯南郡地方振興局耕地課、直川村教育委員会の三者で協議を行った結果、工法変更等による保存措置が困難であることから、本調査を実施することになった。

本調査は大分県佐伯南郡地方振興局耕地課の委託事業により直川村教育委員会が主体となりおこなった。平成１６年度は平成１６年６月７日～平成１６年１０月１３日の間、発掘調査をおこない、～平成１７年３月１５日まで遺物の洗浄・接合などをおこなった。平成１７年度は佐伯市の単独事業として遺物の実測、トレース等をおこない、報告書を作成に努めた。

（戸高　浅生）

２．調査体制

平成16年度（～平成17年3月２日）

調査主体　直川村教育委員会

調査指導　後藤　一重

（大分県教育庁文化課主幹）

甲斐　寿義

（大分県埋蔵文化財センター副主幹）

調査員　直川村教育委員会

嘱託　吉田　和彦

調査事務　直川村教育委員会

教育長　鴨尾　利夫

管理課長　竹中　伸吾

平成16年度（平成17年3月３日～）

調査主体　佐伯市教育委員会

調査指導　後藤　一重

（大分県教育庁文化課主幹）

調査員　佐伯市教育委員会

直川事務所嘱託　吉田　和彦

調査事務　佐伯市教育委員会

教育長　藤浦　武久

社会教育課長　久保田成太

直川事務所長　戸高　浅生

直川事務所主任　曽宮　浩也

平成17年度

調査主体　佐伯市教育委員会

調査指導　後藤　一重（大分県教育庁文化課主幹）

調査員　佐伯市教育委員会

直川事務所嘱託　吉田　和彦（～６月30日）

調査事務　佐伯市教育委員会

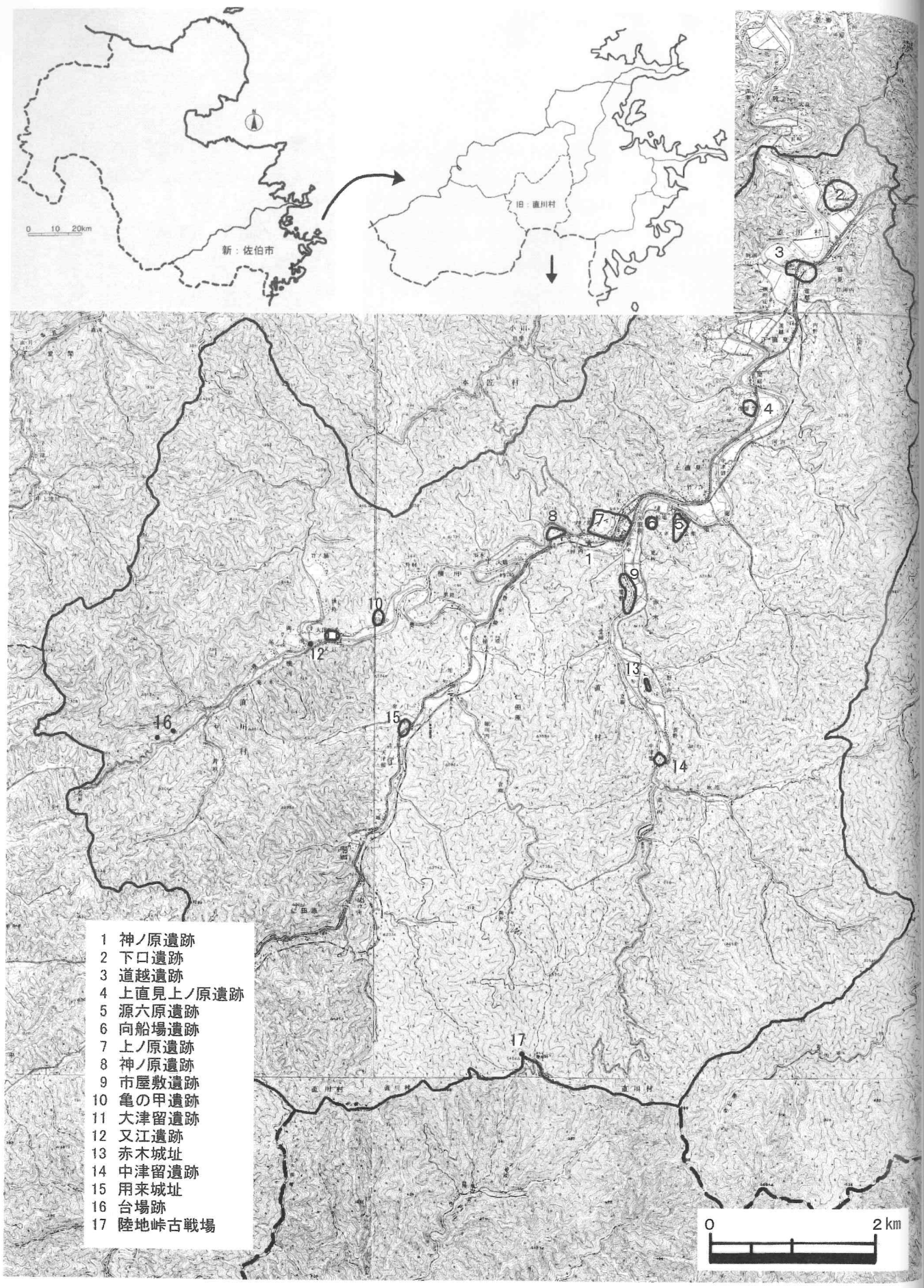
教育長　藤浦　武久（～５月20日）

武田　隆博（５月24日～）

社会教育課長　久保田成太

直川事務所長　戸高　浅生

直川事務所主任　曽宮　浩也



第1図　佐伯市直川の遺跡分布図

第2章 地理的歴史的環境（第１・２図）

１．位置と環境

佐伯市直川は大分県の南部に位置し、周囲を300m～500m級の山地に囲まれ南の一部は宮崎県と接する。地域の中央を番匠川の支流の久留須川が流れ、横川川と赤木川を合わして北上し、佐伯市本匠で番匠川と合流して佐伯湾に注いでいる。久留須川に沿って国道10号線と日豊本線が平行して中央部を南北に縦断しており、古くから交通の便には恵まれている。直川地域の面積の90%以上を山林が占め、久留須川に沿った沖積地に田畑が集中する。

遺跡の位置する神ノ原地区は佐伯市直川の振興局や郵便局・農協・小中学校などがある中心部に接しており、国道10号線、日豊本線、久留須川に囲まれた地域である。

２．歴史と環境

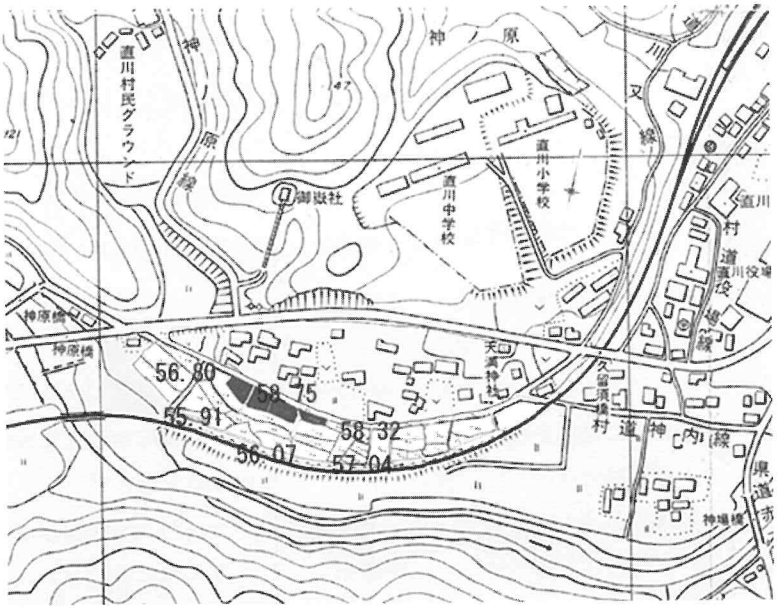
直川地域の大字である下直見・上直見・横川・仁田原・赤木は古くから「5か村」と呼ばれ、歴史的・地理的・政治的にみても似かよっており、交流も盛んであった。

久留須川の上流域の仁田原、横川川流域の横川、赤木川流域の赤木を合併し川原木村となり、上直見・下直見が合併し直見村が誕生したのは明治22年であった。合併促進法が制定される２年前の昭和26年４月に直見村と川原木村が合併し直川村が誕生した。

遺跡の在る神ノ原地区は上直見に位置し、横川川・仁田原の久留須川・赤木川が交わる要の所にあり上直見でも最も西に位置する。赤木の神内地区とは小道を挟んで接しており、地域の人でも間違えるほどである。江戸時代に上直見村の庄屋（小野家）がいたのも神ノ原であった。地区の氏神様である御嶽神社には旧直川村の村木に指定されていた「直見杉」の元祖といわれる樹齢400年以上の巨木がそびえている。また神ノ原地区は横川川に沿って宇目地域まで延びる県道上爪清見園線の基点となっており、横川地域はもとより、宇目地域の産物の輸送路となっている。

大正12年に全線開通した日豊本線は神ノ原駅（昭和36年に直川駅と改称）といい、神ノ原地区と隣接している久留須地区にあるが、直川地域の産物であった木炭や木材、米などの貨物輸送の集積場として、また人々の通学や通勤の人々でにぎわった。

このように古くから神ノ原地区は交通の要所として栄えてきた。　（竹中　伸吾）



第2図　神ノ原遺跡調査区位置図

第３章 調査の成果

１．調査の概要（第3・4図）

試掘調査の段階で、良好な状態でのアカホヤの堆積が確認でき、またその下層には、縄文時代早期の集石の存在が想定できた。またそれらの上層ではアカホヤを切り込む柱穴の存在も確認できていた。よって、縄文時代と中世の２時期を主とした複合遺跡の可能性が想定できた。

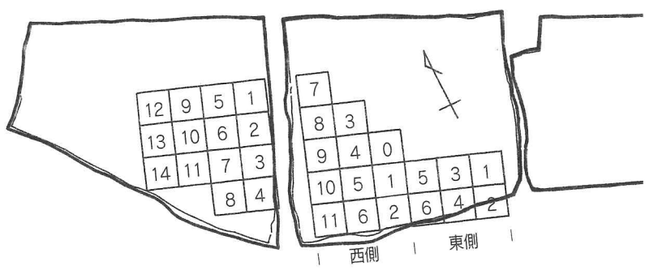
調査区は、調査予定地内の田圃を単位に設定し、東から順に１～４区と名づけた。地形的には、北側の標高が高く、南側が低い。よって田畑や宅地などの造成時の平坦面確保には、高所を削平し、低所をその土で整地していることは明白であった。予想どおり重機による表土剥ぎでは、北側の浅いところで　0.2m、南側の深いところで1.3mで遺構検出面に至った。その後、手作業で遺構の検出に努めた。表土除去後の検出面の状況は、第３図下段右のとおりである。北側ではアカホヤが残存せず、一部で縄文早期の包含層がうすく残存するのみで、ローム層が露出する箇所もみられた。遺構も南側に比べると少ない。一方南側では、３区・４区の一部で良好なアカホヤが確認でき、またそれを切り込む夥しい数のピット、墓、馬埋葬遺構などが主に検出でき、北側に比べ遺構密度著しく高いことがわかった。

調査はまず、アカホヤの上層に当たる遺構（主に中世後期から近世初期の時期）からおこない。その後、アカホヤが良好に残存する３区および４区の一部に関しては、アカホヤを除去した。なお、アカホヤの除去は、調査中にアカホヤに遺物が含まれる可能性が極めて低いと判断できたので、小型重機で除去した。

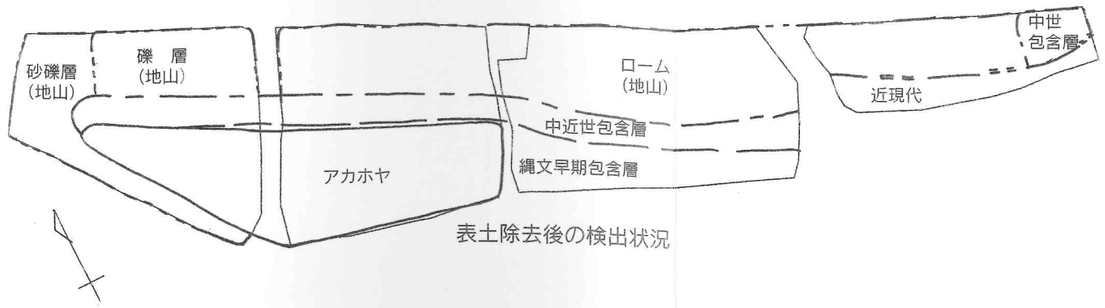
縄文早期の包含層は主に、３・４区に良好に残存していたので、２区の一部・３区・４区の一部を掘削した。包含層中に縄文土器・石器に加え、拳大～人頭大の夥しい量の礫がみられる層で、４区ではさらにこれに砂利が密にまざるという状況であった。これらのうち礫・縄文土器・石器（礫器を含む）の３者をトータルステーションにより座標で記録し取り上げた。この礫の取り上げをおこなう過程、もしくは取り上げ後に、集石を確認した。概ね、中央付近では取り上げ過程で、南側では取り上げ後に集石を確認した。現場では、取り上げ過程と取り上げ後の確認の違いは層位の違い、すなわち時期差であると考えていた。しかし、前述のとおり地形は北から南へ低くなっており、南側の包含層がより厚く堆積しているため、検出状況で差異が生じたものと判断した（なお、北側では最初の表土剥ぎ後の遺構検出段階で集石を確認している。）。これらの下層（３・４区中ほど～南側）では、さらに礫層とも呼ぶべきものが確認できたので、これらに関しては、３m×３mのグリッド（第３図下段左）ごとに取り上げをおこなった。その後、２区・３区・４区の下層をサブトレンチによって確認し、調査を終了した。

２．基本層序（第４図）

基本的な層序は、以下のとおりである。Ⅰ層は表土で田の床土など、Ⅱ層は中世後期～近世初期の時期を中心とした、それ以降の時期ものである。Ⅲ層はアカホヤである。Ⅳ層は、縄文時代早期の包含層で、礫を含むのが特徴である。土の質的には、砂利混じりであることがこの層の特徴でもある。３区（東側）以東は比較的砂利を含まないものであるのに対し、3区（西側）以西は砂利を含む層で、4区に至っては砂利がベースとなる箇所もみられる。しかし色調的には黒色層（$Ⅳ_1$層）と暗茶褐色層（$Ⅳ_2$層）からなるもので、これが基本となる。黒色層は、下層の暗茶褐色層に比べ堆積が薄い。また下層の暗茶褐色層は堆積が厚くさらに細分が可能である。詳細は第４図に譲るが、V_2層には下位の方に礫層と呼ぶべき箇所もある。Ⅴ層は、地山である。場所によって、ローム層・礫まじりのローム層・砂利および礫がまじる砂質の層の場合がある。第４図にアカホヤや縄文早期の包含層が良好に残存する３区～４区を中心とした土層を図示した。

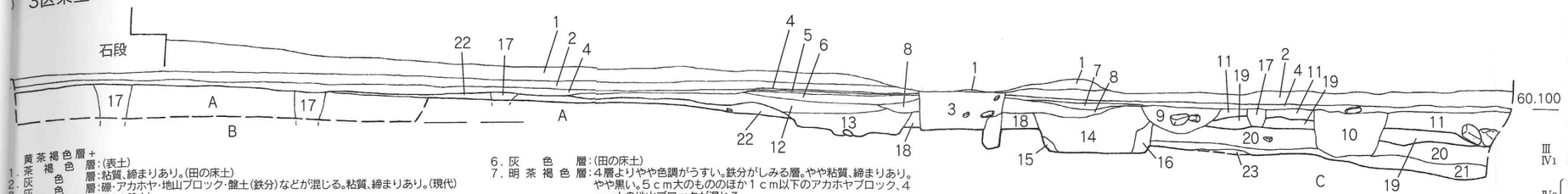


縄文早期下層礫群とりあげグリッド図



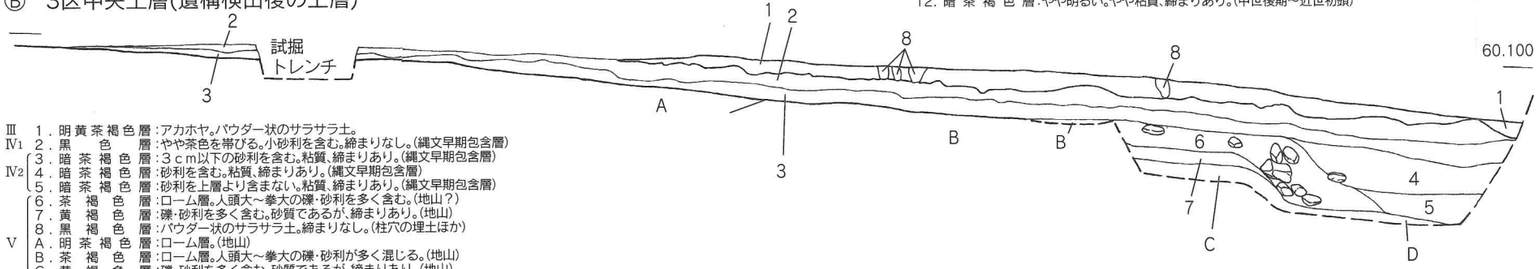
第3図　神ノ原遺跡遺構配置図

3区東壁



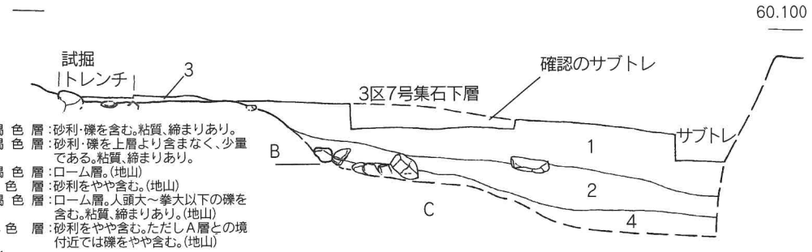
黄茶褐色層＋
1．茶　褐　色　層：(表土)
2．灰　色　層：粘質、締まりあり。(田の床土)
3．灰　色　色　層：礫・アカホヤ・地山ブロック・盤土(鉄分)などが混じる。粘質、締まりあり。(現代)
4．明　茶　褐　色　層：(田の盤土)
5．灰　色　層：(田の床土)
6．灰　色　層：(田の床土)
7．明　茶　褐　色　層：4層よりやや色調がうすい。鉄分がしみる層。やや粘質、締まりあり。やや黒い。5ｃｍ大のもののほか1ｃｍ以下のアカホヤブロック、4ｃｍ大の地山ブロックが混じる。
8．暗　茶　褐　色　層：粘質、締まりあり。(近世以降)
9．黒　色　層：基本的には8層に似る。人頭大～拳大の礫を含む。やや粘質、締まっている。(近世以降)
10．灰　色　層：やや茶色を帯びる。2ｃｍ以下のアカホヤブロックが混じる。(3区10号土壙)(近世初頭)
11．暗　茶　褐　色　層：やや灰色を帯びる。0.5ｍｍ程のアカホヤブロックが混じる。やや粘質、締まりあり。(中世後期)
12．暗　茶　褐　色　層：やや明るい。やや粘質、締まりあり。(中世後期～近世初頭)
13．暗　茶　褐　色　層：やや黒い。やや粘質、締まりあり。(3区8号土坑)(中世後期？)
14．黒　色　層：3ｃｍ以下のアカホヤ・2ｃｍ以下の地山ブロックが多く混じる。粘質、締まりあり。(3区9号土壙埋土)
15．茶　褐　色　層：3ｃｍ大の黄褐色の地山ブロックが混じる。粘質、締まりあり。(3区9号土壙埋土)
16．茶　褐　色　層：基本的には15層と同じ。やや暗い茶褐色の地山が主体的。(3区9号土壙埋土)
17．黒　色　層：アカホヤブロックが混じる。(柱穴)
18．黒　色　層：やや茶色を帯びる。5ｃｍ大の地山ブロックを含む。粘質、締まりあり。(近世初頭以前)
Ⅲ　19．明黄茶褐色層：アカホヤ。パウダー状のサラサラ土。
Ⅳ1　20．黒　色　層：やや茶色を帯びる。礫を含む。やや粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
Ⅳ2　21．暗　茶　褐　色　層：やや粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　暗茶褐色層＋
　　22．明　茶　褐　色　層：縄文早期の層とローム層の漸位層。(縄文早期包含層)
Ⅴ　23．明　茶　褐　色　層：ローム層。(地山)
　　A．明　茶　褐　色　層：ローム層。(地山)
　　B．明　茶　褐　色　層：ローム層。人頭大の礫を含む。(地山)
　　C．黄　褐　色　層：礫・砂利を多く含む。(地山)

Ⓑ　3区中央土層(遺構検出後の上層)



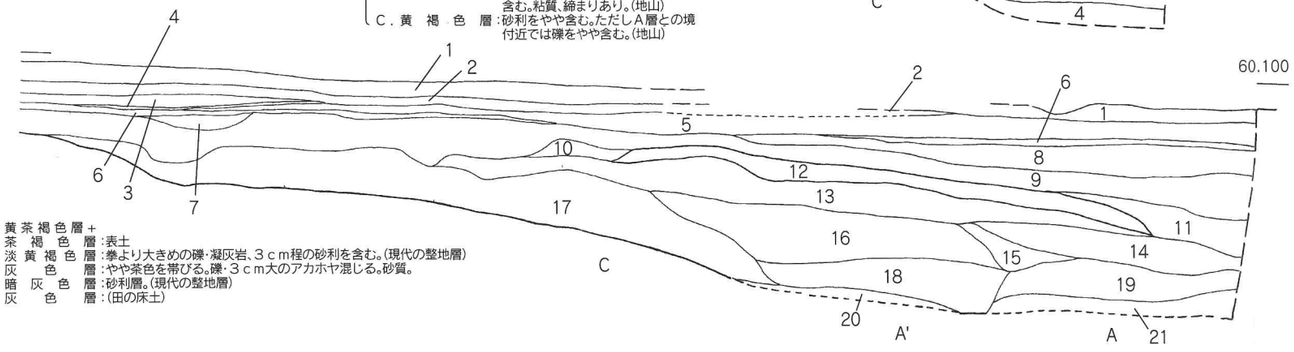
Ⅲ　1．明黄茶褐色層：アカホヤ。パウダー状のサラサラ土。
Ⅳ1　2．黒　色　層：やや茶色を帯びる。小砂利を含む。締まりなし。(縄文早期包含層)
Ⅳ2　3．暗　茶　褐　色　層：3ｃｍ以下の砂利を含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　4．暗　茶　褐　色　層：砂利を含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　5．暗　茶　褐　色　層：砂利を上層より含まない。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
Ⅴ　6．茶　褐　色　層：ローム層。人頭大～拳大の礫・砂利を多く含む。(地山？)
　　7．黄　褐　色　層：礫・砂利を多く含む。砂質であるが、締まりあり。(地山)
　　8．黒　褐　色　層：パウダー状のサラサラ土。締まりなし。(柱穴の埋土ほか)
　　A．明　茶　褐　色　層：ローム層。(地山)
　　B．茶　褐　色　層：ローム層。人頭大～拳大の礫・砂利が多く混じる。(地山)
　　C．黄　褐　色　層：礫・砂利を多く含む。砂質であるが、締まりあり。(地山)
　　D．淡黄茶褐色層：明茶褐色層(ローム層)と黄褐色層の漸位層(地山)

Ⓒ　3区(西側)　中央サブトレンチ（Ⅳ2層の礫層除去後の土層）



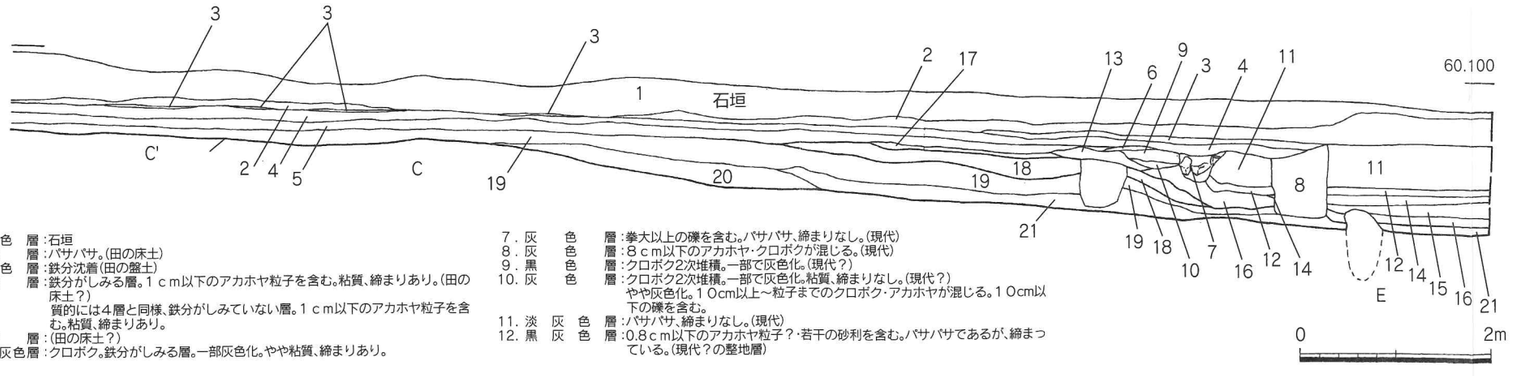
Ⅳ2　1．暗　茶　褐　色　層：砂利・礫を含む。粘質、締まりあり。
　　2．暗　茶　褐　色　層：砂利・礫を上層より含まなく、少量である。粘質、締まりあり。
Ⅴ　3．明　茶　褐　色　層：ローム層。(地山)
　　4．黄　褐　色　層：砂利をやや含む。(地山)
　　B．明　茶　褐　色　層：ローム層。人頭大～拳大以下の礫を含む。粘質、締まりあり。(地山)
　　C．黄　褐　色　層：砂利をやや含む。ただしA層との境付近では礫をやや含む。(地山)

Ⓓ　3区西壁



黄茶褐色層＋
1．茶　褐　色　層：表土
2．淡黄褐色層：拳より大きめの礫・凝灰岩、3ｃｍ程の砂利を含む。(現代の整地層)
3．灰　色　層：やや茶色を帯びる。礫・3ｃｍ大のアカホヤ混じる。砂質。
4．暗　灰　色　層：砂利層。(現代の整地層)
5．灰　色　層：(田の床土)
6．茶　褐　色　層：鉄分沈着(田の盤土)
7．黄茶褐色層：アカホヤの2次堆積。パサパサ、締まりなし。
8．暗茶褐色層：質的には、9層と同様であるが、鉄分がしみる層。
9．暗茶褐色層：やや黒い。0.5ｃｍ前後のアカホヤブロックを含む。パサパサであるが粘質、締まっている。
　黒色層＋：やや茶色を帯びる黒色土と20ｃｍ大のアカホヤブロックが混じる層。パサパサであるがやや粘質、やや締まっている。
10．明黄茶褐色層：やや茶色を帯びる。礫・3ｃｍ大のアカホヤ混じる。砂質。8ｃｍ大の礫、密に砂利を含む。
11．黒　色　層：パサパサ、締まりなし。(クロボク)
Ⅲ　12．明黄茶褐色層：パサパサ、締まりなし。(アカホヤ)
Ⅳ1　13．黒　色　層：砂質であるが、締まりあり。(縄文早期包含層)"
Ⅳ2　14．暗茶褐色層：拳大以下の礫・砂利を含む。粘質、締まりあり。
　　15．暗茶褐色層：17・18層より暗い。3ｃｍ大の礫、小砂利を含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　16．暗茶褐色層：17・18層より暗い。8ｃｍ以下の礫、小砂利を含む。パサパサであるが、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　17．暗茶褐色層：15・16層より明るい。礫・砂利を含む。パサパサであるが、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　18．暗茶褐色層：15・16層より明るい。17層に似るが、やや砂利を含むのみ。パサパサであるが、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　19．暗茶褐色層：やや砂利を含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
Ⅴ　20．明黄褐色層：ローム層。やや砂質。粘質、締まりあり。(地山)
　　21．明茶褐色層：ローム層。粘質、締まりあるが、19層より締まりなし。(地山)
　　A．明茶褐色層：21層に対応、ローム層。粘質、締まりあるが、19層より締まりなし。(地山)
　　A'．明黄褐色層：20層に対応、ローム層。やや砂質。粘質、締まりあり。(地山)
　　C．淡明黄褐色層：砂利・礫を含む。(地山)

Ⓔ　4区東壁



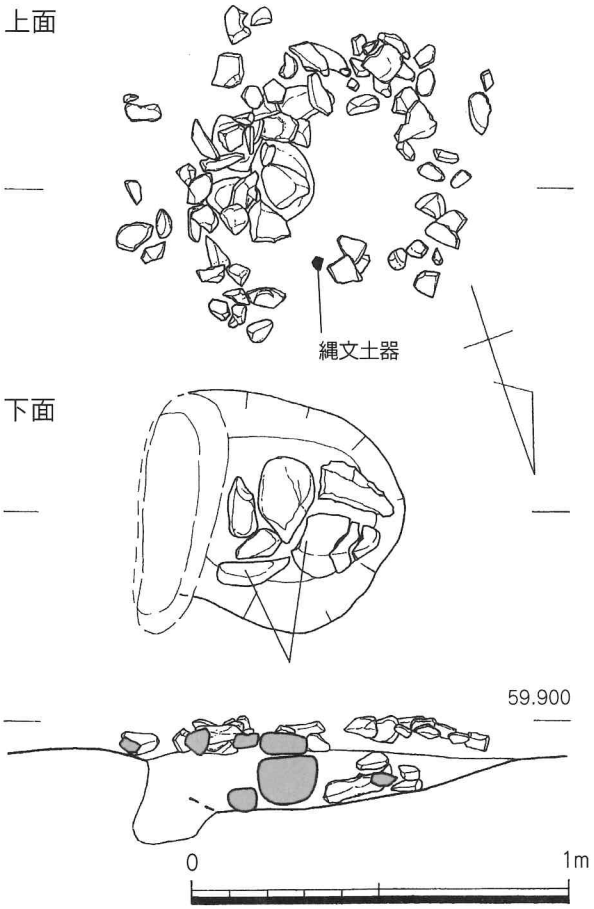
1．暗　灰　色　層：石垣
2．灰　色　層：パサパサ。(田の床土)
3．茶　褐　色　層：鉄分沈着(田の盤土)
4．灰　色　層：鉄分がしみる層。1ｃｍ以下のアカホヤ粒子を含む。粘質、締まりあり。(田の床土？)
　質的には4層と同様、鉄分がしみていない層。1ｃｍ以下のアカホヤ粒子を含む。粘質、締まりあり。
5．灰　色　層：(田の床土？)
6．黒色層＋灰色層：クロボク。鉄分がしみる層。一部灰色化。やや粘質、締まりあり。
7．灰　色　層：拳大以上の礫を含む。パサパサ、締まりなし。(現代)
8．灰　色　層：8ｃｍ以下のアカホヤ・クロボクが混じる。(現代)
9．黒　色　層：クロボク2次堆積。一部で灰色化。(現代？)
10．灰　色　層：クロボク2次堆積。一部で灰色化。粘質、締まりなし。(現代？)
　やや灰色化。10cm以上～粒子までのクロボク・アカホヤが混じる。10cm以下の礫を含む。
11．淡灰色層：パサパサ、締まりなし。(現代)
12．黒灰色層：0.8ｃｍ以下のアカホヤ粒子？・若干の砂利を含む。パサパサであるが、締まっている。(現代？の整地層)
13．黒　色　層：やや茶色を帯びる。0.1ｃｍ程のアカホヤ粒子混じる。やや粘質、締まっている。
14．黒灰色層：アカホヤ粒子が多く混じる。パサパサであるが、締まっている。(現代？の整地層)
15．暗茶褐色層：やや淡い。1ｃｍ以下のアカホヤブロックが密に混じる。やや粘質、締まりあり。(近世～現代の整地層)
16．黒　色　層：クロボク主体、5ｃｍ大のアカホヤブロック若干混じる。砂利も含む。パサパサであるが、締まりあり。
17．暗茶褐色層：4ｃｍ以下のクロボク、アカホヤ含む。(中世後期)
Ⅲ　18．明黄茶褐色層：パサパサ、締まりなし。(アカホヤ)
Ⅳ1　19．黒　色　層：やや茶色を帯びる。砂利を多く含む。拳大以下の礫も若干含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
Ⅳ2　20．暗茶褐色層：拳大以上の礫を濃密に含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
　　21．暗茶褐色層：やや黒い。密に砂利を含む。粘質、締まりあり。(縄文早期包含層)
Ⅴ　C．黄　色　層：礫・砂利を含む。砂質。(地山)
　　C'．黄茶褐色：礫・砂利を含む。砂質。(地山)(1区の北東コーナー付近の壁面土層に似る。)
　　E．暗茶褐色層：礫・砂利を密に含み、砂質であるが、上層の21層に比べ、かなり締まっている。よって(地山)と考えたが、すぐ隣の3区西壁の土層と比較すると、(縄文早期包含層)の可能性もある。

第4図　土層図

第4章 遺構と遺物

時期的には、縄文時代早期と中世後期～近世初期のものが主体をなす。遺構の主なものとしては、前者では集石12基が、後者では土壙墓４基が伴なう。また夥しい数の柱穴は、ほとんどが後者に伴なうものと考えられる。遺物の主なものとしては、縄文時代早期では縄文土器（無文・条痕文・押型文・撚糸文）やチャート製の有舌尖頭器・石鏃などの剥片石器、また礫器などが出土した。中世後期～近世初期では、陶磁器類の出土があり、国産のもののみならず、中国・朝鮮産のものも出土した。中でも、土壙墓から出土した李王朝産白磁碗は県内初の完形品である。加えて、土師質土器（陶磁器模倣）・銭貨が出土した。そのほか明確な遺構は確認できなかったが、弥生土器や中世前期の輸入陶磁器（青磁）が主な出土品である。

以下、詳述する。



第5図　1区1号集石

1．縄文時代早期の遺構と遺物

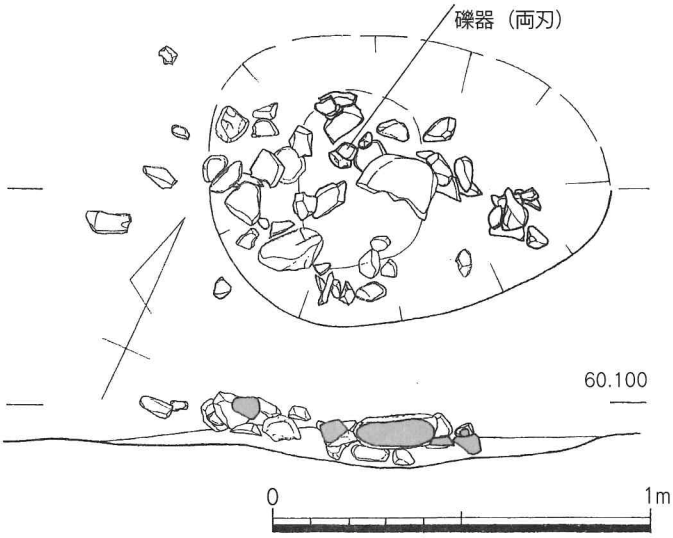
1区１号集石（第５図）：1区の西側に位置する。すぐ北を試掘トレンチが東西にはしる。

上部の礫は拳大前後～拳2個分ほどのもので構成される。西側は後世の撹乱により残りが良好ではない。下部はそれらの礫に比べ大きめで、人頭大前後のものである。掘り込み内に、上面をそろえ平坦を意識するように配置されている。その意識との関連であろうか、下部の礫には1組、接合するものがある。

礫の被熱に関しては、下部の礫は検出時においてはは被熱していないように見えたが、その後、洗浄し肉眼観察したところ、ほぼすべてが被熱していた。

出土遺物は、上部の礫付近で縄文土器が1点出土したのみである。

1区２号集石：調査時は、集石として判断したものであるが、以下の理由から削除した。１号集石とは試掘トレンチを隔てた北側に位置する。遺構検出時に付近から多くの礫が出土したため、その残存箇所を集石としたものの、洗浄後の観察では、ほぼ礫に被熱が観察できず、また円磨度の傾向（Krumbein1941、第53図下）も他の集石と著しく相違することから、本稿の概念でいう集石とは違うものと判断した。



第6図　3区1号集石

３区１号集石（第６図）：３区の北壁付近、やや東寄りの本遺跡の集石中、最も高所に位置する。

削平が著しくローム層の上層に縄文早期の包含層が10ｃｍほど残存する状態で集石を検出した。それを物語るかのように集石検出時には付近より弥生土器１点も出土した。よって、集石の残存状況は良好ではない。

拳大前後の礫で主に構成されるが、なかには人頭大の礫も２点存在する。浅い掘り込みをもつ。礫の被熱に関しては、現場では多少被熱があるものと思われたが、持ち帰り後、洗浄し肉眼観察したところ、75%ほどが確実に被熱していた。

なお、集石内での接合はみられなかったが、集石を構成する礫中に、礫器１点（両刃）が存在することが判明した。

３区２号集石（第７図）：３区中央やや東寄りに位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

上部の礫は拳大前後～拳2個分ほどのもので構成される。下部は拳大前後～拳2個分ほどのものを主体としつつも、それに人頭大の石も構成に加わる。掘り込み内で、人頭大の平石を中心にやや平坦を志向していると考えられる。

集石内での礫の接合は９組、他の集石との接合（３区５号集石）が1組、確認できた。前者の場合、接合する礫は、上部なら上部、下部なら下部という範囲での接合にとどまらず、上部と下部間においても接合をみた。また礫の被熱は、ほぼすべてにあることが確認できた。さらに、集石を構成する礫の中から、砥石（第３０図９）と凹石が確認された。

３区３号集石：調査時は、集石として判断したものであるが、以下の理由から削除した。２号集石の北側に位置する。上層のアカホヤはすでに削平されている箇所である。

礫の状況は、集まっているものの、やや散在するような傾向にあった。礫の大きさは拳大ほどである。礫除去後、浅い掘り込みがみられたので、掘り下げたところ、埋土にアカホヤブロックが混じるものであったため、縄文早期には伴なわないものと判断し、当該期の集石ではないと判断した。

なお、礫の被熱は80%近くあるものの、礫の円磨度の傾向（Krumbein1941、第53図下）が他の集石と著しく相違することを付記しておく。

３区４号集石（第７図）：３区の中央、西端に位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。礫層の上位に営まれた集石である。よって当初は集石であるのか認定に苦しんだ。しかし、遺構検出時に、被熱している石が当該箇所に密に観察できたこと、礫層の石に比べ、集石を構成していると思われる石のほうがやや丸みを帯びていることから集石として認定し、調査の結果、下部に人頭大以上の平石を配置していることを確認するに至り、最終的に集石と判断した。

上部は拳大～拳大よりやや大きめの礫で構成されていた。礫層の上位に集石を営むという性格上、礫層の礫と、集石の礫を完全に分類することは難しく、現場での肉眼観察によって被熱している礫が密集する範囲を集石として認定した。上部の礫を除去すると、下部の中心は、人頭大～人頭大以上の礫で構成されていた。この下位には、礫層の礫を取り除いて造ったと思われる掘り込みを確認した。礫層の上に、集石という性格上その範囲を明確にすることは難しいが、少なくとも下部を構成する人頭大～人頭大以上の礫を埋め込み、平坦に配置するだけの広さはあることが確認できた。

集石内での礫の接合は５組確認できた。また、集石を構成する礫の被熱の度合いは、90%近くであった。

なお、集石内もしくは集石付近より縄文土器が出土している。

１は口縁片で、端部は丸い。器形はやや外方を向く。調整は内外面ともに条痕の後ナデである。外面の条痕は斜め方向、内面のそれは横方向である。２・３は胴部片である。両者ともに一見無文にみえるが、２は、外面が斜め方向の条痕を丁寧にナデ消すもので、注視しないと条痕の痕跡を確認できない。内面はナデ調整である。部位は、下端部の屈曲具合から胴部片でもやや下位の方であろうか。３は内外面ともナデ調整である。

３区５号集石（第８図）：３区の中央、やや南寄りに位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大～拳2個分の礫で主に構成されるが、なかには人頭大の礫も存在する。今までの集石で確認できたよう

第7図　3区2号集石（左）、4号集石（右）および出土土器

に、下部に、人頭大の礫を敷くということも、掘り込みをもつということもない。

念のため集石の下位を掘り下げると、まばらに礫が出土した。しかし、これは集石に伴なうものではなく、ローム層の中に入り込んでいるもので、基盤層と判断した（第４図の地山Ｂに対応）。

集石内での礫の接合が５組、他の集石との接合（３区２号集石）が1組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱が確認された。

３区６号集石（第９図）：３区の中央、南端に位置する。前述の５号集石の南側である。包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

拳大～拳2個分の礫で構成される。前述の５号集石同様、下部に、人頭大の礫を敷くということも、掘り込みをもつということもなかった。

集石内での礫の接合は２組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱が確認された。さらに、集石を構成する礫の中から、片刃礫器が確認された。

３区７号集石（第10図）：３区の中央、南端に位置する。前述の６号集石の西側である。包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

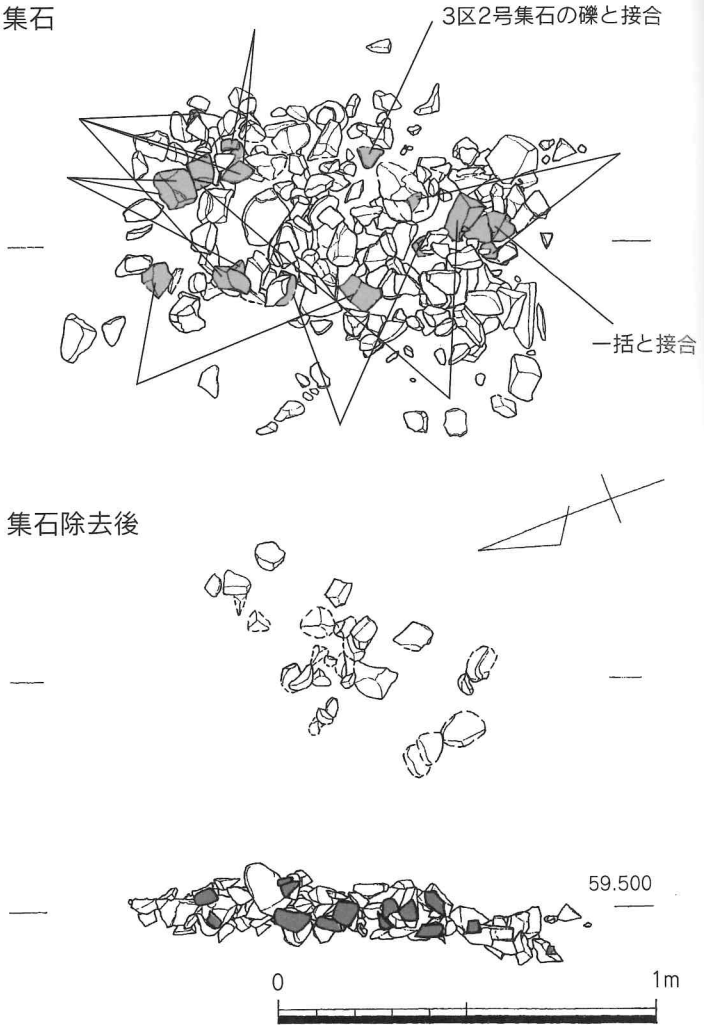
拳大～人頭大の礫で構成される。浅い掘り込みをもつ。この掘り込みの直上では炭化物も出土した。

念のため、浅い掘り込みの確認後、半切し、掘り込みの下層を確認したが、見解が変わることはなかった。

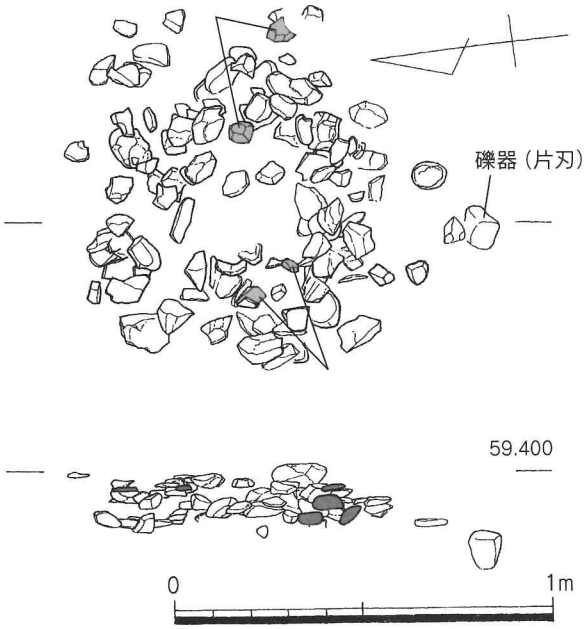
集石内での礫の接合は２組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱がみられた。

４区１号集石（第10図）：４区中央東寄りの４区の集石中もっとも高所に位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大前後～人頭大の礫で構成される。下部は、掘り込み内に人頭大～人頭大よりやや大



第8図　3区5号集石



第9図　3区6号集石

き目のものを配置しており、それらは礫の上面をやや平坦にするように配されている。

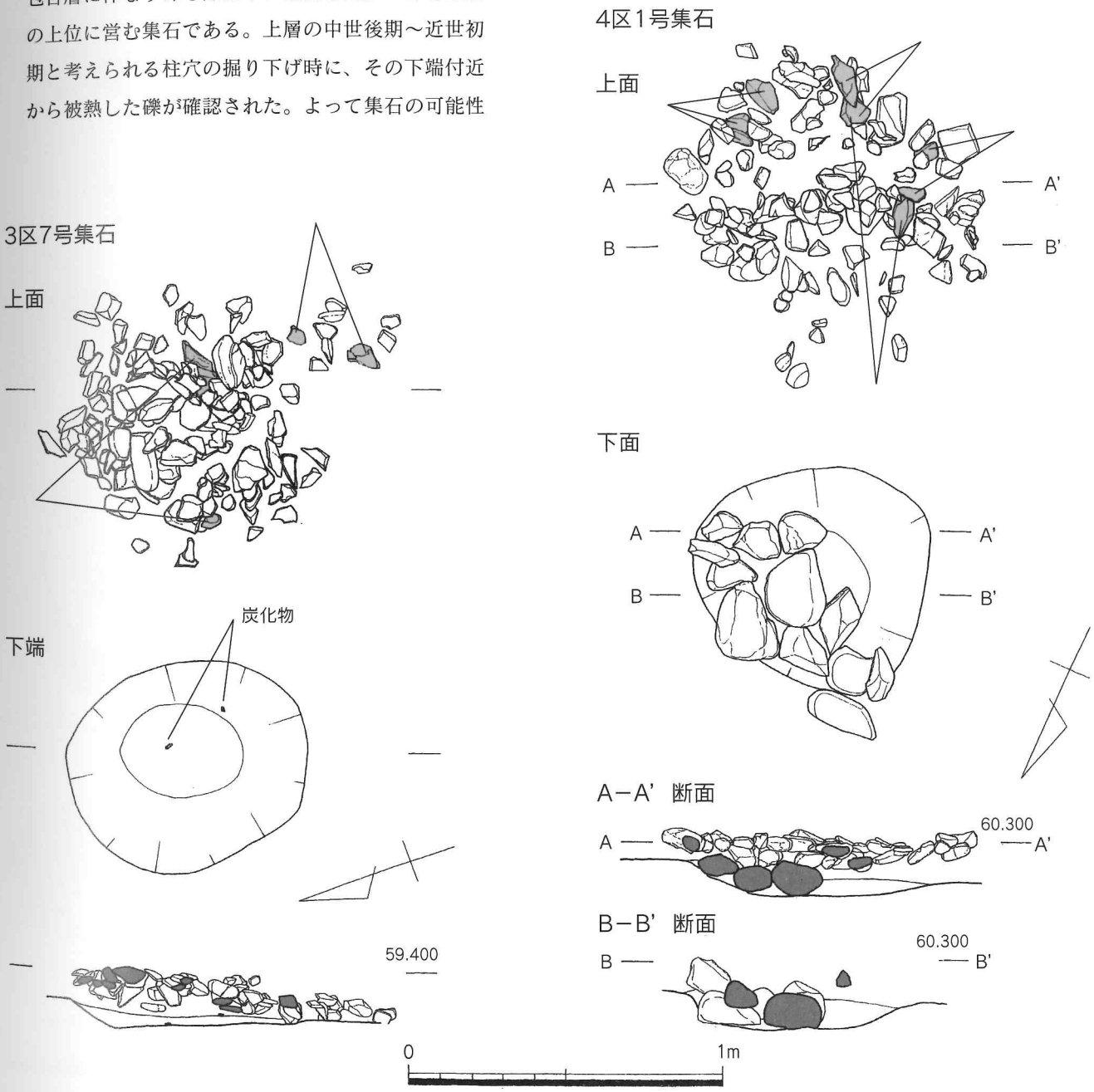
集石内での礫の接合は４組が確認できた。また礫の被熱は、すべてにみられる。

４区２号集石（第11図）：４区のほぼ中央に位置する。南側には試掘トレンチが南北に走る。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

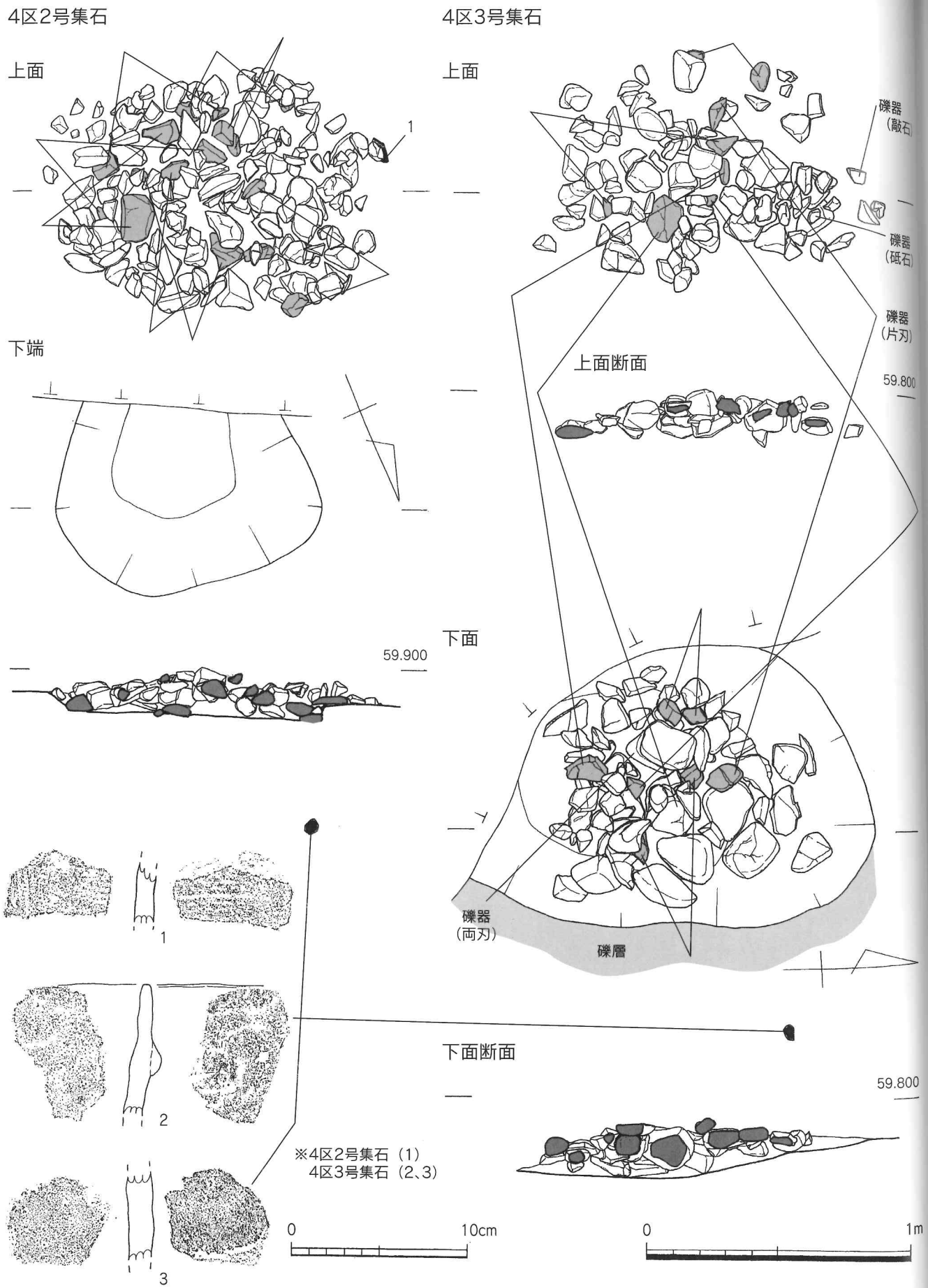
拳大前後～人頭大の礫で構成される。浅い掘り込みをもつ。

集石内での礫の接合は８組が確認できた。また礫の被熱は、すべてにあることが確認できた。なお１は、集石の西端で出土した縄文土器片である。胴部片と思われるが、調整は内外面ともに条痕の後ナデである。条痕の方向は外面が横、内面が斜めである。

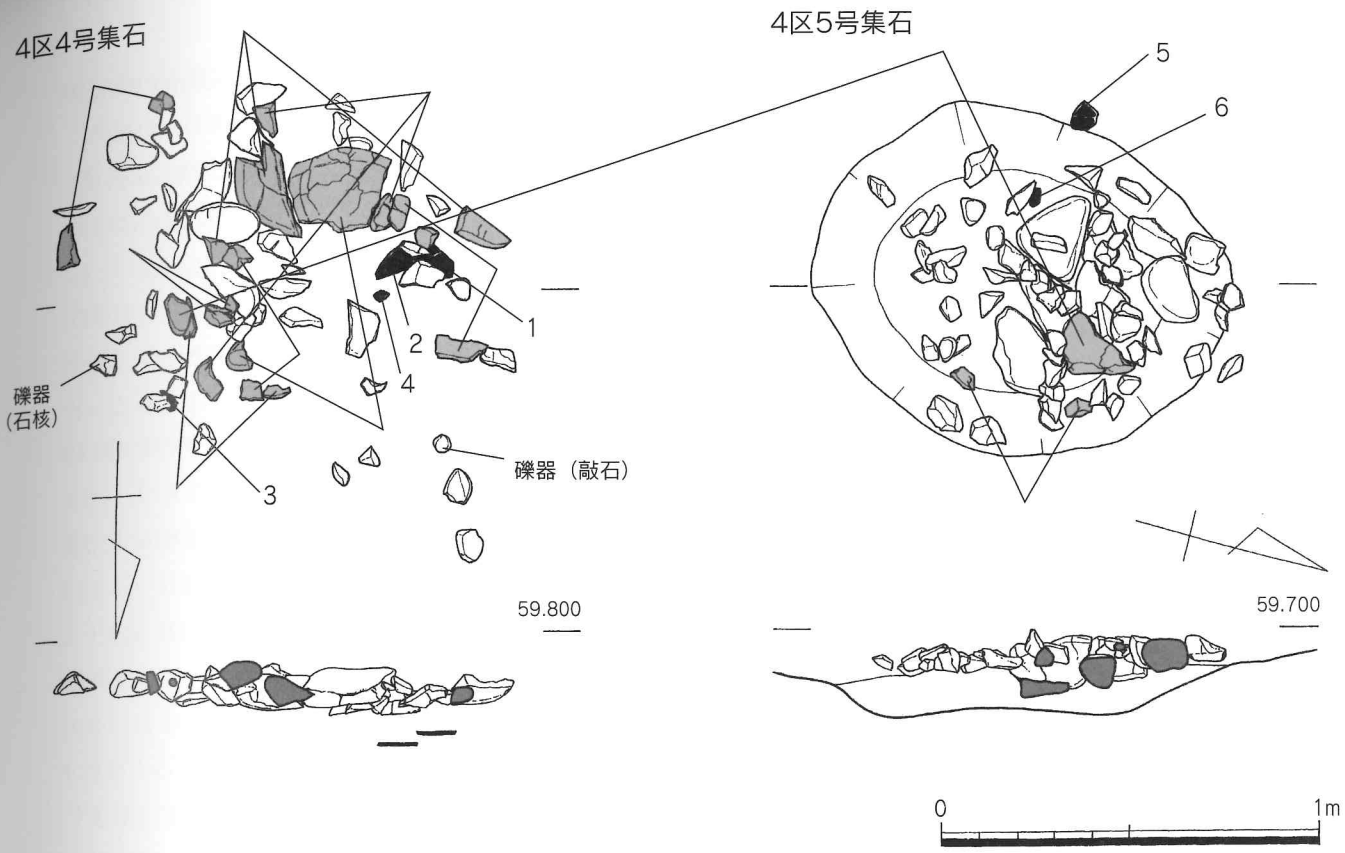
４区３号集石（第11図）：４区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ北側には４号集石・５号集石が所在する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。一部を礫層の上位に営む集石である。上層の中世後期～近世初期と考えられる柱穴の掘り下げ時に、その下端付近から被熱した礫が確認された。よって集石の可能性

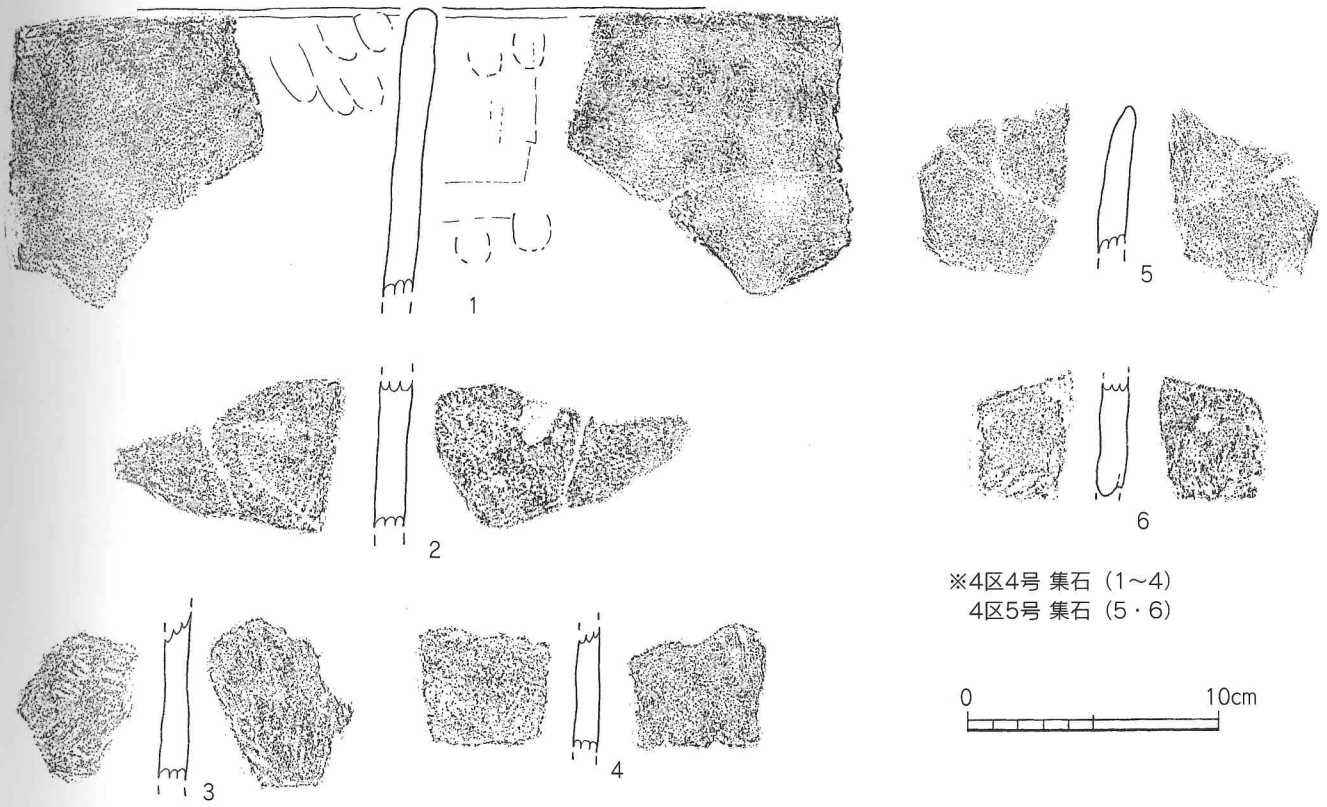


第10図　3区7号集石（左）および4区1号集石（右）



第11図　4区2号集石（左）、3号集石（右）および出土土器





第12図　4区4号集石（左）、5号集石（右）および出土土器

をその時点で想定していた。

上部は、拳大よりやや小さめ～人頭大の礫で構成されていた。下部は、拳大よりやや大きめ～人頭大よりやや大きめの礫を主体として構成されており、また礫の上面をやや平坦にするように配されていた。ただしかし、その配置に丁寧さは感じられなかった。

その下位には掘り込みがあった。一部を礫層の上位に集石を営むという性格上、礫層の礫と、集石の礫を見分ける作業が必要であった。現場作業時の観察では、集石の上位の礫と下位の礫では、下位の礫の方が被熱の度合いがより強く、被熱による亀裂や欠損を伴なう礫が多かった。それに比べ、礫層の礫は、被熱しておらず、また礫も角張ったものが多く、その大きさも拳大前後と小さい。人為的な配置とも考えられない、以上のことから２者を分離することができた。

集石内での礫の接合は８組が確認できた。接合する礫は、上部なら上部、下部なら下部という範囲での接合にとどまらず、上部と下部間においても接合をみた。また礫の被熱は、ほぼすべてにみられた。さらに、集石を構成する礫の中に、両刃礫器・片刃礫器・敲石・砥石が確認された。

なお、集石内もしくは集石付近より縄文土器が出土している。図示する2点は、両者とも集石よりやや離れた位置より出土したものである。２は集石の東側で出土したもので、外面口縁部直下に円形の瘤をもつ。口縁端部は丸い。器形は心もち外方を向く。調整は内外面ともナデである。３は集石の南側で出土したもので、胴部片である。内外面ともにナデ調整である。

４区４号集石（第12図）：４区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ西側には５号集石が、南西には３号集石が所在する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大～人頭大よりやや大きめの礫で構成されるが、ほかの集石に比べやや雑然としている。掘り込みもない。集石内での礫の接合が８組、他の集石との接合（４区５号集石）が1組確認できた。また礫の被熱は、ほぼすべてでみられる。さらに、集石を構成する礫の中から、石核と敲石（第３０図１）が確認された。

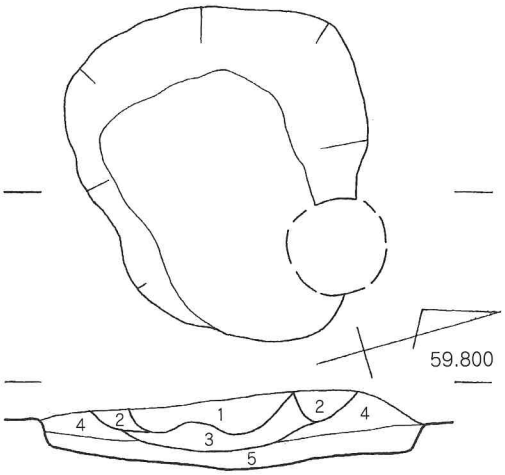
なお、集石内（３・４）、集石下層（１・２）より縄文土器が出土している。１・２・４が無文、３が条痕文である。１は口縁片でほぼ直立する。端部は隅丸の方形を呈す。調整は、外面が横方向の工具ナデの後ナデ、内面がナデである。内外面ともに口縁付近に指頭圧が目立つ。２～４は胴部片である。２・４の調整は内外面ともにナデ調整である。３のそれは、内外面とも条痕の後ナデである。条痕は外面が斜め方向、内面が横の後斜め方向である。なお、外面の条痕はほとんどナデ消されており、一見するとナデ調整のみの無文土器に見える。同様の破片（口縁片）が、残念ながら図示していないが、２区南西側土柱より出土している。

４区5号集石（第12図）：４区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ東側には４号集石が、南側には３号集石が所在する。包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

拳大前後～人頭大よりやや大きめの礫で構成されるが、４区４号集石同様、ほかの集石に比べやや雑然としている。しかし一方で、人頭大～それよりやや大きめの礫は、丁寧さは感じなれないものの、上面をやや平坦にするように配されている。よって上部の礫の部分は残存しておらず、下部のみが残存する集石と判断した。下位には掘り込みがある。

集石内での礫の接合が１組、他の集石との接合（４区４号集石）が1組確認できた。また礫の被熱は、ほぼすべてで確認できた。

なお、集石内より縄文土器（５・６）が出土している。５は、内外面の調整は摩耗のため不明であるものの、無文土器と考えられるものである。口縁端部は丸い。また口縁端部付近に黒斑がみられる。６は胴部片である。下端部に



注記
1. 明 褐 色 層：パサパサ締まりなし、パウダー状。(焼土)
2. 黒　色　層：粘質、締まり若干あり。炭化物まじり。
3. 淡 褐 色 層：粘質、締まりあり。(焼土の周縁)
4. 暗茶褐色層：粘質、締まりあり。(縄文早期の層)
5. 明茶褐色層：粘質、締まりあり。(ローム層)

0　1m

第13図　2区焼土

粘土の接合痕が確認できる。内外面ともにナデ調整である。

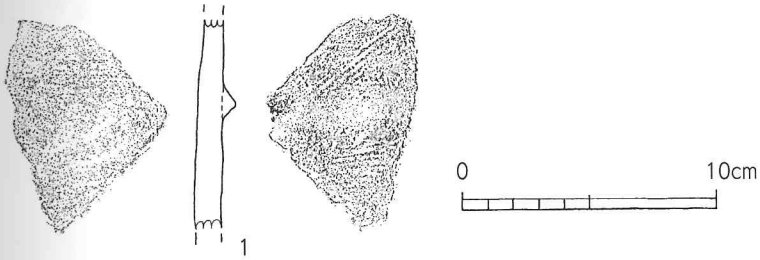
2区焼土（第13図）：２区の西端の中央部に位置する。遺構検出時に確認したもので、その帰属時期に関しては慎重を要した。埋土にアカホヤが含まれない点、周辺に薄くではあるが縄文早期の包含層が残存する点から当期に伴なうものと判断した。焼土内では、１～２ｃｍ程度の炭化物が若干みられた。よって念のため、埋土を持ち帰り、一部を洗浄したが、種子等は検出できなかった。

2区１～３号土坑（第14図）：２区のほぼ中央部に東西に３基並んで位置する。西から１号・２号・３号土坑である。どの土坑も長軸が0.5m～1.0m内におさまる規模である。埋土はすべて縄文早期の、２層に似たもので、色調はそれよりやや淡い暗茶褐色であった。よって当該時期に伴うものと判断した。

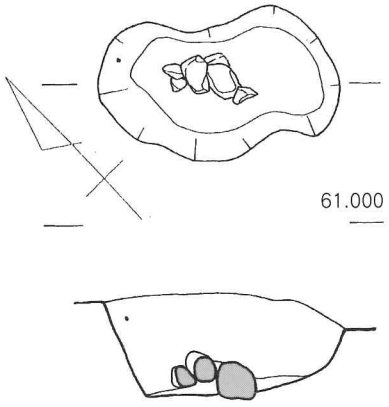
２号土坑からは縄文土器が、３号土坑からは縄文土器（第14図１）と頁岩製の2次加工剥片が出土している。１の出土した縄文土器は、外面に瘤をもつ。瘤は第11図２のような厚ぼったい円形の瘤ではなく、それよりも小ぶりで、円錐状を呈す整美なものである。上端部は口縁部下付近と思われるが、調整等をみるかぎりその兆候は確認できない。調整は、外面が条痕後ナデ、内面がナデである。なお条痕の方向は横のち斜めである。

4区１号土坑（第15図）：４区北東のコーナー付近に位置する。土坑内より、礫のほか、縄文土器片が出土した。縄文土器片は検出中より、概ね同一の個体である可能性が予測できた。よって、念のため残存する埋土を半切し、土層が分層できるか確認したが、分層できないものと判断した。なお、埋土は2区１～３号土坑同様、縄文早期のⅣ$_2$層に似たもので、色調はそれよりやや淡い暗茶褐色であった。

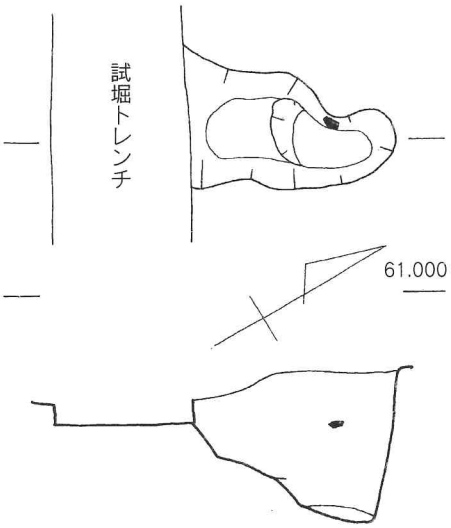
出土した土器の個体数識別の結果、２点を除くほかの破片が同一と考えられる条痕文土器の破片であった。残り２点のうち1点が、４に図示した条痕文土器、もう１点が前2者と別固体の図示に耐えないものであった。



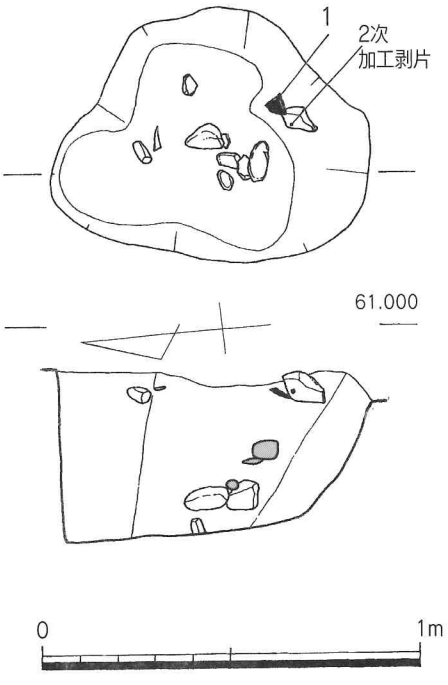
2区1号土坑



2区2号土坑



2区3号土坑



第14図　2区1～3号土坑、および3号土坑出土土器

１～３は、同一個体と考えて間違いない条痕文土器である。１が口縁部～胴部上位、２が口縁部～胴部下位、３が底部である。口縁部はほぼ直立し、胴部～底部にむかってゆるやかにすぼまる。口縁端部の断面は隅丸方形を呈す箇所と、丸い箇所とがある。底部は丸底である。外面口縁部直下には１のように焼成前穿孔が確認できる。完存せず、半欠するものであるが、その径は１ｃｍ前後と考えられる。また内面胴部上位には１のように径１ｃｍ程の竹管状のスタンプが確認できる。これもやはり穿孔を志向したものと考えられ、穿孔する場所の目印として利用したものの、結局は何らかの理由で穿孔を行わなかったものと推察する。調整は、内外面とも条痕のちナデである。条痕は、口唇部付近では横方向、底部内面では螺旋状に施すほかは、斜め方向である。そのほか、外面には黒斑、内面下位には煤の付着が確認できる。

４は、１～３とは同一個体ではない縄文土器の口縁片である。１～３に比べ器壁が薄く、また焼成具合が良く、一目で別個体と察しがつくものである。調整は内外面ともに条痕（ナナメ）後ナデである。また内面に煤が付着する。

５は、中央部に穿孔が確認できる石である。しかし、この穿孔が人為的なものなのか、自然なものなのかは賛否両論である。筆者は、断面にあるように両面から穿孔したように見える点、図面むかって左側の図にあるように穿孔時生じたと考えられる稜がある点、横断面でみると穿孔が垂直ではなく、やや斜めであることから自然の穿孔ではないと考える。なお、石材は砂岩である。

包含層ほかの出土遺物（第16～30図、第１～６表）

包含層から、土器・小型の剥片石器・礫器が出土した。礫器に関しては包含層中に含まれる礫を、前述の様に、主に上位に散在する礫をトータルステーション、下位の礫層とも呼ぶべき箇所を３×３のグリッドにより取り上げた（第３図）。その後、洗浄をおこない、礫器であるか確認をおこなって得られた結果である。100点以上の礫が人為的な剥離をされていることがわかった。そのほか後世の柱穴や表採資料としても土器・小型の剥片石器・礫器が出土しており、それに関しても本稿で図示している。

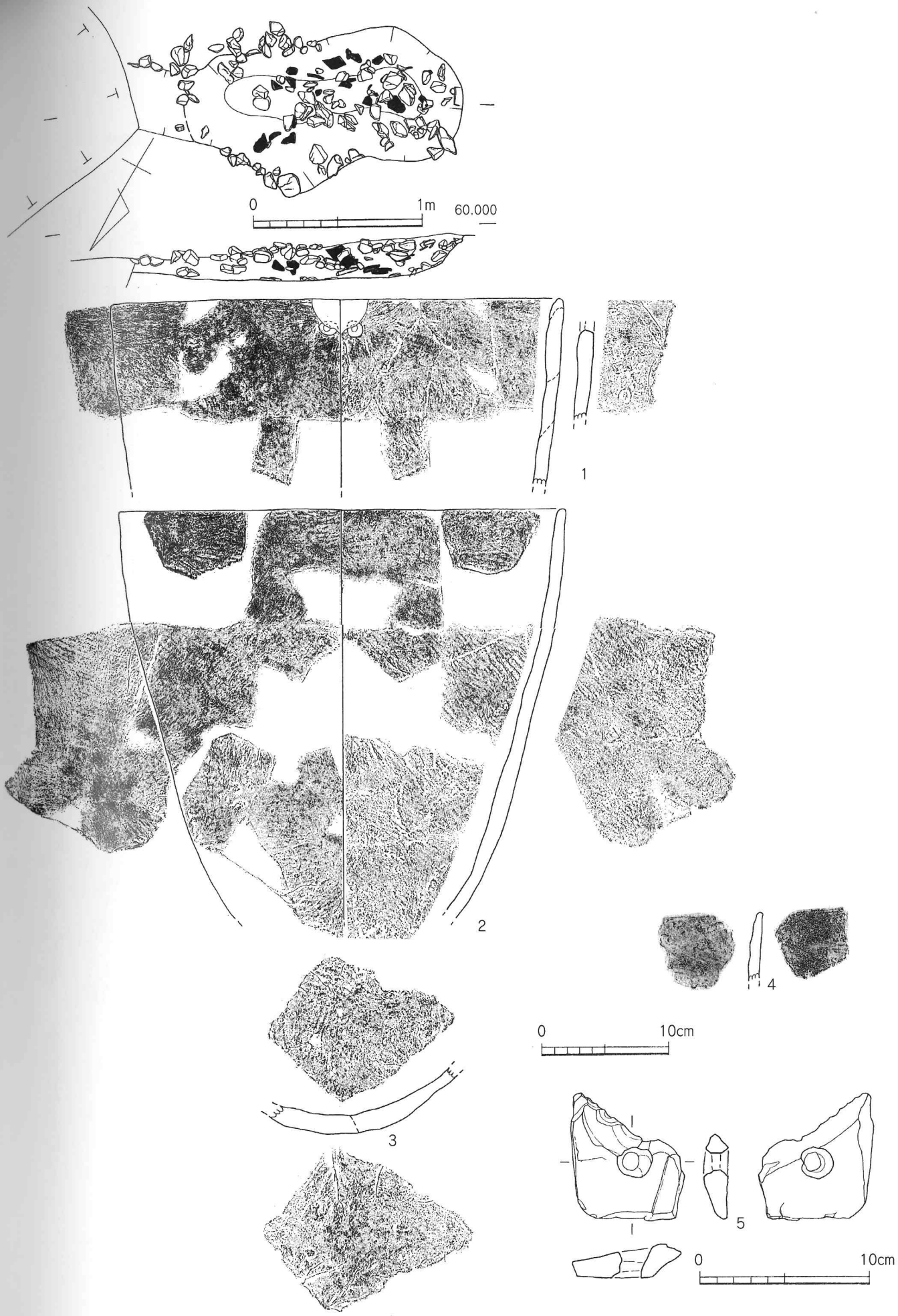
なお、これらのうち、トータルステーションで取り上げをおこなった遺物の分布状況は第16図のとおりである。何度も繰り返すようであるがさらにこれらの下位の礫層とも呼ぶべき層は、３×３のグリッドごとに取り上げた（第３図・第55図参照）。

第16－１図（上）は、土器や礫の接合関係である。残念ながらこれら包含層に含まれる礫と集石とは接合しなかった。土器、礫とも隣接するものが主に接合している。その一方で、土器②・礫③⑧⑩のようにやや距離の離れたものもある。

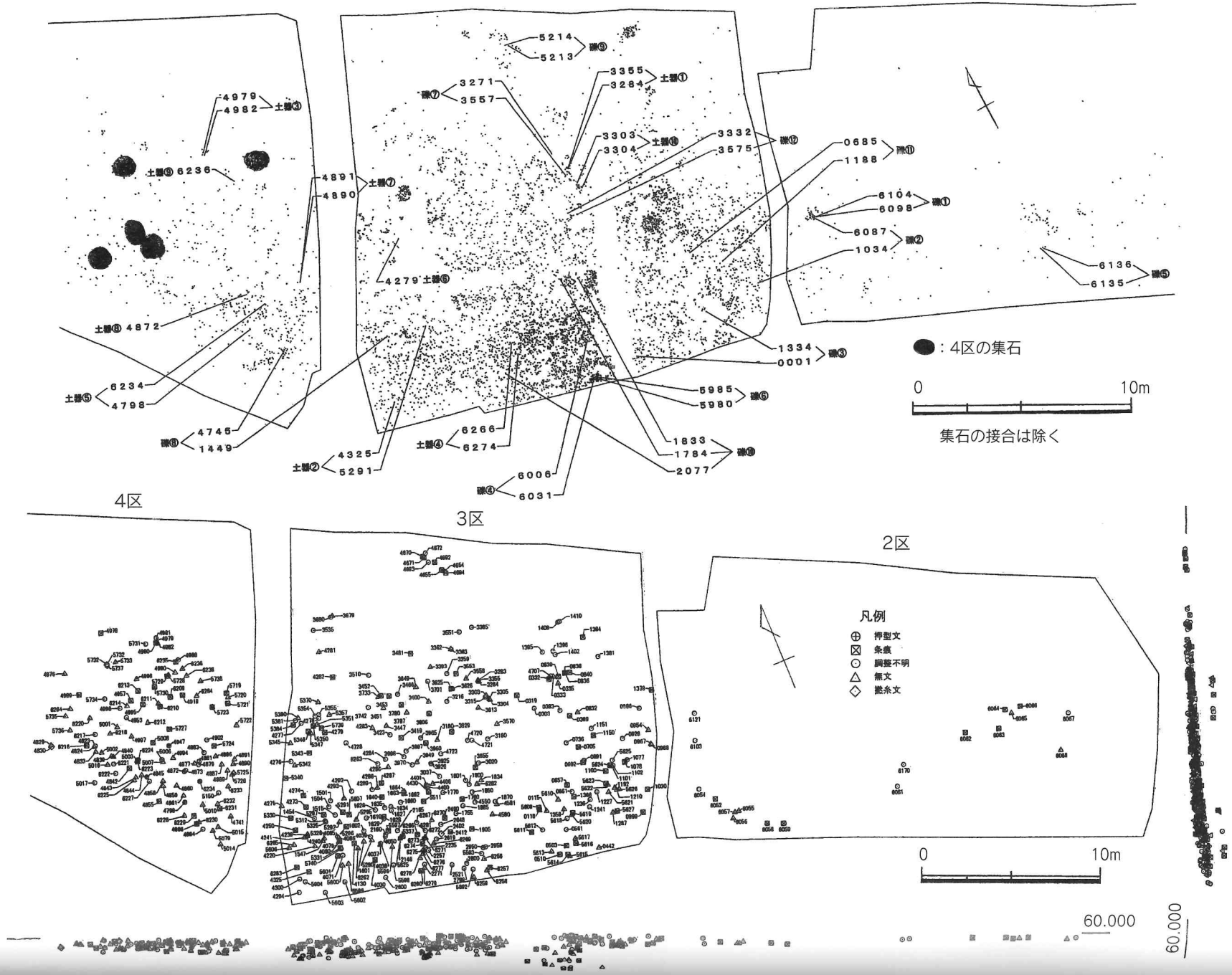
第16－１図（下）は、縄文土器の垂直分布図である。縄文土器は、大きく条痕文・無文・押型文・撚糸文に分類できる。底部はこれら４者のいずれに伴なうものかは接合では確認できなかったので調整不明にしている。分布状況をみると、レベルから２つに分類できる。両者ともに、本遺跡中で大多数を占める条痕文土器、無文土器を伴なっている。しかし、土層で確認できる$Ⅳ_1$と$Ⅳ_2$層との境では明確な差はでなかった。

第16－２図は、小型剥片石器、および礫器の器種別・石材別の垂直分布である。なお、最も出土したチャートは、色調・質等から７種類に分類した。小型剥片石器では、細分したチャートが、同じ細分同士で近接して分布するものもあることから、接合作業にもっと時間を割けば結合する可能性がある。土器同様これらの分布でも、レベルから２つに分類できる。しかし両者との境は縄文土器同様$Ⅳ_2$層中であり、土層で確認できる$Ⅳ_1$と$Ⅳ_2$層との境では明確な差はでなかった。

縄文土器は、大きく条痕文・無文・押型文・撚糸文に分類できる。なお、底部はこれら４者のいずれに伴なうものかは接合では確認できなかった。また少量ではあるが土器加工品も出土している。以下この分類にしたがって略述する。



第15図　4区1号土坑 遺構図および出土遺物



第16－1図　接合関係図および縄文土器の垂直分布図（下）

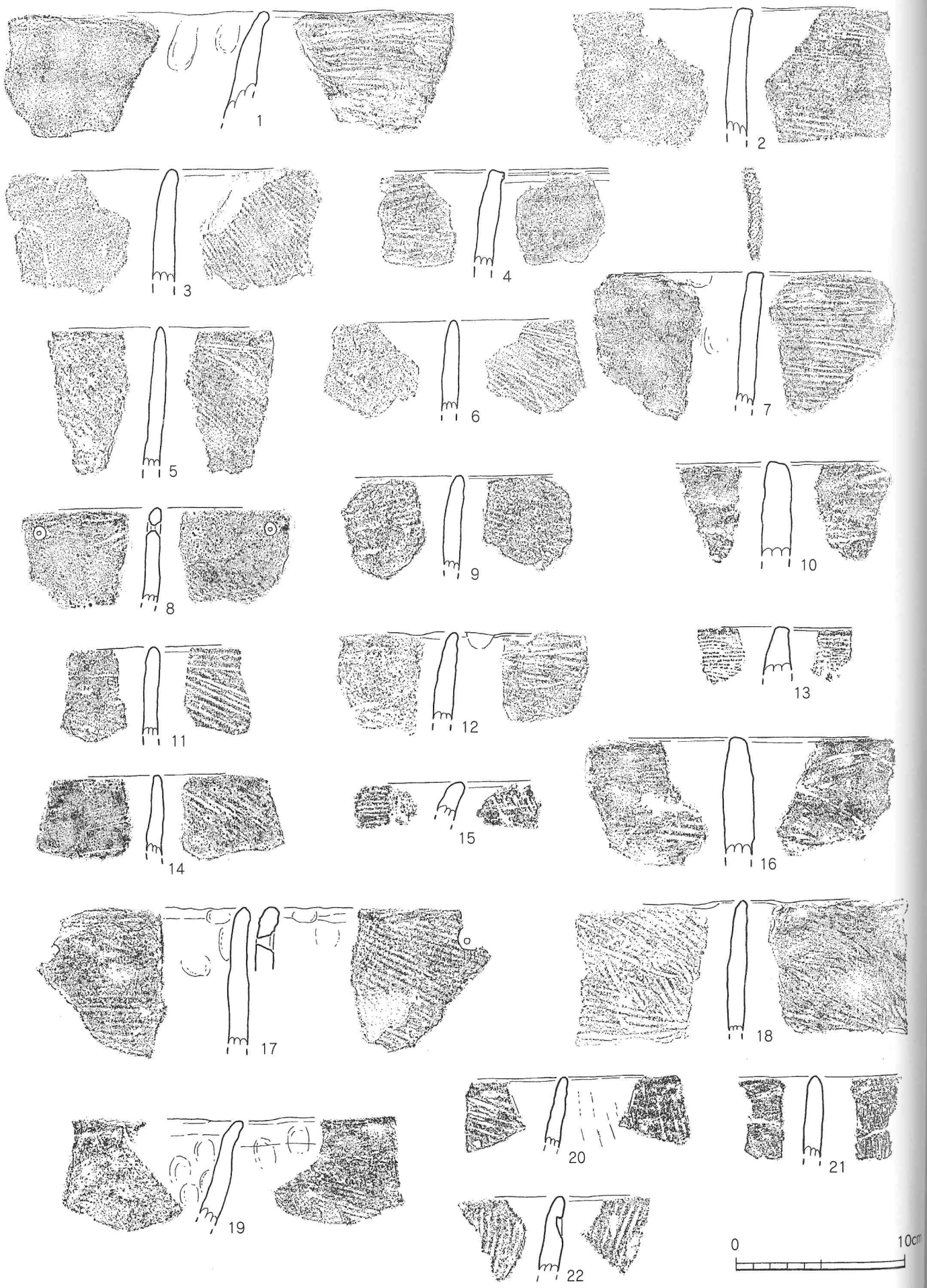
第16−2図　石器の垂直分布図

縄文土器（第17～22図）

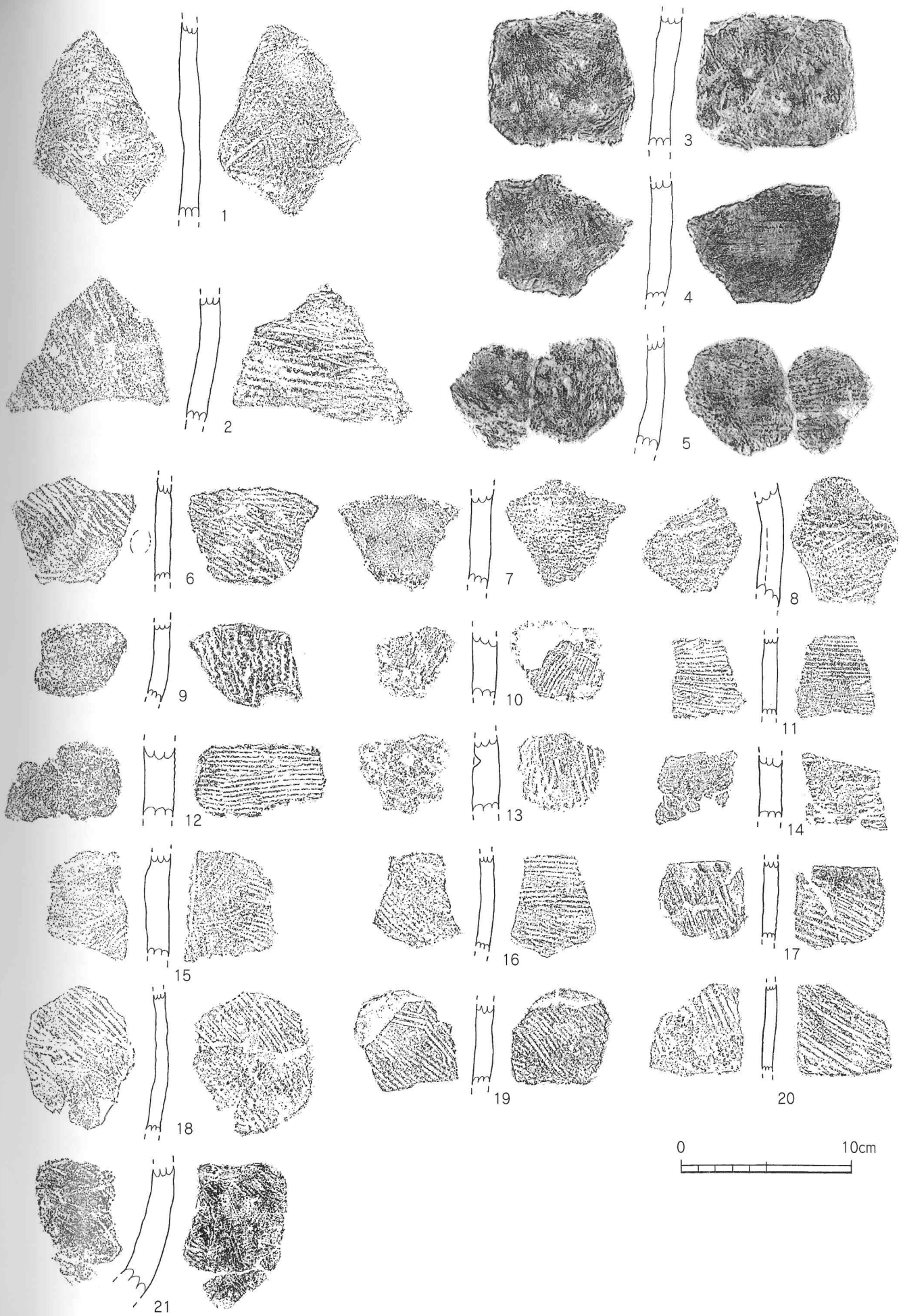
①条痕文土器（第17・18図）

器形は、①直立するもの・②ほぼ直立であるものの、やや外傾するもの・③外傾するもの・④外反するものの４つに分類できる。口縁端部からは、Ａ：丸いもの・Ｂ：方形のもの・Ｃ：やや方形のもの・Ｄ：方形で口唇部外側がやや突出するもの・Ｅ：端部がやや方形で、やや外反するものに分類できる。器壁の厚さからはａ：0.5ｃｍをややこえるもの・ｂ：1cm前後・ｃ：1.5ｃｍ前後・ｄ：２ｃｍ前後分類できる。口縁部片より説明する。第17図が口縁部である。

１は器形が外傾し、口縁端部はやや方形で、やや外反する。調整は、外面が横方向の条痕、内面がナデである。２は器形がやや外傾し、口縁端部は方形である。外面が横方向の条痕、内面がナデである。３は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。外面が斜め方向の条痕、内面がナデである。条痕の雰囲気は２に似る。器壁の厚さも、1.2ｃｍ・1.3ｃｍと近い。４は器形がやや外傾し、口縁端部が方形で口唇部外側がやや突出する。調整は、外面がナデ、内面が口縁部付近が横方向の条痕、それより下位が斜め方向の条痕後、ナデである。５・６・11・14は、器形が直立し、口縁端部は丸い。色調・胎土ともに類似するものである。しかし、条痕に違いがみられる。５・11は、外面の調整において、斜め方向の条痕を主体としつつ、口唇部は斜め後、横方向の条痕を施す。しかし６・14は横方向の条痕を施さず、口唇部はナナメ条痕後、ヨコナデを施す。なお、条痕の雰囲気は５・６・14が細いもので似る。11は前３者に比べ、やや幅広い印象をもつがシャープであることには変わりない。７は器形がやや外傾し、口縁端部は方形である。口縁端部に刻目がみられる。原体条痕使用か。調整は、外面が横方向の条痕、内面がナデである。条痕の雰囲気は11に似る。８は器形が直立し、口縁端部は丸い。口縁端部直下に穿孔がみられる。全体的に摩耗が著しいため、焼成前か焼成後かは判別しづらい。焼成後か？調整も同様の理由から条痕があること以外不明。９は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が細い斜めの条痕後ナデ、内面が横方向の条痕後ナデである。１０・１６は器形が直立し、口縁端部はやや方形である。器壁が1.8ｃｍ・1.9ｃｍと本遺跡の条痕文の口縁としては最も厚い。調整は双方とも、外面において、横方向や、従来の左上がりの条痕のほか、口唇部において左下がりの条痕を施す。その後ナデである。12は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が１０・１６同様、従来の左上がりの条痕、口唇部において左下がりの条痕を施すほか、口唇部において横方向の条痕を施す。条痕の雰囲気も１０・１６に似る。そののちは、今まで当図で説明してきた条痕後ナデ調整のどの土器よりも、比較的丁寧なナデをおこなっている。一部では完全に条痕が消えている。内面はナデである。器壁は、1.1ｃｍと１０・１６の概ね1/2である。１３は器形がやや外傾し、口縁端部はやや方形である。内外面とも細くシャープな条痕を横方向に施す。１５は器形が外傾し、口縁端部は丸い。調整は、小片のため慎重を要すが、外面は横方向の条痕の後、ケズリ状の縦方向の条痕である。そのナデを施している。内面は横方向の条痕である。17は器形が直立し、端部で心持ち外傾する。端部は丸い。またナデ調整のためやや歪曲している。調整は外面が斜めの条痕、内面が横方向の条痕の後ナデである。口縁端部直下には外面から行われた焼成後穿孔が確認できる。18は器形が直立する。端部は丸く、ナデ調整がやや丁寧さを欠き、歪曲している。調整は内外面とも条痕である。条間の幅は５ｍｍ程と本遺跡中の条痕で最も幅が広い範疇に入るものの、整美な条痕であることは注目に値する。内面では条痕同志の切合いが明確に確認でき、下から上へ横方向から斜め方向に条痕の向きが変化することが確認できる。焼成は本遺跡中最も良好な部類にはいり、第19図17と同様に堅緻である。１９は、器形は外傾し、口縁部はさらに外反するものである。端部は丸く、ナデ調整がやや丁寧さを欠き、歪曲している。調整は、外面が斜め方向の条痕後ナデ、内面がナデである。指頭圧が目立つ。20は器形が外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が工具ナデ後ナデ調整である。ナデ調整前は、器壁の具合からその他の調整もあると思われるが、ナデ調整が丁寧であるため不明である。内面は条痕である。21は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は外面が縦方向に擦痕のような細い条痕？が確認できる。内面はナデである。２２は器形が外傾し、口縁端部は丸い。内外面とも縦方向に近い斜めの条痕が確認できる。また外面口縁端部直下には刺突が確認できる。



第17図　縄文時代早期の土器（条痕文および刺突文・口縁部）



第18図　縄文時代早期の土器（条痕文・胴部）

これらの内、器壁に関しては、本文中にとくに記載がない限り、１cm前後～1.5ｃｍ程である。

出土場所は、１～15までが、Ⅳ2層、16～18が、Ⅳ1層、19～22が包含層出土である。

胴部は第18図である。１は調整において、内外面とも条痕が交差するように施している。詳細はその後のナデ調整が丁寧なため条痕が一部でしか残存せず不明である。２も同様に外面において交差する条痕が確認できる。条痕の雰囲気は第17図10・16に似る。しかし、その後のナデ調整は局部的で条痕を大いに残す。13も同様な条痕の雰囲気である。条痕も交差している。第17図10と器壁の厚さが似かよっており、同一個体といかないまでも同一器種の可能性もある。内面に焼成後穿孔途中らしきものがある。また煤も付着する。３～５は、第20図６・７同様に内面が白っぽいものである。３の調整は、外面が縦・横の条痕が確認できる。その後ほとんど条痕がわからない様にナデを施すため、縦・横の条痕の切り合いの先後関係は判別がつかない。内面も条痕の後、同様の丁寧なナデを施す。４・５の外面の調整は、３に比べナデ調整が丁寧ではなく、条痕が残る。しかし、内面は３同様丁寧なナデで、器壁の微妙な凹凸で条痕を確認できる。６・１７～１９は、内外面とも条痕間が２mm強幅で凹凸のしっかりした条痕である。19の内面を除き、その後ナデ調整を施す。器壁は１７・１８が若干薄い。１４も外面は同様の条痕であるが、内面はナデ調整である。７・１０・１１は、外面の条痕がハケ状のものである。内面は、７・１０がナデ調整である。１１が荒いハケ状の条痕である。８・９は外面が交差する条痕を施した後、比較的丁寧なナデを施す。１２は外面に比較的凹凸が明瞭で、条痕幅２mm弱の条痕を施す。６・１７～１９に比べ凹凸が不明瞭である。器壁は1.9ｃｍと第１８図中最も厚い。１５は外面が縦や斜め（左上がり・左下がり）の条痕が交差するものである。文様を意識しての行為とも考えてしまうが、破片のため詳細は不明である。１６は、２mm弱の条痕幅で凹凸があまりないものの、整美な条痕を外面にもつものである。条痕の雰囲気は第17図２・３に似る。ただし、器壁は0.7ｃｍとそれらに比べ薄い。内面には煤が付着する。２０は条痕幅３ｍｍ程の荒い条痕を内外面に施すものである。内面には煤が付着する。器壁は0.55ｃｍと最も薄い。２１は胴部下部で底部に近いと思われる。内外面とも条痕の後ナデである。条痕はケズリ状のものである。器壁は1.8ｃｍである。そのほか図示していないが、包含層中より外面の条痕をほとんどナデ消して、一見無文に見えるもの（注記：２区南西側土柱041006）が出土している。

これらの器壁はとくに記載していない限り、１cm前後～1.5ｃｍ程である。

出土場所は、５を除く１～１１までがⅣ2層、12・13・15～17がⅣ1層、５は土器片2点が接合しており、一方がⅣ1層、他方がⅣ2層と両方にまたがる。14・18～20が包含層出土、21が遺構検出時である。

②無文土器（第19・20図）

口縁部片より説明する。第19図・第20図１が口縁部である。

器形は、①直立するもの・②ほぼ直立であるものの、やや外傾するもの・③外傾するもの・④外反するもの・⑤内傾すると思われるものの５つに分類できる。口縁端部からは、Ａ：丸いもの・Ｂ：方形のもの・Ｃ：やや方形のもの・Ｄ：口唇部外側がやや突出するもの・Ｅ：端部が丸く、やや外反するものに分類できる。器壁の厚さからはａ：0.5ｃｍをややこえるもの・ｂ：1cm前後・ｃ：1.5ｃｍ前後・ｄ：２ｃｍをこえるものに分類できる。

第19図１は、器形が直立し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.05ｃｍである。口縁端部外面に指頭圧や爪痕が連続２段状にみられ文様のような状況を呈している。外面には煤、内面には黒斑状のものがみられる。２・５は、器形がやや外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は1.5ｃｍ弱である。色調が似る点、外面に工具ナデが確認できる点など、第12図１を含め同一個体の可能性もある。指頭圧が目立つ。３は、器形が直立し、口縁端部は丸くやや外反する。器壁が２ｃｍをこえ最も厚い。胴部がやや張る。４は、口縁端部が方形で、器形は小片のため不明である。器壁は0.95ｃｍである。６・11・14は、器形がやや外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は１ｃｍ前後である。なお、14は器壁が0.75mmとａに近

い数値である。７・12は、器形が直立し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.5ｃｍである。両者とも調整に工具ナデが確認できる。また、１・19を含め、外面口縁端部もしくは口縁端部やや下が張る傾向にある。器形が直立し、口縁端部が丸いタイプの特徴と言えそうである。７には外面に煤が付着し、12には外面口縁部付近に煤、内面には黒斑がみられる。８・10・第20図１は、器形がやや外傾し、口縁端部が方形になるものである。器壁は１ｃｍ前後である。８には口縁端部に刻目がみられる。原体条痕使用か。第20図１は外面口縁部下に瘤が残存する。復元径1.5cm程度で、あまり突出しないと思われる。器壁は1.25cmとｃでも良いくらいである。第19図13は、器形がやや外傾し、口縁端部が丸いものである。器壁は0.9ｃｍである。口縁端部に瘤の剥離痕がある。瘤は端部をまたぐ様に貼り付けられているが、その突出の中心は外面と考えられる。15は、器形が直立し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は0.9ｃｍである。16は、器形が内傾し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.1ｃｍである。内傾すると考えられるものはこれ１点のみで、小片のため傾きに関しては今後変更になる可能性もある。17は、器形が外反し、口縁端部が丸いものである。器壁は0.65ｃｍである。第38図１とともに器壁が最も薄い部類に入る。焼成は本遺跡中の縄文土器中で最も良好で堅緻である。18・22・23・24は、器形が外反し、口縁端部が丸いものである。器壁は１cm前後である。19は、器形が直立し、口縁端部が丸い。器壁は1.2ｃｍである。内面に煤が付着する。20は、器形が直立し、口唇部外側がやや突出するものである。器壁は1.1ｃｍである。21は、器形が、胴部が内湾し、口縁部が外反するものである。口縁端部は丸い。器壁は1.4ｃｍである。25は、器形が外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は0.85ｃｍである。

そのほか図示していないが、器形が直立し、口縁端部が外反するものもある。調整が、外面が工具ナデ？後ナデ、内面がナデである。器壁は１cmほど、色調は茶褐色である。

なお、これらの調整であるがとくに記載がない限り、ナデ調整である。

出土場所は、第19図１～18・22がⅣ$_2$層、19・20がⅣ$_1$層、21・22・24・25がⅣ層、23・第20図１が後世の柱穴である。

胴部は、第20図２～13である。

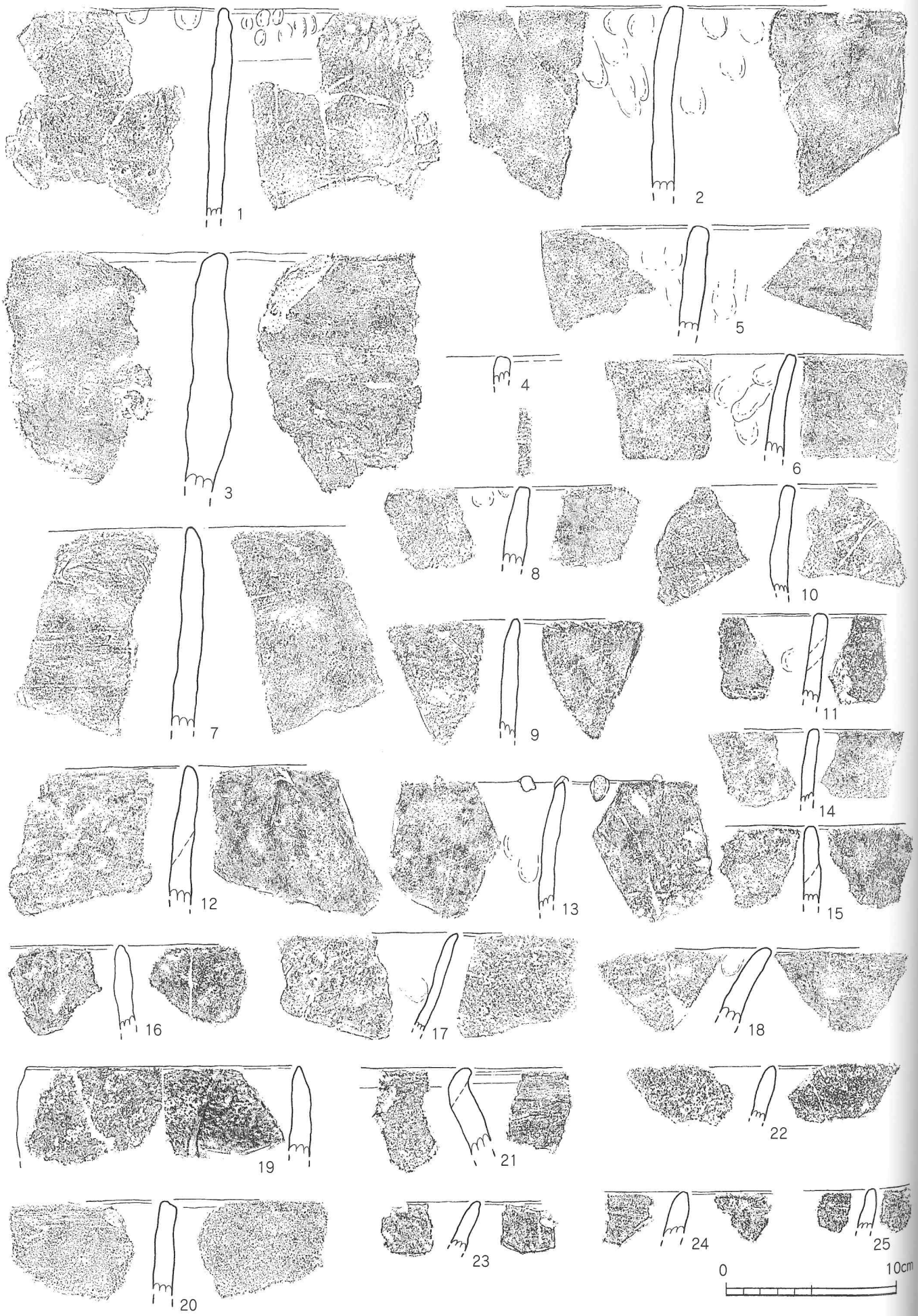
２は、外面に瘤の剥離痕と思われるものがある。剥離痕をみる限り、径は２ｃｍをややこえる位と考えられる。そうとするならば本遺跡中最も瘤の規模が大きくなるものと考えられる。部位は、口縁部の下位にこの手の瘤がみられることから、口縁部下位であると考える。３は焼成前穿孔がみられるもので、口縁部下位の部位と思われる。４は口縁部下位から胴部上位付近である。中ほどでややくびれている。内面に指頭圧が目立つ。５は内外面とも工具ナデである。とくに外面の工具ナデはミガキ状を呈しており、やや光沢がある。また内面も一見、工具ナデの後、ミガキのように見えるが、工具ナデが一部でミガキ状になっているものと判断した。よって、外面と内面の調整工具は同一であると考える。６・７は内面がやや白っぽいものである。本遺跡内では条痕文にも内面が白っぽいものがあり、同一固体かは不明である。６にはややミガキ状になるナデもしくは工具ナデが確認できる。８は一応図のように実測したが、上下逆の可能性もある。以上の胴部の調整に関しては、とくに記載がない限り、ナデ調整である。器壁は１cm前後から1.5ｃｍ前後である。

10～13は胴部下位である。12では外面に工具ナデが確認できるほかは、ナデ調整である。12では接合痕も確認できる。器壁は11・12が２ｃｍと最も厚いほかは、１～1.5ｃｍである。

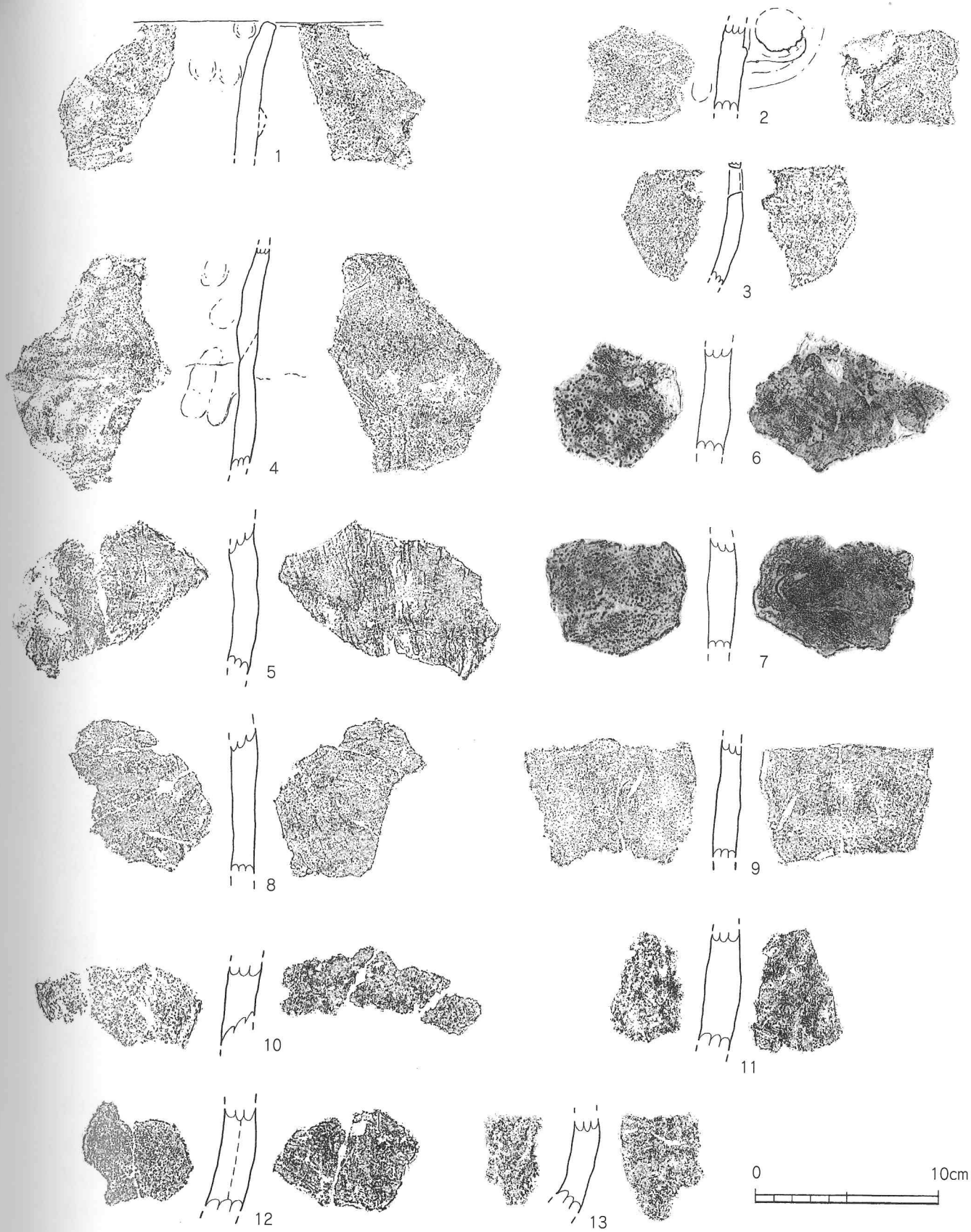
出土場所は、４・７～12がⅣ$_2$層、５がⅣ$_1$層、３が後世の柱穴、２・６が後世の土層内より出土した。

③撚糸文土器（第21図１～６）

１・３～５は４区出土であり同一個体の可能性もある。器壁が1.5ｃｍ前後と撚糸文の中では器壁が厚いという特徴がある。１は口縁部である。器形は外傾し、口縁端部は丸い。３は胴部上位と考えられる。４・５も胴部の破片である。これらは外面に撚糸を施す。やや摩耗するものもあり、節が確認できるものは４・５である。内面の調整は、全てにナデ調整がみられるが、４・５はその前段階に工具ナデを施す。６は同様

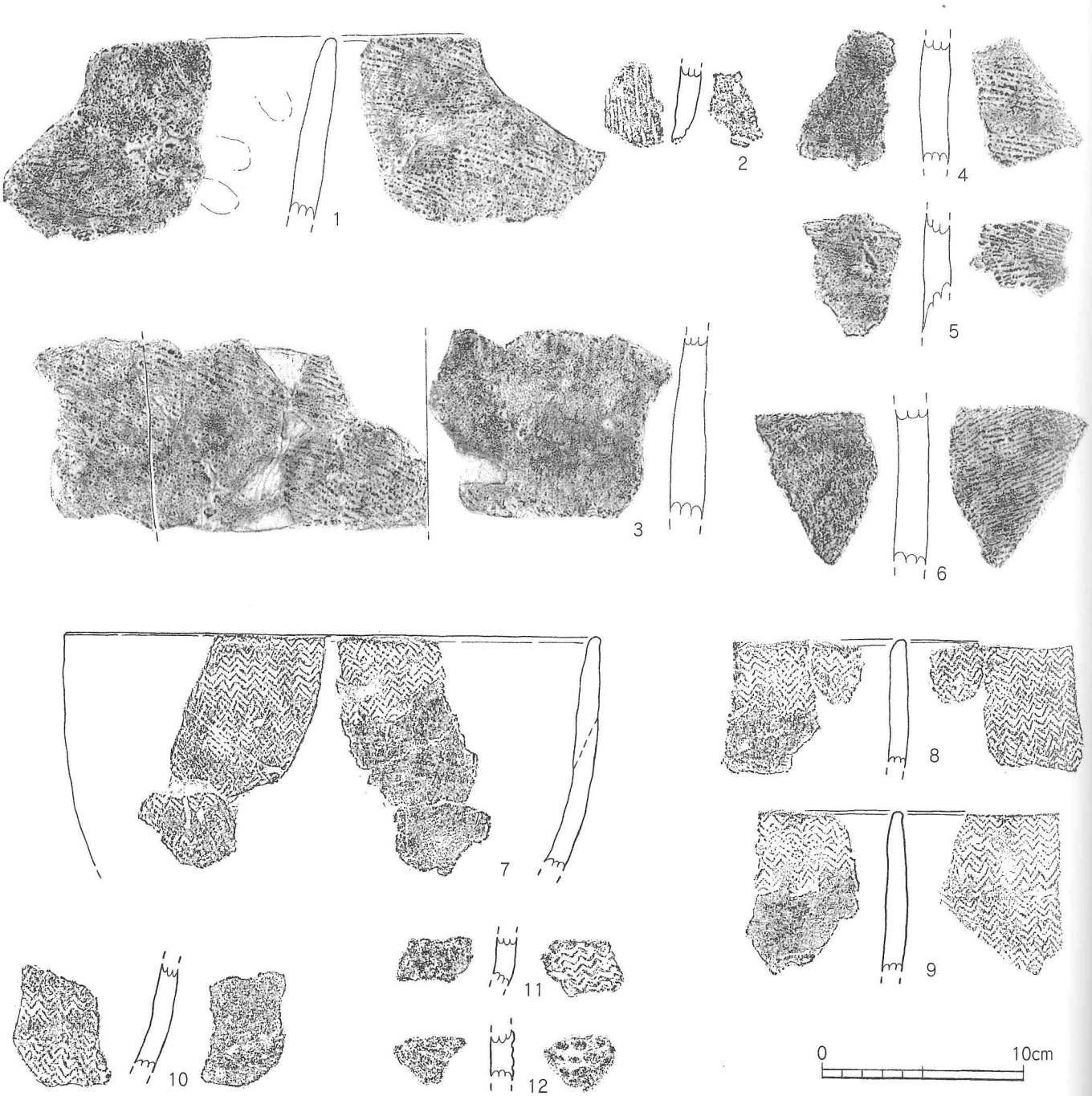


第19図　縄文時代早期の土器（無文・口縁部）



第20図　縄文時代早期の土器（無文・口縁部および胴部）

に器壁が厚いが、同一個体の可能性は全くなく、焼成・色調も全く前述のものと違う。撚糸の幅も１ｍｍ強と前者の１／２程度である。２も撚糸の幅が細い。最初は条痕と間違ったほど撚糸間の幅が狭く、節のスタンプが繊細である。端部が一部欠損するものの、口縁部の破片と考えられる。この破片は外面のみならず、内面口縁端部付近にも撚糸らしきものが確認できる。



第21図　縄文時代早期の土器（撚糸文および押型文）

④押型文土器（第21図７～１２）

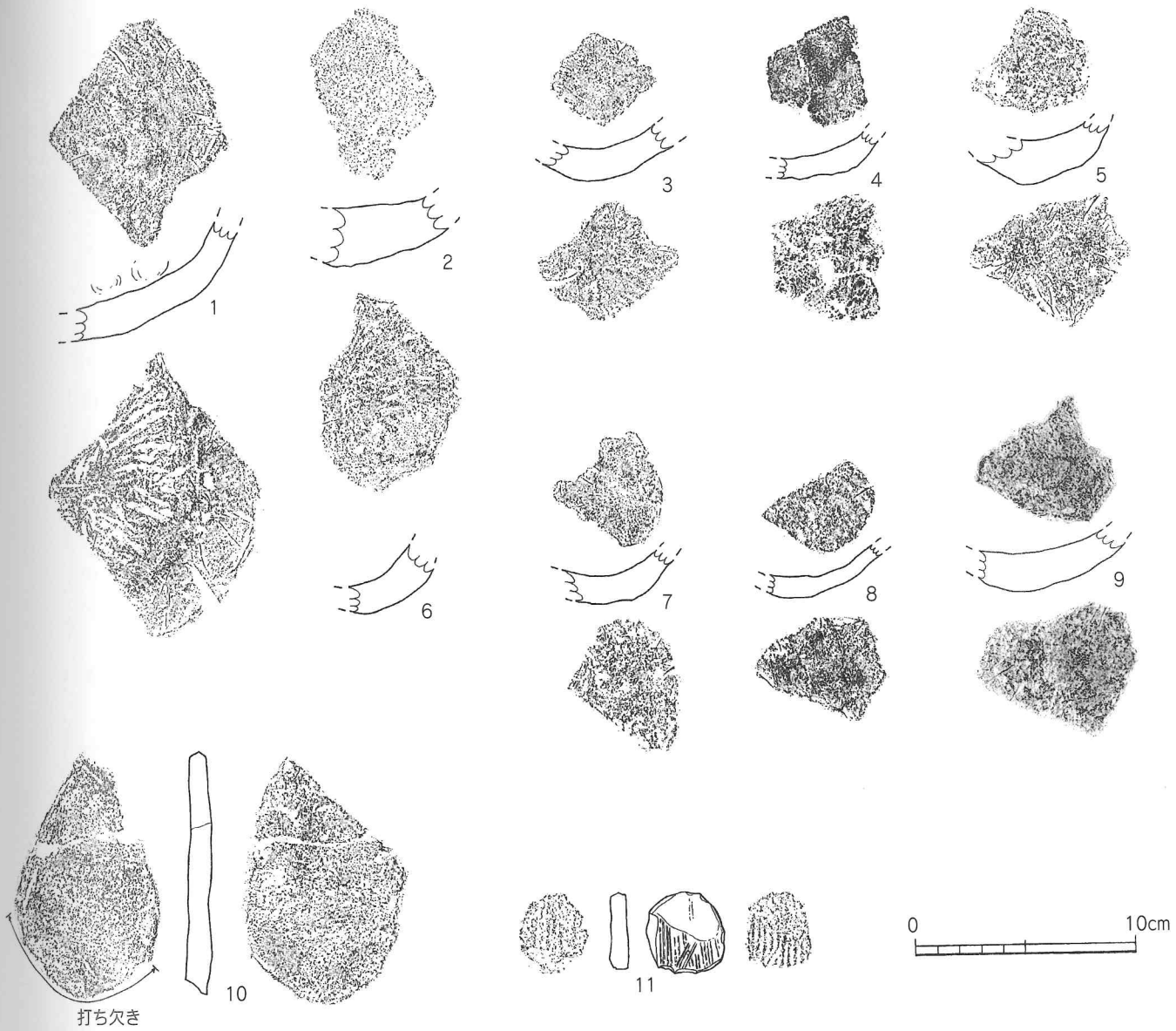
７～11は山形文、12は楕円文である。

山形文の内、７～10は、同一個体の可能性が大きい。焼成・色調・器壁厚さはいうに及ばす、内外面の山形の形が似る。７～９は口縁である。７は別々の地点で取り上げた２点が接合した。口縁から胴部上位が残存する。外面のほか口縁部内面付近にも山形文が確認できる。また外面にヨコナデにより山形文を消す箇所が確認できる。文様を意識か？。なお、８・９でも口縁部内面付近に山形文を施すことが確認できる。また外面にヨコナデにより山形文を消す箇所あることは１０でも確認できる。１１はこれらの山形文に比べ、文様が雑である。１２は、外面に楕円文が確認できる。

小片のため、詳細は不明である。

⑤底部（第22図１～９）

概ね丸底であるが、ややバラエティに富む。１の外面は放射状にケズリというべきものを施す。２は摩耗が



第22図　縄文時代早期の土器（底部および土器加工品）

激しいが、僅かに外面に放射状の調整（工具ナデ）が確認できる。若干乳房を志向気味である。３・５・９はやや乳房上に外面が突出する。また９の外面には白っぽい付着物が確認できる。４・７・８もやや歪であるが丸底である。器壁は１cm前後～２ｃｍ半ばとバラエティに富む。

⑥土器加工品（第22図10・11）

１０はメンコ製作途中のものであろうか。下端部に打ち欠きの痕跡が確認できる。なお、無文土器を使用している。１１はメンコである。打ち欠きにより円形を作り出している。条痕文土器使用で、外面は条痕のちナデである。

（吉田）

縄文時代の石器

縄文時代早期の包含層から多数の石器類が出土した。包含層は、上下の二層（Ⅳ1層・Ⅳ2層、第４図参照のこと）に分けることができるものである。

出土した石器類は、①チャートを主体とする小型の剥片石器類、②硬質の砂岩を主体とする大型の剥片石器類、③ ①②の母材となる石核類、④砂岩を主体とする礫器類、⑤磨石・敲石、⑥石皿等の礫石器に大別することができる。以下、その順序で記述する。

①小型の剥片石器類（第23図）

石鏃（１～６）の出土数は７点と多くない。石材はすべてチャート製である。１は細石鏃に分類されるもので長さ1.3ｃｍ、分厚く、裏面に主要剥離面を残すが調整は精緻である。２も長さ1.6ｃｍと小さいが、先端部は欠損後再加工を行っている。Ⅳ2層出土。３は深い抉りがあるが両脚とも端部が欠損している。４は平基の少し加工が粗いものである。５は縄文早期に典型的な鍬形鏃の比較的大型のものである。６は粗い加工の未製品とみられるがスクレイパーの可能性もある。

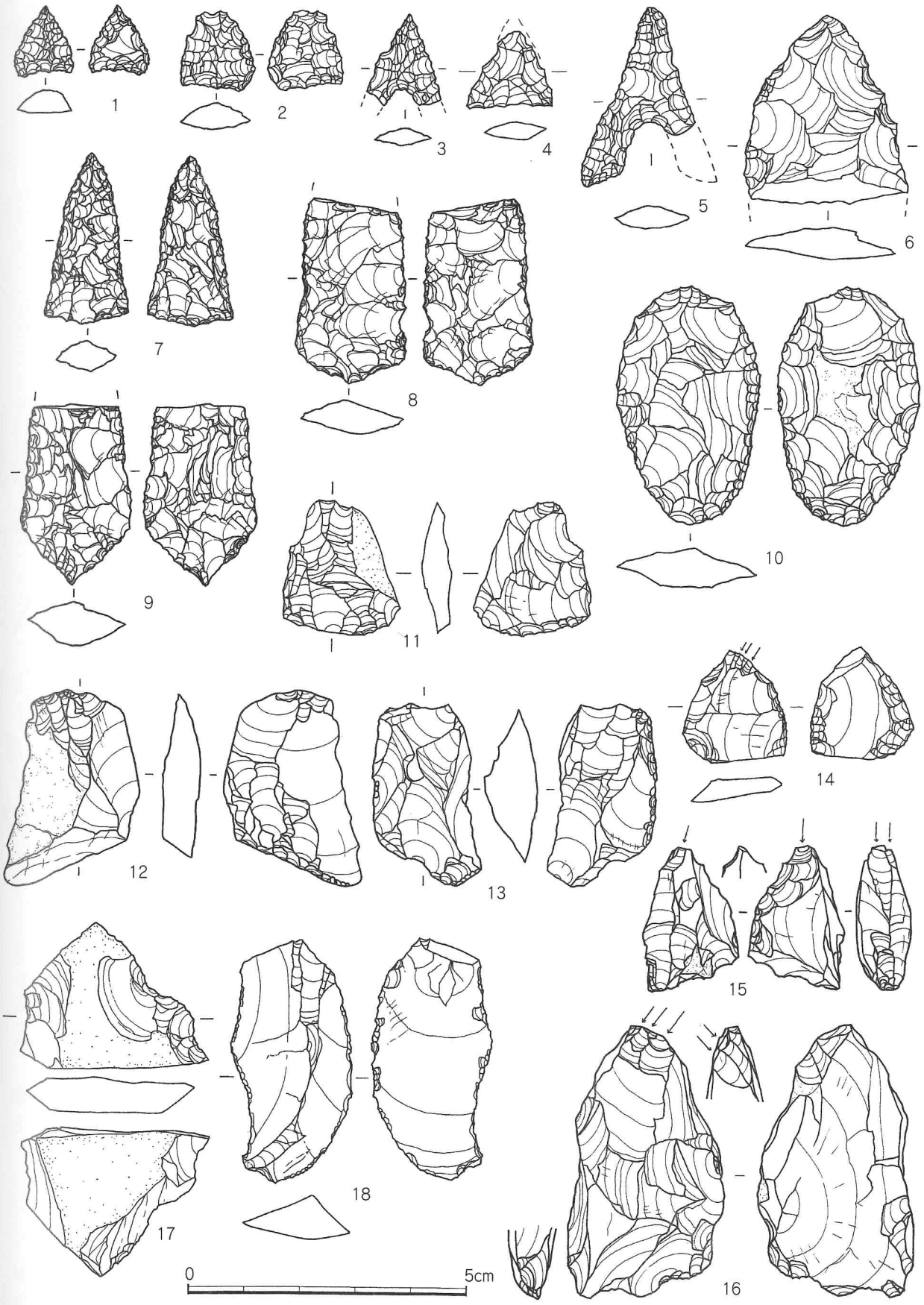
有舌尖頭器（７～９）が３点出土している。県内で数少ない。石材はすべてチャート製である。７は完形の整美なもので、舌部の突出は弱く、有舌系の石鏃ともいうべきか、有舌尖頭器の退化したものと把えることができる。Ⅳ1層出土。８は先端部を欠くもので、７よりも大きく、舌部もより顕著である。９も先端部を欠くが典型的な有舌尖頭器である。基部の舌部の加工は入念であり、分厚く仕上げている。Ⅳ2層出土。

スクレイパー類（10～14、17・18）は、石材はすべてチャートである。10は平面卵形の両面加工のスクレイパーであり、全周に入念な加工を施すが、一部に打面を残す。また、背面の一部に自然面を残している。

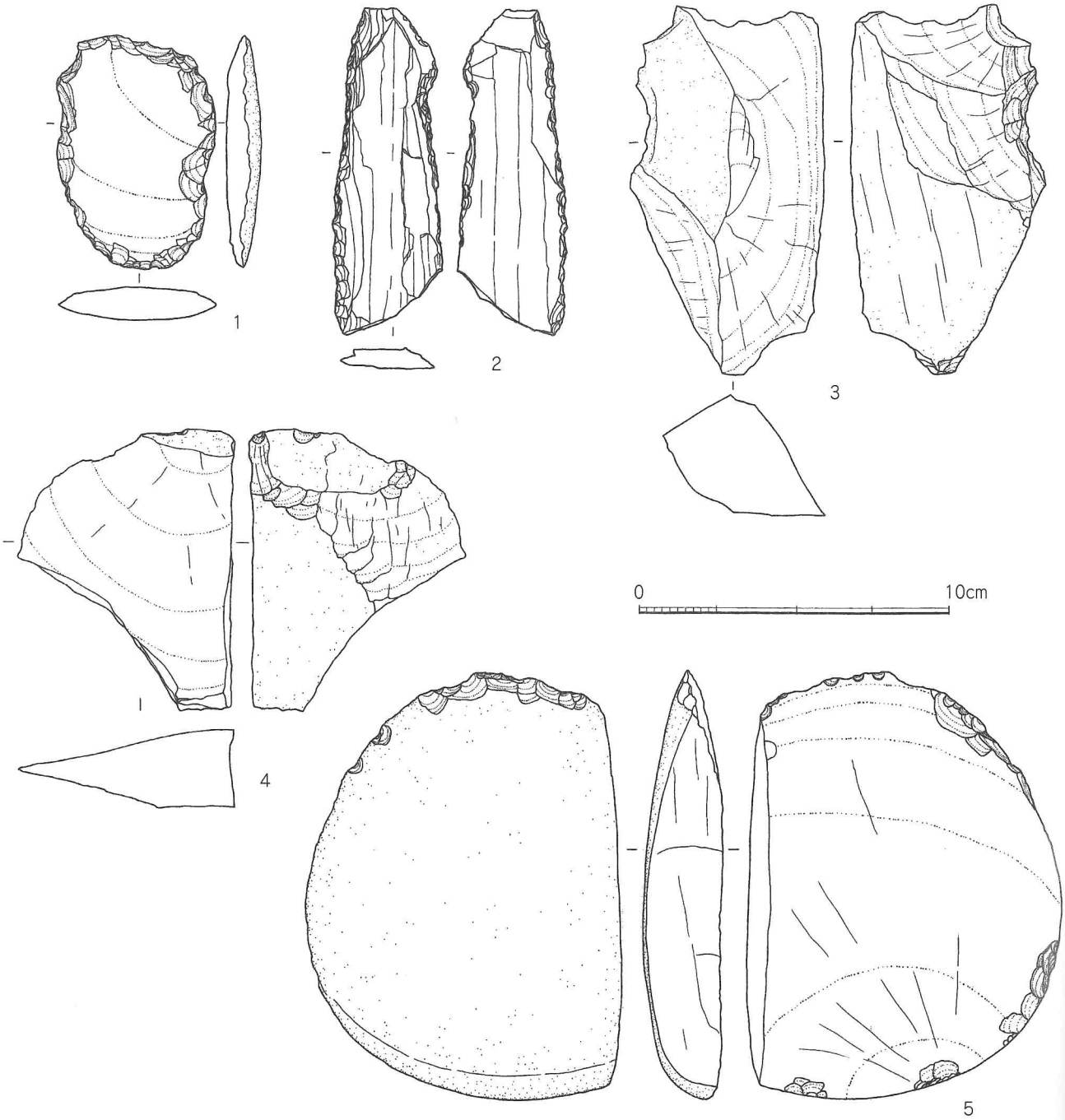
	チャート（深緑）	チャート（黒）	チャート（黒灰）	チャート（灰色１）	チャート（灰色２）	チャート（乳白）	チャート（透明）	チャート（赤）	ホルンフェルス	頁岩	緑泥片岩	サヌカイト	硅化木	砂岩	凝灰岩	黒曜石（姫島）	計（点数）（重量）g	備考
片刃礫器														80			80	
														50139			50139	
両刃礫器										1				33			34	
										91				22435			22526	
剥片石器											1			24			25	
											36			4486			4522	
敲石								1						11			12	
								74						3457			3531	
磨石														2			2	
														895			895	
凹石														2			2	
														924			924	
砥石														2			2	
														3801			3801	
石皿														2			2	
														5500			5500	
砥石・石皿														1			1	
														6660			6660	
台石														1			1	
														8640			8640	
石鏃	1		1		1		1										4	
	1.2		8.9		3.1		0.6										13.8	
有舌尖頭器			1	1	1												3	
			5.3	6.1	2.5												13.9	
スクレイパー		1	1	1	1		1										5	
		2.7	8.8	9.9	3		2.6										27	
彫器様石器				1	1		1	1									4	
				5.2	25.2		2.2	3.9									36.5	
クサビ形石器			1	1	1		1										4	
			4.5	8	4.2		6.7										23.4	
錐			1		2		1										4	
			5.3		1.8		0.1										7.2	
２次加工剥片	1		1	1	4		8	1	1	5	1						23	
	1.5		1.7	1.4	30.2		17.3	3.3	9.6	120.9	12.8						198.7	
使用痕剥片	2	1	2	3	5	1	3		2								19	
	14.5	9.9	53.5	15.4	26.6	0.5	11.1		85								216.5	
石核	1		2		1	3		1	3	2				9			22	
	7.8		61.1		5.4	625		148	488.6	473				8061			9869.9	
剥片	2	1	6	10	23	2	17	4	6	4		1	1				77	
	12.9	2.4	9.4	38.9	104.7	78.4	18.2	11.9	35.7	8.6		13.7	1.5				336.3	
チップ	2		1	5	4	1	24									1（弥生？）	38	
	0.6		0.5	0.9	0.88	0.1	3.07									0.09	6.14	
加工品															1		1	
															2000		2000	
計（点数）	9	3	17	23	44	7	57	8	12	12	2	1	1	167	1	1	365	
（重量）g	38.5	15	159	85.8	207.58	704	61.87	241.1	618.9	693.5	48.8	13.7	1.5	114998	2000	0.09	119887.34	

チャート（灰色１：透明でない。縞なし。）
チャート（灰色２：やや透明のものが多い。縞がある。）
ホルンフェルス・頁岩・緑泥片岩の原石は分布図で表示したが、この組成表では省いている。

第１表　神ノ原遺跡の石器組成



第23図　剥片石器実測図



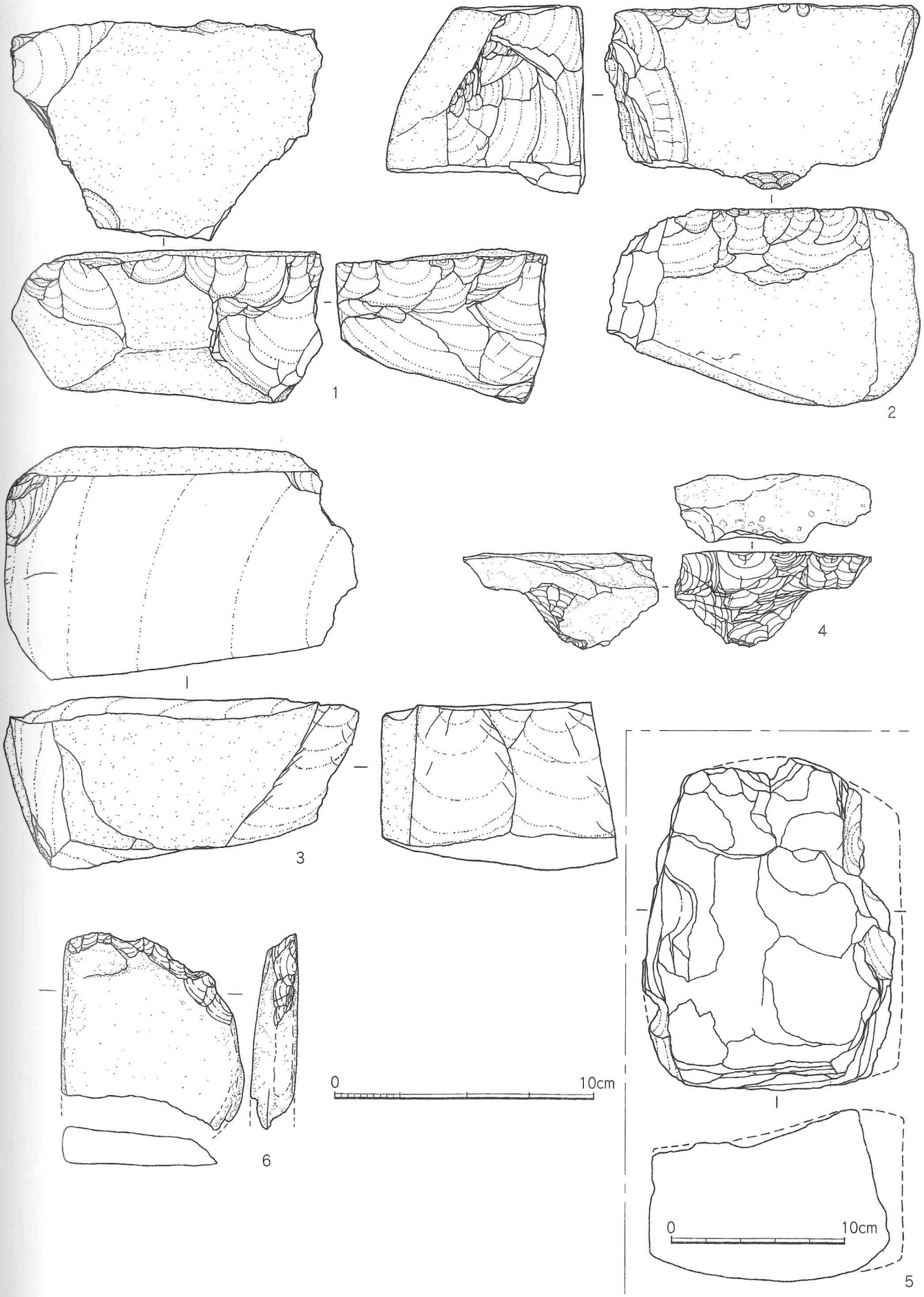
第24図　大型剥片石器実測図

11～13は両端の断面を鋭角に加工したクサビ形石器である。表裏のどちらかの端部から長い剥離を行っているのが特徴である。素はいずれも巾広の縦長剥片とみられる。14は小型の幅広剥片を素材とする両面加工の削器、略三角形の一角には片面に細かい連続剥離がみられる。17は板状の素材の二辺に加工を施したものであるが一辺はノッチが２ヶ所みられる。18は縦長剥片をそのまま削器としており両側辺に細かい使用痕が観察される。先端部にわずかの加工を有している。

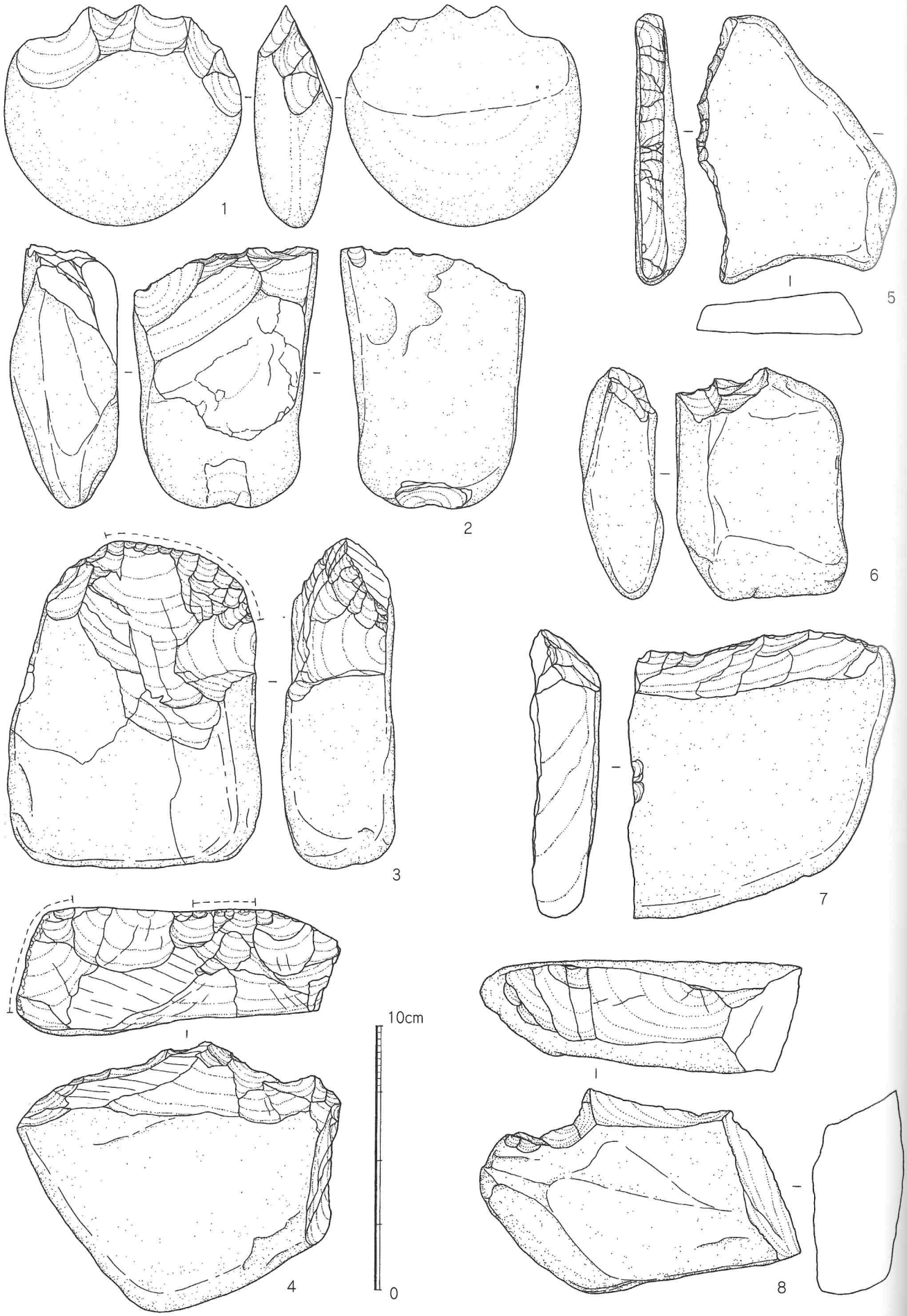
彫器様石器（15・16）は、一部にフルーティング加工をもつ彫器に近い石器である。いずれもチャートの幅広剥片を素材としている。15は小型の両端にフルーティング加工をもつ。16はやや大型の横長の剥片を素材とし、両端部に斜め方向の長い剥離加工を施している。

②大型の剥片石器類（第24図）

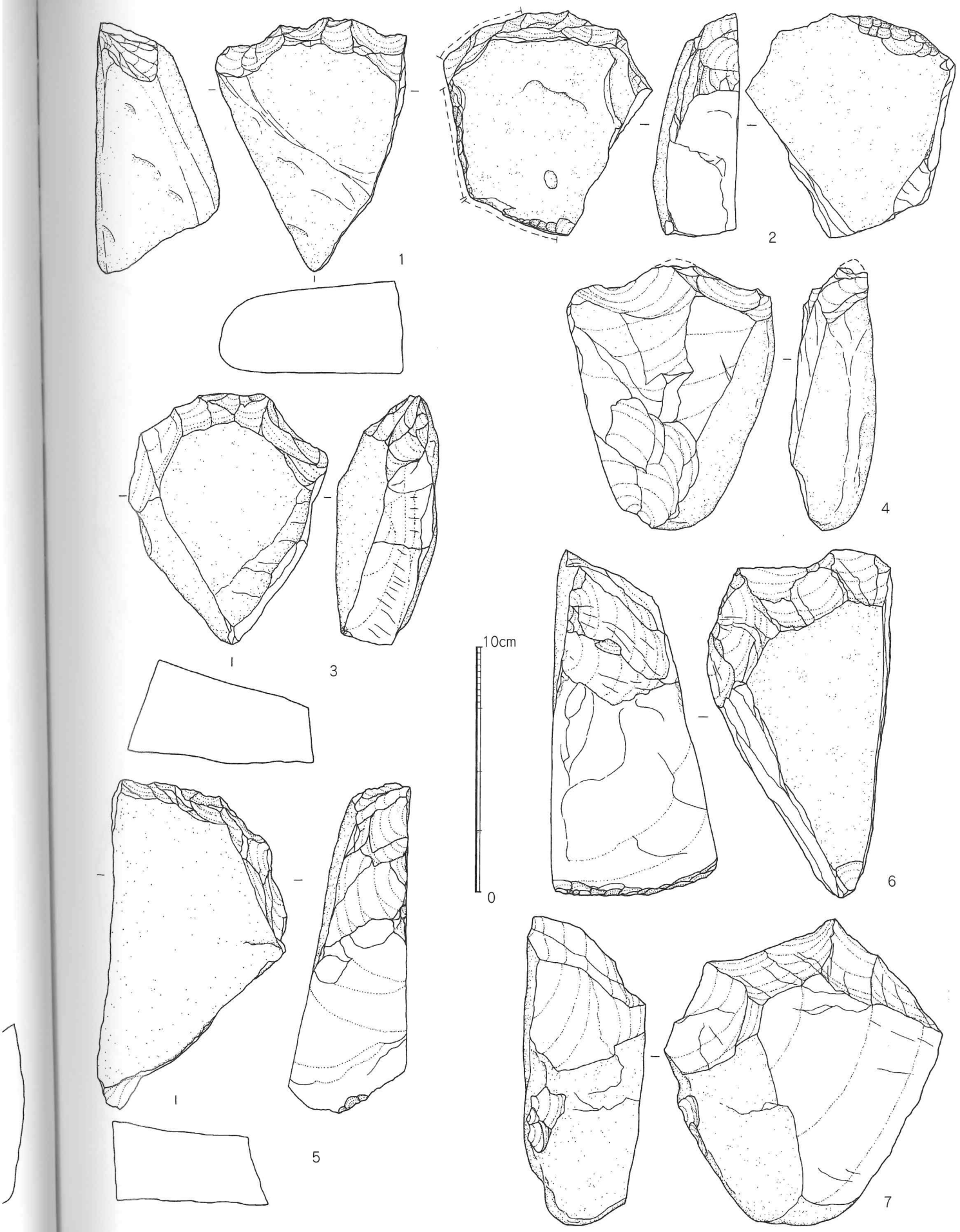
主として硬質の砂岩を石材とする剥片石器類である。１は背面に自然面を残す幅広剥片の全周に片面加工を施した削器である。２は石英質の結晶片岩の薄い剥片の両側の両面に細かい加工をした削器である。３は横長の剥片、打面部は自然面。４は同様に自然面を打面とする幅広剥片。背面にわずかの加工痕をもつ。５は、大きな円礫の最初の剥離によって得られた大型剥片を素材とする削器。末端部の主に片面に加工を施し



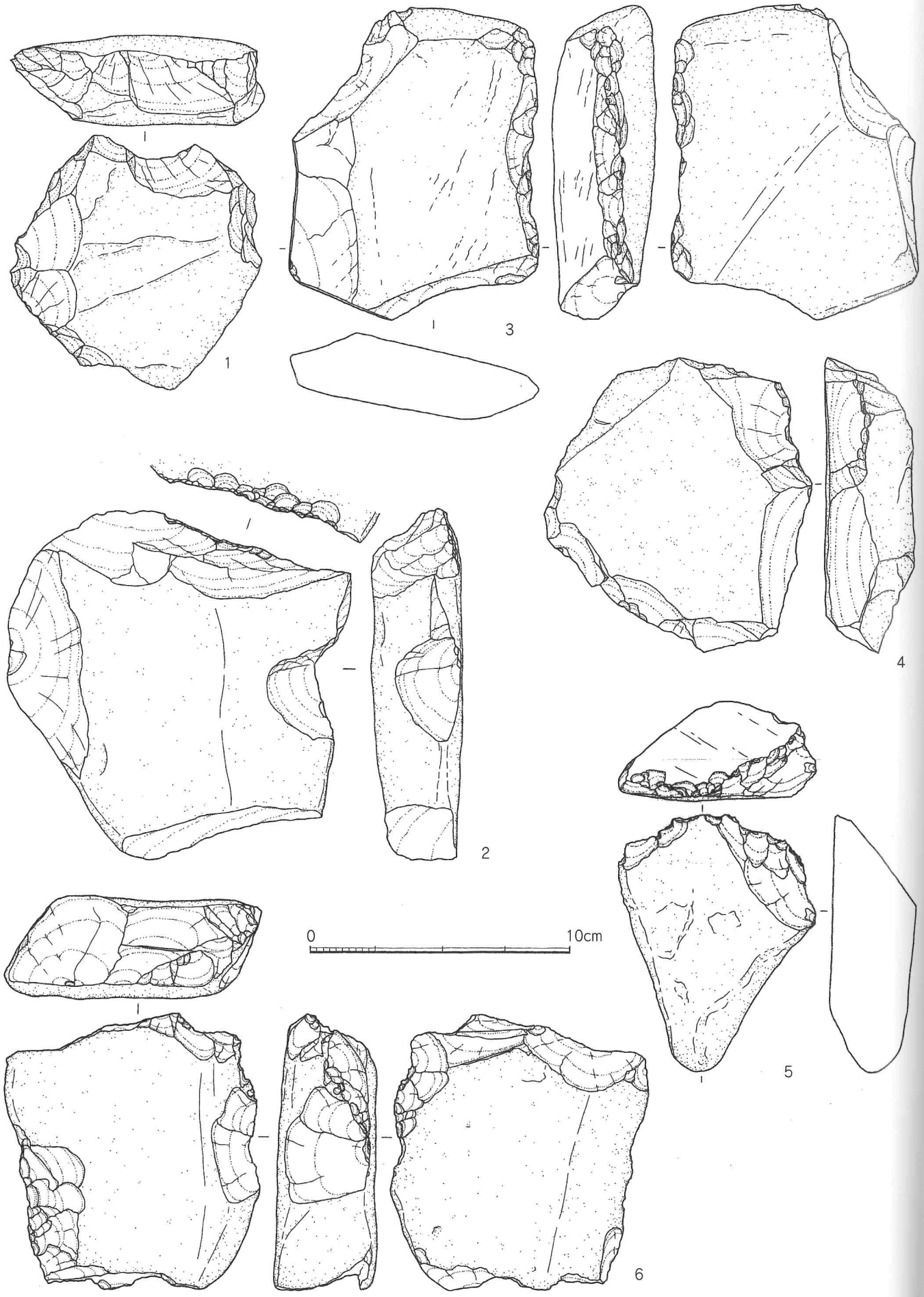
第25図　石核・礫器・凝灰岩加工品実測図



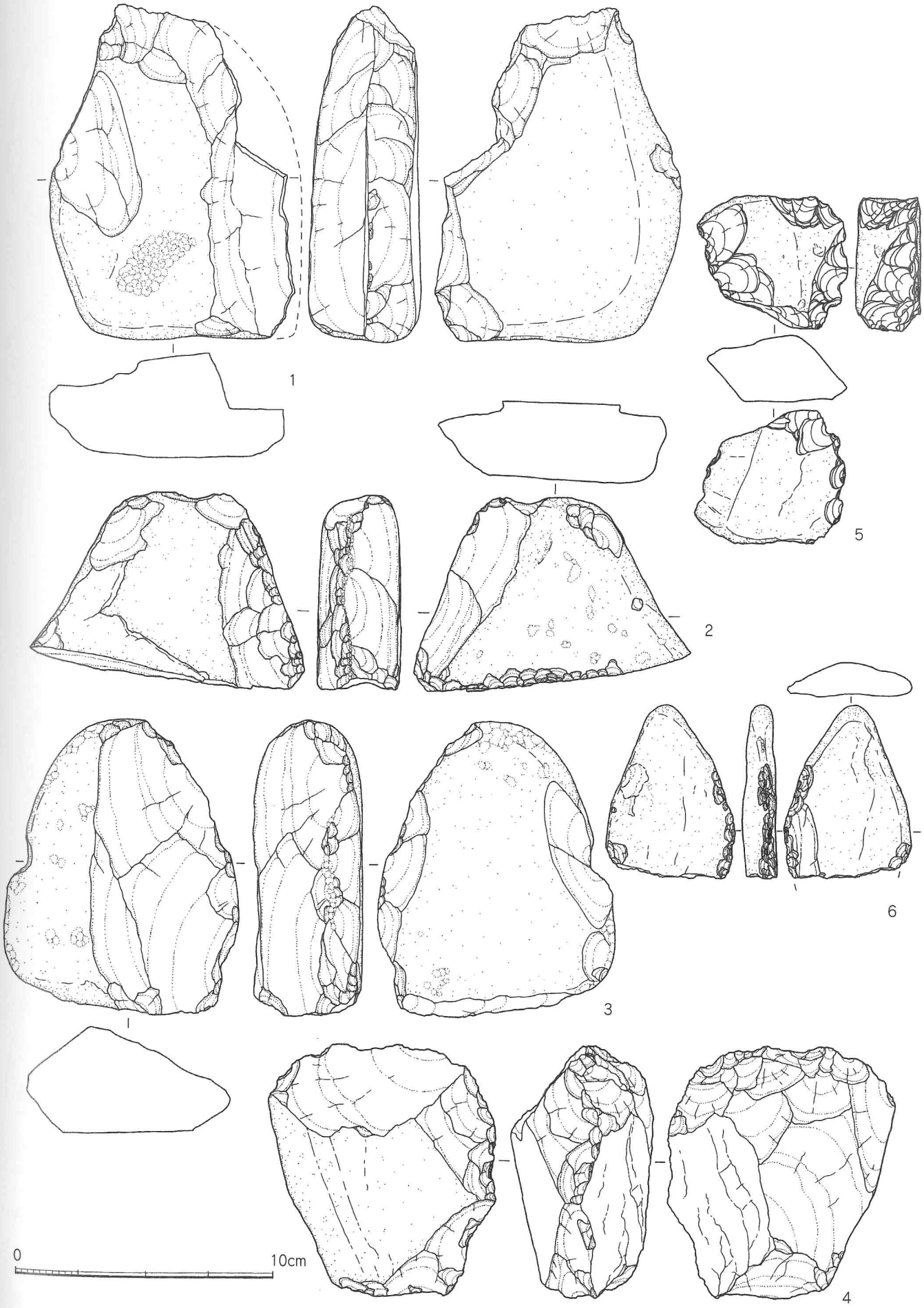
第26図　片刃礫器実測図



第27図　片刃礫器実測図



第28図　片刃礫器・両刃礫器実測図



第29図　両刃礫器実測図

第30図　磨石・敲石・石皿・砥石実測図

て刃部としている。石材は硬質緻密な砂岩である。１・４はⅣ$_2$層、２・３・５はⅣ$_1$層出土。

③石核類（第25図１～４）

１～３は大型剥片の母材となった砂岩の石核である。いずれも大型の分厚い角礫を素材とするもので、１・２は平坦な自然面をそのまま打面としている。３は上面を大きな剥離によって平坦な打面とし、その一端から連続して剥片剥離を行っている。４はチャートの石核である。角礫の自然面を打面とし、三方向からの剥片剥離がみられる。主な打面となった平坦面にはいくつかの打痕が観察されるものである。小型の剥片石器の母材となったものである。

④礫器（第25図６・第26～29図）

砂岩の円礫・角礫・分割礫を素材とする片刃礫器・両刃礫器である。本遺跡の石器群の中で主要な器種であり、その形態もいくつか分類が可能である。これらはすべて硬質の砂岩の河川礫を利用している。

片刃礫器は、（第25図６・第26図・第27図・第28図１・４）である。第25図６・第26図１～８は円礫もしくは扁平礫の一端を打ち欠いた、いわゆるチョッパー類である。第26図１はその典型的なもので、刃部を鋸歯状にした鋭利なものである。第25図６と第26図５は扁平礫を利用したもので、重量も小さく、削器に近い機能とみられる。第26図２・３は略直方形の分厚い礫の一端に鈍い刃を付けている。第26図４は山形の刃部を形成し、一端部は調整打によってカットしている。第26図７・８は扁平礫の一端を割って形を整えた後に刃部を形成している。第26図１・２・６はⅣ$_1$層出土、８は、Ⅳ$_2$層出土。第27図１～３・５・６は分厚い亜角礫を２・３分割し、略三角形となった素材の短辺に片刃加工したもので、掌状形を呈している。刃部は概して外湾しており、底面は平坦な自然となっている。２・６は刃部外の縁辺に刃潰し状の加工を施している。４・７はほぼ原礫のまま利用しているが、基部がすぼまる点では共通している。７の刃部の加工は打点を残さない大きな剥離を形成しており、これは特殊な“面打ち”的な技法によるものかと思われる。１・２・５・６はⅣ$_2$層出土。第28図１・４は刃部が多辺に及ぶ片刃礫器で、１つの石器で複数の機能を有するとみられる。１は山形の鋭角部・ノッチ部・鈍い刃部をもつ。Ⅳ$_2$層出土。

両刃礫器は、（第28図２・３・５・６、第29図）で、ほぼ原礫をそのまま素材としている。

第28図２・６は略方形の扁平礫に複数の刃部を付けたものであり、いずれも一部にノッチをもつ。６はとくに一角を錯交状の加工としている。５は逆三角形のやや小型、刃部は細かい両面加工となっている。３は略方形の一辺を両面加工としている。他辺の大きな剥離は整形のためとみられる。５・６はⅣ$_2$層出土。第29図１・３は円礫の長辺部を両面加工したもの。２も本来そうであったとみられるが欠損したもので、その新しい稜に細かい刃潰し状の加工を施している。なお、１の片面には著しい敲打痕がみられる。４は大小の剥離による分厚い両刃礫器、加工は三辺に及ぶ。５・６は小型の両刃礫器。５は頁岩質の角礫を長辺を両刃、短辺を片刃としたものである。スクレイパーに近い形態である。６は扁平礫の一部に両面加工としたもの。１はⅣ$_1$層、２～４はⅣ$_2$層出土。

⑤磨石・敲石・槌石（第30図１～７）

１は、チャートの円礫の一端に敲打痕がみられる槌石（ハンマーストーン）である。球状のきわめて硬いもので、小型の剥片石器に用いられたものとみられる。第Ⅳ$_1$層出土。２・３は砂岩の円礫の一部に敲打痕をもつ敲石。５は断面三角形の敲打面をもつ磨石。底面の広い部分を磨面としている。４は敲打面をもつ凹石。一面に２つ、他面に１つのスリ鉢状の凹みをもつ。凹みは回転による磨滅である。６は礫器（両刃）状の刃部の稜に敲打痕をもつ槌石である。礫器製作用のハンマーストーンと考えられる。７は隅丸の直方体状となった磨石である。両面と両側面は磨耗度が著しい。両端面は敲打面となっている。全面よく使用された完形品である。近辺の遺跡では佐伯市門前遺跡で出土している。

⑥石皿類（第30図８～10）

８は破損した石皿である。被熱によって周囲の大半が失われており、中心部に近い部分が残されている。磨面は片面であり、緩い凹面となっている。10は大型の扁平礫の中心部に深い凹面をもつ石皿。半分に欠けており、過度の回転による作業が行われたとみられる。石臼とも表現できるものである。９は、分厚い円礫を素材とする長短の断面がともに内湾しており、石皿とするより、砥石の可能性が高い。以上全て砂岩製である。（清水）

第2表　土器観察表（その１）

遺構覧の(黒)はⅣ1層、(暗茶)はⅣ2層に対応

図版番号	器種	部位・残存	遺構	文様・調整	法量 器高	口径	底径	最大厚	色調	焼成	石英	白色粒子	赤色粒子	角閃石	雲母(金)	その他	備考
第7図1	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区 (4号集石　　)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ヨコ)→ナデ	(5.7cm)	－	－	(1.05cm)	外:褐Hue10YR4/4 内:灰黄褐Hue10YR4/2	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.0mm以下			
第7図2	縄文土器(条痕文)	胴部	3区 (4号集石　P4)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:ナデ	(6.75cm)	－	－	(1.1cm)	外:にぶい褐Hue7.5YR5/4 内:にぶい褐Hue7.5YR6/4	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	1.0mm以下	1.5mm以下	微粒		外面の条痕はほとんどナデ消されている。また外面に指頭圧が目立つ。
第7図3	縄文土器(無文)	胴部	3区 (4号集石　P1)	外:ナデ 内:ナデ	(3.1cm)	－	－	(1.0cm)	外:橙Hue7.5YR7/6 内:黒褐Hue7.5YR3/1	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.0mm以下			
第11図1	縄文土器(条痕文)	胴部	4区 (2号集石　P1)	外:条痕(ヨコ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(3.4cm)	－	－	(1.0cm)	外:暗褐Hue5YR5/6 内:明黄褐Hue10YR7/6	良好	1.0mm以下	5.0mm以下	2.0mm以下	2.0mm以下			
第11図2	縄文土器(無文)	口縁部	4区 (3号集石　P1)	外:ナデ 内:ナデ	(7.35cm)	－	－	(1.0cm)	外:にぶい黄褐Hue10YR4/3 内:黒褐Hue10YR3/2	良好	2.0mm以下	1.5mm以下		1.5mm以下			外面口縁部直下に瘤。
第11図3	縄文土器(無文)	胴部	4区 (3号集石　P2)	外:ナデ 内:ナデ	(5.0cm)	－	－	(1.3cm)	外:褐Hue7.5YR4/4 内:にぶい黄褐Hue10YR5/4	やや軟	2.0mm以下	2.5mm以下		1.0mm以下			
第12図1	縄文土器(無文)	口縁部	4区 (4号集石　P3)	外:工具ナデ(ヨコ)→ナデ 内:ナデ	(11.2cm)	－	－	(1.4cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:明黄褐Hue10YR7/6	良好	1.0mm以下	5.0mm以下	2.0mm以下	2.0mm以下			
第12図2	縄文土器(無文)	胴部	4区 (4号集石　P4)	外:ナデ 内:ナデ	(5.8cm)	－	－	(1.1cm)	外:橙Hue7.5YR6/8 内:明黄褐Hue10YR6/6	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.0mm以下			
第12図3	縄文土器(条痕文)	胴部	4区 (4号集石　P1)	外:条痕(ナナメ?)→ナデ 内:条痕(ヨコ→ナナメ)→ナデ	(6.6cm)	－	－	(1.1cm)	外:褐Hue7.5YR4/6 内:灰褐Hue7.5YR4/2	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		2.0mm以下			
第12図4	縄文土器(無文)	胴部	4区 (4号集石　P2)	外:ナデ 内:ナデ	(4.9cm)	－	－	(0.85cm)	外:赤褐Hue5YR4/6 内:灰黄褐Hue10YR4/2	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.5mm以下			
第12図5	縄文土器(無文)	口縁部	4区 (5号集石　P3)	外:調整不明 内:調整不明	(5.8cm)	－	－	(1.1cm)	外:灰黄褐Hue10YR4/2 内:にぶい黄褐Hue10YR4/3	良好	1.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下	2.0mm以下			口縁端部付近に黒斑
第12図6	縄文土器(無文)	胴部	4区 (5号集石　P1)	外:ナデ 内:ナデ	(4.6cm)	－	－	(1.05cm)	外:橙Hue7.5YR6/8 内:にぶい褐Hue7.5YR5/4	良好	1.0mm以下	0.5mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下			下端部に接合痕。
第14図1	縄文土器(条痕文)	胴部(上位)	2区 (3号土坑　P1)	外:条痕(ヨコ→ナナメ)→ナデ 内:ナデ	(8.1cm)	－	－	(1.1cm)	外:黒褐Hue10YR3/1橙Hue7.5YR6/6 内:橙Hue7.5YR6/6	良好		1.5mm以下		2.0mm以下			外面に瘤。
第15図1	縄文土器(条痕文)	口縁部～胴部(上位)	4区 (1号土坑)	内外:条痕 (口唇:ヨコ、他:ナナメ)→ナデ	(14.7cm)	(35.2cm)	－	(1.2cm)	外:にぶい黄橙Hue10YR7/4黒褐Hue2.5Y3/1 内:橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下			1.0mm以下	微粒	5.0mm大の粒	口縁部直下に焼成前穿孔。また内面に円形のスタンプ。外面に黒斑。第15図2・3と同一個体。
第15図2	縄文土器(条痕文)	口縁部～胴部(下位)	4区 (1号土坑)	内外:条痕 (口唇:ヨコ、他:ナナメ)→ナデ	(32.1cm)	(35.2cm)	－	(1.15cm)	外:橙Hue7.5YR6/6 内:にぶい橙Hue7.5YR5/4	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		1.5mm以下			内面下位に煤付着。 第15図1・3と同一個体。
第15図3	縄文土器(条痕文)	底部	4区 (1号土坑)	外:ナデ 内:条痕(螺旋状)→ナデ	(5.1cm)	－	－	(1.5cm)	明黄褐Hue10YR6/6	良好	1.5mm以下	5.0mm以下	1.5mm以下	2.0mm以下			第15図1・2と同一個体。
第15図4	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区 (1号土坑)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(5.4cm)	－	－	(0.8cm)	外:にぶい黄橙Hue10YR6/3 内:黒Hue10YR2/1	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		0.5mm以下	?微粒		内面に煤付着。 第15図1・2・3とは別個体。
第17図1	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (4400)	外:条痕(ヨコ) 内:ナデ	(6.2cm)	－	－	(1.3cm)	外:浅黄Hue2.5YR7/4 内:暗灰黄Hue2.5YR4/2	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.0mm以下			口縁端部外反。内面に煤。
第17図2	縄文土器(条痕文)	口縁部	2区包含層(暗茶) (6064)	外:条痕(ヨコ) 内:ナデ	(7.5cm)	－	－	(1.2cm)	外:にぶい赤褐Hue5YR4/4 内:にぶい赤褐Hue5YR5/4	良好	1.5mm以下	1.5mm以下		2.0mm以下		3.0mm大の粒	
第17図3	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (4978)	外:条痕(ナナメ) 内:ナデ	(6.5cm)	－	－	(1.3cm)	外:灰褐Hue7.5YR4/2 内:明赤褐Hue5YR5/6	良好	1.0mm以下	1.0mm以下	1.5mm以下	2.0mm以下			参考:野田山遺跡(大分市)
第17図4	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (6231)	外:ナデ 内:条痕(ヨコ・ナナメ)→ナデ	(6.6cm)	－	－	(1.05cm)	にぶい橙Hue5YR6/4	良好	1.0mm以下	5.0mm以下	1.0mm以下	微粒			
第17図5	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (4273)	外:条痕(細い)(口唇:ナナメ→ヨコ、他:ナナメ) 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(8.0cm)	－	－	(0.9cm)	外:明褐Hue7.5YR5/6 内:橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下	1.5mm以下		2.0mm以下	微粒		外面は、斜めの条痕の後、口唇部に横方向の条痕を施す。
第17図6	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (4274)	外:条痕(細い)(ナナメ) 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(5.2cm)	－	－	(0.9cm)	外:暗褐Hue10YR3/3 内:にぶい黄褐Hue10YR4/3	良好	0.5mm以下	2.0mm以下		2.0mm以下			
第17図7	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (5008)	外:条痕(ヨコ) 内:ナデ	(5.8cm)	－	－	(1.2cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:暗灰黄Hue2.5Y4/2	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.5mm以下			口縁端部に刻目(条痕の原体使用か?)。
第17図8	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (3960)	内外:条痕以外は摩耗のため不明。	(5.5cm)	－	－	(0.9cm)	外:暗褐Hue10YR3/3 内:褐Hue10YR4/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	3.0mm以下	1.0mm以下			口縁端部付近に穿孔(焼成後?)
第17図9	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (礫層グリッド8)	外:条痕(細い)(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ヨコ)→ナデ	(5.5cm)	－	－	(0.95cm)	外:明褐Hue7.5YR5/6 内:橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下		1.0mm以下	微粒		
第17図10	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (5611)	外:条痕(ヨコ→ナナメ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)?→ナデ	(5.5cm)	－	－	(1.8cm)	外:暗褐Hue10YR3/4 内:赤褐Hue5YR4/8	良好	1.5mm以下	5.0mm以下	?2.0mm以下	1.0mm以下			外面は横方向や従来の左上がりの条痕を施した後、口唇部には左下がりの条痕を施す。
第17図11	縄文土器(条痕文)	口縁部	2区包含層(暗茶) (6066)	外:条痕(口唇:ナナメ→ヨコ、他:ナナメ) 内:条痕(ナナメ・ヨコ)→ナデ	(5.1cm)	－	－	(0.9cm)	外:赤褐Hue5YR4/8 内:浅黄Hue2.5Y7/4	良好	1.0mm以下	0.5mm前後		1.0mm以下			外面は、斜めの条痕の後、口唇部に横方向の条痕を施す。
第17図12	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (6210)	外:条痕(ヨコ)→ナデ 内:ナデ	(5.1cm)	－	－	(1.1cm)	外:暗灰黄Hue2.5Y5/2 内:浅黄Hue2.5Y7/4	良好	0.5mm前後	2.0mm以下		1.0mm以下		7.0mm大の粒を若干(砂岩?)	
第17図13	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (6257)	外:条痕(細い)(ヨコ) 内:条痕(細い)(ヨコ)	(2.8cm)	－	－	(1.5cm)	外:暗褐Hue10YR3/3 内:褐Hue7.5YR4/3	良好	0.5mm前後	1.0mm以下		1.5mm以下	微粒		
第17図14	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (4980)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ヨコ)→ナデ	(4.7cm)	－	－	(0.8cm)	にぶい黄Hue2.5Y6/4	良好	1.5mm以下	1.5mm以下		1.0mm以下	微粒		外面は、斜めの条痕の後、口縁端部および、口縁部下でヨコナデにより条痕を消す箇所あり。(文様を意識?)
第17図15	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (3806)	外:条痕(ケズリ状)(ヨコ→タテ) 内:条痕文	(2.2cm)	－	－	(1.05cm)	明褐Hue7.5YR5/8	良好	0.5mm前後	0.5mm前後	0.5mm前後	1.0mm以下			口唇部外面に横方向の条痕の後、ケズリ状の縦方向の条痕。

第3表　土器観察表（その2）

遺構覧の(黒)はⅣ1層、(暗茶)はⅣ2層に対応

図版番号	器種	部位・残存	遺構	文様・調整	法量 器高	口径	底径	最大厚	色調	焼成	石英	白色粒子	赤色粒子	角閃石	雲母(金)	その他	備考
第17図16	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(黒)(5384)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ヨコ)	(6.9cm)	－	－	(1.9cm)	明赤褐Hue5YR5/8	良好	有り？	3.0mm以下		2.0mm以下			外面は横方向や従来の左上がりの条痕を施した後、口唇部には左下がりの条痕を施す。
第17図17	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(黒)(332)	外:条痕(ナナメ) 内:条痕(ヨコ)→ナデ	(8.1cm)	－	－	(0.8cm)	外:明黄褐Hue10YR6/6 内:にぶい黄橙10YR7/4	良好		1.0mm以下	1.0mm以下	0.5mm以下		3.0mm大の粒	口縁端部はナデ調整のためやや歪曲。 口縁端部下に焼成後穿孔。
第17図18	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(黒)(3453)	外:条痕(ナナメ) 内:条痕(ヨコ→ナナメ)	(7.6cm)	－	－	(1.05cm)	にぶい黄橙Hue10YR6/4 黄灰2.5Y5/1	良好	4.0mm以下	3.0mm以下		0.5mm以下	微粒		口縁端部はナデ調整のためやや歪曲。
第17図19	縄文土器(条痕文)	口縁部	4区包含層(南壁)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:ナデ	(6.3cm)	－	－	(1.1cm)	にぶい黄橙Hue10YR7/4	やや軟	1.0mm以下	2.0mm以下		1.5mm以下	微粒		口縁部が外反する。 口縁端部はナデ調整のためやや歪曲。
第17図20	縄文土器(条痕文)	口縁部	2区包含層(南西側)	外:ナデ・工具ナデ 内:条痕	(4.1cm)	－	－	(0.8cm)	外:明赤褐Hue5YR5/2 内:にぶい褐Hue7.5Y5/3	良好	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下		微粒		
第17図21	縄文土器(条痕文?)	口縁部	3区包含層(東側土柱)	外:条痕？(細い)(タテ)→ナデ 内:ナデ	(4.75cm)	－	－	(1.0cm)	橙Hue5YR6/6	良好		1.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下	微粒		擦痕の様な条痕？。
第17図22	縄文土器(条痕文)	口縁部	3区包含層(南東側)	外:条痕(ナナメ)→刺突 内:条痕(タテ)	(4.4cm)	－	－	(1.15cm)	外:橙Hue7.5YR6/6 内:にぶい黄橙Hue10YR6/4	良好	1.0mm以下	1.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下			外面口縁端部下に刺突。刺突はついた後、下に引く。
第18図1	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(暗茶)(5627)	外:条痕(ナナメ→ヨコ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)	(11.4cm)	－	－	(1.2cm)	外:褐Hue7.5YR4/3 内:褐Hue7.5YR4/4	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		1.0mm以下	微粒		
第18図2	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(暗茶)(6235)	外:条痕(ヨコ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(7.3cm)	－	－	(1.2cm)	黒褐Hue10YR3/2 にぶい黄橙Hue10YR6/4	良好	1.0mm以下	3.5mm以下		2.0mm以下	2.0mm以下		
第18図3	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(暗茶)(4080・4250)	外:条痕(タテ・ナナメ)→ナデ 内:条痕(ヨコ・ナナメ)→ナデ	(7.6cm)	－	－	(1.35cm)	外:橙Hue5YR6/8 内:にぶい黄橙Hue10YR7/3	良好	2.0mm以下	3.0mm以下	3.0mm以下			5.0mm大の粒	内面白っぽい。
第18図4	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(暗茶)(4866)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(7.0cm)	－	－	(1.3cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:にぶい橙Hue7.5YR6/4	良好	3.0mm以下	3.0mm以下			微粒	4.0mm大の粒	内面白っぽい。
第18図5	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(暗茶・黒)(4325・5291)	外:条痕(ヨコ・ナナメ)→ナデ 内:ナデ	(6.65cm)	－	－	(1.25cm)	外:橙Hue5YR6/6にぶい黄橙Hue10YR7/3 内:にぶい黄橙Hue10YR7/3	良好		3.0mm以下	5.0mm以下	微粒		5.0mm大の粒	内面白っぽい。
第18図6	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(暗茶)(6223)	外:条痕(ナナメ→ヨコ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(6.0cm)	－	－	(1.0cm)	外:にぶい黄橙Hue10YR6/4 内:にぶい黄橙Hue10YR7/4	良好	0.5mm前後	1.0mm以下		1.0mm以下	微粒		
第18図7	縄文土器(条痕文)	胴部	2区包含層(暗茶)(6058)	外:条痕(ヨコ)(細い) 内:ナデ	(5.4cm)	－	－	(1.25cm)	外:にぶい赤褐Hue5YR4/4 内:灰オリーブHue5Y5/2	良好	1.0mm以下	3.0mm以下		2.0mm以下		4.0mm大の粒	
第18図8	縄文土器(条痕文)	胴部	2区包含層(暗茶)(6059)	外:条痕(ナナメが交差)→ナデ？ 内:条痕(ヨコ・ナナメ)→ナデ	(7.15cm)	－	－	(0.85cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:暗灰黄Hue2.5Y5/2	良好	1.5mm前後	4.0mm以下		1.5mm以下			外面はナナメ方向の条痕が交差している。
第18図9	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(暗茶)(5737)	外:条痕(タテ・ナナメ)→ナデ 内:ナデ	(4.7cm)	－	－	(0.95cm)	外:黄橙Hue10YR8/8 内:灰黄褐Hue10YR5/2	良好	1.5mm以下	1.5mm以下		1.5mm以下			内外面、および欠損部にも煤付着。
第18図10	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(暗茶)(5619)	外:条痕(ナナメ)(細い) 内:ナデ	(3.8cm)	－	－	(1.4cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6にぶい赤褐5YR4/3 内:にぶい赤褐Hue5YR5/4	良好	0.5mm前後	1.0mm以下		1.5mm以下	微粒	2.0mm大の黒い粒	上下左右不明。
第18図11	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(暗茶)(4995)	外:条痕(ヨコ)(細い)→一部ナデ 内:条痕(ヨコ→ナナメ)(細い)	(4.6cm)	－	－	(0.9cm)	外:褐Hue7.5YR4/4 内:明褐Hue7.5YR5/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下		1.0mm以下			
第18図12	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(黒)(3216)	外:条痕(ヨコ)(深い) 内:ナデ	(4.2cm)	－	－	(1.9cm)	外:明黄褐Hue10YR7/6 内:にぶい黄橙Hue10YR7/3	良好	2.0mm以下	3.0mm以下	2.0mm以下	0.5mm以下	微粒		
第18図13	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(黒)(389)	外:条痕(タテ)→ナデ 内:ナデ？	(4.5cm)	－	－	(1.55cm)	外:明褐Hue7.5YR5/6 内:黄灰Hue2.5Y4/1	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.5mm以下			内面に煤付着。 内面に焼成後穿孔途中のものあり。
第18図14	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(西端部)	外:条痕(ヨコ)→ナデ 内:ナデ	(3.65cm)	－	－	(1.2cm)	明赤褐Hue5YR5/6 褐灰Hue7.5YR4/1	良好	0.5mm以下	2.0mm以下				3.0mm大の粒	
第18図15	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(黒)(5297)	外:条痕(ナナメが交差してる) 内:条痕(ヨコ・ナナメ)	(5.95cm)	－	－	(1.4cm)	外:にぶい黄褐Hue10YR4/3 内:灰黄褐Hue10YR4/2	良好	1.5mm以下	2.0mm以下		1.5mm以下		5.0mm大の粒	外面は、条痕が交差している。
第18図16	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(黒)(319)	外:条痕(ヨコ) 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(5.6cm)	－	－	(0.7cm)	外:橙Hue7.5YR6/6 内:黒Hue7.5Y2/1	良好	1.0mm以下	0.5mm前後		1.0mm以下			内面に煤付着。
第18図17	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(黒)(4919)	外:条痕(ナナメ)→一部ヨコナデ 内:条痕(タテ・ナナメ)→ナデ？	(4.65cm)	－	－	(0.8cm)	外:褐灰Hue10YR4/1 内:にぶい黄橙Hue10YR6/4	良好	1.0mm以下	1.5mm以下	1.0mm以下	0.5mm前後			外面に一部ヨコナデ。
第18図18	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層(杭下)	外:条痕(ナナメ) 内:条痕(ナナメ)→一部ナデ	(8.2cm)	－	－	(0.75cm)	外:橙Hue7.5YR6/6 内:黒Hue7.5YR2/1にぶい黄橙Hue10YR7/4	良好	0.5mm前後	0.5mm前後		0.5mm前後		6.0mm大の粒	内面に煤付着。
第18図19	縄文土器(条痕文)	胴部	3区包含層(5340)	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)	(4.7cm)	－	－	(1.0cm)	外:浅黄Hue2.5YR7/4 内:にぶい黄Hue2.5Y6/4	良好	?0.5mm前後	2.0mm以下	1.0mm以下	0.5mm前後			
第18図20	縄文土器(条痕文)	胴部	4区包含層東端部	外:条痕(ナナメ) 内:条痕(ナナメ)	(5.1cm)	－	－	(0.55cm)	外:橙Hue7.5YR7/6 内:黒褐Hue2.5Y3/1	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		0.5mm以下			内面に煤付着。
第18図21	縄文土器(条痕文)	胴部(下部)	4区遺構検出時	外:条痕(ナナメ)→ナデ 内:条痕(ナナメ)→ナデ	(7.65cm)	－	－	(1.8cm)	暗赤褐Hue5YR3/6	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		0.5mm以下			外面黒斑。
第19図1	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶)(4982・4979)	外:ナデ 内:ナデ	(12.1cm)	－	－	(1.05cm)	外:褐Hue7.5YR4/3 内:灰褐Hue7.5YR4/2	良好	1.0mm以下	2.0mm以下					口縁部外面に指頭圧が著しい。一部ツメ痕もあり。文様を意識か？。外面には煤、内面には黒斑状のもの。
第19図2	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶)(4840)	外:工具ナデ(ヨコ)→ナデ 内:ナデ	(10.8cm)	－	－	(1.4cm)	外:明赤褐Hue7.5YR5/6 内:にぶい橙Hue7.5YR7/4	良好	1.0mm以下	2.0mm以下	2.5mm以下	2.0mm以下			
第19図3	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶)(4859)	外:ナデ 内:ナデ	(13.9cm)	－	－	(2.3cm)	明赤褐Hue5YR5/8	やや軟	3.0mm以下	5.0mm以下	3.0mm以下	0.5mm前後			
第19図4	縄文土器(無文)？	口縁部	2区包含層(暗茶)(6121)	外: 内:	(1.6cm)	－	－	(0.95cm)	橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下	0.5mm以下					

第4表　土器観察表（その3）

遺構覧の(黒)はⅣ1層、(暗茶)はⅣ2層に対応

図版番号	器種	部位・残存	遺構	文様・調整	法量 器高	口径	底径	最大厚	色調	焼成	石英	白色粒子	赤色粒子	角閃石	雲母(金)	その他	備考
第19図5	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (6284)	外:工具ナデ→ナデ 内:ナデ	(5.2cm)		−	(1.2cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:にぶい橙Hue7.5Y7/4	良好	2.0mm以下	5.0mm以下	2.0mm以下	2.0mm以下			
第19図6	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (5002)	外:調整不明 内:ナデ	(6.0cm)		−	(1.1cm)	外:浅黄橙Hue10YR7/4 内:にぶい黄Hue2.5Y6/3	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		2.0mm以下			内面に指頭圧が目立つ。
第19図7	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (5613)	外:ナデ(一部工具ナデ) 内:工具ナデ(ヨコ)→ナデ	(11.5cm)		−	(1.5cm)	外:黒褐Hue10YR3/1 内:明褐Hue7.5YR5/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下			外面に煤。
第19図8	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (5079)	外:ナデ 内:ナデ	(4.7cm)		−	(1.2cm)	明赤褐Hue5YR5/6	良好	2.0mm以下	1.5mm以下		1.0mm以下			口縁端部に刻目(条痕の原体使用か?)。
第19図9	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (6277)	外:ナデ 内:ナデ	(6.7cm)		−	(0.9cm)	にぶい黄褐Hue10YR5/4	良好	2.5mm以下	3.0mm以下		2.5mm以下			
第19図10	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (6264)	外:ナデ 内:ヨコナデ	(6.25cm)		−	(0.9cm)	灰黄褐Hue10YR5/2 浅黄Hue2.5Y7/4	良好	1.0mm以下	0.5mm以下		1.5mm以下			
第19図11	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (4996)	外:ナデ 内:ナデ	(5.1cm)		−	(0.9cm)	にぶい褐Hue7.5YR5/4	良好	1.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	微粒		
第19図12	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (6276)	外:ナデ(一部工具ナデ?) 内:ナデ・口縁端部は工具ナデ?	(8.1cm)		−	(1.5cm)	明褐Hue7.5YR5/6	良好	1.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	微粒		外面:口縁部付近に煤、内面に黒斑。
第19図13	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (5606)	外:ナデ 内:ナデ	(7.7cm)		−	(0.9cm)	橙Hue7.5YR6/6 にぶい黄褐Hue10YR5/3	良好	1.0mm以下	1.5mm以下		1.5mm以下			口縁端部に瘤。
第19図14	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (6214)	外:ナデ 内:ナデ	(4.2cm)		−	(0.75cm)	暗灰黄Hue2.5Y5/2	良好		1.0mm以下		1.0mm以下	微粒	5.0mm大の粒	
第19図15	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (礫層グリッド13)	外:ナデ 内:ナデ	(4.5cm)		−	(0.9cm)	褐Hue7.5YR4/6	良好	1.0mm以下	1.5mm以下	1.0mm以下	1.5mm以下	微粒		
第19図16	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (3733・3806)	外:ナデ 内:ナデ	(4.9cm)		−	(1.1cm)	外:橙Hue7.5YR7/6 内:褐灰Hue7.5YR4/1	良好	3.0mm以下	3.0mm以下	1.5mm以下	1.5mm以下	微粒		
第19図17	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (4241)	外:ナデ(一部工具ナデ?) 内:ナデ	(5.7cm)		−	(0.65cm)	橙Hue5YR6/8	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		1.0mm以下	0.5mm以下		
第19図18	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(暗茶) (5016)	外:ナデ 内:ナデ	(4.4cm)		−	(1.2cm)	外:褐Hue7.5YR4/4 内:赤褐Hue5YR4/8	良好	2.0mm以下	1.0mm以下		1.5mm以下	0.5mm以下		
第19図19	縄文土器(無文)	口縁部	4区包含層(黒) (3303・3304)	外:ナデ 内:調整不明(煤付着の為)	(5.2cm)		−	(1.2cm)	外:橙Hue7.5YR6/6 内:黒褐Hue7.5YR3/1	良好	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	0.5mm以下		内面に煤付着。
第19図20	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(黒) (968)	外:ナデ 内:ナデ	(5.5cm)		−	(1.1cm)	外:褐Hue7.5YR4/4 内:黒褐Hue7.5YR3/2	良好	2.0mm以下	2.5mm以下		2.0mm以下			
第19図21	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層 (5010)	外:ナデ 内:ナデ	(5.0cm)		−	(1.4cm)	外:にぶい黄橙Hue10YR7/4 内:にぶい黄橙Hue10YR7/3	良好	2.0mm以下	1.5mm以下	2.0mm以下	0.5mm以下	微粒		
第19図22	縄文土器(無文)	口縁部	3区包含層(暗茶) (礫層中央)	外:ナデ 内:ナデ	(3.1cm)		−	(0.8cm)	外:にぶい黄褐Hue10YR4/3 内:暗褐Hue10YR3/3	やや軟	1.0mm以下	1.0mm以下		1.5mm以下	微粒		
第19図23	縄文土器(無文)	口縁部	3区 27号柱穴	外:ナデ 内:ナデ	(2.9cm)		−	(0.95cm)	灰褐Hue7.5YR4/2	良好	0.5mm以下	1.0mm以下		0.5mm以下	微粒		
第19図24	縄文土器(無文)	口縁部	2区包含層 (東側)	外:ナデ 内:ナデ	(2.6cm)		−	(1.05cm)	明赤褐Hue5YR5/6	良好	1.5mm以下	3.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下			
第19図25	縄文土器(無文)	口縁部	2区包含層 (東側)	外:ナデ 内:ナデ	(2.2cm)		−	(0.85cm)	外:にぶい褐Hue7.5YR5/3 内:灰褐Hue7.5YR4/2	良好	0.5mm以下	0.5mm以下					
第20図1	縄文土器(無文)	口縁部	2区　4号柱穴	外:ナデ・工具ナデ? 内:ナデ・工具ナデ?(ケズリ気味)	(7.2cm)		−	(1.25cm)	にぶい橙Hue7.5YR6/4	良好	2.0mm以下	1.0mm以下		2.0mm以下		5.0mm以下 (片岩系の石)	口縁部下外面に瘤。
第20図2	縄文土器(無文)	胴部(上位)	4区 (南側壁面)	外:ナデ 内:ナデ	(4.8cm)		−	(1.2cm)	外:褐灰Hue10YR4/1 内:明黄褐Hue10YR7/6	良好	1.0mm以下	1.0mm以下		2.0mm以下	0.5mm以下		外面に瘤の剥離痕? 内面に繊維痕?
第20図3	縄文土器(無文)	胴部(上位)	4区 11号柱穴	外:ナデ 内:ナデ	(6.6cm)		−	(0.9cm)	にぶい褐Hue7.5YR5/4	良好	0.5mm前後	2.0mm以下		1.0mm以下			焼成前穿孔あり。
第20図4	縄文土器(無文)	胴部(上位)	4区包含層(暗茶) (5728)	外:ナデ 内:ナデ	(12.0cm)		−	(1.25cm)	明黄褐Hue10YR7/6 内:にぶい黄褐Hue10YR5/3	良好	1.5mm以下	2.0mm以下		1.5mm以下			内面に煤付着。 内面指頭圧が目立つ。
第20図5	縄文土器(無文)	胴部	3区包含層(黒) (3284・3355)	外:工具ナデ(タテミガキ状) 内:工具ナデ(一部ミガキ状)	(8.2cm)		−	(1.4cm)	外:明褐Hue7.5YR5/8 内:にぶい褐Hue7.5YR5/4	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下		7.0mm大の粒	内面は一見、工具ナデの後、ミガキのように見えるが、工具ナデが一部でミガキ状になっているものと判断した。よって、外面と内面の調整工具は同一であると考える。
第20図6	縄文土器(無文)	胴部	3区後世の整地土 (南端部)	外:ナデもしくは工具ナデ(ややミガキ状) 内:ナデ?	(5.8cm)		−	(1.6cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:にぶい黄褐Hue10YR7/2	やや軟		3.0mm以下	2.0mm以下			4.0mm大の粒	内面白っぽい。
第20図7	縄文土器(無文)	胴部	4区包含層(暗茶) (5726)	外:ナデ 内:ナデ?	(6.1cm)		−	(1.55cm)	外:にぶい黄橙Hue10YR7/2橙Hue5YR6/6 内:にぶい黄橙Hue10YR7/3	良好	1.0mm以下	2.0mm以下	2.0mm以下				内面白っぽい。
第20図8	縄文土器(無文)	胴部	4区包含層(暗茶) (5738)	外:ナデ 内:ナデ	(8.0cm)		−	(1.35cm)	外:にぶい橙Hue7.5YR7/4 内:褐灰Hue7.5YR6/1	良好	0.5mm前後	1.0mm以下	1.5mm以下	1.5mm以下			上下逆の可能性あり。
第20図9	縄文土器(無文)	胴部	4区包含層(暗茶) (5722)	外:ナデ 内:ナデ	(6.4cm)		−	(1.2cm)	明黄褐Hue10YR6/6	良好	1.5mm以下	2.0mm以下		2.0mm以下			
第20図10	縄文土器(無文)	胴部(下位)	3区包含層(暗茶) (6282)	外:ナデ 内:ナデ?	(4.5cm)		−	(1.5cm)	外:褐Hue7.5YR4/6 内:にぶい黄Hue2.5Y	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		2.0mm以下			
第20図11	縄文土器(無文)	胴部(下位)	2区包含層(暗茶) (6057)	外:ナデ 内:ナデ?	(6.5cm)		−	(2.0cm)	外:明赤褐Hue5YR5/6 内:褐灰Hue5YR4/1	良好	1.0mm以下	5.0mm以下	2.0mm以下	1.0mm以下	微粒		

第5表　土器観察表（その4）

遺構覧の（黒）はⅣ1層、（暗茶）はⅣ2層に対応

図版番号	器種		遺構	文様・調整	法量				色調	焼成	石英	白色粒子	赤色粒子	角閃石	雲母（金）	その他	備考
		部位・残存			器高	口径	底径	最大厚									
第20図12	縄文土器（無文）	胴部（下位）	4区包含層（暗茶）（礫層グリッド6）	外：工具ナデ 内：ナデ	(5.6cm)	－	－	(2.0cm)	外：にぶい黄褐Hue10YR5/4 内：灰黄Hue2.5Y6/2	良好	3.0mm以下	2.0mm以下		1.0mm以下		5.0mm大の粒	
第20図13	縄文土器（無文？）	胴部（下位）	3区包含層（4720）	外：ナデ？ 内：ナデ	(5.2cm)	－	－	(1.45cm)	外：褐Hue7.5YR4/6 内：にぶい黄Hue2.5Y6/3	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		2.0mm以下			条痕文の可能性もあり。
第21図1	縄文土器（撚糸文）	口縁部	4区（23´号柱穴）	外：撚糸文（ナナメ） 内：ナデ以外不明	(8.9cm)	－	－	(1.4cm)	褐Hue7.5YR4/4	やや軟	2.0mm以下	1.5mm以下	5.0mm以下	2.0mm以下			
第21図2	縄文土器（撚糸文）	口縁部？	3区包含層（黒）（2402）	外：撚糸文（ナナメ） 内：撚糸文（ナナメ）・ナデ	(3.7cm)	－	－	(1.1cm)	外：暗褐Hue7.5YR3/3 内：橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下			0.5mm前後			細い撚糸文、最初条痕文と思ったほど。なおかつ、本遺跡中の他の撚糸文に比べ特異。
第21図3	縄文土器（撚糸文）	口縁部	4区（23号柱穴）	外：撚糸文（ナナメ） 内：ナデ	(9.0cm)	－	－	(1.6cm)	外：赤褐Hue5YR4/8 内：黒褐Hue10YR3/1	やや軟	1.0mm以下	2.0mm以下		2.5mm以下		5.0mm大の粒	
第21図4	縄文土器（撚糸文）	胴部	4区包含層（暗茶）（5732）	外：撚糸文（ナナメ） 内：ナデもしくは工具ナデ	(6.1cm)	－	－	(1.35cm)	外：赤褐Hue5YR4/6 内：褐Hue7.5YR4/4	やや軟	1.0mm以下	3.0mm以下	3.0mm以下	0.5mm前後		4.0mm大の粒	撚糸の節が分かる。
第21図5	縄文土器（撚糸文）	胴部	4区包含層（暗茶）（4830）	外：撚糸文（ナナメ・ヨコ） 内：ナデ・工具ナデ	(5.85cm)	－	－	(1.3cm)	外：褐Hue7.5YR4/4 内：褐Hue7.5YR4/6	やや軟	1.0mm以下	1.5mm以下		1.0mm以下		4.0mm大の粒	上下不明。 撚糸の節が分かる。
第21図6	縄文土器（撚糸文）	胴部	3区包含層（暗茶）（6275）	外：撚糸文（ナナメ） 内：ナデ	(7.6cm)	－	－	(1.6cm)	外：黒褐Hue2.5Y3/1 内：にぶい黄Hue2.5Y6/3	良好		2.5mm以下	2.5mm以下	2.0mm以下			他の出土土器に比べ胎土が精良。 焼成の具合も他の撚糸文と違う。
第21図7	縄文土器（押型文：山形）	口縁部～胴部	4区包含層（黒・暗茶）（4798・6234）	外：山形押型文→ヨコナデ 内：山形押型文・ナデ	(11.4cm)	－	－	(1.05cm)	外：橙Hue7.5YR6/6 内：にぶい黄褐Hue10YR5/4	良好	1.0mm以下	5.0mm以下				5.0mm大の粒（砂岩？）	別の点で取り上げた2点が接合。口縁部内面付近にも山形文。 外面にヨコナデにより山形文を消す箇所あり。（文様を意識？）
第21図8	縄文土器（押型文：山形）	口縁部～胴部	4区包含層（暗茶）（4872）4区4号柱穴	外：山形押型文 内：山形押型文・ナデ	(6.3cm)	－	－	(1.0cm)	褐Hue7.5YR4/6	良好		3.0mm前後		微粒		5.0mm大の粒を若干	口縁部内面付近にも山形文。
第21図9	縄文土器（押型文：山形）	口縁部～胴部	4区包含層（黒）（4947）	外：山形押型文 内：山形押型文・ナデ	(7.8cm)	－	－	(1.2cm)	明赤褐Hue5YR5/6	良好	1.0mm以下	4.0mm前後				5.0mm大の粒を少量（砂岩？）	口縁部内面付近にも山形文。
第21図10	縄文土器（押型文：山形）	胴部	4区包含層（暗茶）（4845）	外：山形押型文→ヨコナデ 内：ナデ	(4.8cm)	－	－	(1.0cm)	外：明赤褐Hue5YR5/8 内：にぶい黄褐Hue7.5YR5/4	良好	0.5mm前後	0.5mm前後				3.0mm以下の粒を少量	外面にヨコナデにより山形文を消す箇所あり。（文様を意識？）
第21図11	縄文土器（押型文：山形）	胴部	4区包含層	外：山形押型文 内：ナデ	(2.4cm)	－	－	(0.9cm)	明赤褐Hue5YR5/6	良好	1.0mm以下	3.0mm前後		1.0mm以下			第21図7～10に比べ山形文が雑。 小片のため上下不明。
第21図12	縄文土器（押型文：楕円）	胴部	4区遺構検出時（東側）	外：楕円形押型文 内：ナデ	(2.5cm)	－	－	(1.2cm)	外：にぶい黄橙Hue10YR7/4 内：暗灰黄Hue2.5YR4/2	良好	0.5mm前後	3.0mm前後		微粒			
第22図1	縄文土器	底部	3区包含層（暗茶）（6280）	外：ナデ・工具ナデ・かき取り 内：ナデ	(5.2cm)	－	－	(1.55cm)	外：明褐Hue7.5YR5/6 内：にぶい褐Hue7.5YR5/4	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	?1.0mm以下	1.5mm以下	微粒		底部外面に放射状のかき取り。
第22図2	縄文土器（無文？）	底部	2区包含層（暗茶）（6055）	外：工具ナデ 内：ナデ	(3.15cm)	－	－	(2.6cm)	褐Hue7.5YR4/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下		2.0mm以下	微粒	5.0mm大の粒	底部外面に放射状の工具ナデ（乳房状を志向か？）。
第22図3	縄文土器（条痕文）	底部	3区包含層（暗茶）（5739）	外：ナデ・条痕文 内：ナデ	(2.5cm)	－	－	(1.45cm)	外：黒褐Hue2.5YR3/1 内：褐Hue7.5YR4/3	良好	1.0mm以下	2.0mm以下		1.0mm以下	微粒		
第22図4	縄文土器	底部	3区包含層（暗茶）（6263）	外：不明 内：ナデ	(2.1cm)	－	－	(1.0cm)	橙Hue7.5YR6/6	やや軟	1.0mm以下	2.5mm以下	2.5mm以下	1.5mm以下			外面に黒斑。
第22図5	縄文土器（無文？）	底部	3区包含層（東側）	外：ナデ 内：ナデ	(2.9cm)	－	－	(20.05cm)	橙Hue7.5YR6/6	良好	1.0mm以下	3.0mm以下	1.0mm以下	0.5mm以下			底部はやや乳房状になる。
第22図6	縄文土器	底部	4区遺構検出時（西端）	外：不明 内：不明	(2.9cm)	－	－	(0.95cm)	外：にぶい黄橙Hue10YR7/4 内：浅黄Hue7.5Y7/3	やや軟	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下			
第22図7	縄文土器	底部	3区包含層（黒）（5342）	外：ナデ 内：ナデ（ミガキ状）	(2.4cm)	－	－	(1.2cm)	外：明赤褐Hue5YR5/8 内：黒Hue7.5Y2/1	良好	2.0mm以下	2.0mm以下	0.5mm以下	1.0mm以下			3区5354と同一固体か？
第22図8	縄文土器	底部	4区包含層（暗茶）（4976）	外：ナデ（一部工具ナデ） 内：ナデ	(2.4cm)	－	－	(1.0cm)	外：褐Hue7.5Y4/6 内：灰黄褐Hue10YR4/2	良好	1.5mm以下	3.0mm以下		2.0mm以下	微粒		
第22図9	縄文土器	底部	調査区一括	外：工具ナデ・ナデ？ 内：ナデ	(2.9cm)	－	－	(1.8cm)	外：橙Hue7.5YR7/6 内：灰黄褐Hue10YR5/2	良好	1.5mm以下	2.5mm以下		2.5mm以下			外面に白い付着物。
第22図10	縄文土器（無文）	土器加工品（途中？）	4区包含層（暗茶）（5014）	外：ナデ 内：ナデ	土器加工品時の最大長10.8cm、最大幅7.7cm			(1.05cm)	外：黄橙Hue10YR8/6 内：黒Hue10YR2/1	良好	1.0mm前後	2.0mm以下		2.0mm以下			土器加工品製作途中のものか？
第22図11	縄文土器（条痕文）	土器加工品	4区包含層（暗茶）（5729）	外：条痕→ナデ 内：ナデ	土器加工品時の最大長3.6cm、最大幅3.45cm			(0.7cm)	外：橙Hue7.5YR7/6 内：褐灰Hue7.5YR4/1	良好	1.0mm前後	1.0mm前後		0.5mm前後			
第32図1	縄文土器（轟B式）	口縁部	4区（3号土坑）	外：ナデ 内：貝殻条痕	(2.9cm)	－	－	(0.8cm)	外：黒褐Hue2.5Y3/1 内：にぶい褐Hue7.5YR5/3	良好		1.5mm以下	0.5mm前後	0.5mm前後			口唇部に貝殻腹縁による刺突。
第32図2	縄文土器	胴部？	2区（3号柱穴）	外：ナデ 内：ナデ	(3.6cm)	－	－	(1.1cm)	外：橙Hue7.5Y6/8 内：灰褐Hue7.5YR4/2	良好	2.0mm以下		1.0mm前後	0.5mm前後	0.5mm以下		外面強いヨコナデによる凹凸あり。
第32図3	縄文土器（後期？）	底部	2区（道路状遺構）P1	外：調整不明 内：調整不明	(2.5cm)	－	－	(1.2cm)	外：橙Hue5Y6/6 内：浅黄Hue2.5Y7/3	良好	1.0mm以下	1.0mm以下	1.0mm以下	1.5mm以下	微粒		
第32図4	縄文土器（後晩期）（浅鉢）	胴部	3区（3号柱穴）	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	(4.2cm)	－	－	(0.6cm)	外：明赤褐Hue5YR5/8灰褐Hue7.5YR4/2 内：橙Hue7.5YR6/6	良好		0.5mm前後				精良	
第32図5	縄文土器（後晩期）（浅鉢？）	胴部	4区遺構検出時（南側）	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	(3.0cm)	－	－	(0.65cm)	外：明褐Hue7.5YR5/8 内：黄褐Hue5YR4/8	良好	0.5mm前後	1.0mm以下	2.0mm以下	0.5mm前後		精良	
第38図1	縄文土器（無文）	口縁部	3区8号土坑	外：ナデ 内：ナデ	(3.3cm)	－	－	(0.55cm)	明褐Hue7.5YR5/8	良好	1.0mm以下	1.0mm以下			微粒		

第6表　石器観察表

遺構覧の(黒)はⅣ1層、(暗茶)はⅣ2層に対応

図版番号	器　種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第23図1	石鏃	4区包含層(4991)	1.4	1.1	0.45	0.5	チャート	
第23図2	石鏃	3区包含層(暗茶)(5605)	1.5	1.5	0.5	1.2	チャート	
第23図3	石鏃	3区包含層	1.3	1.4	0.35	0.7	チャート	
第23図4	石鏃	3区包含層(4716)	1.6	1.8	0.4	0.6	チャート	
第23図5	石鏃	4区遺構検出時(西側)	3.3	2.2	0.5	1.9	チャート	
第23図6	石鏃	表採	3.4	3.1	0.75	8.4	チャート	未製品、スクレイパーの可能性も
第23図7	有舌尖頭器	3区包含層(黒)(4732)	3.2	1.65	0.6	2.5	チャート	
第23図8	有舌尖頭器	3区包含層(4159)	3.6	2.1	0.65	5.3	チャート	
第23図9	有舌尖頭器	3区包含層(暗茶)(3927)	3.3	2.15	0.8	6.1	チャート	
第23図10	スクレイパー	3区包含層(西壁付近)	4.5	2.7	0.8	9.9	チャート	
第23図11	クサビ形石器	3区包含層(黒)(2526)	2.5	2.3	0.8	4.2	チャート	
第23図12	クサビ形石器	3区包含層(4717)	3.6	3.5	0.9	8	チャート	
第23図13	クサビ形石器	表採	3.4	2	0.9	6.7	チャート	
第23図14	スクレイパー	4区包含層	2.2	2	0.6	2.7	チャート	
第23図15	彫器様石器	3区包含層(黒)(421)	2.6	1.9	1	5.2	チャート	
第23図16	彫器様石器	3区包含層(黒)(2951)	5.1	3.1	1.35	25.2	チャート	
第23図17	スクレイパー	3区包含層(4722)	2.8	3.5	0.6	8.8	チャート	
第23図18	使用痕剥片	4区包含層	6.5	2.35	0.8	8.3	チャート	縦長剥片をそのまま削器として使用
第24図1	剥片石器	2区包含層(暗茶)(6121)	7.6	5	1.1	55	砂岩	片面加工スクレイパー礫片素材
第24図2	剥片石器	3区包含層(黒)(1472)	10.5	3.5	0.6	36	結晶片岩	両面加工スクレイパー
第24図3	剥片石器	4区包含層(黒)(4922)	11.9	5.6	4	246	砂岩	大型剥片
第24図4	剥片石器	3区包含層(暗茶)(3552)	8.8	7	2.8	147	砂岩	
第24図5	剥片石器	3区包含層(黒)(3340)	13.7	9	2.5	486	砂岩	錯交剥離スクレイパー大型礫片素材
第25図1	石核	4区包含層(黒)(4768)	12.2	8.2	6	770	砂岩	
第25図2	石核	3区包含層(暗茶)(3665)	11.7	7.5	6.9	840	砂岩	
第25図3	石核	3区包含層(黒)(1535)	13.7	8.9	6.3	1210	砂岩	
第25図4	石核	3区包含層(黒)(3490)	7.8	3.9	2.7	56	チャート	
第25図5	凝灰岩加工品	4区包含層(黒)(4937)	19	14.8	9.8	2000	凝灰岩	被熱
第25図6	片刃礫器	2区包含層(暗茶)(6187)	7.1	7.3	1.7	115	砂岩	
第26図1	片刃礫器	3区包含層(黒)(3073)	9.2	8	3.1	284	砂岩	
第26図2	片刃礫器	3区包含層(黒)(1119)	10	6.9	4.1	426	砂岩	
第26図3	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(3576)	12.5	9.6	4.3	764	砂岩	
第26図4	片刃礫器	4区包含層(暗茶)(礫層グリッド7)	12.4	9.7	4.4	752	砂岩	

図版番号	器　種	出土部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第26図5	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(3736)	11	7.7	1.9	171	砂岩	扁平礫
第26図6	片刃礫器	4区包含層(黒)(4939)	8.8	6.3	2.9	217	砂岩	
第26図7	片刃礫器	2区包含層(暗茶)(6071)	10.9	10	2.4	427	砂岩	
第26図8	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(3668)	12	7.8	4.2	475	砂岩	
第27図1	片刃礫器	4区包含層(暗茶)(礫層グリッド7)	10.5	8	5.1	387	砂岩	
第27図2	片刃礫器	4区包含層(暗茶)(礫層グリッド6)	9.2	8.5	3.2	338	砂岩	
第27図3	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(西側礫層グリッド1)	10.3	7.9	4.1	328	砂岩	
第27図4	片刃礫器	3区4号集石周辺一括	10.9	8.7	3.3	373	砂岩	
第27図5	片刃礫器	4区包含層(暗茶)(5170)	13.5	9.1	4.7	516	砂岩	端部刃潰しあり
第27図6	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(4145)	13.9	8.1	6.6	790	砂岩	
第27図7	片刃礫器	3区包含層(黒)(5287)	12.2	11.5	4.7	714	砂岩	
第28図1	片刃礫器	4区包含層(暗茶)(5130)	9.7	9.3	3.8	386	砂岩	ノッチあり
第28図2	片刃礫器	3区包含層(黒)(969)	13.4	13.8	3.4	784	砂岩	
第28図3	両刃礫器	2区包含層(西壁サブトレンチ)	12.2	9.6	4	504	砂岩	
第28図4	片刃礫器	3区包含層(暗茶)(4589)	11.6	10.6	3.6	431	砂岩	
第28図5	両刃礫器	3区包含層(暗茶)(3898)	9.9	7.7	3.7	246	砂岩	
第28図6	両刃礫器	3区包含層(暗茶)(東側礫層グリッド3)	10.6	9.6	3.5	592	砂岩	亜角礫
第29図1	両刃礫器	3区包含層(黒)(1002)	13.1	9.4	4.2	626	砂岩	
第29図2	両刃礫器	4区包含層(暗茶)(礫層グリッド2下層)	9.5	9	3.2	313	砂岩	偏平礫
第29図3	両刃礫器	4区包含層(暗茶)(礫層グリッド10)	11.2	9.1	3.9	510	砂岩	
第29図4	両刃礫器	3区包含層(暗茶)(3958)	9.5	8.8	4.9	458	砂岩	亜角礫
第29図5	両刃礫器	3区包含層(暗茶)(東側礫層グリッド6)	5.9	5.1	2.5	91	頁岩	スクレイパー、角礫
第29図6	両刃礫器	3区包含層(黒)(1018)	6.5	4.9	2.6	49	砂岩	
第30図1	敲石	4区(4号集石　No.1)	4.2	3.4	3.4	74	チャート(赤)	円礫
第30図2	敲石	3区包含層(黒)(3383)	5.3	4.9	2.7	115	砂岩	
第30図3	磨石	2区包含層(暗茶)(6069)	5.8	4.8	4.3	161	砂岩	円礫
第30図4	凹石	3区包含層(黒)(498)	6.9	6.8	3.8	208	砂岩	両面にくぼみ、半欠
第30図5	敲石	3区包含層(黒)(1369)	8.1	7.5	5.3	469	砂岩	
第30図6	敲石	3区包含層(暗茶)(4690)	11	7	6	612	砂岩	
第30図7	磨石	3区包含層(黒)(4703)	12.4	7.6	4.9	734	砂岩	4面磨り面、両端敲打 石鹸形
第30図8	石皿	3区包含層(暗茶)(5937)	12.8	8.8	6.8	1080	砂岩	破損品、被熱
第30図9	砥石	3区(2号集石　No.224)	21.1	16.4	9.1	3540	砂岩	磨製石斧用の大型砥石？
第30図10	石皿	2区包含層(暗茶)(6125)	24.3	17.2	10	4420	砂岩	くぼみ石状、半欠

２．縄文時代前期～晩期の遺構と遺物（第３１・３２図）

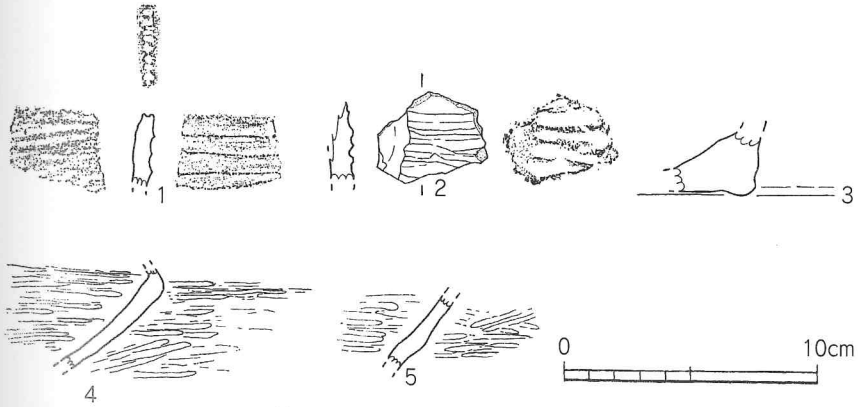
第３１図１は、前期の轟式土器片である。小片であるが、Ｂ式か。口縁端部に貝殻腹縁による刺突、外面にヨコナデによる横位の数条の隆起が確認できる。内面は貝殻による条痕である。４区３号土坑より出土した(第３２図)。２は外面に強いナデによる横位の凹凸がみられる。３は平底である。当初は弥生土器と考えたが、後述する弥生土器の胎土よりも縄文土器の胎土に似ること。５・6で後晩期の土器も出土していることも加味して、縄文後期の土器と判断した。５・６は、後晩期の浅鉢の破片である。調整は内外面がヨコヘラミガキである。

３．弥生時代の遺物（第３３図）

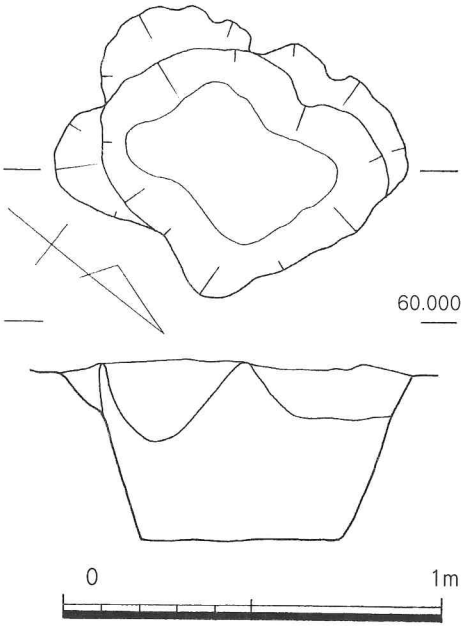
遺構検出時や柱穴内より若干の弥生土器が出土した。これらの柱穴の帰属はほとんどが中世以降であり、弥生の包含層はすでに削平をうけているものと判断した。よってこれらは遺構には伴なわない。

１は、４区４号柱穴から出土した口縁片である。口縁は方形で、外面口縁部直下に突帯をめぐらす。前期末の甕の破片であろうか。調整はヨコナデおよびナデである。口縁端部に黒斑がみられる。２は、３区７号柱穴から出土した甕の口縁片である。口縁は外反し、口唇部内面側はやや上方に突出する。調整はヨコナデおよびナデである。外面に煤の付着がみられる。３は、鉢の口縁～胴部であろうか。類例を知らない。ゆるやかに外側にひろがる胴部に、外反する鍔状の口縁がつく。調整は、内外面とも、口縁部がヨコナデ、胴部がミガキである。４は、４区から出土した甕の口縁～胴部である。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。口径よりも胴部径の方が大きくなると思われる。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部タテナデである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がケズリのちナデである。また、外面には黒色顔料が塗布されているようである。５は、壷の胴部下位である。４と同様の場所で出土した。よって調査中は４と同一固体と考えたが、以下に述べる調整の違いから別固体と判断した。調整は外面がナデ・ミガキで、ミガキは単位の幅が1cm弱の幅広いものもある。内面もミガキで上位がタテ方向、下位がヨコ方向である。また、外面に黒斑らしきものがみられる。６は、４区Ｂ号柱穴から出土した壷の底部で、平底である。同柱穴からは、青磁（第42図13）が出土している。調整は、外面が胴部はおろか底面にまでタタキを行った後、同様の箇所にミガキを施す。内面は剥落のため不明である。７は、１区３号柱穴から出土した高坏の脚部である。調整は、外面がタテヘラミガキで、坏との接合部付近はヨコナデである。内面は、しぼり痕が確認できる。また、外面には赤色顔料を塗布している。

これらの土器の色調は主に黄褐色系統である。胎土は縄文土器同様、石英・白色粒子・赤色粒子を含むほか、７は角閃石を含む。そのほか注



第31図　縄文土器（前期以降）



第32図　4区2号土坑

目すべきことは、これらの胎土には５mm前後の粒を多く含むことである。よって、一見すると当遺跡の弥生土器は縄文土器より胎土が粗悪な印象をうける。これは何も当遺跡のみではなく、旧直川村内で表採された弥生土器に関しても言えることである。

時期に関しては、１が前期末の可能性があるほかは、後期の後半の所産と考える。

４．中世前期の遺物（第４２図７・10・12）

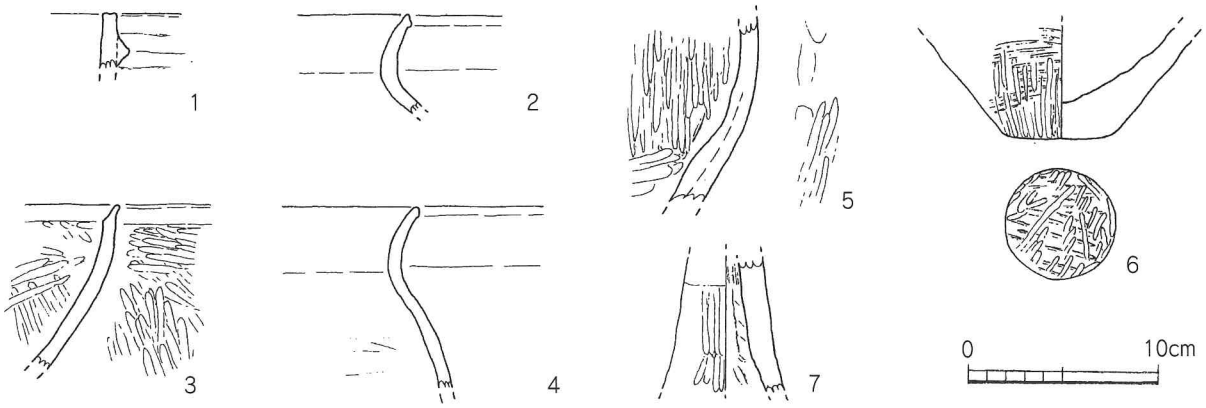
若干、中世前期の遺物も出土している。これらはすべて遺構に伴うものではない。７・10・12の3点とも中国龍泉窯系の青磁である。７は碗である。口縁部～体部にかけての破片である。口縁部は端反りである。残存器高は5.2ｃｍである。胎土は灰色で、0.5mm前後の白色粒子を含む。釉調はうぐいす色である。４区出土である。10も碗である。体部の破片で、外面に鎬連弁がみられる。残存器高は4.2ｃｍである。胎土は精良であるが、薄い黄色である。焼成不良であろうか。還元しきれていない。釉調は暗いうぐいす色である。１区南東端の道路遺構下位の整地土より出土した。12は底部片である。皿の破片でろうか。残存器高は1.2ｃｍである。胎土は灰色で、0.5mm前後の白色粒子を含む。精良である。釉調はうぐいす色である。釉は畳付にも施されている。４区東端部の後世の整地土より出土した。

５．中世後期以降の遺構と遺物

３区１号墓（第３４図）：３区南西端で検出した。北方2.2ｍほどで２号墓が頭位を変え、隣接する。平面形が楕円形で、南北に主軸を向ける土壙墓である。長軸0.75ｍ、短軸0.6ｍ強、残存する深さ0.１ｍ程の墓壙である。墓壙のほぼ中心で白磁碗が出土した。北側からは頭骨片が、白磁の下位からは下肢骨の一部が出土した。埋葬状態の詳細な検討は第５章の田中良之・石川健両氏の論考を参照されたい。

出土した白磁碗は、李氏朝鮮系白磁と思われるものである。口径15.6ｃｍ・底径5.8ｃｍ・器高7.4ｃｍである。釉調はやや青白い。全面に施釉した後、畳付の釉を掻き取っている。また畳付には７ヶ所の胎土目痕が確認できる。外面口縁部直下には釉着痕が確認できる。雑な印象をうける点もある。高台外面には回転ヘラケズリ時に生じた削り残しの窪みがみられるし、見込みにみられるひび割れは、外面にまで達するもので、本来の用をなさないものである。生産時期は16世紀後半～末と考えられる。

３区２号墓（第３５図）：３区南西側で検出した。南方2.2ｍほどで１号墓が頭位を変え、隣接する。他の遺構（主に柱穴）との切り合いで輪郭が不明瞭な箇所が存在するものの、平面形が楕円形で、東西に主軸を向け



第33図　弥生土器実測図

る土壙墓であると考えられる。長軸0.7m、短軸0.6m、残存する深さ0.12m程の墓壙である。墓壙内の北側から歯が出土した。それ以外のものは出土していない。

造墓時期は３区１号墓に隣接することから、時期に関しても近接するものと考える。

３区９号墓（第３６図）：２区と３区を区切る畔に遺構の約半分が隠れる形で３区において当初約半分を検出した。南方1.8mには３区１０号墓が隣接する。墓壙内北側から歯、南側からは「寛永通宝」２点が出土した。よって大きな期待を寄せ、畔にかかるもう半分を検出したが、出土遺物は上述のものだけであった。青銅色の土も２点の寛永通宝が出土した箇所でしか確認できなかった。最終的な平面形は楕円形で、南北に主軸を向ける土壙墓であった。長軸1.25m、短軸0.9m弱、残存する深さ0.45m程の墓壙である。床面では地山であるロームに含まれる拳より大きめの石が３ｃｍ程露出しており、その付近やや上位からは歯が出土している。よって意図的か、偶発的かは判断できないが、この石が枕的な役割を担っていたものとも考えられる。

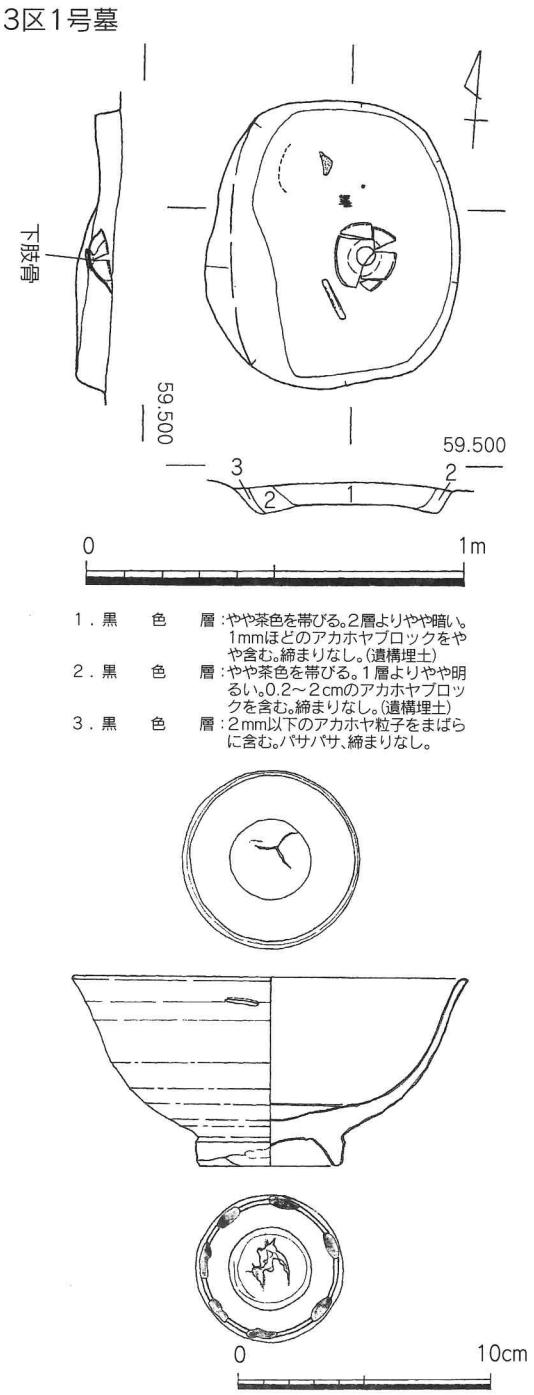
出土した寛永通宝２点に関して説明する。１・２とも字体の特徴から、いわゆる古寛永（１６３６～１６５９年鋳造）である。１は検出時に一部欠損した。劣化が著しい。色調は青銅色である。裏面左側に鋳造時に生じたと考えられる「一」の字状の凸が確認できる。２は残存状態良好である。色調は淡い黒色である。

３区１０号墓（第３７図上）：２区と３区を区切る畔付近に位置する。北方1.8mには３区９号墓が隣接する。当初は３区東壁面の土層において確認した。２区と３区を区切る畔に遺構の２／３が隠れ、３区において一部が除く程度であったため、断ち割りを行い、遺構か否か土層（第４図Ａ）で確認を行った。するときわめて土壙墓の可能性が高いと判断できたため、畔の部分を拡張し、遺構検出に努めた。残存状況からは平面形が楕円に想定できるものであった。さらにその遺構内を掘り進めると中央北寄りで灰色の土の塊を検出した。さらにその灰色の土塊をとり除くと、その下から歯が出土した。よって、灰色の土塊は頭骨が土化する寸前と解釈できたため、墓と認定した。

平面形は前述のように楕円形で、主軸は南北に向いていたと考えられる。長軸1.１m強、短軸0.55m＋α、残存する深さ0.4m程の墓壙である。出土遺物は頭骨の痕跡以外出土していない。

造墓時期は３区９号墓に隣接することから、時期に関しても近接するものと考える。

なお、遺構平面検出時に検出面で自然石がたった状態で確認でき、墓の墓標の可能性も考えたが、以下の点から墓石とは確定しなかった。土層で確認すると墓壙埋土とその石との間に灰色土が確認でき、極めてこの石が現代に置かれたものと判断できた。ちょうど墓が検出された場所は２



第34図　3区1号墓および出土遺物（上）

区と３区の田圃を区切る畔になっており、この畔の形成によって置かれた石と判断した。

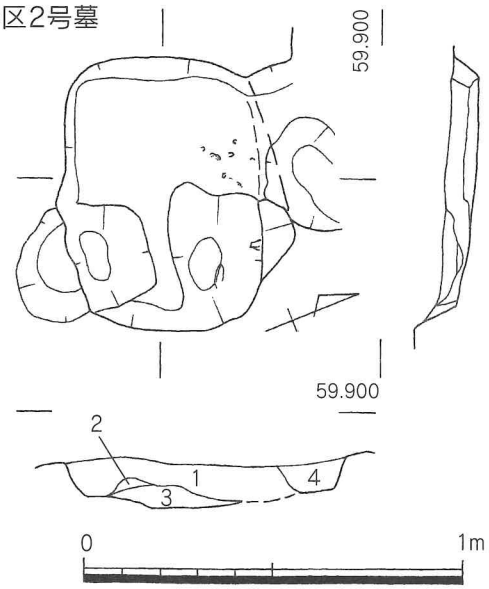
３区５号土坑（第３７図下）：３区の中央やや北寄りに位置する。径1.1m弱のほぼ円形を呈す土坑である。南側を後世の柱穴よって切られている。土坑内からは、炭や0.1m以下の白色骨片状の塊が出土した。よって調査中は墓の可能性も考えた。また人頭大以下の礫が５点出土した。礫の中には被熱したものもみられた。そのほか陶器も出土した。

白色の骨片状のものは、取り上げ後、九州大学田中研究室に鑑定をお願いしたところ、骨ではないことが判明した。

被熱した礫に関しては、縄文早期の層から出土した礫と接合した。よって被熱した礫自体の被熱した時期は縄文時代早期であると考えられる。

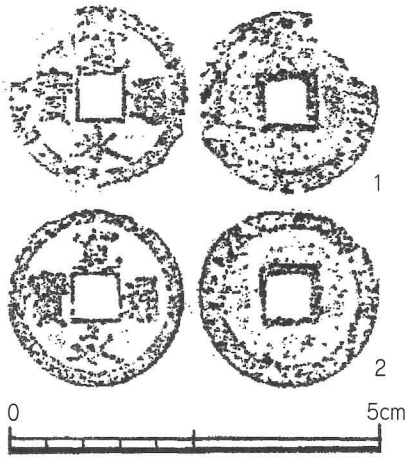
１は、中国産白磁の瓶の破片と思われるが、詳細は不明である。施釉は、外面において、畳付を除くほかの箇所にみられる。

3区2号墓

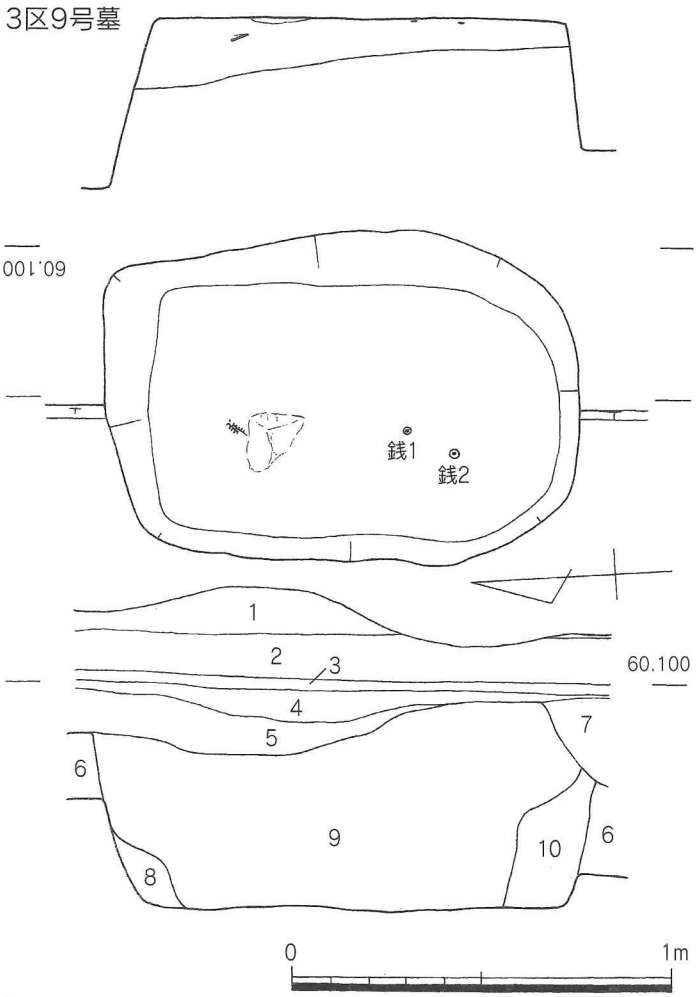


1．黒　　色　　層：やや茶色を帯びる。アカホヤの粒子を含む。パサパサ、締まりなし。（遺構埋土）
2．黄茶褐色層：アカホヤブロックを含む。パサパサ、締まりなし。（遺構埋土）
3．黄茶褐色層：５ｃｍほどのアカホヤブロックを含む。パサパサ、締まりなし。（遺構埋土）
4．黒　　色　　層：パサパサ、締まりなし。（柱穴埋土、別遺構）

第35図　3区2号墓



3区9号墓



黄茶褐色層＋
1．茶　褐　色　層：（表土）
2．灰　　色　　層：粘質、締まりあり。（田の床土）
3．明茶褐色層：（田の盤土）
4．明茶褐色層：３層よりやや色調がうすい。鉄分がしみる層。やや粘質、締まりあり。
5．暗茶褐色層：やや黒い。５ｃｍ大のもののほか１cm以下のアカホヤブロック、4cm大の地山ブロックが混じる。粘質、締まりあり。（近世以降）
6．黒　　色　　層：基本的には８層に似る。人頭大～拳大の礫を含む。やや粘質、締まっている。（近世以降）
7．黒　　色　　層：やや茶色を帯びる。5cm大の地山ブロックを含む。粘質、締まりあり。（近世初頭以前）
8．茶　褐　色　層：3cm大の黄褐色の地山ブロックが混じる。粘質、締まりあり。（３区９号土壙埋土）
9．黒　　色　　層：3cm以下のアカホヤ・2cm以下の地山ブロックが多く混じる。粘質、締まりあり。（３区９号土壙埋土）
10．茶　褐　色　層：基本的には１５層と同じ。やや暗い茶褐色の地山が主体的。（３区９号土壙埋土）

第36図　3区9号墓および出土銭

３区４号土坑（第３８図上）：３区の北側中央に位置する。径0.9m強の歪な円形を呈す土坑である。西側では柱穴に切られ、東側では柱穴を切っている。遺構の下場は、壁面付近で浅い溝状に窪む。よって現状では浅い凹みが壁溝状に巡る。西端で陶器２点が出土した。

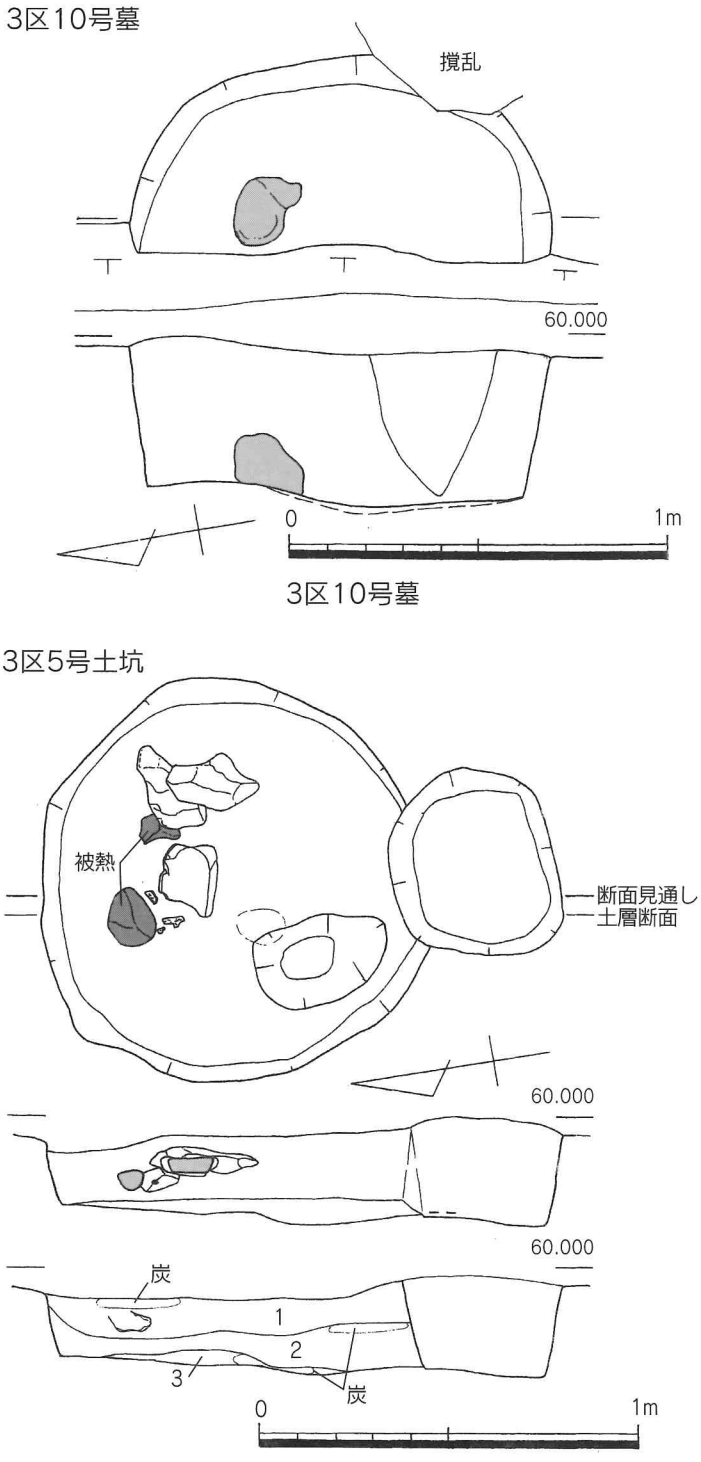
１は信楽系陶器の小碗もしくは小坏で、18世紀後半～19世紀前半の所産である。胎土は白色で精良である。色調はやや黄味帯びた白色である。２は唐津系陶器の碗で、17世紀前半の所産である。胎土は灰色で精良である。色調は暗深緑色である。

３区８号土坑（第３８図下）：２区と３区を区切る畔付近に位置する。南方1.2mには３区９号墓が隣接する。長軸1.8m、短軸1m強の不定形の土坑である。床面付近で地山の層が、ローム層からローム層（人頭大の礫を含む）に変化するため、床面には礫が露出する。東壁面では縄文土器が出土した。当然この土器は遺構に伴なうものではない。

１は、無文土器で本遺跡縄文早期の土器中最も器壁が薄い。器形は外傾する。口縁端部は丸く、口唇部内側がやや突出する。調整は内外面ナデである。

１区性格不明遺構（第３９図）：１区の東端に位置する。北側は調査区の北壁に接し、上場は調査区外のため検出できなかった。南北10.5m+α、東西10m強のやや方形を呈す。東側の上場付近では石敷が確認できた。性格は不明な遺構である。遺構の埋土はほぼ分層できるような状態ではなく、掘削した後、時を置かずまた埋め戻したようである。

出土遺物は、縄文土器、景徳鎮や漳州窯の碗、土師器の坏・皿、備前の破片がそれぞれ１点もしくは２点出土している。以上のことから遺構の時期としては16世紀が妥当であると考える。なお、本遺構に伴なうと考えられる遺物（第42図２・５・19・20）の詳細は後述する。

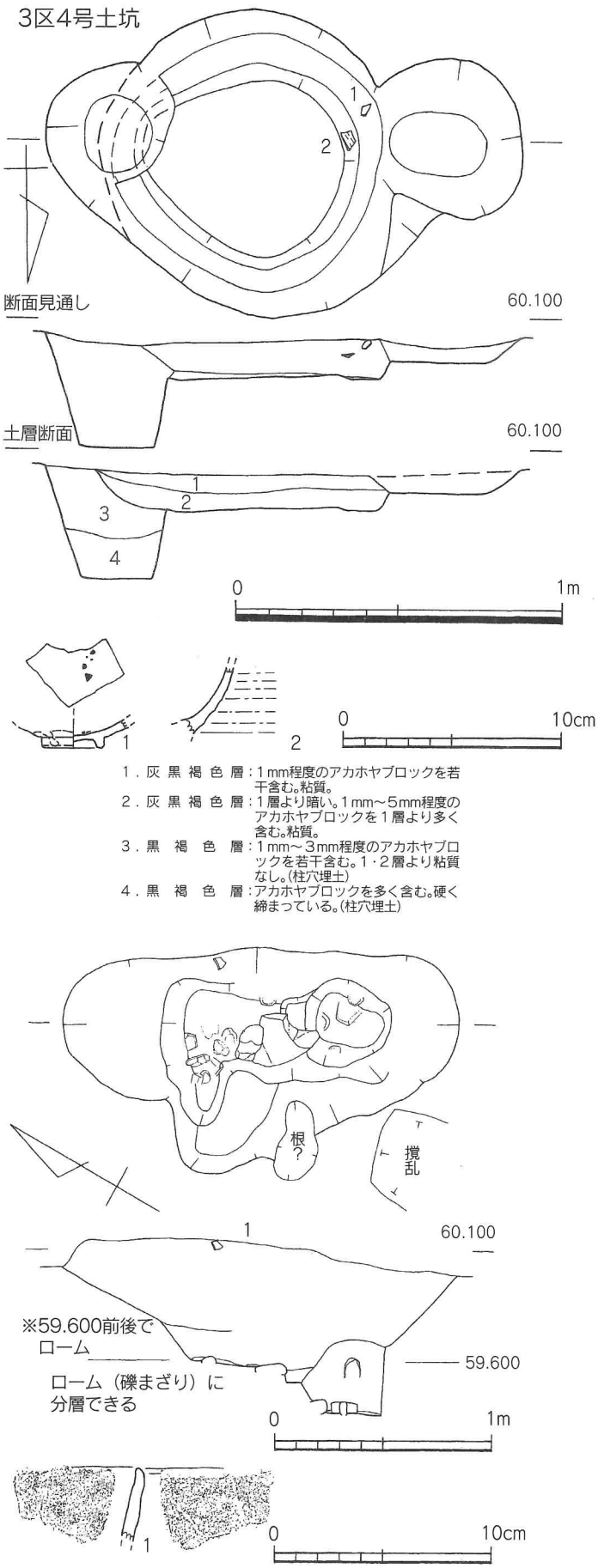


第37図　3区10号墓（上）と3区5号土坑および出土遺物（下）

３区１１号掘立柱建物（第４０図）：３区北東端付近に位置する。柱穴の東側は、調査区外もしくは２・３区間の畔下に、また視点をかえれば調査区の端部に位置することから、土層確認のためのサブトレンチを最初に掘削したため、柱穴を一部掘削することになり、残存する柱穴１／２程を土層（第４図）で確認している。現状３間×２間の規模である。長軸の並びは柱穴が2.1m程の間隔に４つ並ぶ。短軸は4.2m間隔に２つである。よってその間が束柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.3mの後半～0.5m程である。南東端の柱穴の埋土から肥前陶器の溝縁皿（第４３図８）および土錘（第４４図）が出土している。

３区１２号掘立柱建物（第４０図）：３区のほぼ中央に位置する。北側では馬埋葬遺構が、北東端では3区13号掘立柱建物が隣接する。南端の柱穴はやや位置がずれる。３間×２間の規模である。長軸の並びは柱穴が2.3m程の間隔に４つ並ぶ。短軸は4.55m前後間隔に２つである。よってその間が束柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.4m前後である。

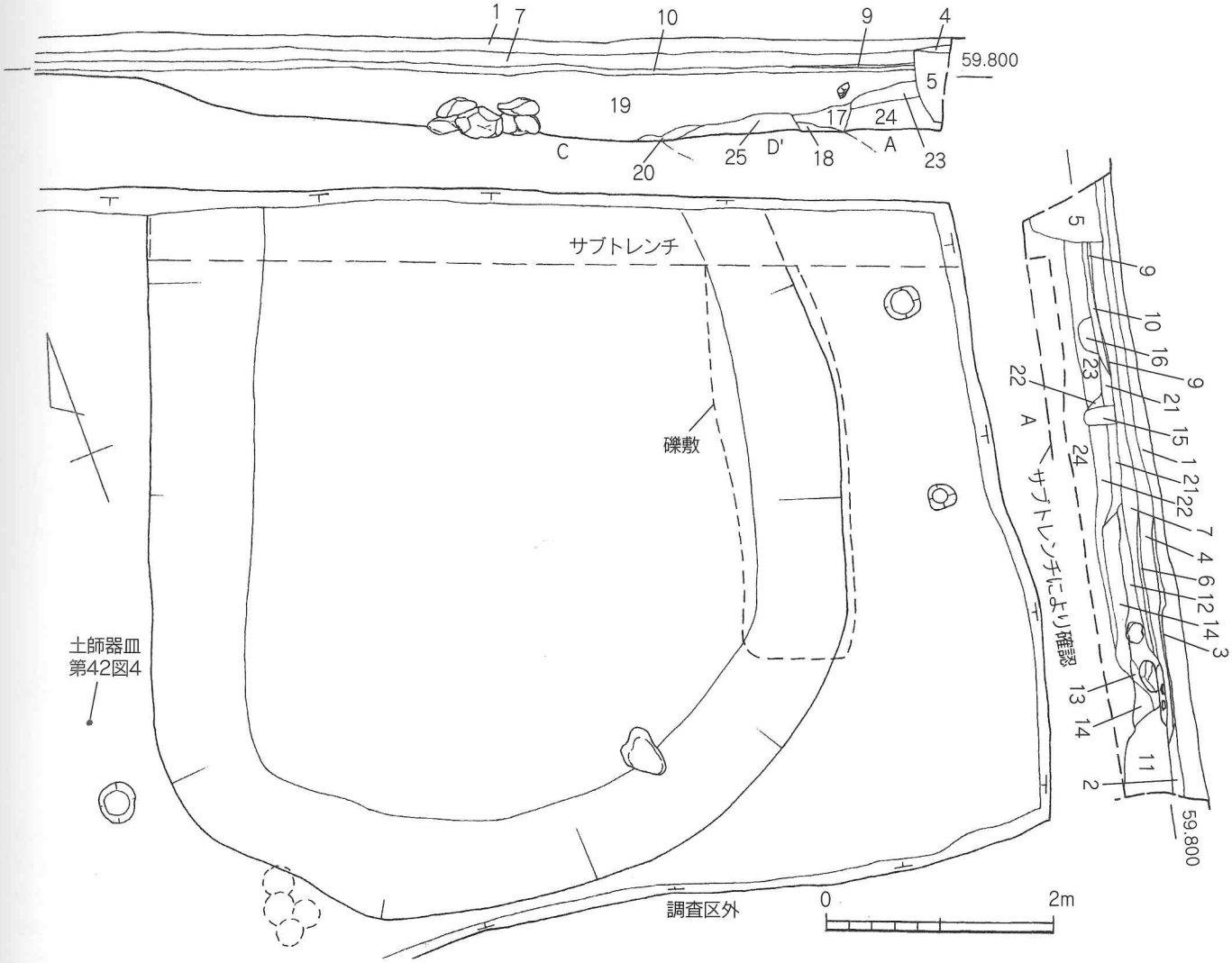
３区１３号掘立柱建物（第４０図）：３区の中央やや北東よりに位置する。南西端では、馬埋葬遺構、3区１２号掘立柱建物が隣接する。中央部には試掘トレンチが東西に走り、東側の長軸沿いの柱穴１つはそのトレンチにかかっている。３間×２間の規模である。長軸の並びは柱穴が2mもしくは2m弱の間隔に４つ並ぶ。短軸は4m程の間隔に２つである。よってその間が束柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.33m～0.45mである。また柱穴の中には、柱痕もしくはそれに関連すると思われる土層があったので一部を図示した（第40図土層Ａ～Ｄ）。これらのほか東側の長軸北から2番目、西側の長軸南端の柱穴でそれぞれ柱痕の一部を確認している。なお、柱痕の規模は土層Ｂ・Ｃをみると



第38図　3区4号土坑および出土遺物（上）と
3区8号土坑および出土遺物（下）

柱痕の径は柱穴の径の１／３もしくは１／３強で、径0.15m程を想定できる。

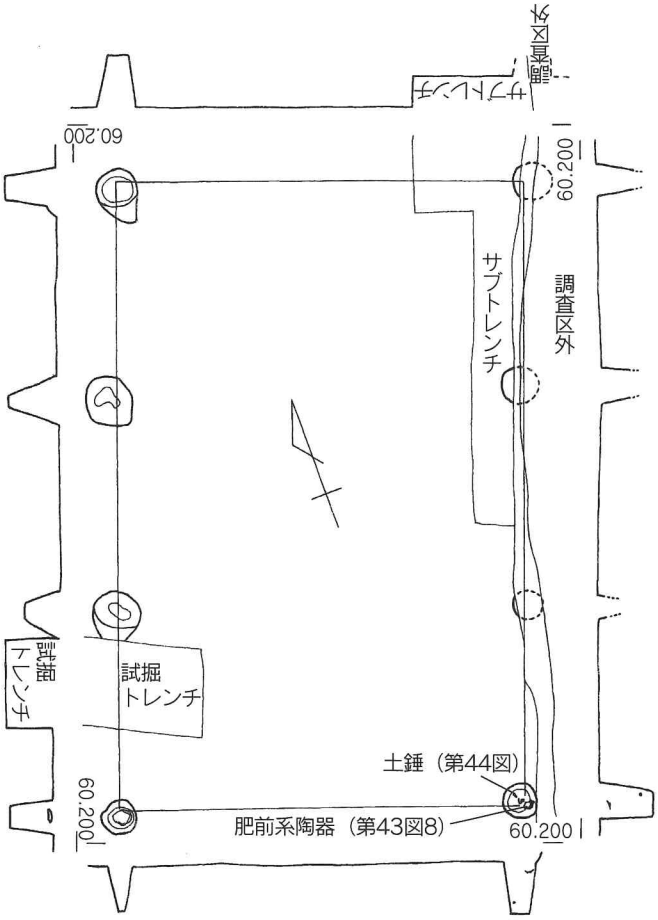
１区４号掘立柱建物（第４１図）：１区の中央、北壁に隣接する。現状２間×１間の規模である。建物の北側は調査区外のため、建物の規模の詳細は不明である。現状長軸の並びは柱穴間が2.5m程の間隔である。現状横軸も柱穴間は2.5m程の間隔である。３区と違い、束柱を現状は持たない。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。



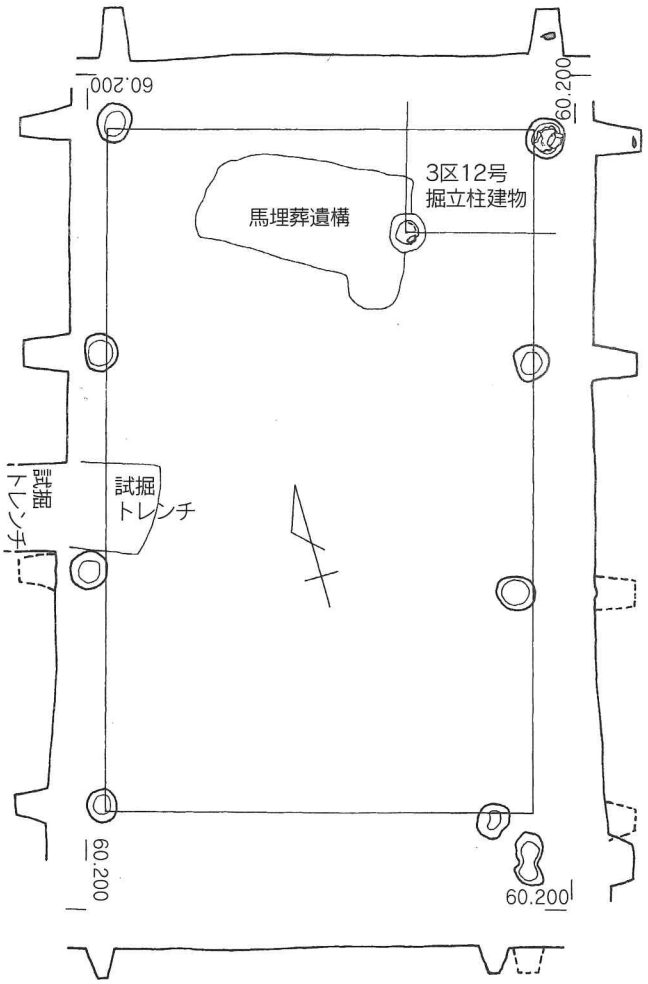
1．灰　色　層：粘質。(表土、田の床土)
2．暗黄茶褐色：地山ブロック(ローム)を主体とする整地層。(田の畔の一部)
3．明茶褐色層：(田の盤土)
4．灰　色　層：0.1ｃｍ～0.3ｃｍ程度のアカホヤブロックを若干含む。粘質。
5．茶　色　層：砂利・小礫を多く含む。(現代の電柱の掘り方)
6．明茶褐色層：(田の盤土)
7．灰　褐　色　層：上層からの鉄分がしみる層。0.1ｃｍ～0.3ｃｍ程度のアカホヤブロックを若干含む。粘質、締まりあり。
8．黒　灰　色　層：砂利と瓦を含む層。砂質であるが、締まりあり。(すくなくとも近代以降の道路に関連する整地層)
9．明茶褐色層：(田の盤土)
10．黒　色　層：ところどころやや灰色を帯びる。３ｃｍ以下のアカホヤブロック含む。パサパサであるが締まりあり。
11．黒　灰　色　層：0.5ｃｍ以下のアカホヤブロックを若干含む。粘質、締まりともに若干あり。(近代～現代)
12．茶　褐　色　層：やや暗い。質的には7層と同じ。拳大以下～人頭大の礫を含む。(19層に対応？)
13．黒　色　層：やや灰色を帯びる。３ｃｍ以下のアカホヤブロック含む。パサパサであるが締まりあり。
14．黒　色　層：やや茶色を帯びる。質的には7層・12層と同じ。(19層に対応？)
15．黒　色　層：0.1ｃｍ～0.3ｃｍ程度のアカホヤブロックを若干含む。粘質、締まりなし。(柱穴埋土)
16．黒　色　層：23層もしくは24層のブロック、アカホヤ粒子を含む。(柱穴埋土)
　　黒色層＋
17．灰　色　層：0.5mm以下のアカホヤブロック含む。粘質、締まりほとんどなし。(柱穴埋土)
　　黒色層＋
18．灰　色　層：上層の17層に、23層もしくは24層が混じる層。
19．黒　色　層：やや茶色を帯びる。0.1ｃｍ～0.3ｃｍ程度のアカホヤブロックを含む。粘質、締まりあり。中国陶磁出土。(中世後期)
20．黒　色　層：19層と25層が混じる層。粘質、締まりあり。(中世後期)
21．明黄茶褐色層：パウダー状、締まりなし。(アカホヤ)
22．黒　色　層：粘質、締まりあり。(３区の縄文早期の層に対応)
23．暗黄茶褐色：24層に比べ、やや明るい。粘質、締まりあり。(３区の縄文早期の層に対応)
24．暗黄茶褐色：23層に比べ、やや暗い。粘質、締まりあり。(３区の縄文早期の層に対応)
25．黄茶褐色層：小砂利を若干含む。粘質、締まりあり。　層と　層の中間的な層
A．明茶褐色層：ローム層。(地山)
C．黄　褐　色　層：礫・砂利を多く含む。(地山)
D'．黄茶褐色層：A層(ローム層)とC層の漸位層(地山)

第39図　1区性格不明遺構

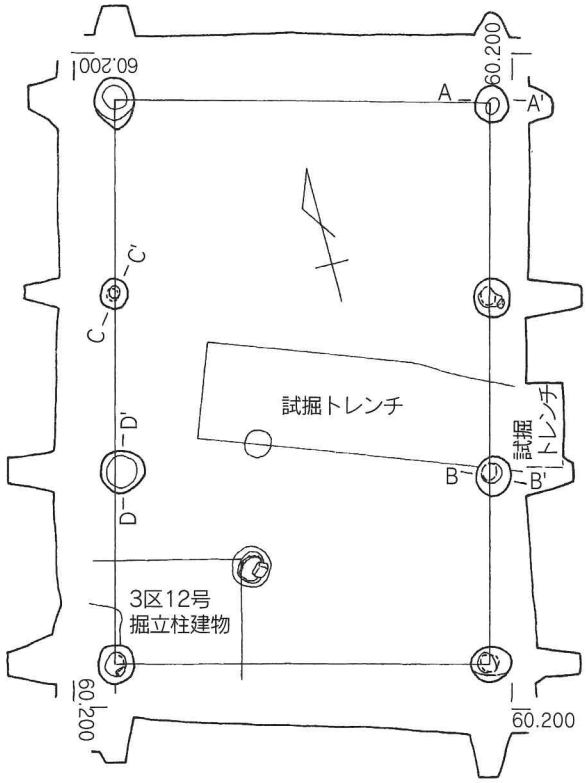
3区11号掘立柱建物

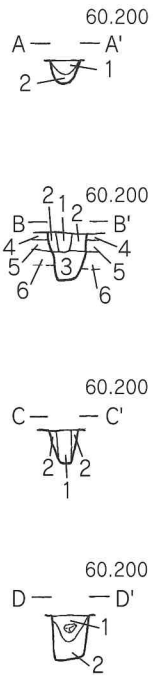


3区12号掘立柱建物



3区13号掘立柱建物





1．黒　褐　色　層：アカホヤブロックが混じる。締まりなく、パサパサ。
2．茶　褐　色　層：アカホヤブロック・地山(ローム)ブロックが混じる。締まりが強い。

1．黒　褐　色　層：やや茶色を帯びる。2ｃｍ以下のアカホヤブロックが混じる。やや粘質、締まりあり。
2．黒　褐　色　層：やや茶色を帯びる。3ｃｍ以下のアカホヤブロックが混じる。やや粘質、締まりあり。"
3．暗　茶　褐　色　層：1ｃｍ以下のアカホヤブロック・地山(ローム)ブロックが混じる。粘質、締まりあり。
4．黒　　色　　層：やや茶色を帯びる。パサパサ、締まりなし。(縄文早期包含層)
5．暗　茶　褐　色　層：パサパサであるが、締まりあり。(縄文早期包含層)
6．明　茶　褐　色　層：ローム層、3ｃｍ以下の砂利を含む。粘質、締まりあり。(地山)

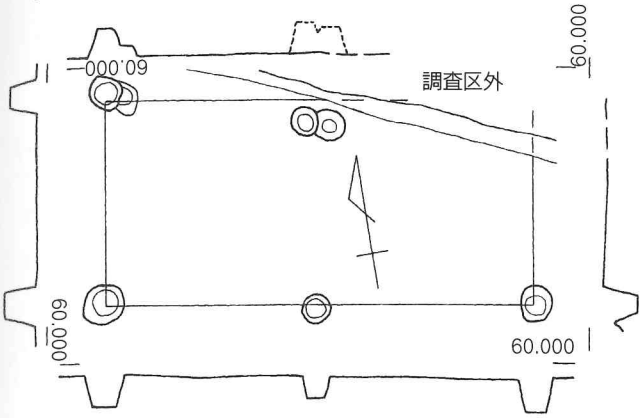
1．黒　褐　色　層：締りがなく、パサパサ。
2．暗　茶　褐　色　層：1～5ｃｍ大のアカホヤブロックが多く混じる。締まりあり。

1．黒　褐　色　層：アカホヤが混じる。締りがなく、パサパサ。
2．黒　褐　色　層：アカホヤブロック・地山(ローム)ブロックが混じる。締りが強い。

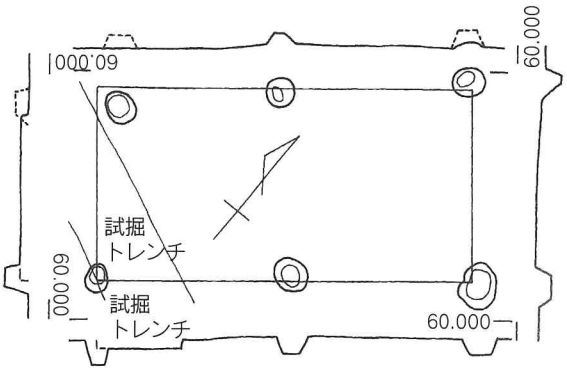
0　　4m

第40図　3区掘立柱建物

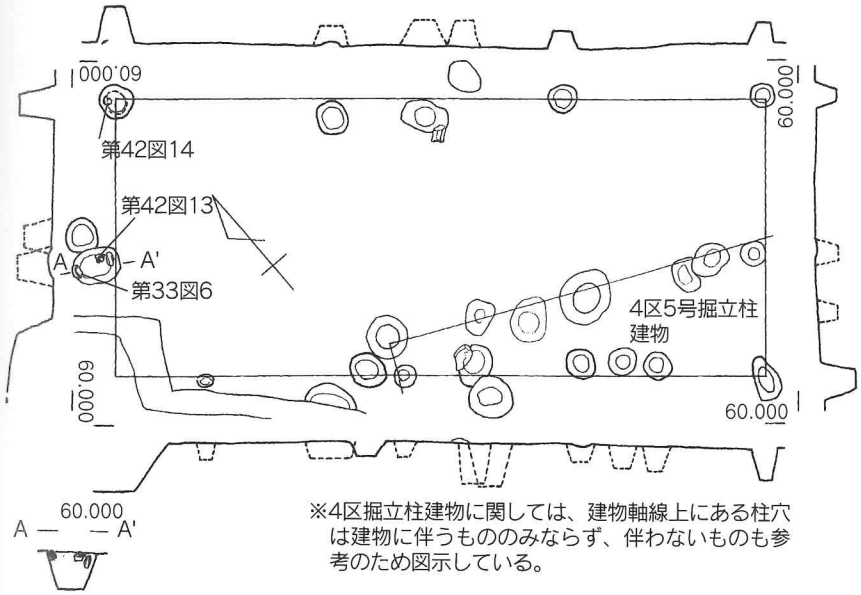
1区4号掘立柱建物



1区5号掘立柱建物

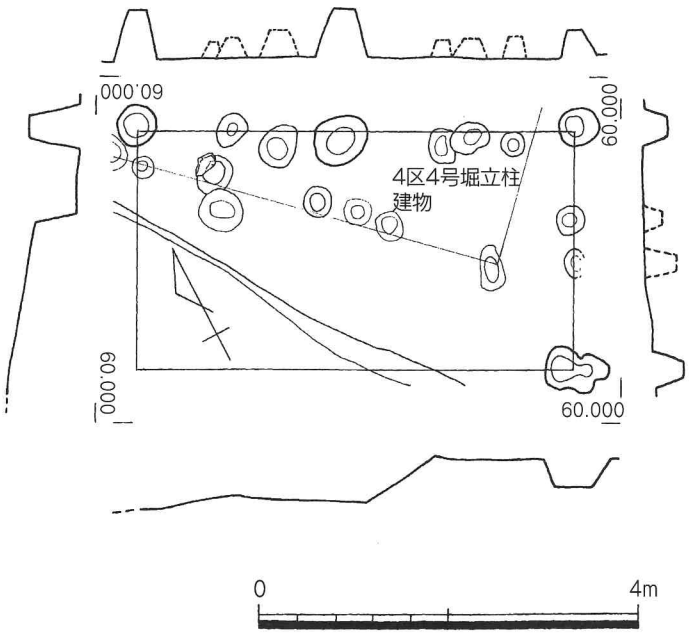


4区4号掘立柱建物



※4区掘立柱建物に関しては、建物軸線上にある柱穴は建物に伴うもののみならず、伴わないものも参考のため図示している。

4区5号掘立柱建物



第41図　1区および4区掘立柱建物

１区５号掘立柱建物（第４１図）：１区の中央、南西側に位置する。南側では試掘トレンチが東西にはしる。２間×１間の規模である。長軸の並びは柱穴間が2.0m程の間隔である。横軸も柱穴間は2.0m強の間隔である。１区４号掘立柱建物同様、３区と違い、束柱を現状は持たない。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。

４区４号掘立柱建物（第４１図）：４区の南東側に位置する。南東側では４区５号掘立柱建物が隣接する。南方は大きく削平を受けており、建物の南側長軸の西端柱穴は削平のためか見当たらない。現状では３間×１間（もしくは２間）の規模である。長軸の並びは柱穴間が2.0～2.3m程の間隔である。横軸の柱穴間は3.0m強の間隔である。なお、その間にも柱穴がみられるため、それらが伴なうものとすれば、柱間は1.5mとなり、２間である。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。西側の2ヶ所の柱穴埋土からは青磁の皿がそれぞれ出土しており（遺物実測図は第42図13・14）、この建物の時期を確定するものの可能性がある。

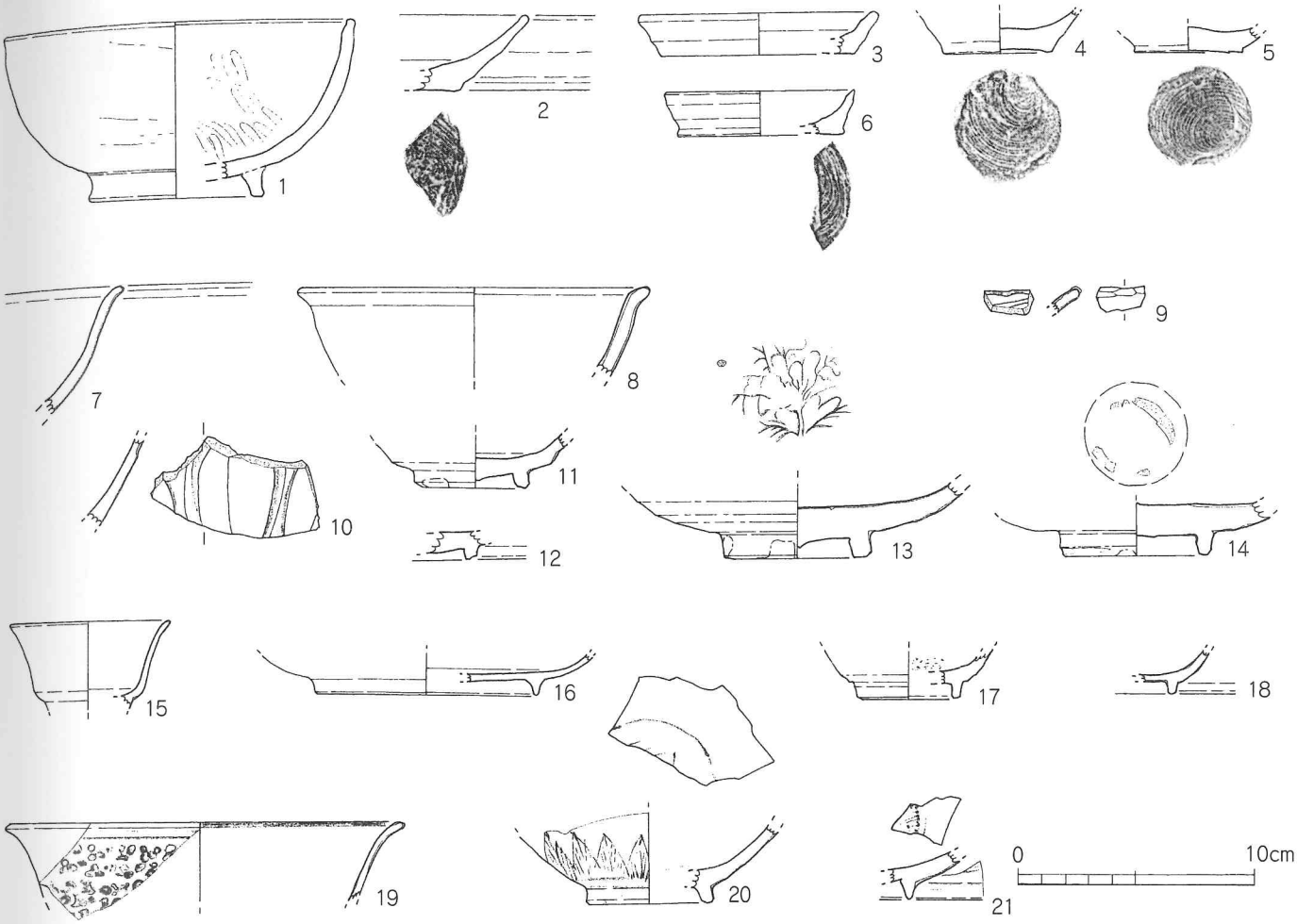
ただし、何度も言うように無数の柱穴を検出したこと、中世の掘立柱建物はある程度軸が曲がっていても建物を建てる傾向があること。そのほか青磁が出土した柱穴が隣接してあること。以上のことから本建物に関しては無理に建物として認定した感も否めない。また一方で、建物と認定したものの軸線上には無数の柱穴がかかっており、建物であった場合、上記以外の柱穴も伴なう可能性を否定できない。よって、当４区４号掘立建物、および次の４区５号掘立柱建物に関しては軸線にかかる柱穴も図示している。

４区５号掘立柱建物（第４１図）：４区南東端に位置する。北側では４区４号掘立柱建物が隣接する。南方は大きく削平を受けており、建物の南側長軸の２柱穴は削平のためか見当たらない。現状では２間×１間の規模である。柱穴間が2.2～2.4m程の間隔である。４区４号掘立建物同様、軸線にかかる柱穴も図示している。

中世後期以降の出土遺物：墓および掘立柱建物の時期と考えられる中世後期から近世前期のものを中心に図示した。

①土師質土器（第４２図１～６）

１は椀形で、１／６程残存する。復元口径14.6ｃｍ・復元底径7.2ｃｍ・器高7.3ｃｍである。胎土は精良で、白色粒子、赤色粒子、石英、角閃石を含む。色調は黄橙色である。焼成は良好である。やや摩耗するため調整が判別しづらい。外面は回転ヨコナデ？、内面はミガキで、方向は辛うじて判別できる。１区南東端部付近で道路遺構下位の整地土より出土した。２は坏で、口縁部～底部にかけて１／10程残存する。小片のため、口径・底径は不明である。器高3.1ｃｍである。胎土には赤色粒子を多く含み、また微粒の金雲母を含む。色調は淡い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。１区性格不明遺構より出土した。３は皿である。口縁部～底部にかけて１／７程残存する。復元口径は9.8ｃｍ・復元底径は7.8ｃｍである。器高1.7ｃｍである。胎土は精良で、赤色粒子、白色粒子、また微粒の金雲母を含む。色調は淡い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。１区東側で遺構検出時に出土した。４は皿である。口縁部付近が欠損するのみである。口径は７ｃｍ弱と思われる。底径は５ｃｍである。器高は２ｃｍ程と思われる。胎土には赤色粒子、白色粒子、石英を含む。色調は橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。１区性格不明遺構の西側上場付近で出土した。５は皿である。底部付近が残存する。底径は4.5ｃｍである。残存器高は1.1ｃｍである。胎土には赤色粒子、白色粒子のほか、微粒の金雲母を含む。色調はやや暗い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。１区性格不明遺構より出土した。６は坏である。口縁部～底部が１／４弱残存する。復元口径7.8ｃｍ・復元底径6.8ｃｍ・器高1.9ｃｍである。胎土は精良で、赤色粒子、白色粒子を



第42図　土師質土器および輸入陶磁器実測図

含む。色調は淡い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。また外面に煤らしきものが付着する。４区５号柱穴より出土した。

これらの生産年代はいずれも16世紀と思われる。

②輸入陶磁器（第４２図８・９・11～21）

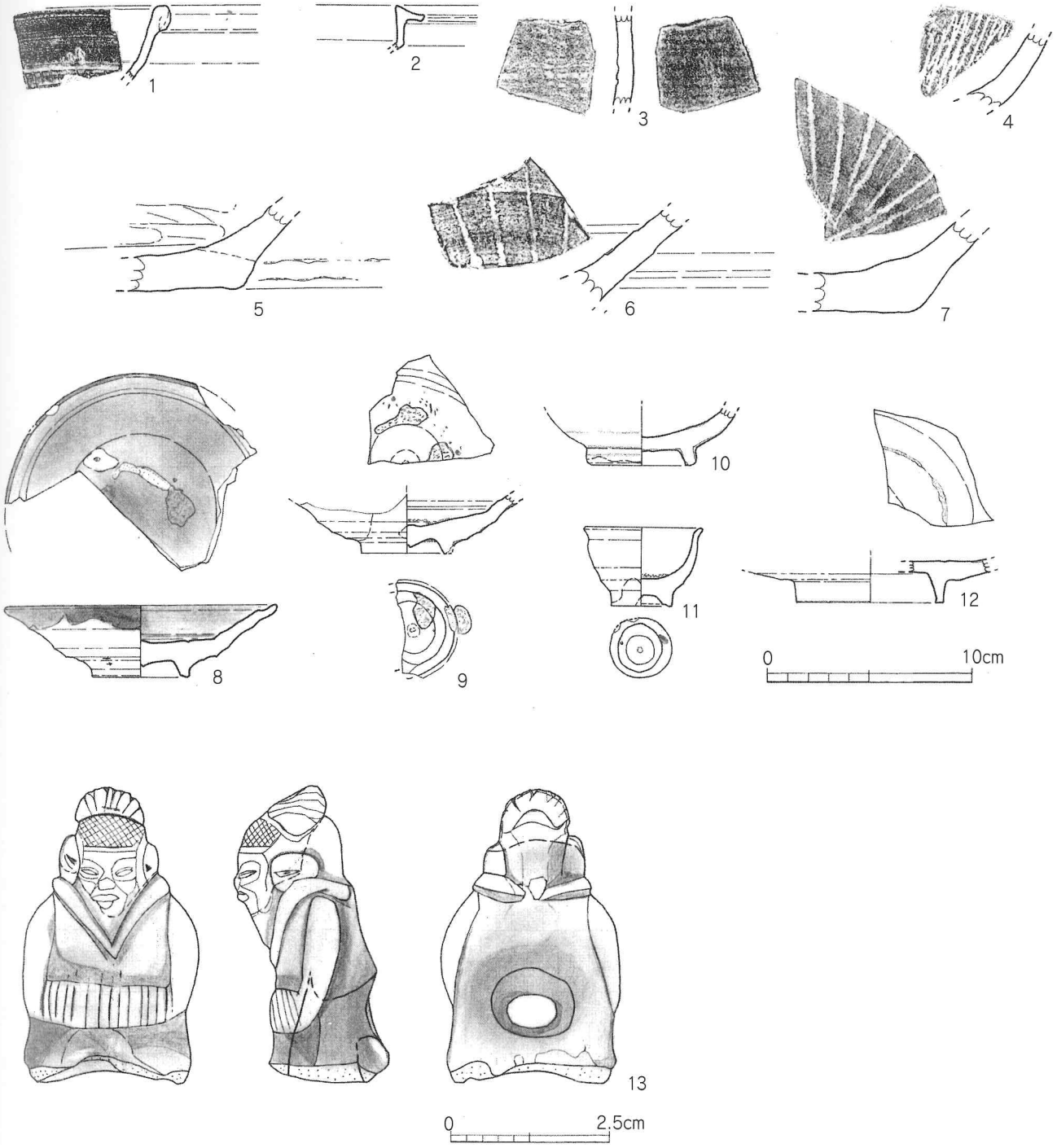
８・９・11・13・14は青磁である。８は碗である。口縁部～底部が１／９程残存する。口縁部は端反りである。復元口径14.4ｃｍ・残存器高3.7ｃｍである。胎土はやや灰色がかった白色である。釉調はうぐいす色である。また内外面とも釉薬が厚くかかっている。３区南側田の床土より出土した。生産年代は15世紀である。９は稜花皿の口縁片である。小片のため口径は不明である。残存器高は１ｃｍである。胎土は灰色で、精良である。釉調はうぐいす色である。内には模様がみられる。１区より出土した。生産年代は15世紀である。11は碗である。体部下部～底部が残存する。外面では体部下部と底部との境に稜が確認できる。底径4.7ｃｍ・残存器高2.3ｃｍである。焼成が不良で、おそらく低温で還元しきれていないと思われる。よって胎土は黄褐色のままで、白色粒子・石英・赤色粒子が確認できる。釉調は灰色がかったオリーブ色である。１区での表採である。生産年代は16世紀である。13は龍泉窯系の皿である。体部下部～底部が残存する。体部外面には箆削りがみられる。また見込みには彫り込みによる文様がみられる。浅学のため彫りこみの形態は分からない。底径6.0ｃｍ・残存器高3.1ｃｍである。釉調はやや暗いうぐいす色で、外面の高台にも一部で釉が施されている。４区Ｂ号柱穴（出土状況第41図）より出土した。生産年代は15世紀である。なお、同柱穴からは弥生土器も出土している（第33図6）。14は龍泉窯系の皿である。体部下部～底部が残存する。見込みには別のものが釉着した痕跡が確認できる。底径6.0ｃｍ・残存器高2.2ｃｍである。釉調はうぐいす色で、見込みおよび畳付～高台内側以外に釉が施されている。４区Ａ号柱穴（出土状況第41図）より出土した。生産年代は14～15世紀である。

15～18は白磁である。15は小坏である。口縁部～体部下部が１／15残存する。復元口径6.8ｃｍ・残存器高3.7ｃｍである。胎土は白色である。釉調はやや暗い白色で、残存するすべてに施されている。１区東端部の田の床土より出土した。生産年代は16世紀である。16は皿である。体部下部～底部が１／６程残存する。復元底径9.1ｃｍ・残存器高1.75ｃｍである。胎土はきめ細かく精良で白色である。釉調はきれいな白色である。４区東端部の後世の整地層より出土した。17は小坏である。体部下部～底部が１／６程残存する。復元底径4.2ｃｍ・残存器高2.1ｃｍである。胎土は白色で、黒い粒を含む。釉調はややクリームがかった白色である。２・３区より表採した。生産年代は16世紀である。18は皿である。体部下部～底部片である。残存器高1.8ｃｍである。胎土は白色で、黒い粒を含む。釉調はやや暗い白色である。１区１号土坑より出土した。生産年代は16世紀である。

19～21は中国産の染付である。19・21は景徳鎮、20は漳州窯である。19は青花碗である。口縁部～体部にかけてが残存する。復元口径16.6ｃｍ・残存器高3.3ｃｍである。胎土は精良で、白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。１区性格不明遺構より出土した。生産年代は16世紀前半である。20は碗である。体部下部～底部にかけてが残存する。復元底径5.2ｃｍ・残存器高4.0ｃｍである。胎土はやや精良で、黒い粒を含む。白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。釉は畳付より内側はかきとられている。１区性格不明遺構より出土した。生産年代は16世紀である。21は青花碗である。体部下部～底部にかけての破片である。残存器高2.0ｃｍである。胎土は精良で、白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。畳付にのみ釉剥ぎがみられる。１区道路遺構の整地土より出土した。生産年代は16世紀前半である。

③近世陶磁（第４３図）

１は肥前系陶器の擂鉢の口縁部片である。残存器高3.6ｃｍである。胎土は精良で、濃灰色である。色調は口縁部付近が淡い黒褐色、その他が暗い赤褐色である。口縁端部外面に若干釉が付着する。４区南西側整地層より出土した。２は関西系陶器の土瓶片である。残存器高2.2ｃｍである。胎土は灰色である。釉調は灰色がかったオリーブ色である。１区の南壁面より出土した。３は陶器の胴部片である。傾き・器種は不明である。胎土は精良で、やや暗い赤褐色である。色調は淡い赤褐色である。調整は内外面とも叩きのちなでである。なお、叩きは外面が横位の並行叩き、内面が格子目状叩きである。２区の田の床土より出土した。４は陶器の擂鉢片であろう。摩耗が著しい。内面に摺目と考えられるものが確認できる。残存器高3.4ｃｍである。胎土に白色粒子・赤色粒子が含まれる。色調は橙色である。２区の遺構検出時に出土した。５は陶器である。７を参考にすると摺目が底面まで施されているのに対し、本遺物は底面にまで摺目が施されていない。よってこね鉢片であろう。残存器高4.1ｃｍである。胎土は灰色もしくは淡い灰色である。白い粒を含む。色調は、外面が暗い橙色・赤褐色で、内面が褐灰色である。調整は内外面ともなでである。１区東端部の田の床土より出土した。６は陶器の擂鉢片である。胴部下部と思われる。残存器高4.4ｃｍである。胎土に白色粒子・赤色粒子が含まれる。色調は灰色である。表採遺物である。７は陶器の擂鉢の底部片である。残存器高4.3ｃｍである。胎土は精良で、白色粒子を含む。色調は、外面が暗い橙色で、内面が灰色である。調整は外面が削りのちなで、底面が時計回りに削りである。３区南西端部西壁面より出土した。８は肥前系（唐津系）陶器の溝縁皿である。３／５程残存する。復元口径は13.1ｃｍ・復元底径は3.4ｃｍ・器高は4.6ｃｍである。口縁部は溝縁で、高台は兜巾高台である。見込には砂目、また別の遺物との釉着を剥がした時の欠損が確認できる。胎土は灰色で、白色粒子を含む。釉調は灰色がかったオリーブで、内面にはほぼ全面、外面には口縁部付近に施釉されている。生産年代は1600～1630年である。３区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。９は肥前系陶器の碗である。体部下部～底部にかけてが１／３程残存する。復元底径は4.3ｃｍ・残存器高は2.8ｃｍである。見込および高台付近には胎土目が確認できる。また見込には藁灰の付着もみられる。胎土は精良で、灰色である。釉調はうぐいす色で、内面にはほぼ全面に施釉され、外面は高台は施釉されておらず、体部に施されている。10は肥前系の陶胎染付碗である。体部下部～底部にかけてが残存する。底径は5.2ｃｍ・残存器高は2.8ｃｍで

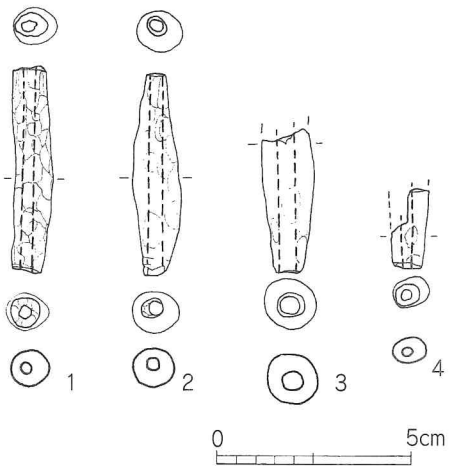


第43図　近世陶磁器実測図

ある。胎土は精良で、黒い粒を含む。色調は暗い褐色で一部で酸化還元して灰色である。釉調は青みがかった白色で、ほぼ全面に施釉されており、畳付にのみ釉剥ぎが確認できる。２・３区表採である。11は肥前系陶器の小坏である。２／３程残存する。復元口径は5.6ｃｍ・底径は2.7ｃｍ・器高は3.8ｃｍである。口縁部が端反りである。また見込みに砂目が確認できる。胎土は淡い灰色である。釉調は灰色で畳付より内側以外に施釉されている。３区南側の田の床土より出土した。12は関西系陶器の皿もしくは盤である。体部下部～底部が１／４弱残存する。復元底径は7.0ｃｍ・残存器高は2.1ｃｍである。内面には、蛇の目釉剥ぎがみられ、量ね焼きを行い別製品が釉着したものを取り外した時の欠損がみられる。胎土は精良で、白色粒子を含む。色調はやや黒い灰色である。釉調は濃緑である。内面は前述のごとく、帯円状に施釉されていない箇所がある。外面は高台が施釉されていない。それ以外の残存箇所は施釉されている。生産年代は18世紀後半以降である。４区試掘トレンチより出土した。13は肥前系磁器の灯芯押で、完存する。完存する例は２例目である。全高は4.8

ｃｍ・全幅は2.9ｃｍである。唐人をモチーフしたもので、全体的な釉調はやや青味がかった白色で、顔の部分に鉄釉を施し茶色である。欠損している下部以外全面に施釉している。お尻にあたる部分には芯を通したと思われる１ｃｍ前後の焼成前の穿がみられる。内面は、詳細が不明であるが空洞である。耳の隙間から中をみる限り、頭部までつづくと思われる。胎土は白色である。生産年代は1630～1650年である。２区南西部より出土した。

これらのほか17世紀代の白磁紅皿、17世紀末～18世紀前半の内野山窯系緑釉皿、18世紀前半の大明年製くずれ銘の染付、18世紀後半の見込み蛇の目釉剥ぎ碗、1820～1860年の肥前磁器染付端反碗、型紙摺りの染付などが出土している。このように江戸時代を通じて遺物が散見される。



第44図　土錘実測図

④土錘（第４４図）

４点出土した。全て管状土錘である。形態的には、小口も胴部もほぼ同じ径の棒状のもの（１）と、小口より胴部の径が大きく最大径であるもの（２・３）に大別できる。なお、（４）は欠損のため不明である。

１は完存する。全長さ5.45ｃｍ・幅0.95ｃｍ・重量5.8ｇである。胎土には石英を含む。色調は橙色～灰色である。焼成は良好である。一部で黒斑が確認できる。孔は断面円形で、棒状工具で穿たれたと考えられる。小口側の断面はやや方形状を呈す。孔を穿つ時に孔を広げようとしたために生じたものであろう。また同所には僅かに欠けも確認できる。紐使用による可能性もある。調整は手捏ねのちナデである。指頭圧痕が多数確認できる。３区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。２は完存する。全長さ5.3ｃｍ・幅1.25ｃｍ・重量5.5ｇである。胎土には赤色粒子・金雲母を含む。色調は灰赤色～暗い橙色である。焼成は良好である。小口の一方には紐使用による欠けも確認できる。調整は手捏ね後タテナデである。指頭圧痕が確認できる。３区北東端の包含層より出土した。３は２／３ほど残存する。残存長3.8ｃｍ・幅1.35ｃｍ・重量5.7ｇである。胎土には石英・金雲母を含む。色調は灰赤色～橙色である。焼成は良好である。調整は、摩耗のため分かりづらいが、手捏ねである。３区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。４は１／３ほど残存であろうか。残存長2.1ｃｍ・幅1.0ｃｍ・重量1.2ｇである。胎土には赤色粒子・金雲母を含む。色調は暗い褐色である。焼成はやや良好である。小口には、切断し小口を製作した折の、めくり返りが未調整のまま残っている。調整は、丁寧なタテナデである。３区より出土した。

３区馬埋葬遺構（第４５図）：３区のほぼ中央に位置する。当初は隅丸方形の土壙墓と東側と南側でそれぞれ柱穴１基ずつが切り合っているものと判断した。それを裏付けるかのように、中心部で土層の乱れが、土層断面でも、平面でも確認できた。また骨らしきものが出土したこともこの見解を後押しした。しかし掘り進めていくうちに、骨は馬の骨であることが木村幾多郎氏（大分市歴史資料館）の鑑定で明らかになった。よって中心部でみられた土層の乱れは、土壙墓の蓋が腐敗したため上位の土が土圧により下位に移動して生じたものではなく、馬の体部が腐敗することによってガスが抜け、上位の土が土圧により下位に移動して生じたものであることが判明した。当然、墓壙の形に関する見解も修正を必要とした。隅丸方形に南東端が半円に突出する形であることが判明した。他の遺構との切り合いは東側で柱穴とあるのみであった。

墓壙内には骨の一部が残存していた。頭骨・前肢・後肢である。体幹部の骨はほとんど残存していなかった。歯の残存状況が良好で、頭骨も鼻や目の周辺も少々残存していた。墓壙の西端に位置する。前肢は遠位を欠いている。肢を折りたたむように埋葬していた。後肢は半円に突出している墓壙にまで伸びていた。これらの骨

はバインダー処理を施し取り上げをおこなったが、歯以外、原型を留めることはなかった。残存状況から推定できる体高は120ｃｍほどである。

以上の状況から、埋葬時を想定すると、最初に隅丸方形の墓壙を掘削し、頭→前肢（このとき先端部を折りたたむ）・後肢の順番で埋置し、最後に後肢の先端部がおさまりきれなくて、半円状にさらに掘削し、先端部を埋葬したものと思われる。

時期は、中世後期～近世初期の柱穴を切っていることから近世初期以降の遺構と思われる。

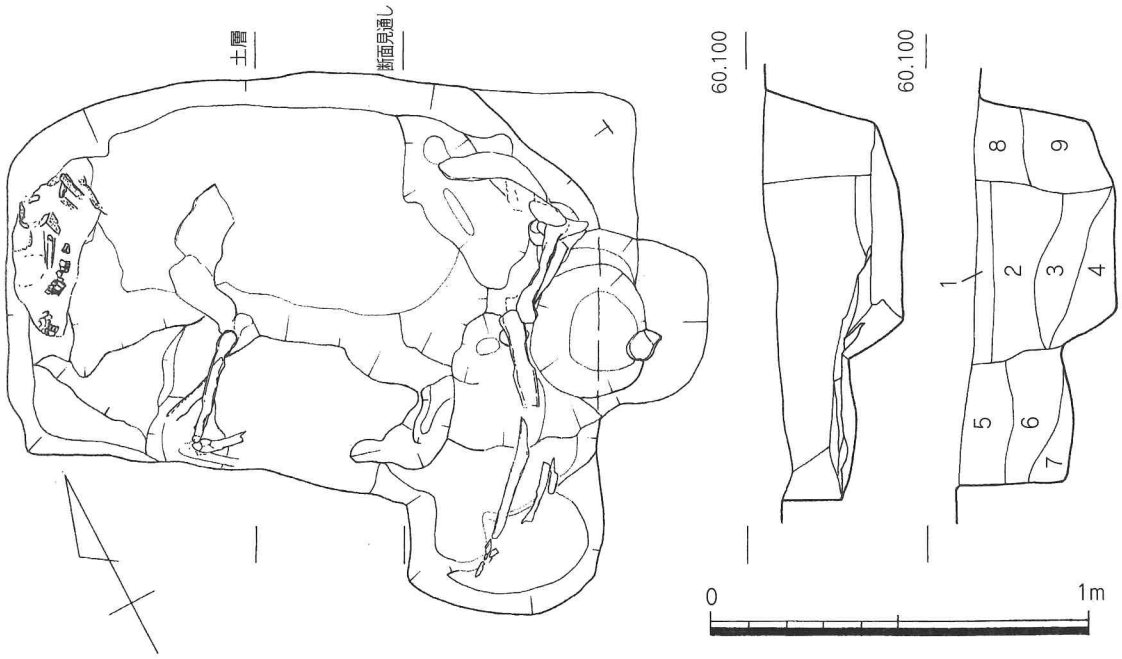
１・２区道路痕跡（第４６図）：１区の南側、2区の北側でそれぞれ検出した。

まず１区の方に関して説明する。表土および田の盤土を除去したところ、北側および中央では地山や包含層が検出できたが、南側では、同一レベルでは両者とも検出できなかった。しかし最大幅４ｍで玉砂利や平瓦片を敷いている痕跡を確認した。明治28年頃の地籍図を確認したところ、道路に対応する箇所であった。

2区に関しては、表土および田の盤土を除去したところ、北側で段を埋めて整地した痕跡が一部で確認できた。同様に明治28年頃の地籍図を確認したところ、道路に対応する箇所であった。

これらの道路痕跡のすぐ北側では旧10号線が並行するように並んでいる（写真図版1－4）。

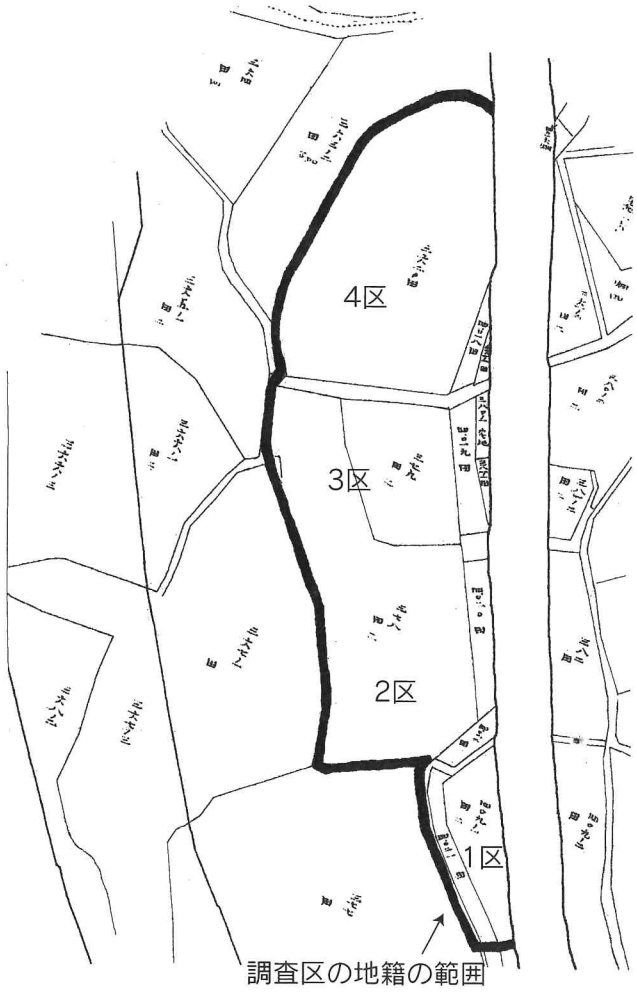
３区６号土坑および出土遺物と３区道路状遺構（第４７図）：３区北西端に位置する。西側の３区6号土坑は、長軸２ｍ程・短軸1.2ｍ+αのやや楕円形を呈す土坑である。この土坑の西側では板の痕跡もみられた。遺構内からは夥しい数の礫とともに、陶磁器類（第４７図１～５）、板の痕跡、炭、鉄塊が出土した。なお、これらの礫は砂岩がほとんどであるが、凝灰岩も出土した。１は瀬戸・美濃の染付碗である。口縁部～体部が１／４程

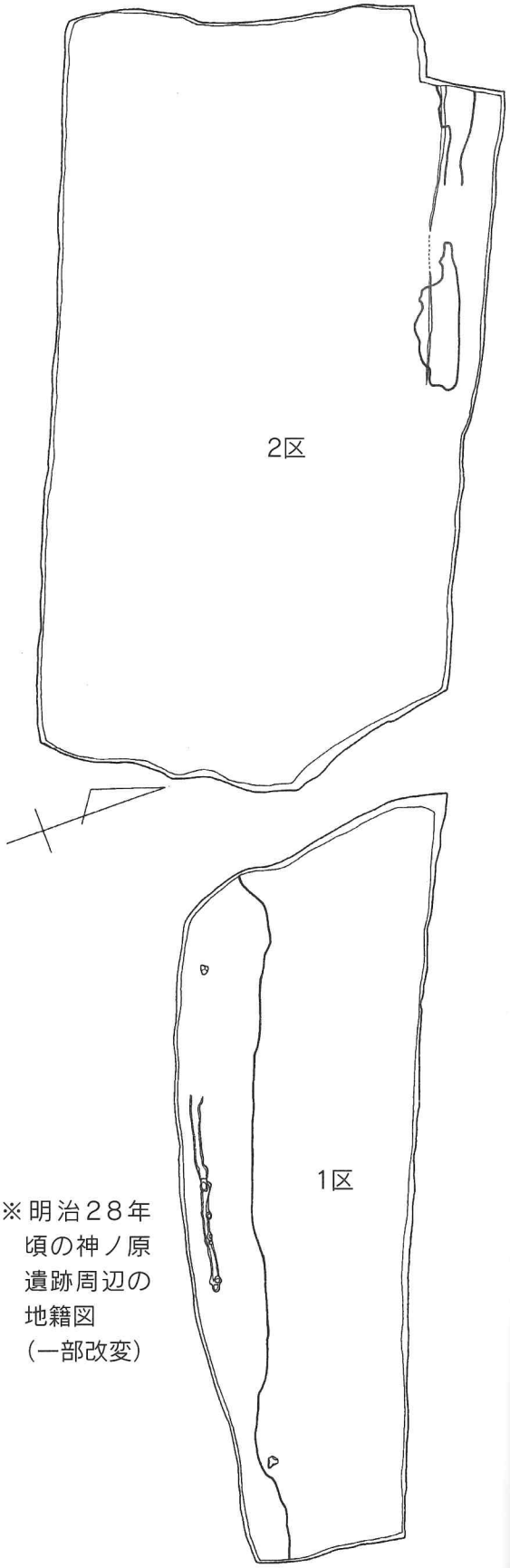


1．暗茶褐色層：やや黒味がかる。２ｃｍ大のアカホヤブロックを多く、１ｃｍ大の地山ブロックを含む。
2．暗茶褐色層：やや黒味がかる。３ｃｍ大・３mm大のアカホヤブロック、５mm大の地山ブロックを含む。パサパサではあるが、やや粘質で、締まりなし。
3．暗茶褐色層：やや黒味がかる。３ｃｍ大のアカホヤブロック・地山ブロックを含む。パサパサではあるが、やや粘質で、締まりなし。
4．黒色層：１０ｃｍ以下のアカホヤブロック含む。粘質、締まりなし。
5．暗茶褐色層：やや黒味がかる。1.5ｃｍ大のアカホヤブロックをまばらに、２ｃｍ大の地山ブロックを多く含む。
6．茶褐色層：やや黒味がかる。１０ｃｍ大のアカホヤブロックを濃密に含む。パサパサではあるが、締まりあり。
7．黒色層：やや茶色がかる。1.5ｃｍ大のアカホヤブロックをまばらに含む。パサパサであるが、粘質、場所によっては締まりあり。
8．暗茶褐色層：やや黒味がかる。3.5ｃｍ以下のアカホヤブロック・５ｃｍ大の地山ブロックを多く含む。パサパサであるが、やや粘質、締まりあり。
9．暗茶褐色層～茶褐色層：やや黒味がかる。５ｃｍ以下のアカホヤブロック・2.5ｃｍ以下の地山ブロックを多く含む。パサパサであるが、やや粘質。縄文土器出土（時期判定には無関係）。

第45図　3区馬埋葬遺構

残存する。復元口径は10.9ｃｍである。胎土は白色でやや荒い。釉調はややクリーム色の白色である。模様は青色である。生産時期は19世紀前半である。２は肥前の染付碗で、いわゆる「くらわんか茶碗」である。口縁部～体部が１／６程残存する。復元口径は9.4ｃｍである。胎土はやや灰色の白色である。釉調は透明である。模様は青色、もしくは群青色である。生産時期は18世紀後半である。３は肥前の染付小坏である。口縁部～体部が１／４程残存する。復元口径は7.5ｃｍである。胎土は白色で精良である。釉調は透明である。模様は群青色である。生産時期は18世紀後半以降である。４は肥前系陶器の盤である。口縁部～体部が１／６程残存する。外面下位にケズリを明瞭に残す。復元口径は20.3ｃｍである。胎土はやや黄味帯びた灰色で、やや精良である。ムラがあり５ｍｍ大の粒が１つ確認できる。釉調は深緑である。口縁部から体部下位付近にまで施釉がみられる。内面に刷毛による模様がみられる。生産時期は18世紀後半以降である。５は肥前系陶器の瓶である。底部のみ残存する。復元底径は6.2ｃｍである。胎土は灰色で精良である。釉調はうぐいす色である。残存部全





※明治２８年頃の神ノ原遺跡周辺の地籍図（一部改変）

第46図　1・2区道路痕跡

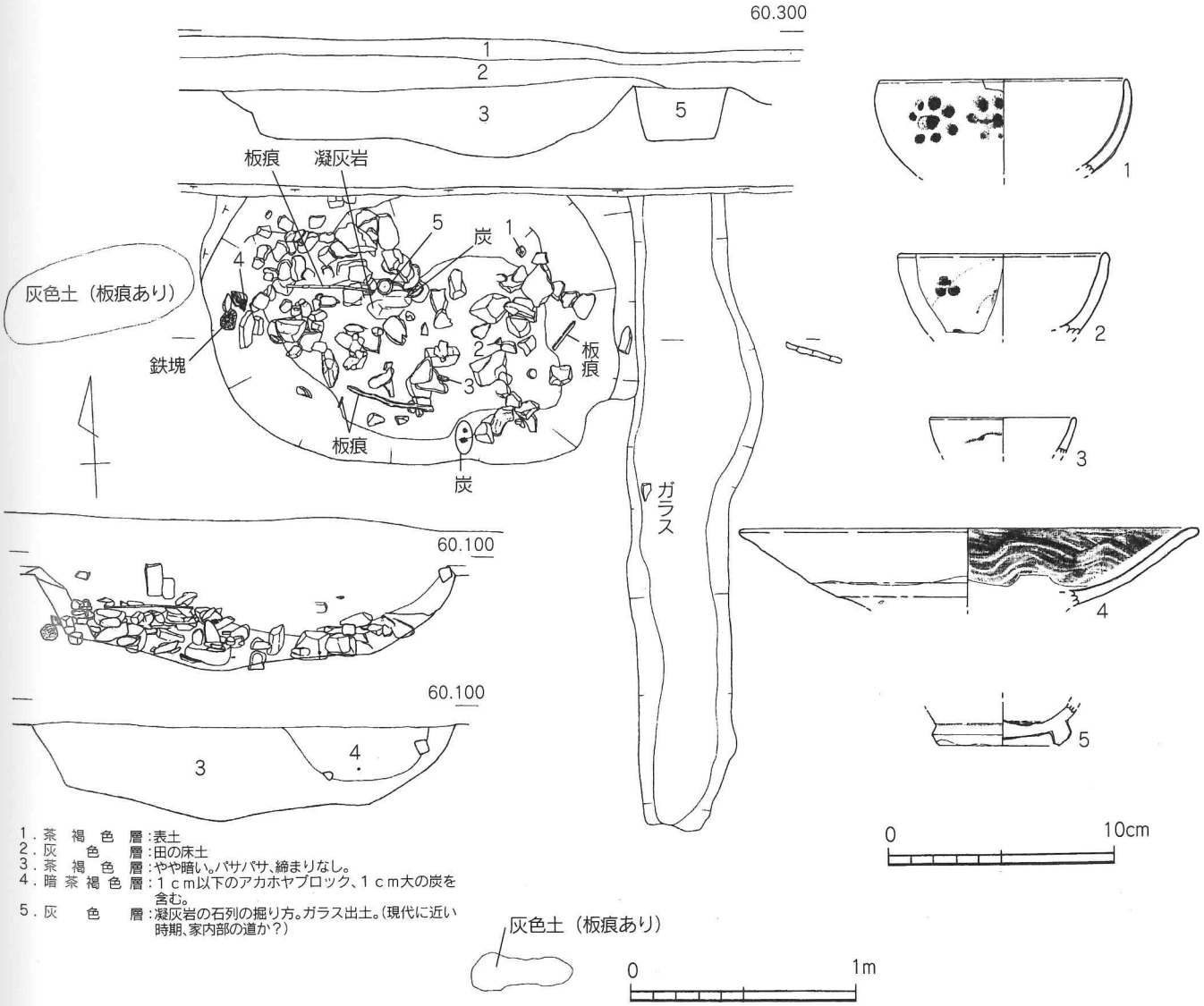
体に施釉がみられ、畳付の部分だけ掻きとっている。内面の見込には灰釉らしきものも確認できる。

東側の３区道路状遺構は南北に３ｍ弱＋αのびるもので、最大幅0.5ｍ程である。北側は調査区外までのびるため状況は不明である。東側・南側でそれぞれ板の痕跡がみられる。0.25ｍ程の掘り込みに人頭大の凝灰岩を敷き詰めていた。凝灰岩をとり除く段階でガラス片（瓶の破片？）が出土した。

これらの時期に関しては、後者はガラス片が出土していることから極めて現代に近い時期であることが想定できる。一方前者では18・19世紀の遺物が出土しているがこれらがこの遺構の帰属時期ではない。土層（第47図上）で確認すると道路状遺構の上層で3区６号土坑の埋土が確認できることからこちらの時期も極めて現代に近い時期であるといえる。

ここで今一度、第４６図の地籍図を参照してみると、これらの遺構が検出された場所は宅地という記載がある。後者の道路状遺構は人頭大の凝灰岩を並べていたことから宅地の敷地内を通る（例えば門から玄関に向かってのびる）道路であった可能性を想定できる。一方前者は廃棄物を埋めた土坑であろうか。これらの周辺でみられた板の痕跡もこの宅地を仕切るものであったと考えられる。

極めて現代に近い時期が想定できたが、実はこの痕跡に関して知る方は私が探した限りではおられなかった。下手をすると昭和の痕跡かもしれないものが忘れ去られているという状況を慮り、敢えて図示した。（吉田）



第47図　3区6号土穴および出土遺物と3区道路状遺構

第5章　自然科学的考察

神ノ原遺跡出土人骨について

石川健・田中良之
九州大学大学院比較社会文化研究院

1．はじめに

大分県南海部郡直川村（現佐伯市直川）神ノ原遺跡において直川村教育委員会による調査が行われ、中世土壙墓から人骨が出土した。同教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、現地にて実測・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学へ搬送され、同講座において整理・分析作業を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2．出土状況

2－1　3区1号土壙出土人骨

墓壙長軸北側より頭頂部の痕跡が認められ、その東側に乳様突起部が認められる。乳様突起南側に上下顎の歯牙が咬合状態で出土し、北側に大臼歯、南側に切歯が位置する。頭蓋痕跡及び歯牙の南側より下肢骨が北西方向に長軸をとった状態で出土している。

頭蓋骨の痕跡と歯牙の位置から、顔面が南側を向いた北頭位、右側臥の状態で埋葬されていたものと考えられる。また、伸展した状態で埋葬するには墓壙が小さいことから、墓壙東壁に沿うように椎骨から寛骨が位置し、下肢を屈曲した状態で埋葬されていたものと考えられる。さらに下肢骨と出土土器の位置から腹部に土器を抱え込むような状態であったと推定できる。

2－2　3区2号土壙出土人骨

墓壙北西より、歯牙小片が多数出土した。出土歯牙は咬合状態にはない。埋葬姿勢は不明である。

2－3　3区9号土壙出土人骨

墓壙北側より歯牙が出土した。歯牙の残存状況は不良であるが、臼歯部において上下顎が咬合した状態であることから、ほぼ埋葬時の位置を保つものと考えられる。詳細な埋葬姿勢については不明であるが、北頭位で埋葬されていたものと考えられる。銭2枚が出土している。

2－4　3区10号土壙出土人骨

墓壙北側で頭蓋骨の痕跡が認められた。また一部歯列弓を保った状態で歯牙が出土していることから、埋葬時の位置をほぼ保っているものと考えられる。頭頂部を北に、顔面を南東に向けた状態の北頭位と推定される。躯幹骨・四肢骨が認められず、埋葬姿勢については不明である。

3．人骨所見

3－1　3区1号土壙出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨痕跡及び上下顎歯牙、下肢骨が残存する。頭蓋骨痕跡は頭頂部片である。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

・	・	・	・	・	・	・	・	・		・	・	・	・		
M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	/	C	P^1	P^2	M^1	/	/
/	M_2	M_1	P_2	P_1		/		/	/	/	/	/	/	M^2	/
	・	・	・	・										・	

(○歯槽開放　×歯槽閉鎖　/欠損　△歯根のみ　・遊離歯　( ) 未萌出　c齲歯以下同様)

歯牙咬耗度は栃原1°cである（栃原1957）。これら歯種同定が可能であった歯牙以外にも左右不明の下顎第三大臼歯1、下顎切歯1他、細片化したものが残存する。

下肢骨が出土するが、保存状況が悪いことから部位・左右などについては不明である。

【性別・年齢】性別は判定可能な部位が遺存しないことから不明である。年齢は、歯牙咬耗がやや進行していることから成年と推定される。

3−2　3区2号土壙出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。歯牙小片が残存するのみである。歯種の判別は、保存状況が非常に悪いことから不能である。

【性別・年齢】性別・年齢は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

3−3　3区9号土壙出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。歯種同定の不能な歯牙小片が残存するのみである

【性別・年齢】性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

3−4　3区10号土壙出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。部位不明な頭蓋小片および歯牙が残存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。これらの他にも小片のため歯種の同定が不能な歯牙片が認められる。

						・	・	・	・	・	・				
/	/	/	/	/	/	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	/	/	/	/
/	/	/	/	/	C	/	/	/	/	C	P^1	/	/	/	/
					・					・	・				

【年齢・性別】年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

4. まとめ

以上本遺跡出土人骨についての報告を行ってきた。調査においては4体の人骨が出土した。これらの出土人骨はいずれも保存状況が良好ではなかったため、計測に耐えうるものはなく、形質的比較を行える個体は得られなかった。

埋葬姿勢についても、人骨の残存状況が悪くほとんどの場合詳細を知ることができなかった。但し、頭蓋骨あるいは歯牙が出土している場合をみると、1号・9号・10号土壙において頭位を北にとっている。また、1号土壙については、頭蓋と歯牙および下肢骨の位置関係から、右側臥で下肢を屈曲し、腹部と大腿骨の間に土器を抱え込んだ状態での埋葬と推定された。このような側臥屈葬は、近隣地域では久住遺跡などの中世墓において認められる埋葬姿勢と共通するものである（板倉他2005）。また、腹部付近における土器の副葬については吉母浜遺跡において認められる（下関市教育委員会1985）。

謝辞

本報告にあたり、ご便宜を賜った吉田和彦氏をはじめ直川村教育委員会の各位に厚く感謝申し上げたい。

文献

板倉有大・田中良之，2005：5.久住遺跡出土人骨について．久住町教育委員会編，久住遺跡（久住御茶屋跡）．

下関市教育委員会，1985：吉母浜遺跡．

栃原博，1957：日本人歯牙咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31，補冊4．

大分県佐伯市（旧直川村）神ノ原遺跡出土のウマについて

加藤　久雄（愛知学泉大学家政学部）

1．緒言

神ノ原遺跡から出土したウマ骨資料の鑑定・報告を大分県佐伯市（旧直川村）教育委員会から依頼された。以下では、主にウマ骨資料の観察・計測所見を述べる。

出土状況について：当該遺跡は、大分県佐伯市（旧直川村）上直見にあり、旧直川村教育委員会によって2004年6月7日～10月13日に発掘された。出土したウマの骨の帰属時期については、現場における遺構群の面的配置や出土した土器の所見により、近世初期以降であると考えられている。遺構から出土したウマは、東西方向に長い楕円形の穴に体の左側を上に向け、穴の形状に合わせわずかに体を曲げた姿勢で埋められたと判断される。後肢の一部はこの遺構とは別の穴状遺構から出土している。頭位は西側である。

残存状況について：出土したウマ骨は、比較的残りにくい脊椎骨や肋骨以外のほぼ全身の1体分が残存した。しかしながら、発掘現場でのバインダーによる保存処理にもかかわらず、土圧の影響により細かくひび割れ、火山灰性の酸性土壌の影響であるのか、破片断面が著しく溶解しているため、取り上げ段階で細かい破片となってしまっていた。

報告する資料について：取り上げ後に、旧直川村教育委員会にて著者が観察したウマ骨資料は、骨質が劣化により著しく脆弱で接合・復元が困難な小破片を主に構成されていたため、ほとんどの破片は観察や計測が著しく困難な状態であった。それゆえ、一部の接合が可能で観察や計測に耐えうる残存状況が良い歯牙を中心とした部位について報告したい。

2．出土したウマの歯の基礎データ

計測は、主要部位についてはDriesch（1976）を参考におこなった。咬耗の状態は、奈良文化財研究所（2004）を参照し観察した。計測・観察結果を表1に示す。

3．出土したウマの形態的特徴

・年齢と性別：歯の咬耗の状況から、10歳以上（10代後半の可能性が高い）の成獣個体と考えられる。性別については、その決め手となる犬歯と判断される破片や犬歯が収まっていた顎骨歯槽部と判断される破片が出土していない。したがって、それらの点から判断するとメスの可能性がやや高いと判断される。

・体高について：ウマの骨を検出時した際、発掘調査者によって後肢遠位部から肩甲骨最上部の高さから計測された体高は、約120cmであった。しかしながら、取り上げられた骨資料からは、体高推定が可能な破片が残存しないためこれ以上は述べない。

・歯：資料に含まれる歯は、残存状況が相対的に最も良好な部位であった。計測値は、表1示す。特徴として残存する歯の磨耗が著しいこと、その影響で歯根部までの高さが著しく短くなっていることがあげられる。また、歯冠の象牙質や歯根部の残存状態もあまりよくないため、これ以上は述べない。

4．まとめ

・ 出土したウマ骨の帰属時期については、近世以降と考えられる。

・ SK - 03遺構から出土したウマ骨は、ほぼ全身の1体分が残存していた。

・ 歯の咬耗の状況から、10代後半の年老いた成獣個体であろうと考えられる。性別については、メスの可能性がやや高いと判断される。

・ 発掘調査者によって後肢遠位部から肩甲骨最上部の高さから計測された体高は、約120cmであった。現在の在来ウマの小型に属すくらいのサイズであり、主な遺跡出土ウマの体高の平均値（約126mm）（西中川1991）よりもやや小さい。

5．参考文献

奈良文化財研究所　2004　『環境考古学4　牛馬骨格図譜』埋蔵文化財ニュース　115号　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（pp.16）

西中川駿　1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書（pp.197）

Driesch, A. 1976 "*A guide to the measurement of animal bones from archaeological site*", Peabody museum bulletin 1, Peabody museum of archaeology and ethnology, *Harvard University*,　(pp.136)

6．出土哺乳動物種名表

哺乳綱 Class Mammalia
　奇蹄目 Order Perissodactyla
　　ウマ科 Family Equidae
　　ウマ *Equus caballus*

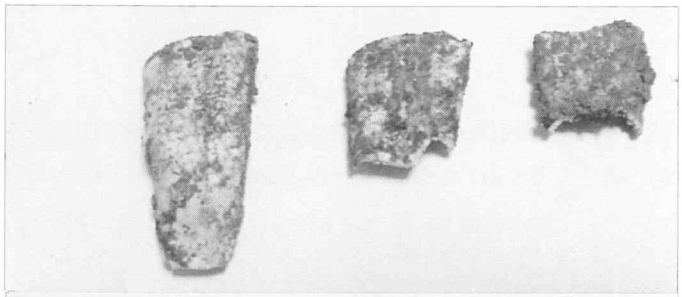
7．謝辞

大分県佐伯市および旧直川村教育委員会および同（元）文化財専門員　吉田和彦氏には、貴重な動物遺存体資料の報告の機会を頂いた。厚く御礼申し上げたい。

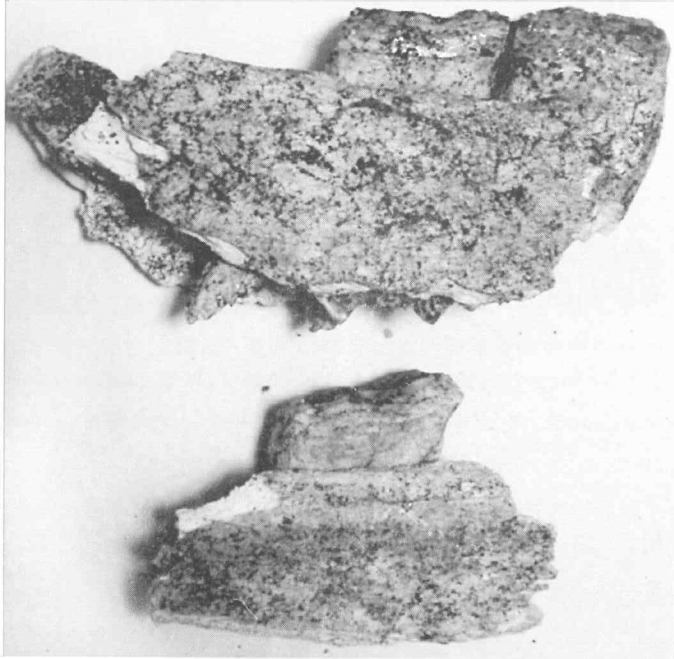
第7表　神ノ原遺跡出土のウマの歯についての基礎データ

資料番号	写真番号	上下	歯種	順位	左右	近遠心径(mm)	類舌径(mm)	舌側歯冠高(mm)	類側歯冠高(mm)
①	A	L	I	?	R	12.44	-	-	-
②	A	?	I	?	?	13.24	-	-	-
③	A	?	I	?	?	11.69	-	-	-
④−1	B	L	M	1	R	20.48	15.36	11.63	-
④−2	B	L	M	2	R	19.07	18.72	10.86	-
⑤	D	L	M	3	R	31.27	13.25	11.84	-
⑥	D	L	M	3	L	31.37	13.69	11.73	-
⑦	B	L	M	2	L	21.33	16.67	10.41	-
⑧	D	L	M	1	L	19.78	20.00	-	-
⑨	D	L	P	4	R	22.26	-	-	-
⑩	D	L	P	4	L	22.90	-	-	-
⑪	D	L	P	2	L	23.41	-	-	-
⑫	C	U	M	3	L	20.08	-	-	-
⑬	C	U	M	2	L		-	-	-
⑭	C	U	P	3	R	22.35	23.06	-	-
⑮	C	U	P	4	R	19.54	-	8.96	-
⑯	C	U	M	1	R	20.75	23.07	-	23.88
⑰	C	U	M	2	R	21.80	23.54	11.59	-
⑱	C	U	M	3	R	23.71	21.44	-	10.83

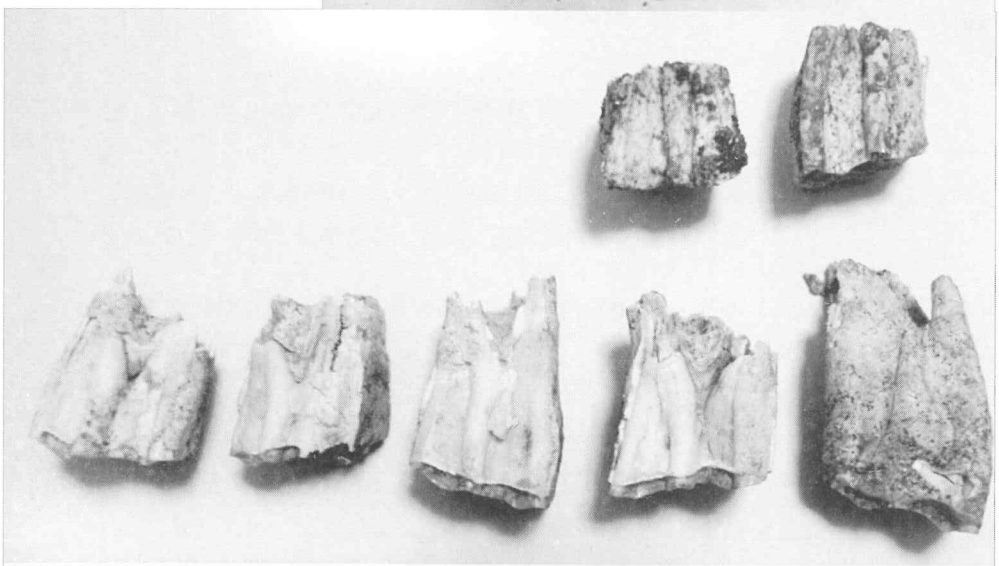
-：破損により計測不能。



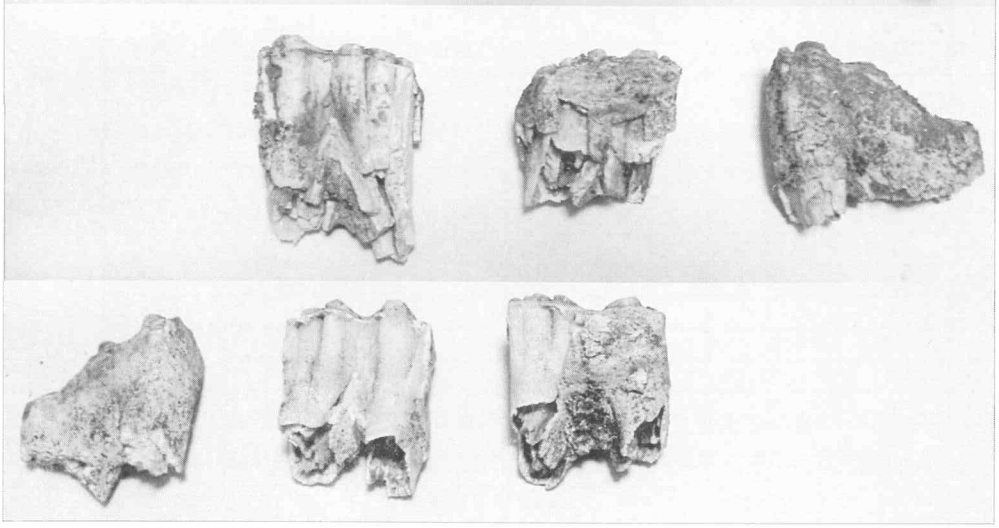
写真A　切歯（切縁を天に撮影）



写真B　下顎骨



写真C　上顎臼歯



写真D　下顎臼歯

第6章　まとめと考察

縄文時代早期

土器・礫などの分布について

第16－１図（上）の土器や礫の接合関係でみるように、両者とも隣接するものが主に接合しているが、その一方で、距離が離れたものに関しては、地形的影響で動いただけではなさそうなものもある。礫⑩は３つの破片が接合するが、それらは被熱しておりまた、3者うち２者が３区５号集石と、１者が３区７号集石と隣接しており、人為的な移動の可能性がある。

土器および石器の垂直分布では、レベルから２つに分けることができた。両者ともに、本遺跡中で大多数を占める条痕文土器、無文土器を伴なっており、土器から差を見出すことは困難であった。小型剥片石器では、色調・質等から細分したチャートが、同じ細分同士で近接して分布するものもあることから、まだ接合する可能性がある、より細かい検討によって、何か見出せるだろう。

なお、土層で確認できるⅣ$_1$とⅣ$_2$層との境では遺物からは、明確な差はでなかった。

土器について

ここでもう一度、本遺跡における当該時期の土器の特徴を列挙する。口縁は直口もしくはやや外傾するものが主で、そのほか内傾するもの、外反するものがみられる。底部は丸底、若干乳房状を呈すものである。調整は、条痕・無文・押型文・撚糸文である。これらの比率は、800点近くの土器（一部、接合しない同一個体もそれぞれ１点として数えている。）のうち、条痕文が３割近く、無文が半数近く、押型文が３点、撚糸文が３点ほどである。残りの２割弱は不明としたものであるが、印象としては無文が多いと考える。器壁は、0.5ｃｍ～２ｃｍ強である。口縁直下に瘤や穿孔がみられる。などである。

これらのアカホヤの下層から出土した土器は、数点の押型文を除き、概ね早期前半に位置づけられるものである。撚糸文も器壁が著しく厚いことから当早期の土器相の中でも新しい方に属するものと考える。これらの土器は二日市遺跡を例に挙げるならば、第５文化層～第７文化層という幅の中で考えられるものである。その他、大分県では、中原遺跡（宇佐市）・陽弓遺跡（国東町）・野田山遺跡（大分市）・二日市遺跡（九重町）などが関連するものとして列挙できよう。よって、いずれにせよ数時期の土器が混在していると考えられる。これはプロポーションにややバリエーションがあること、調整も、条痕においては条痕の相違・条痕の方向の相違、無文においてはナデ調整・ミガキ調整・工具ナデなどバラティに富むこと、器壁も薄手から厚手がみられることからも首肯できると考える。なお、本遺跡では有舌尖頭器が出土しているため、草創期の土器が出土しているか注意を要するところである。近隣では阿蘇原上遺跡（宮崎県高千穂町）において草創期の土器が確認されているが（松林・甲斐・松本2003）、実見したものの本遺跡に関連を彷彿させるような土器は出土していない。

よって、本遺跡のアカホヤの下層の土器の位置づけは早期前半内に数時期あり、無文と条痕文が比率を変化させながらその主体を占め、ある時期若干の撚糸文が加わると理解しておく。当然、早期後半の押型文期に伴なう無文土器も存在するものと考える。これらの土器が、それぞれどの時期に対応するものであるかという位置づけは、本遺跡の場合、非常に困難なものと考える。本遺跡の土層堆積・および土層内の遺物の一括性は、洞穴遺跡など層序がしっかりしており、なおかつそこに含まれる土器の一括性が良好である可能性が高いものではなく、オープンサイトという層序がしっかりしていない可能性やその層に含まれる土器も数時期にわたる

可能性が高いというものであり、慎重を要することである。実際、上層であるⅣ1層と下層であるⅣ2層間の土器（例えば山形文）が数点接合している。分布図において集中する箇所のものを同時期に認定するなど、そのほかの方法で土器の組成を読み取ることも可能ではあるが、筆者の力量の外である。周辺の資料の増加が本件を解消してくれるものと信じる。（吉田）

参考文献

松林豊樹・甲斐貴光・松本茂　2003『阿蘇原上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター

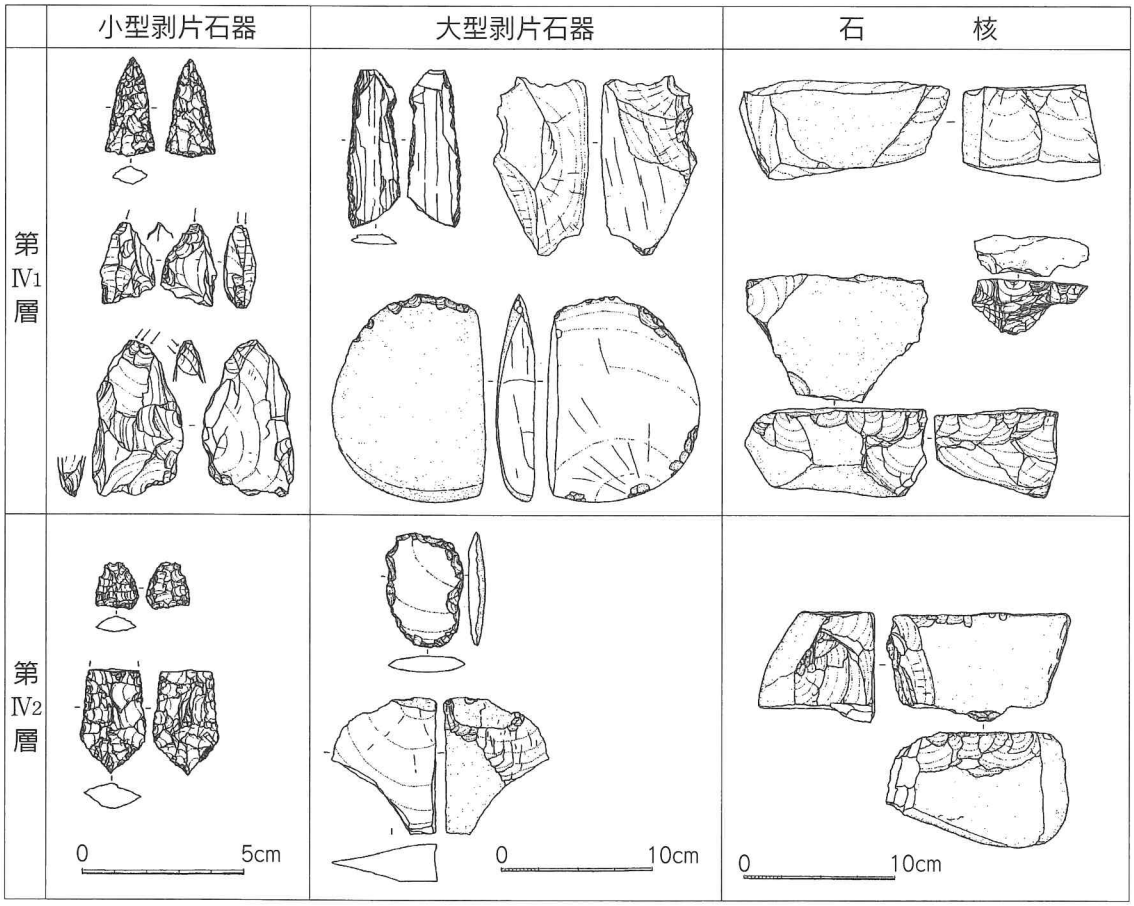
石器について

①石器全体について

本遺跡では、縄文時代早期の上下２層から多様な石器類が出土した。その石器組成は、先年（1998年）に発掘調査が行われた佐伯市長谷の『森の木遺跡』の石器組成と近似している。それはチャートを主体とする小型の剥片石器類、砂岩を素材とする大型の剥片石器類、砂岩礫を使った豊富な礫器類と共通するものである。

小型の剥片石器については、神ノ原遺跡では圧倒的にチャート主体であるが、森の木遺跡ではホルンフェルスが多く使用されている違いはある。また、森の木遺跡では、姫島産黒曜石が１点出土しているが、神ノ原遺跡でも姫島産黒曜石が攪乱層であるが１点出土している。さらに、神ノ原遺跡では佐賀関半島方面で産出する結晶片岩製の剥片石器があり、チャートでは替えられない用途なのか注目される。

大型剥片石器と礫石器類は全て流域に産する砂岩の転礫である。砂岩としては硬い、緻密な性質であり、森の木遺跡と同様に大型剥片石器の素材としても使用に耐えるものである。とくに神ノ原遺跡においては、礫器



第48図　神ノ原遺跡出土石器対比図（剥片石器・石核）

が多く出土した。なかでも片刃礫器が両刃よりも多く使用されている。これも森の木遺跡と共通する要素である。また、片刃礫器については、上層（Ⅳ$_1$層）と下層（Ⅳ$_2$層）では形態に相違がみられる。これは明らかに製作技法の変化と把えてよいものである。

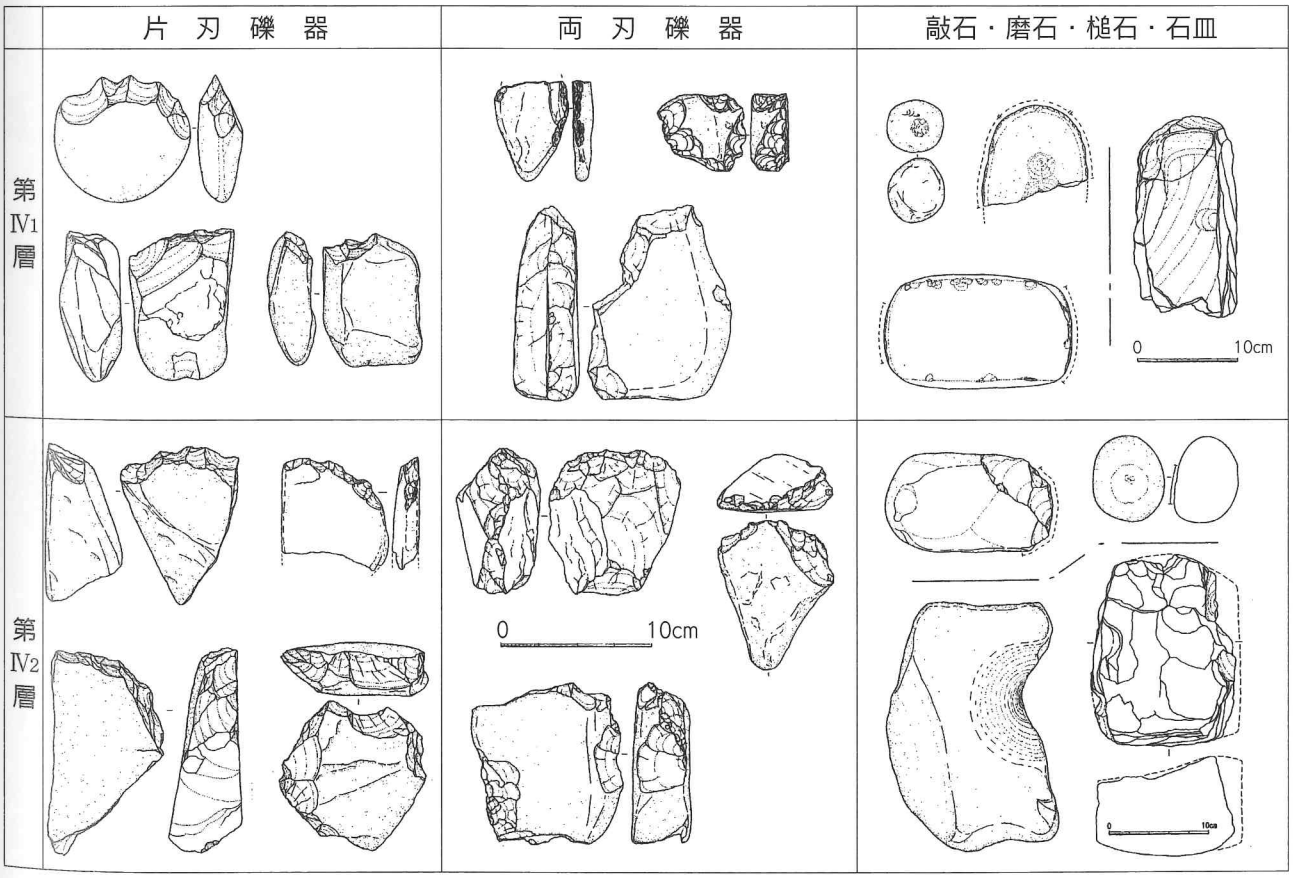
②礫器について

本遺跡においても早期の良好な礫器資料が得られた。下層（Ⅳ$_2$層）石器の礫器についていえば、片刃礫器の製作過程で分割による素材の確保という技法がみられた。それは、（1）できるだけ平坦な面をもつ大きな扁平礫を２～３に分割し、略三角形の素材をつくる。（2）礫の短辺に平坦面側から片面加工によって刃部をつくる。（3）周辺の稜を調整加工する。という順序である。この方法によれば、使用によって刃部が鈍くなった時の再生加工が容易である。なぜならば、平坦な底面からの片面からの加工によって常に鋭い刃部が保持されるからである。また下層（Ⅳ$_2$層）においては一個の片刃礫器でいろいろな角度の刃部をもつものがあり、複数の機能を有していたものとみられる。

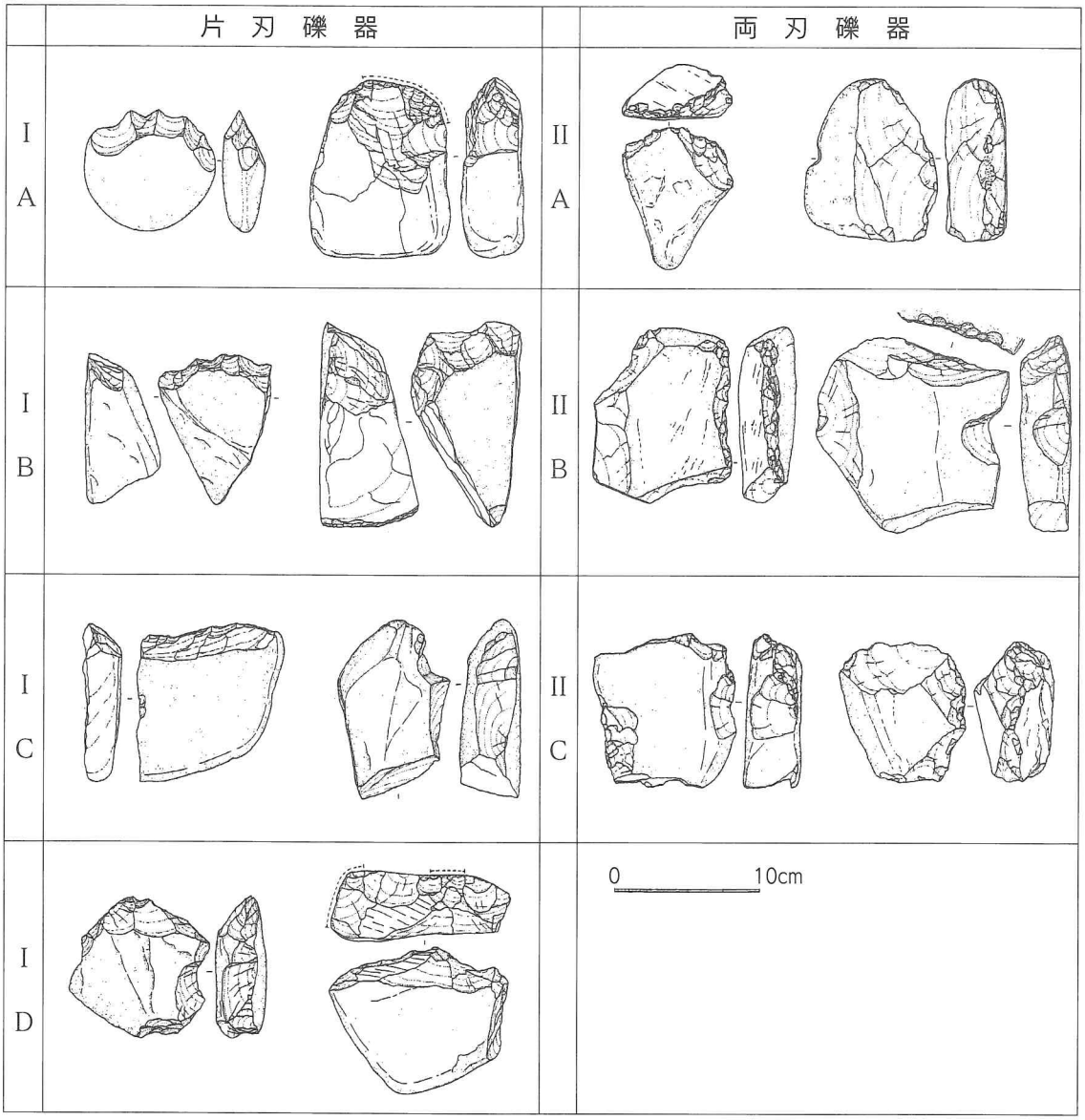
上層（Ⅳ$_1$層）の礫器には分割に技法はみられない。その替わり、適当な大きさの円礫あるいは亜角礫をそのまま素材として、その一端に加工したものである。その形態も単純なものでなく、刃部の形態、角度に変化がみられる。礫器についてもいくつかの機能を有していたものであろう。あるいは、刃部の鋭いものは一つの石器で万能に近い用途をもっていたと考えられる。

本遺跡では磨製石斧が出土していない。大型砥石があることから、その存在は否定できないが、県下においては早期前葉の段階では出土例が少ないのは指摘できる。本遺跡に比較的近い森の木遺跡においても磨製石斧は１点のみである。両遺跡ともに礫器とくに片刃礫器が多いことから、その両者の間に相関の関係があったのではとみられる。やはり、礫器の多くは、伐開の用途に供されていたのではと推測されるものである。

（清水）



第49図　神ノ原遺跡出土石器対比図（礫石器）



第50図　神ノ原遺跡出土礫器の分類

参考文献

賀川光夫ほか編　1982『政所馬渡』別府大学付属博物館

清水宗昭ほか編　2004『黒岩遺跡』大分県文化財調査報告書　第165輯、大分県教育委員会

高橋信武編　1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会

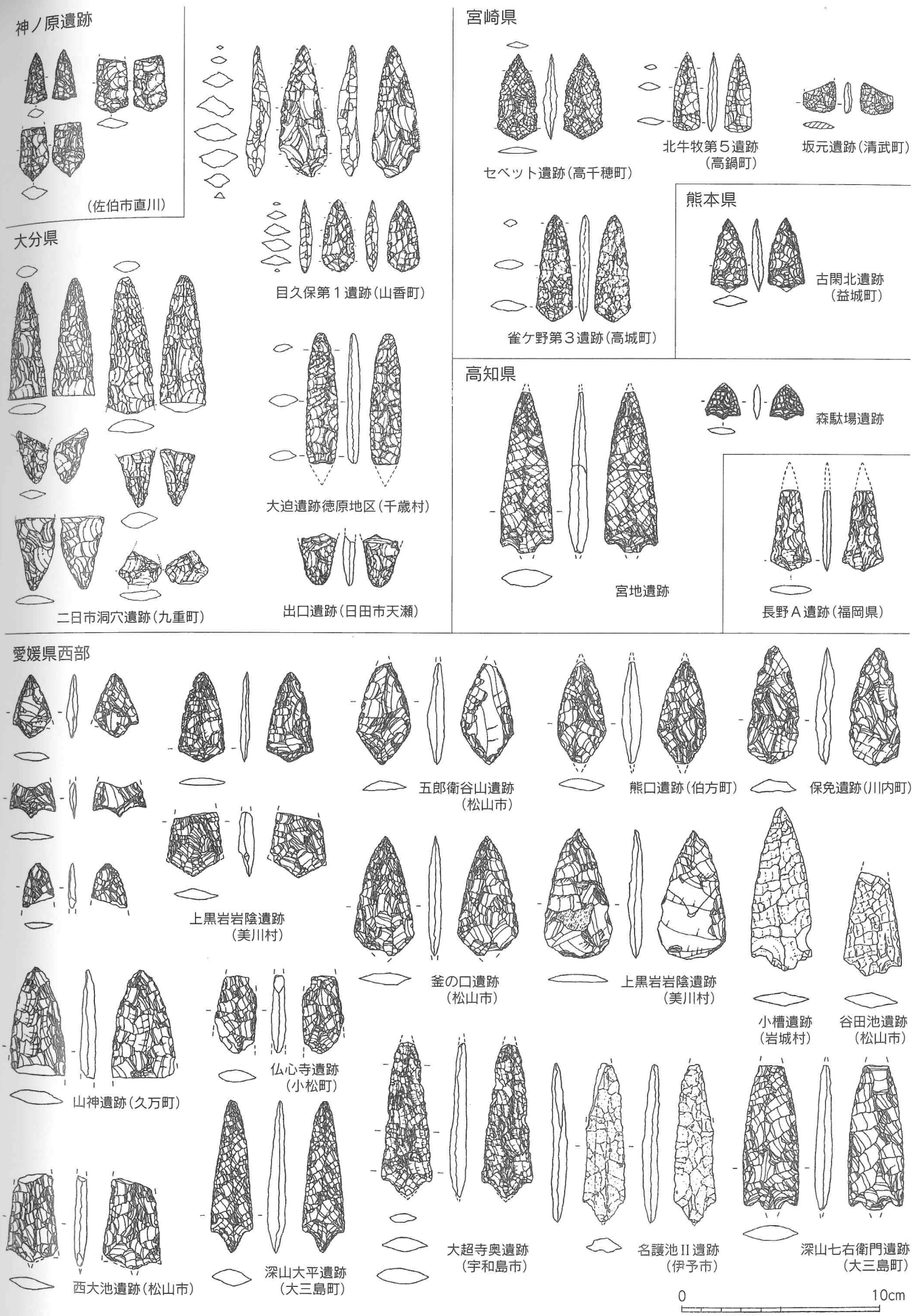
高橋信武編　2000『森の木遺跡』大分県文化財調査報告書　第109輯、大分県教育委員会

橘　昌信編　1980『大分県二日市洞穴』別府大学付属博物館

③有舌尖頭器について

本遺跡からは有舌尖頭器と考えられるものが３点出土している。九州において１遺跡において３点出土することは稀であり、その位置づけには慎重を要する。全て早期の層からの出土であるが、有舌尖頭器の帰属年代は草創期であることが一般的であり、その下限に関しては他地域では早期前半まで下げる傾向もあるが（大下2002）、九州に関してはまだまだ早期の層から出土しても草創期の流れ込みと判断することが現状である（近沢2005）。

本遺跡が、本項の「土器について」でも述べたように包含層に数時期の土器が混在する可能性や、Ⅳ$_1$層とⅣ$_2$層の間で遺物が接合するなど遺物の上下があることも上記の見解を助けるものと判断する。よって早期の層中よ



第51図　神ノ原遺跡およびその周辺地域の有舌突頭器

りの出土であるが、本遺物を早期の遺物と判断するには躊躇する。

そのほか九州の有舌尖頭器の場合、土器と明確に共伴する例が僅かに知られる程度であり、土器との共伴が問題のひとつである。本遺跡でも有舌尖頭器の時期の中心である草創期の土器があるかどうか確認したが、結果は本稿の「土器について」で記載したとおりである。

最後に本遺物の形態であるが、第51図のように周辺の有舌尖頭器を集成した。大分県はいうに及ばず、隣接する宮崎県・熊本県・高知県・愛媛県西半部と対象とした。こうしてみると、本遺跡の遺物は、同じ県である大分県出土のものとも形態的には似ていない。多数分布する本州に近い愛媛県西半部はどうであろうか。当地域は舌部付近の逆刺が強いものが多い。上黒岩遺跡や五郎衛谷山遺跡で舌部の形態が逆三角形のものがみられるもののやや形態的開きが感じられる。

こうした中で宮崎県の出土のセベット遺跡（高千穂町）・雀ヶ野第３遺跡（高城町）のものをみてみると、本遺跡のうち刃部が欠損する2点にプロポーションのみならず大きさが類似すると考えられる。

本遺跡のうち完形品のもう１点は、長野A遺跡（福岡県）出土のものが、先端が欠損するものの類似すると考えられる。ただし、本遺跡のものが全長3.2ｃｍに対し、長野Ａ遺跡のものはその２倍ほどであると考えられるが・・・。

このように考えると、本遺跡の当該遺物は、分布の中心により近い愛媛県よりストレートに波及してきたものとは考えづらい。資料が少ない九州内での判断であるが、現時点では九州内での複雑な交流のなかでもたらされたものと判断したい。よって本遺跡で確認できる先端部が欠損する２点と完形品である１点の舌部間にみられる形態的差異も、単純に舌部の退化による型式の旧→新と見るべき問題ではなく、形式の内での差異と把えることも現時点では可能であると考える。（吉田）

参考文献

大下　明　2002「近畿地方と東海地方西部における押型紋土器期の石器群について」『第４回　関西縄文文化研究会　縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会　など

近沢恒典　2005『雀ヶ野遺跡群』高城町教育委員会

図出典

愛媛県西部・高知県（多田　仁　1997『愛媛考古学』14　愛媛考古学協会、同　2003『紀要愛媛』第３号　財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター）、大分県目久保第１遺跡（高橋信武　1993「第３章　３．目久保第１遺跡」『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会）、大分県二日市洞穴遺跡（橘　昌信編　1980『大分県二日市洞穴』別府大学付属博物館）、大分県大迫遺跡徳原地区（豊田徹士　1999『大迫遺跡徳原地区原田第２遺跡原地区』千歳村教育委員会）、大分県出口遺跡（橘　昌信　1986「第２節　縄文時代」『天瀬町誌』天瀬町）、宮崎県セベット遺跡（松岡良一　1984「第Ⅱ章　遺構と遺物　５．石器」『セベット遺跡』高千穂町土地開発公社／高千穂町教育委員会）、宮崎県北牛牧第５遺跡（草薙良雄　2003「北牛牧第５遺跡」『北牛牧第５遺跡　銀座第３Ａ遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター）、宮崎県坂元遺跡（井田　篤・秋成雅博　2005『坂元遺跡』清武町教育委員会）、宮崎県雀ヶ野第３遺跡（近沢恒典　2005『雀ヶ野遺跡群』高城町教育委員会）、熊本県古閑北遺跡（野田恒親・濱田彰久　1999『古閑北遺跡』熊本県教育委員会）

集石について

①集石の立地について

集石は１区で1基、３区で６基、４区で５基、都合１２基検出した。

これらのうち、１区１号集石、３区1号集石がそれぞれ単独で立地する。この２者は双方とも調査区内では

北寄りで、なお且つ比較的高所に立地する。よって単独立地は、削平によるものの可能性もある３区２号集石・５号～７号集石が、また４区の集石が、それぞれ密集して存在する。これら密集する集石同士の構造は１つのものではなく、後述するように３種類からなり、この構造の相違が問題点として挙げられる。積極的に解釈すれば、この構造が違うもの同士がまとまってひとつの何らかの単位である可能性も指摘できよう。

②構造について

検出した１２基は以下のような構造に分類できる。

ａ．上部が拳大以上の礫、下部が人頭大を中心とした礫で構成され、なお且つ掘り込みをもつもの。
（１区1号集石・3区２号集石・３区４号集石・４区１号集石・４区３号集石・４区５号集石）

ｂ．拳大～人頭大の礫を中心に構成され、上記のように上部と下部で礫の大きさが違わない。つまり下部構造をもたないタイプである。ただし浅い掘り込みをもつ。（３区１号集石・３区７号集石・４区２号集石）

ｃ．拳大～人頭大の礫を中心に構成され、上記のように上部と下部で礫の大きさが違わない。つまり下部構造をもたないタイプで、ここまではｂ類と同様である。ただし本ｃ類は掘り込みをももたない。（３区５号集石・３区６号集石・４区４号集石）

これら３分類のそれぞれが、遺構の性格を異にすると考えることも可能であろう。以下その可能性に関して検討する。

隣接する３区２号集石と３区５号集石、および４区４号集石と４区５号集石の構成礫が、それぞれ接合した。３区２号集石・４区５号集石がａ類、３区５号集石・４区４号集石がｃ類と、それぞれａ類とｃ類の組み合わせである。これらは少なくとも接合する集石同士が同時併存、もしくは同時併存と言わないまでも、近接する時期に使用されたものと考えることが自然であると考える。

同時併存と考えた場合、それぞれ構造の違う集石であることから、その性格の違いを考えなければならない。集石が調理（蒸す）時の遺構であるという前提に立脚して話を進めた場合、

・調理前に礫を集め熱して、一部は使用し、一部は使用されずそのままの状態

・調理をおこない、集石を構成する礫を一部破壊し調理したものを取り去り、放置した状態

・調理したものを、取り去る時に集石を構成する礫を一部取り去り、集めた状態

などが、妥当なところであろう。これらのどれかの状態に当てはまる可能性を指摘できよう。

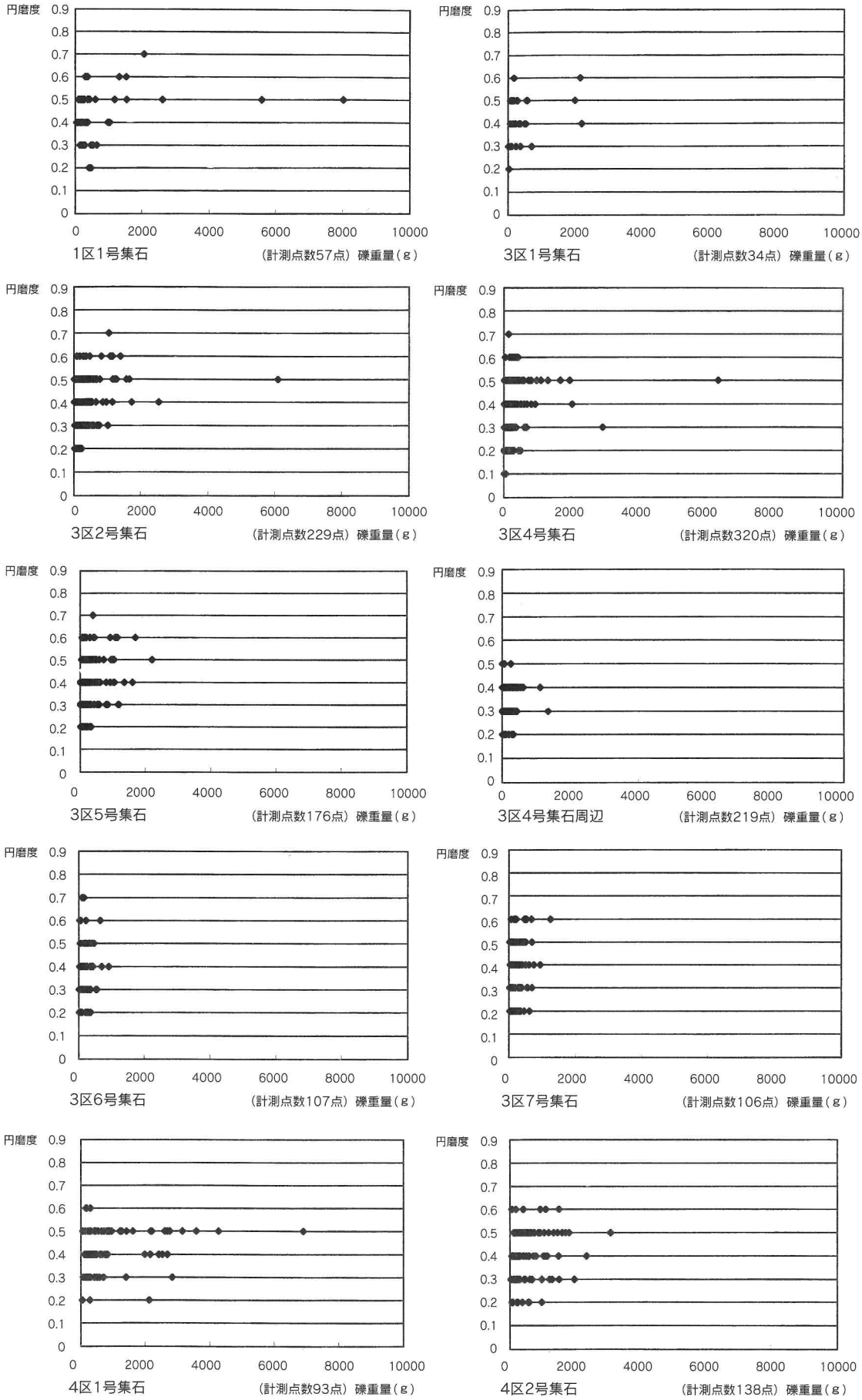
逆に同時併存ではないと考えた場合、上記３点の可能性のほか、時期的な違いによる形態差とも考えることが可能である。つまり同様に蒸すという行為をおこないながら、時期によってその構造が違うということである。その場合、何度も同じ様な場所で、同じ様な礫を使用したということが指摘できる。

③集石および礫層の構成礫について

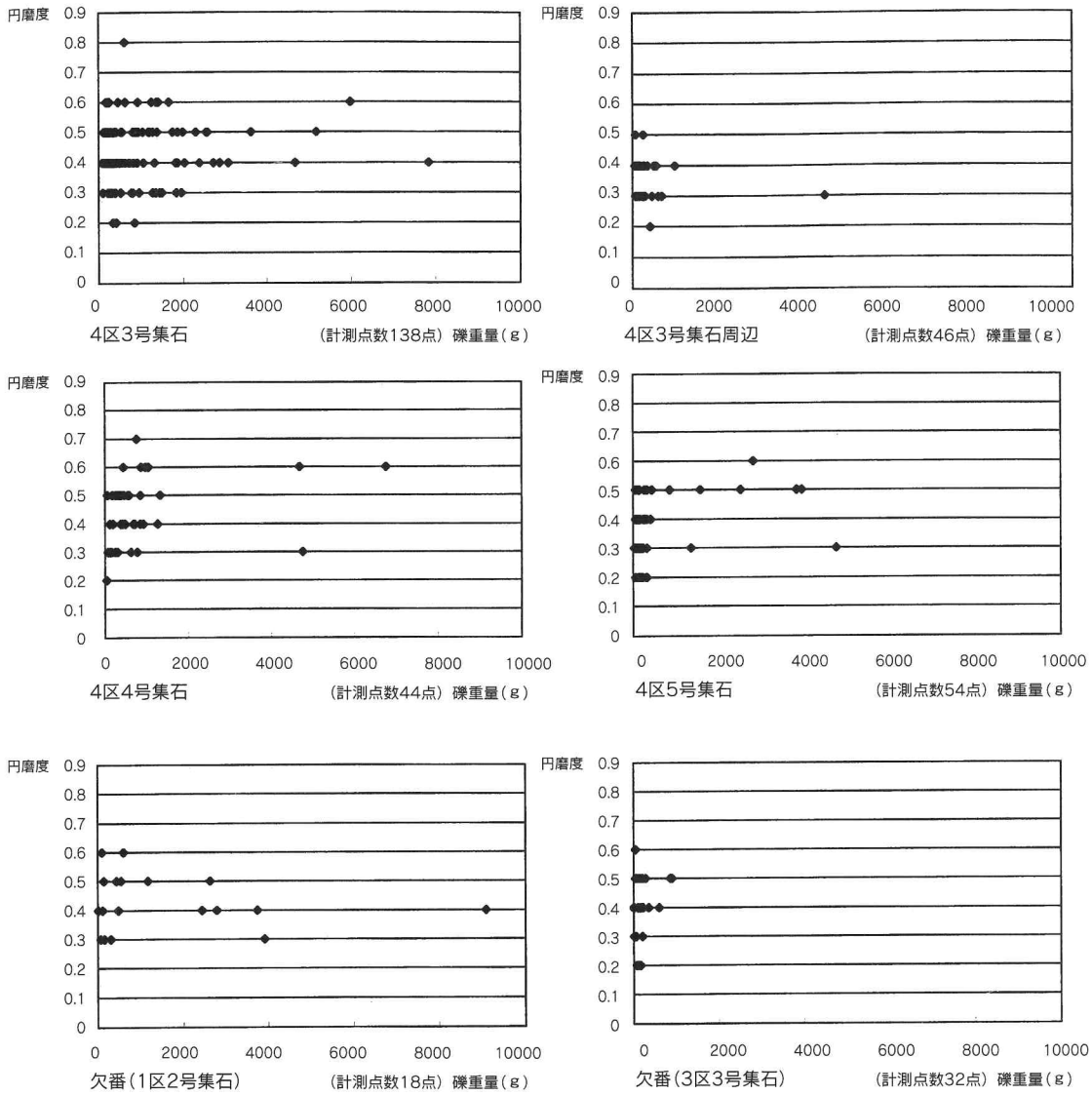
集石および、包含層中に含まれる礫の重さと摩耗度をみる円磨度（Krumbein 1941、第53図下の表参照のこと）を計測し、グラフ化を試みた。なお、集石は計測可能な全ての礫を、トータルステーションで取り上げをおこなった包含層上位の礫および、下位のグリッドで取り上げた礫層の礫は、すべての礫の計測はおこなわず、無作為に選び計測をおこなった。

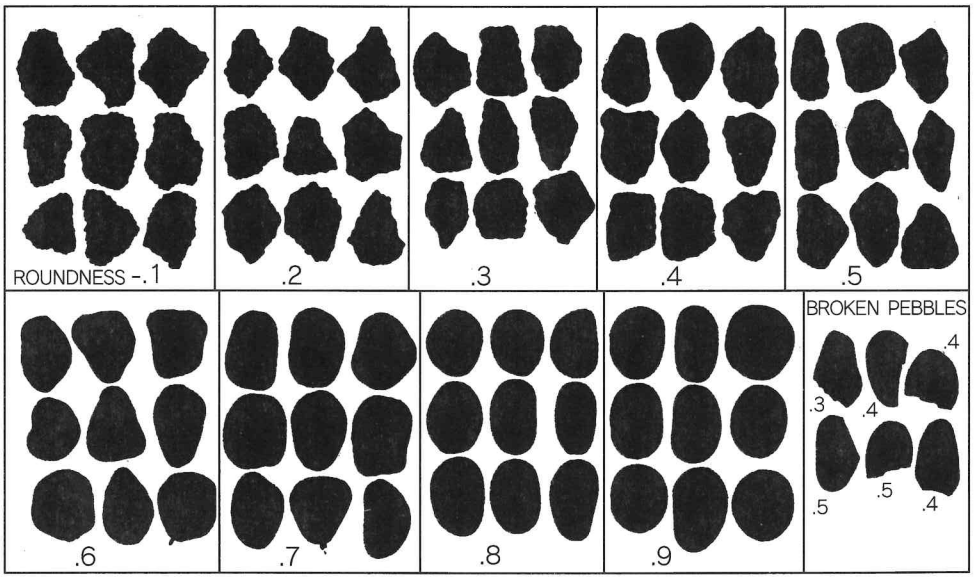
まず集石のグラフ（第52・53図）を見てみると、概ね2000ｇ前後を頂点に、円磨度0.4～0.5の礫が集中することがわかる。４区の集石の中には3000ｇ前後が頂点であるものもあるが、これは第55図の下を見て分かるように、４区の集石が立地する周辺の礫層の礫がやや大きめであるからであろう。

このことをふまえ、集石に隣接する礫を取り上げた３区４号集石周辺（第52図）、４区３号集石周辺（第53図）を見てみると、1000ｇ前後が頂点で、円磨度の数値が1ランク少ない。これはこの２集石周辺のみではな

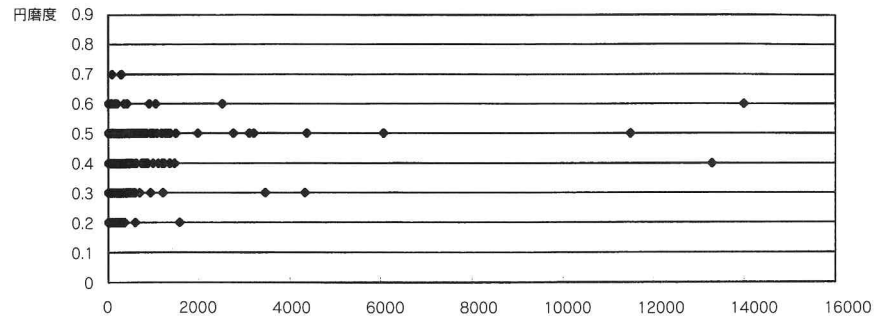


第52図　集石の構成礫の計測（その1）

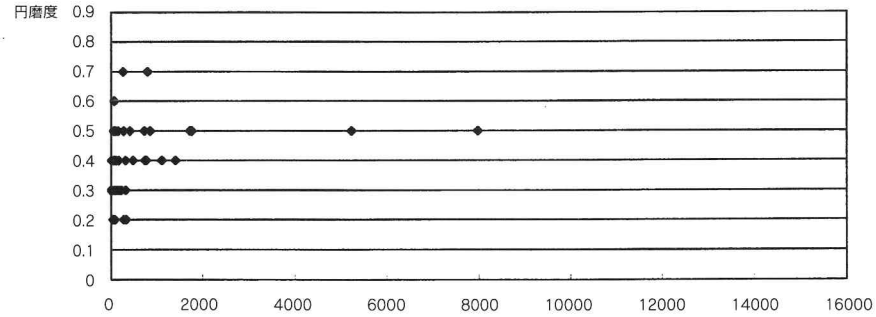




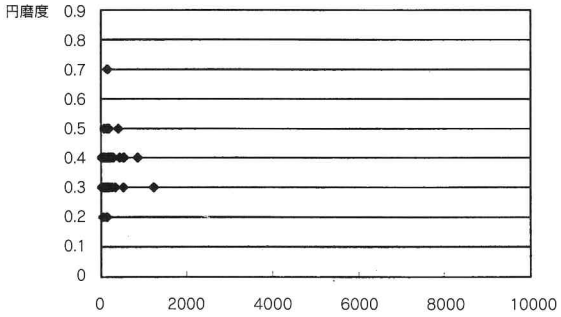
第53図　集石の構成礫の計測（その2）と礫の円磨度（下）



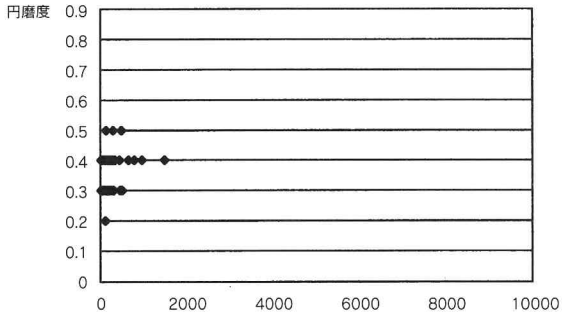
3区礫ピックアップ　(計測点数793点)　礫重量(g)



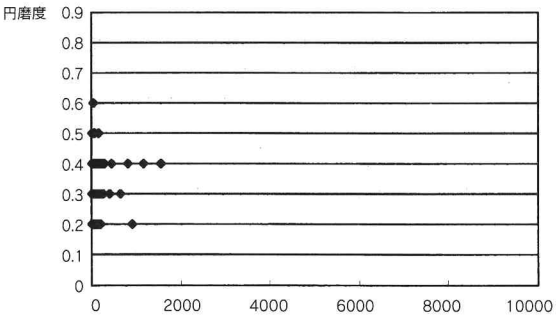
4区礫ピックアップ　(計測点数59点)　礫重量(g)



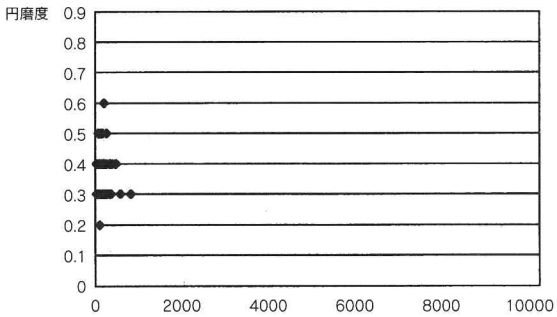
3区(西側)礫層グリッド1　(計測点数68点)　礫重量(g)



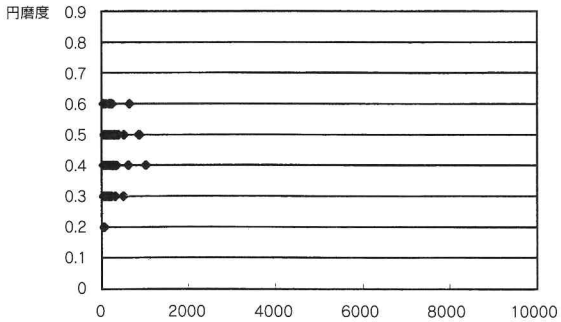
3区(西側)礫層グリッド3　(計測点数58点)　礫重量(g)



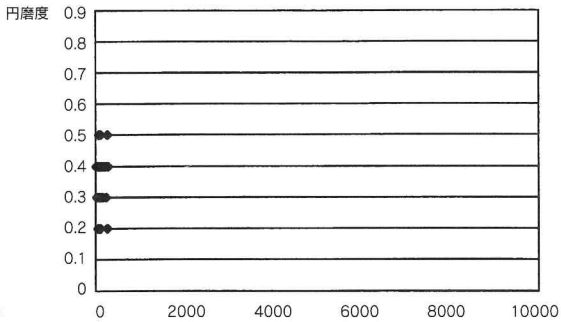
3区(西側)礫層グリッド4　(計測点数76点)　礫重量(g)



3区(西側)礫層グリッド4下層　(計測点数95点)　礫重量(g)

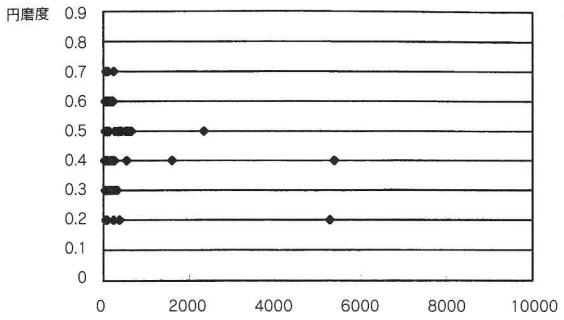


3区(西側)礫層グリッド10　(計測点数76点)　礫重量(g)

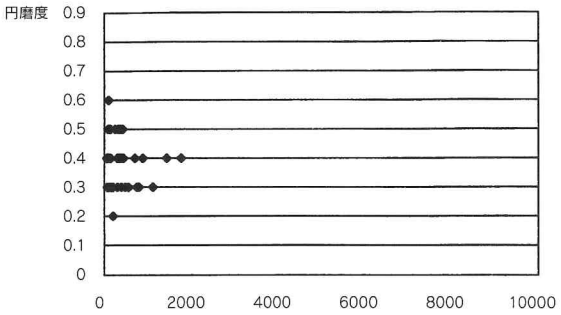


3区(西側)礫層グリッド10下層　(計測点数122点)　礫重量(g)

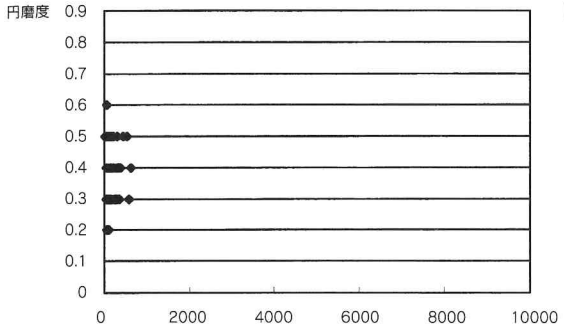
第54図　縄文早期包含中の構成礫の計測（その1）



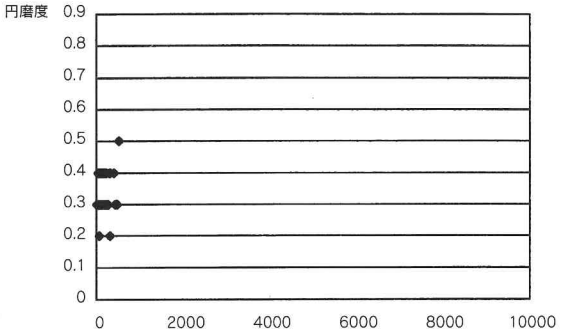
3区(東側)礫層グリッド6　(計測点数116点)　礫重量(g)



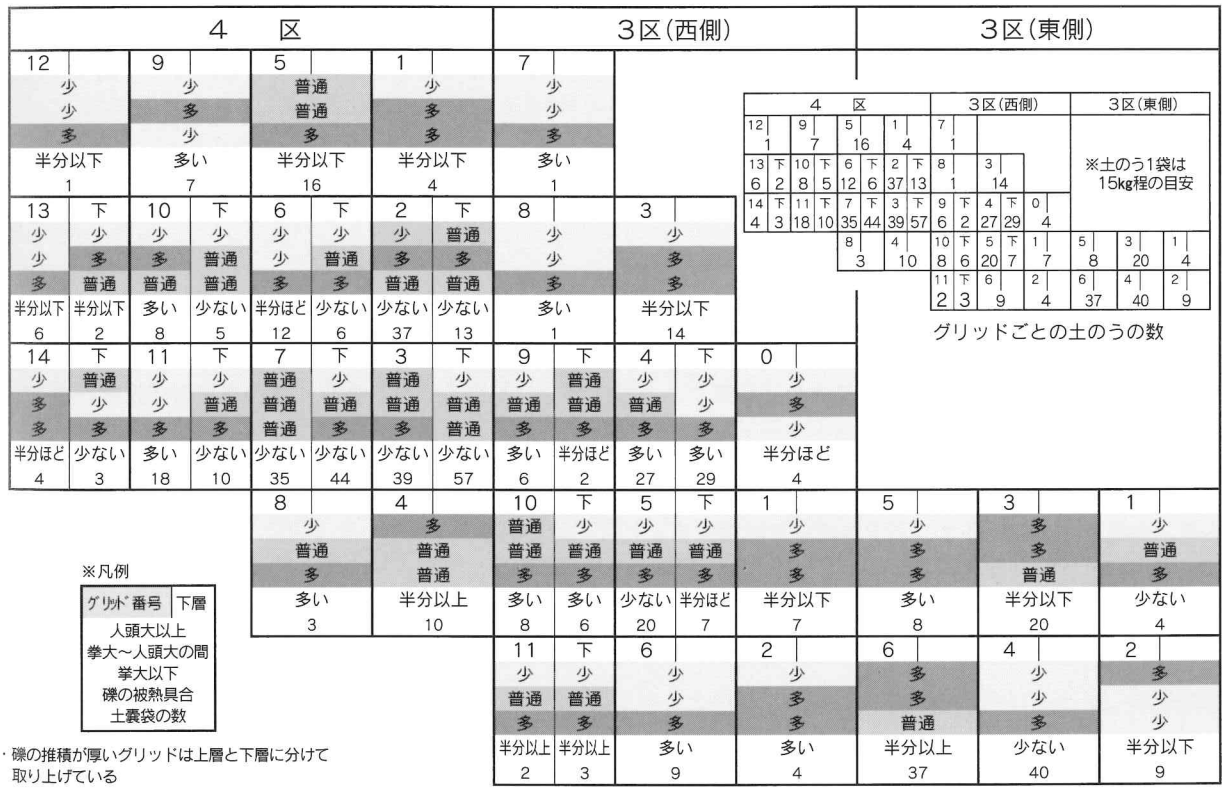
4区7礫群グリッド7　(計測点数47点)　礫重量(g)



4区礫層グリッド8　(計測点数76点)　礫重量(g)



4区礫群グリッド7下層　(計測点数71点)　礫重量(g)



第55図　縄文早期包含中の構成礫の計測（その2）

く、礫層自体が概ね1000ｇ以内で構成され、円磨度が0.3～0.4と集石に比べ1ランク少ないことからも、礫層自体が、このような礫で構成されていたと考えられる。また下層ほど礫が小さいことも指摘できる。いずれにせよ、第55図下の表も考慮にいれながら考えると、集石の上部を主に構成する礫はもっとも近場であるその辺、もしくは礫層が厚く堆積する３区と４区の境あたりで獲得した可能性を指摘できる。

さて、集石には前述の礫より重い礫も、また円磨度の数値も高いものも存在する。これらは礫層のグラフでは、３区（東側）礫層グリッド６（第55図）で確認することができる。この場所は調査区中最も低所に位置する。よって、下部遺構を構成する大きめの礫はより、川岸に近い低所から獲得してきたと考えられる。

最後に第54図上の、トータルステーションで取り上げた礫の３区・４区ごとのグラフをみてみる。その状況は、集石のグラフの分布状況に似る。これらの礫の大部分は被熱しており、上述したような礫層を構成する礫のみでは決してなく、集石に使用された礫を多く含むものと考えられる。

Krumbein 1941 “Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary partcles” Journal of Sedimentary Petrology, vol.11, no.2, pp.64－72

④集石群の立地について

集石は調理時の遺構ということを前提にたって話を進めていく。ここで今一度本遺跡の立地を確認すると、久留須川にむかって迫出している立地である。遺跡付近での久留須川は決して真直ぐではなく、南に向かって弧を描くような形である。山間であるため時期を遡っても下流のように流路がそれほど変化しているとも想定できない。縄文海進という大きな気候の変化があったとしても、山間であるためそれほど変化はないものと考える。ただし、長年の流れにより、より弧が強調されたものになったことは想定できる。よって縄文時代早期における久留須川は今よりも遺跡に近い位置を流れていたと考えられる。遺跡の南側から出土した礫層は、まさに当時の久留須川の河原であったと考えられる。ただし、実際川が流れる場所と一定の距離をもった場所、つまり雨などによる増水がない限り、つかってしまうようなことはない場所であったと思われる。このような場所に集石が営まれた。

ここで目の前に流れる川を素材に大胆な想定を行う。山間の小さな川を歩いてみると分かるが、川底は結構凹凸である。上流から流れてきた礫や砂は、川が曲がる最初の曲がりばなの箇所で一定の量が下流に流れきれなくなって、やがてあまたもの礫や砂などが集まり、水深を著しく浅くしてしまう。曲がりばなの次の曲線ではそういう現象が起こっているわけではなく、水深は深い。川の蛇行箇所は、これの繰り返しで水深が浅いところと深いところが隣り合わせである。よって、水深が浅い箇所に石などでせき止めをつくりそこに魚を追い込み、水面を板などで叩き、魚を気絶させ捕獲することも可能である。

捕獲した魚をさばく、調理する、場所として河岸段丘、とくに弧のように川に向かって迫出した場所は絶好の立地であったと考えられる。そのような場所に本遺跡の集石は営まれていると考える。（吉田）

中世後期～近世初頭

土師器椀について

本遺跡では第42図１のような土師質の椀が出土した。大分県では、戦国期に土師質や瓦質の同様なプロポーションの椀の出土が知られている。前者の調整はナデやケズリで、また成形段階についたと思われる布目痕がみられる。後者の調整はミガキである。また大分市横尾遺跡出土のもの（永松1999）のように外面に青磁の連弁を模したものもみられる。

さて、本遺跡のものの調整を今一度確認すると、やや摩耗するものの、外面は回転ヨコナデ？、内面はミガキである。布目痕は現状確認できない。という具合に調整は瓦質のものに近い様相を呈するものの、同様なプロポーションから同様な性質のものと考えてよいと思われる。現時点では横尾遺跡出土のものに輸入陶磁器を模したと考えられるものがあることから、輸入陶磁器を模すことによって成立した土師器もしくは瓦質のと考えておく。

なお、これらの大分県内での分布は、国東半島、大分市、豊後大野市で確認されていた（塩地1997）。よって今回の資料は、その南限を拡大したことになる。よってこの遺物の歴史的意義についても今後重要になるものと考える。

参考文献

塩地潤一　1997「戦国時代土師器椀についての一考察」『大分・大友土器研究』第16号、大分・大友土器研究会

永松正大　1999「XV　横尾遺跡群第72次調査（多武尾遺跡）」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度、大分市教育委員会

掘立柱建物について

本遺跡では、合計７棟の掘立柱建物を確認することができた。１区では２棟確認できた。３区と４区で夥しい数の柱穴が検出され、逆に建物を探すのに困難を極めたが、とりあえず５棟確認することができた。柱穴が夥しいこと、等高線に沿って柱穴の下端が似たようなレベルになることから、柵列の存在も想定したが、確認できなかった。隣接する２区では逆に柱穴の数も極端に少なく、また建物も確認できなかった。この柱穴の少なさは、２区と３・４区の柱穴の下端レベルが似たような数値を示すことから、決して後世の削平によるものではないといえる。よって建物が集中したのは３・４区であり、２区は空白地帯であったと指摘できる。その空白の具体的な機能については、発掘調査では確認できなかった。比較的早い段階で田畑化していたとも考えられるが、これ以上は筆者の力量の外である。いずれにせよこの２区と３区の柱穴の密集相違から、両者の境を、屋敷地の境とは言えないまでも、少なくとも建物の範囲と想定できる。

なお、これらの柱穴の時期は、出土遺物の状況から16世紀～17世紀中頃までが主であると考える。

墓について

本遺跡では、中世後期～近世初頭に造墓されたと考えられる墓が４基出土した。これらの平面プランはすべて楕円形と考えられる。３区１号墓と３区２号墓、３区９号墓と３区10号墓が、それぞれ隣接する。規模も前

者が長軸0.7m台、後者が長軸１mをこえるくらいと、隣接するもの同士で規模が似通っていることからそれぞれ近接する時期を想定できる。墓壙の主軸は１号墓と２号墓は相違し、９号墓と10号墓はほぼ同一である。よって９号墓と10号墓はより近接する時期、極端に言えば併存を考えることも可能であろうか。1号墓で李氏朝鮮系白磁（生産年代：16世紀後半～末）が1点出土していることから、タイムラグを考慮して３区１号墓と２号墓の２基は中世末以降と考える。また３区９号墓と10号墓ほ、９号墓で寛永通宝2点（古寛永）が出土しており、その鋳造年代1636年～1659年、および後述するように墓石をともなわないことから、近世初頭と考える。早桶などの使用が考えられないことも証左になると考える。

出土遺物は、それぞれで骨片が、そのほか1号墓で李氏朝鮮系白磁が1点、９号墓で寛永通宝2点（古寛永）がそれぞれ出土している。李氏朝鮮系白磁の碗の完形品は大分県内では本遺跡が初と考えられる貴重なものである。生産年代は前述のとおりである。また墓に副葬する輸入陶磁器は、大分では中国産の青磁の場合が多く、白磁であることは稀であることも注目に値する。一方、出土した寛永通宝（古寛永）２点に関しては六道銭を想定し、残りの４つの有無を確認したが出土しなかった。また青銅に変色した土も本２点の周辺のみであった。６つで構成されていたと仮定した場合、残り４つ（同じ銅銭の場合）は腐ってなくなってしまったと考えられなくもないが、青銅色化した土が他では確認できなかったことから木や紙といったものでの六道銭専用の銭の形代であった可能性もある。が、一方で最初から２つであった可能性もある。大分市中尾近世墓地（吉田1999）では、夫婦の墓と考えられる２基の墓のうち、夫と考えられる墓からは６つ、妻と考えられる墓からは２つ、それぞれ銭の出土をみ、男女間で銭の副葬数に差があることが指摘されている。これはこの遺跡に限ったことではなく、大分市女狐近世墓地（田中1996）でも男性で６つ、女性で２ないし１つ、またはなし、幼児で１つまたはなし、と年齢性差で副葬する銭の枚数が相違する傾向が指摘されている。

いずれにせよ、六道銭の習俗は中世からも散見されるが、むしろ増加するのは近世であり、本例もこれに合致するものと考える。

３区10号墓では、遺構平面検出時に検出面で自然石がたった状態で確認でき、墓の墓標の可能性も考えたが、最終的には前述のように墓石とは確定しなかった。このように17世紀初頭～中葉にかけて墓石がみられなくなる現象は、大分のみならず、当時の日本の中枢以外の九州～東北という周縁地域で認識されており、本遺跡もそれを追認する形となった。

これらの中世後期～近世初頭に造墓されたと考えられる４基の墓であるが、ここに中世～近世に社会の枠組みが変化するに至っても、墓の上ではまだ変化がみられないということが指摘できる。このことがひとつの遺跡の中で確認できるという点で本遺跡は重要である。

参考文献

田中裕介　1996「銭貨」『女狐近世墓地』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書５、大分県教育委員会

吉田　寛　1999『中尾近世墓地』大分県教育委員会

墓と建物について

本遺跡では、３区と４区で夥しい数の柱穴が検出され、逆に建物を探すのに困難を極めたが、とりあえず５棟確認することができた。これらの柱穴の時期は、出土遺物の状況から16世紀～17世紀中頃までが主である。よって一部前述した４基の墓と併存していた可能性を指摘できる。よって現象的には「屋敷墓」の様相を呈していると考えられる（註１）。

これらの墓の被葬者は屋敷の当主層と想定する。では、この屋敷の当主層はいかなる階層であったのであろうか。

本遺跡が存在する小字が「神ノ原」であり、東側には「神内」「市屋敷」といった有力者の屋敷の存在を髣髴させるような小字が存在するし、またもう少し東側、１ｋｍ程のところの高台には縄文～弥生時代にかけての良好な資料が発掘された源六原遺跡が立地し、その眼下は「向船場」という地名が残る地区である。第２章で述べたとおり、当遺跡周辺は、久留須川・赤木川・横川川の３川が合流する交通の要所であり、現在でも旧直川役場（現：佐伯市直川振興局）・幼稚園・保育園・小学校・中学校・郵便局・農協と重要な施設が集中する場所である。これらの中で最も好立地なものは、高台にある小・中学校である。現在は戦後の校舎造営により良好な遺構の存在は確認できない。しかしこの場所は、当遺跡が立地する背後の高台にあたり、墓や掘立柱建物が存在した時期に、この周辺に実際に住み治めた在村領主層とも言うべきクラスが、この高台に存在した可能性は十分にあり得る。

神ノ原遺跡で確認できた墓の被葬者は、この階層を支える1ランク下の階層のものであると想定できる。

さて、現在でも見られるような墓碑をもつ墓の形態になるのは１７世紀後半である。当初は少数であり、限られた程度である。ごく限られた家の家長のみ墓碑が伴なう墓に葬られる程度と想定されている。18世紀以降徐々に墓碑を伴なう被葬者は家長からその妻や子にまで及び、そして全てに及んでいく。

この流れのなかで、神ノ原遺跡の墓の被葬者像を想定すると、在村領主層ともいうべきクラスを支えた１ランク下の階層の家長と想定することが可能である。

註１：「屋敷墓」に関しては中世前期限定する考え方のほか、中世前期と近世とする立場、中世前期～近世にかけてとする立場があるが、これらの見解は論者の立脚する立場によって相違する。これらひとつひとつの立場を検討するべきであろうが、ここではその紙幅もなく、また筆者の力量の外である。現時点で筆者は、現象としては屋敷と単独もしくは数基の墓というセット関係は中世前期から近世まで確認できるものと考える。そしてその意義についてはさておき、ここではその現象を便宜上「屋敷墓」という言葉で言い換えて使用している。

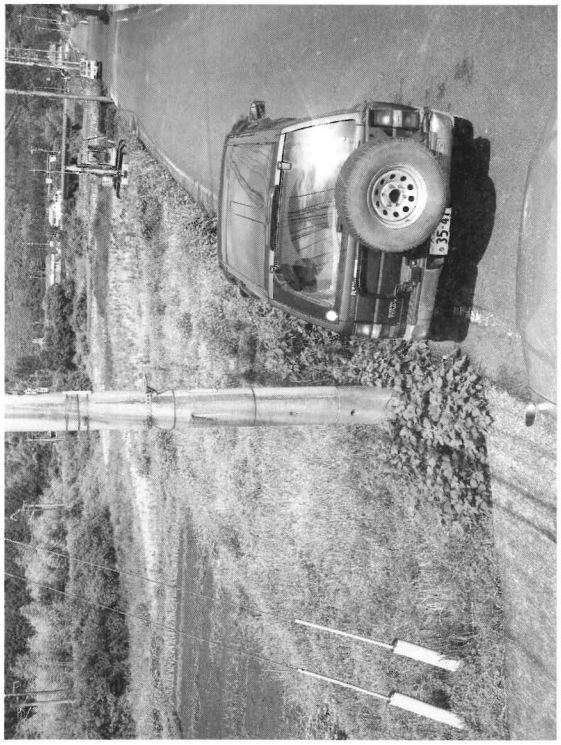
（吉田）

参考文献

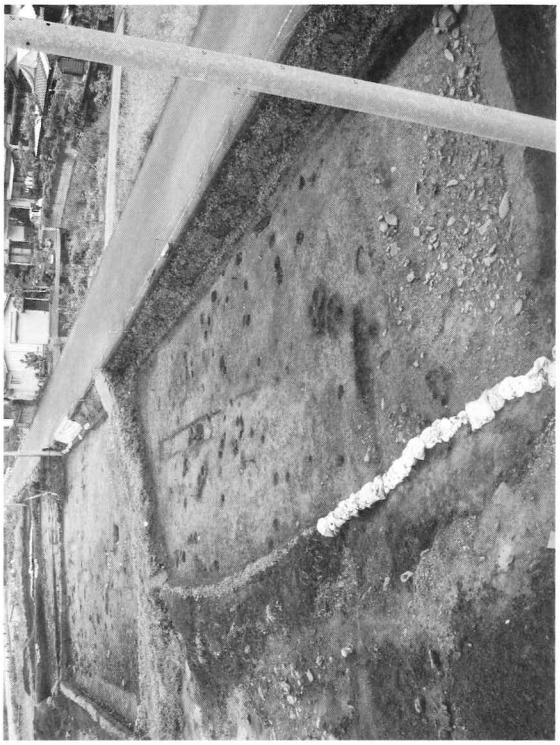
後藤一重・浜田教靖　編　1995『豊後国田原別符の調査Ⅲ　波多方の歴史』大田村教育委員会

橘田正徳　1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ、日本中世土器研究会

写真1



1．調査区：調査前（東から）



3．1・2区全景（東から）

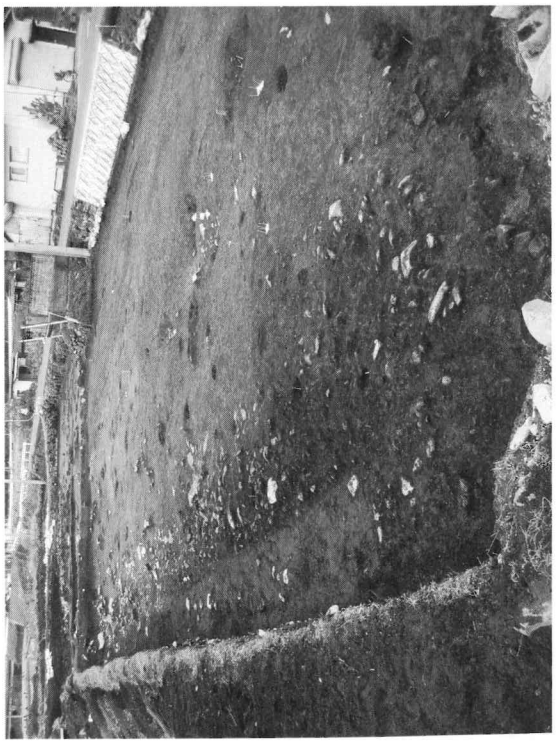
2．調査区遠景（西から）

4．調査区近景（西から）

1区全景（東から）

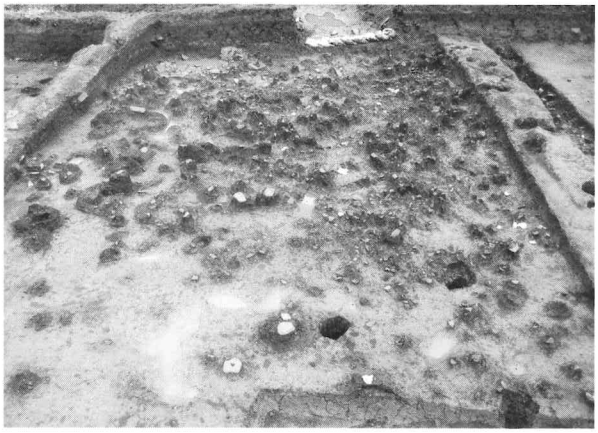
2区全景（北東から）

1区全景（北西から）

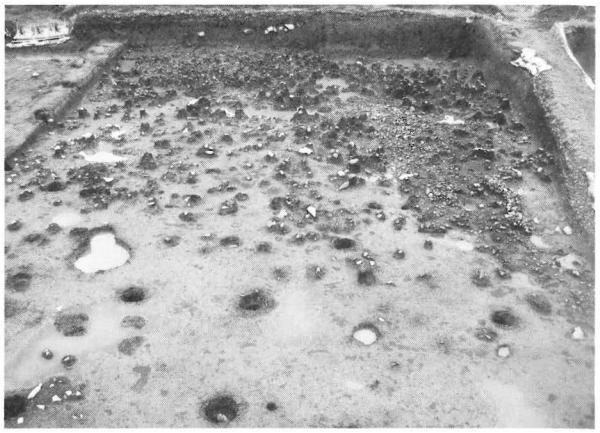


2区全景（南東から）

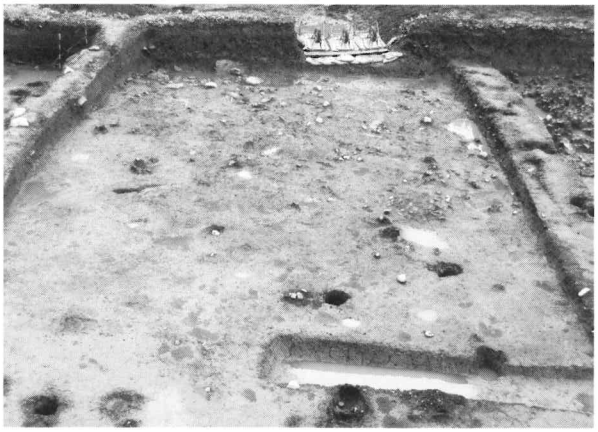
写真3



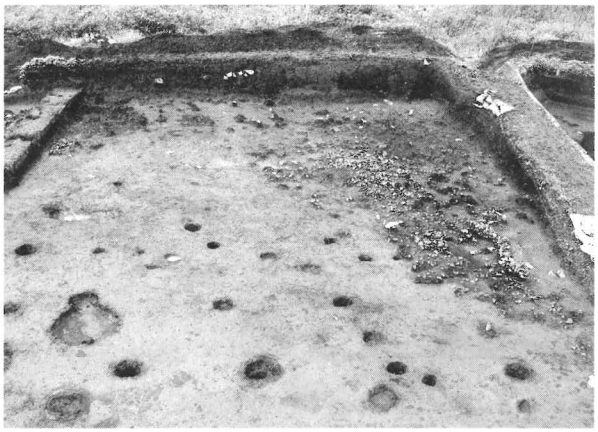
1．３区（東側）：縄文早期検出面（その１）（北から）



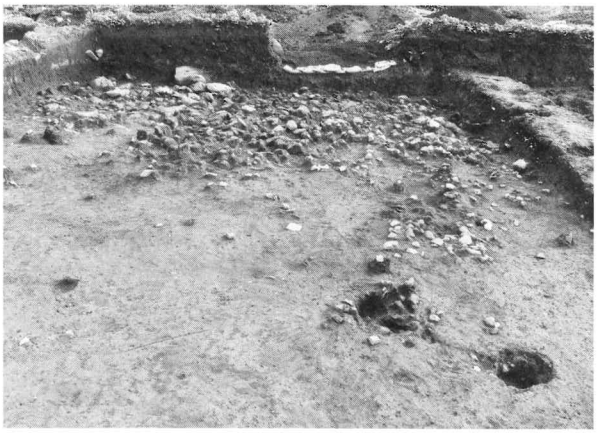
5．３区（西側）：縄文早期検出面（その１）（北から）



2．３区（東側）：縄文早期検出面（その２）（北から）

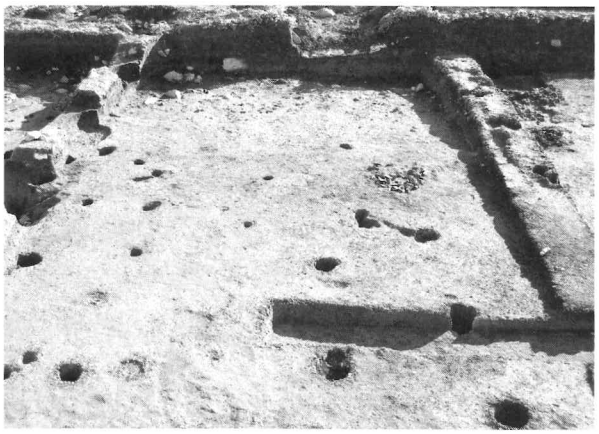


6．３区（西側）：縄文早期検出面（その２）（北から）



3．３区（東側）：縄文早期検出面（その３）（北から）

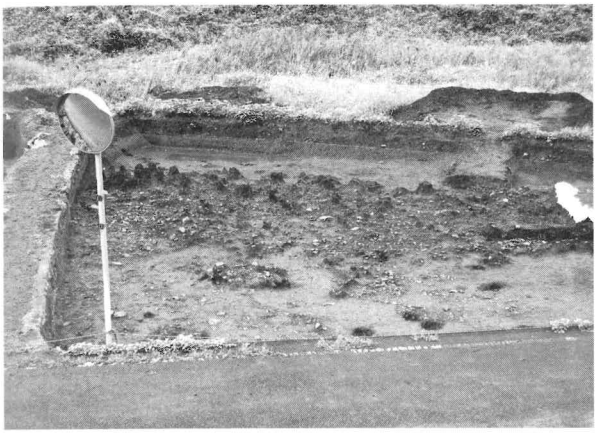
7．３区（西側）：縄文早期検出面（その３）（北から）



4．３区（東側）：縄文早期検出面（その４）（北から）

8．３区（西側）：縄文早期検出面（その２）、礫層（南から）

9. 4区：縄文早期検出面（その1）（北から）

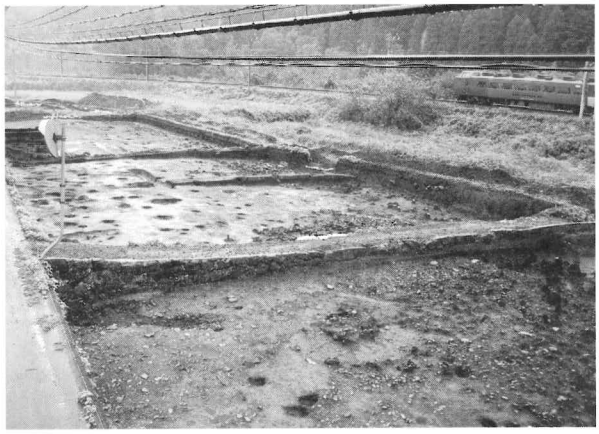


10. 4区：縄文早期検出面（その2）（北から）

11. 4区：縄文早期検出面（その3）（北から）

12. 3区（西側）：縄文早期検出面（その2）、礫層（南東から）

13. 3・4区：縄文早期包含層検出途中（北西から）



14. 3・4区：縄文早期包含層検出途中（北西から）

15. 3・4区：縄文早期包含層最終検出面（北西から）

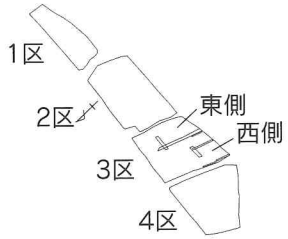
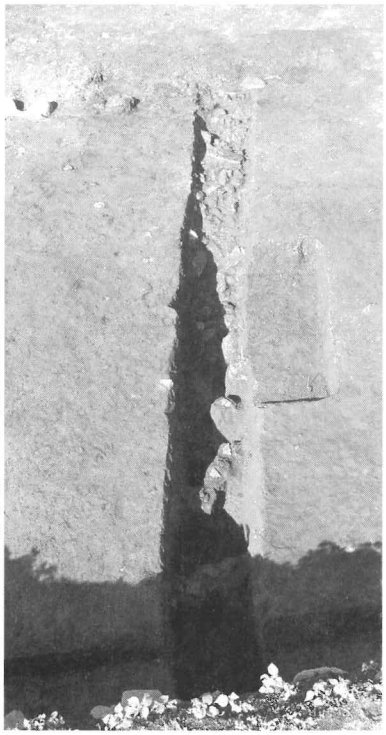


写真5

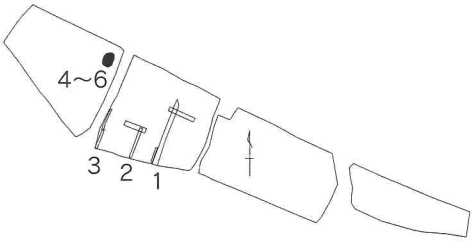
1. 3区中央土層サブトレンチ（南から）



2. 3区（東側）中央サブトレンチ（南から）

3. 3区西壁面サブトレンチ（北から）

4. 4区1号土坑（北から）



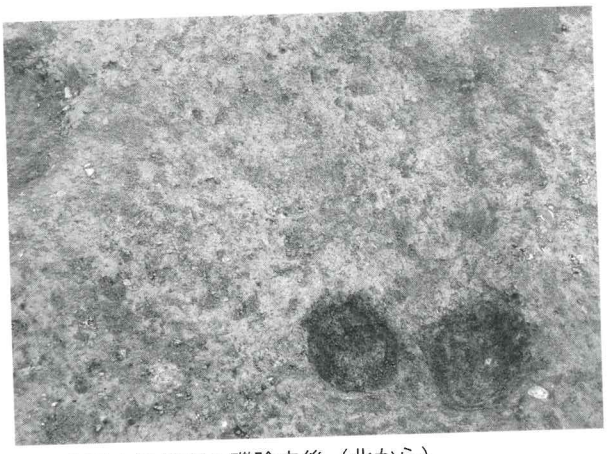
5. 4区1号土坑土器検出状況（北から）

6. 4区1号土坑完掘状況（北から）

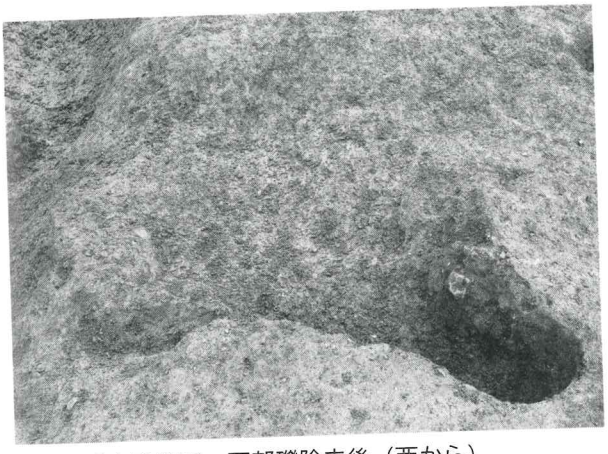
1．１区１号集石：検出時（西から）

4．３区１号集石：検出時（北から）

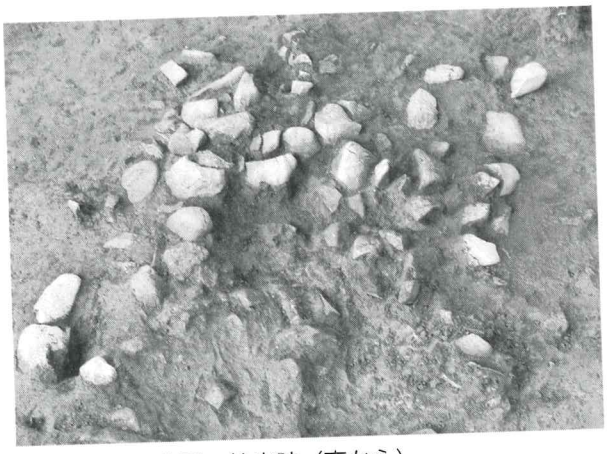
2．１区１号集石：上部礫除去後（西から）



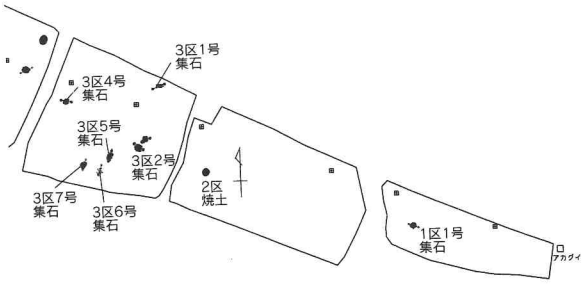
5．３区１号集石：礫除去後（北から）



3．１区１号集石：下部礫除去後（西から）



6．３区２号集石：検出時（南から）

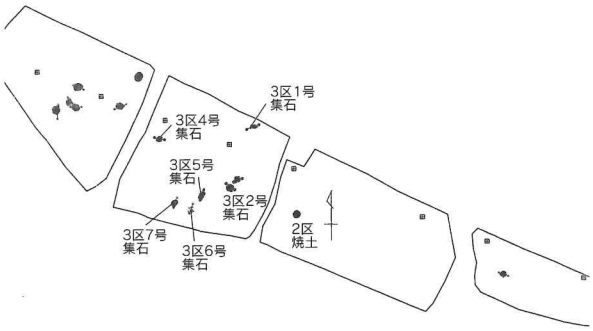


7．３区２号集石：上部礫除去後（南から）

写真7

1．３区４号集石：遠景（西から）

2．３区４号集石：上部礫半切状況（北から）



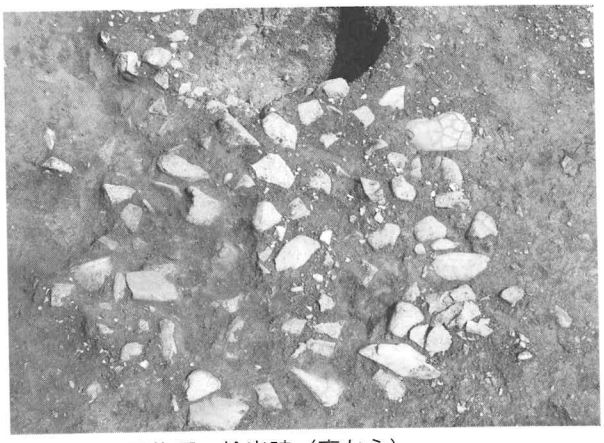
3．３区４号集石：上部礫除去後（北から）

5．３区４号集石：下層（礫層）半切状況（北から）

4．３区４号集石：下部礫除去後（北から）

6．３区４号集石：下層（礫層）半切断面（北から）

1．３区５号集石：検出時（東から）

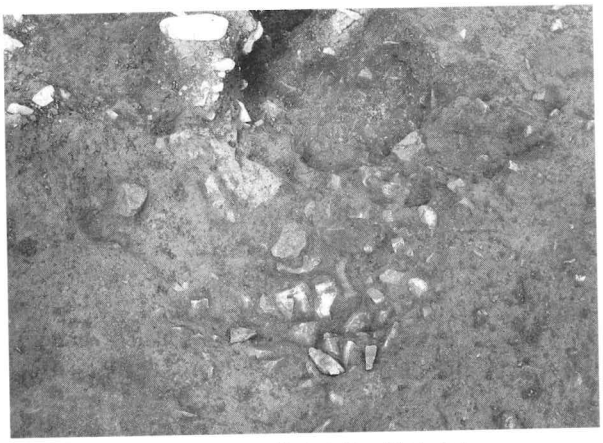


5．４区１号集石：検出時（東から）

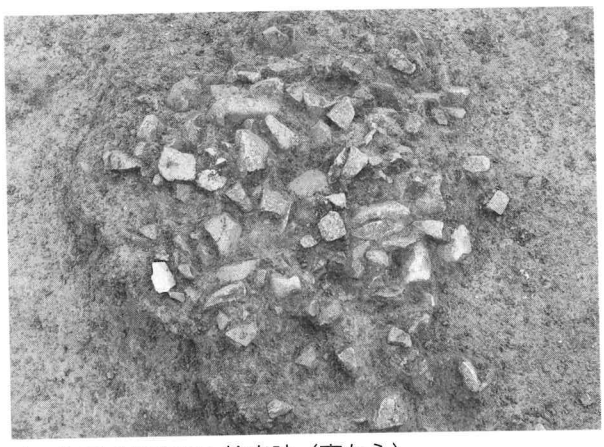
2．３区５号集石：礫除去後、下層の検出（東から）

6．４区１号集石：上部礫除去後（東から）

3．３区６号集石：検出時（南から）



7．４区１号集石：下部礫除去後（東から）



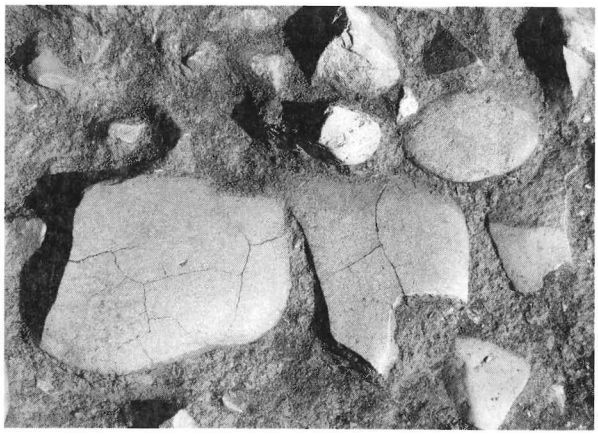
4．３区７号集石：検出時（南から）

8．４区１号集石：被熱著しい礫（東から）

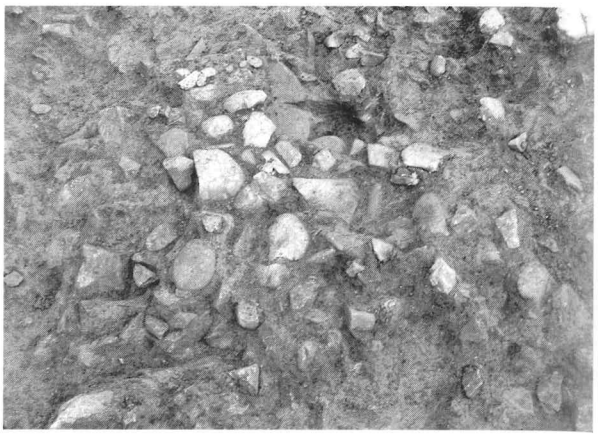
1．４区２号集石：検出時（南から）

2．４区２号集石：礫除去後（南から）

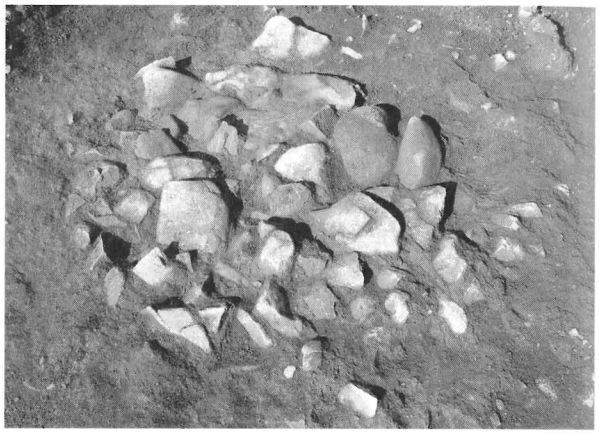
3．４区４号集石：検出時（南から）



4．４区４号集石：被熱著しい礫（南から）

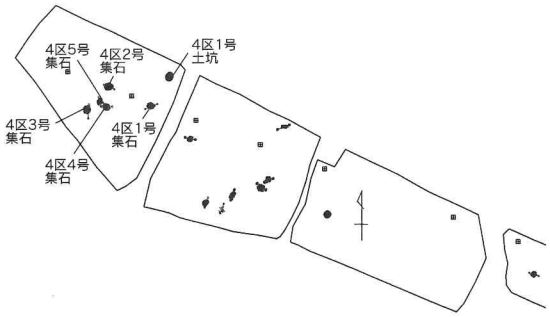


5．４区３号集石：検出時（南から）



6．４区３号集石：上部礫除去後（南から）

7．４区３号集石：下部礫除去後（南から）



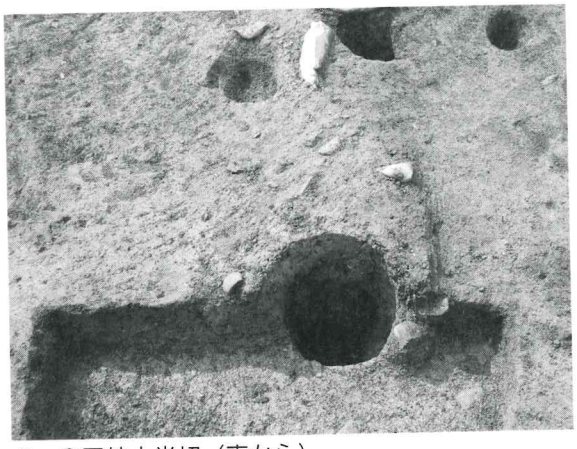
1．４区５号集石：検出時（西から）

2．４区５号集石：礫検出時（西から）

3．２区２号土坑（南から）

4．２区1号土坑（東から）

5．２区焼土（西から）

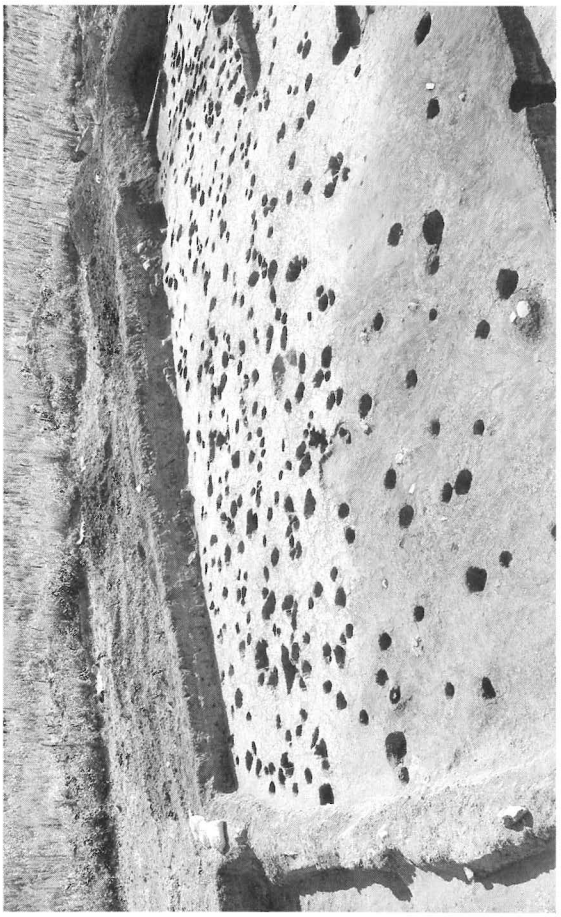


6．２区焼土半切（東から）

7．２区焼土土層断面（東から）

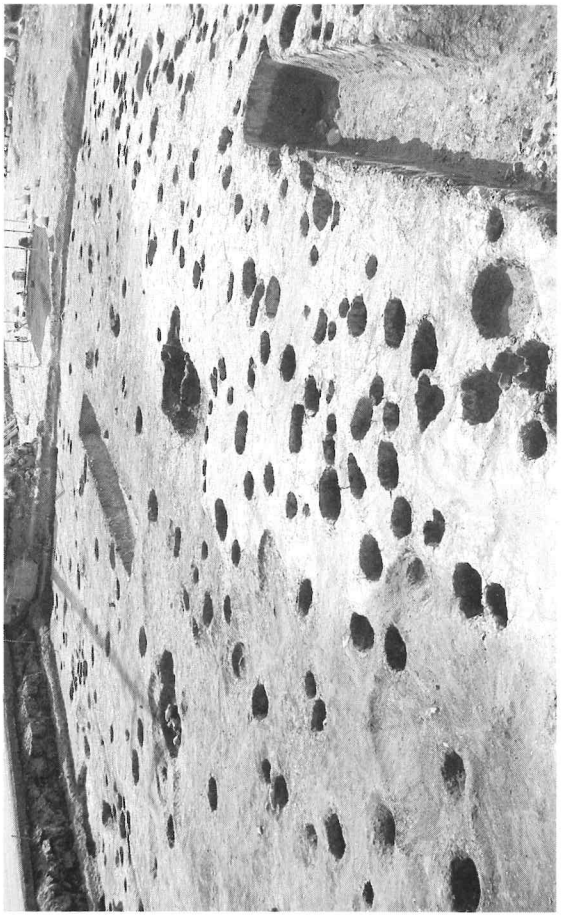
8．２区３号土坑

写真11

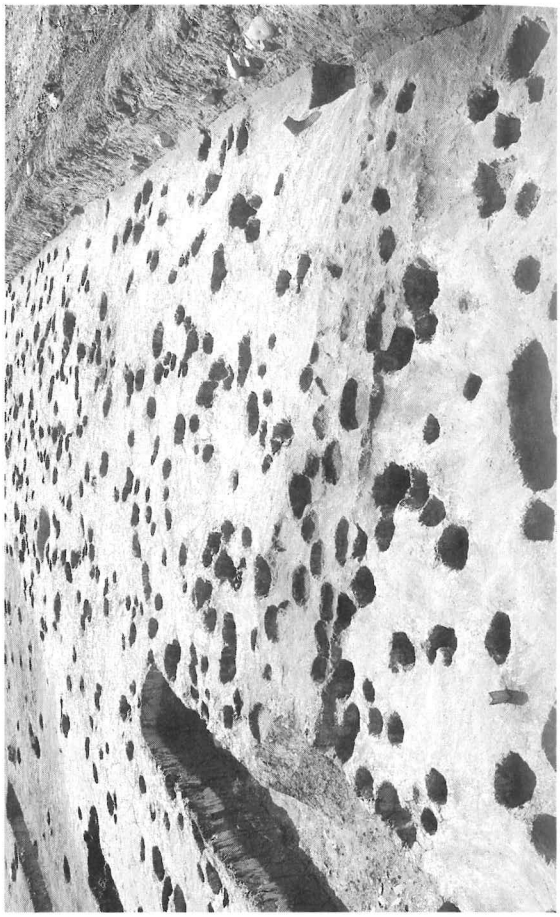


1．3区1次検出面：南東側（北から）

2．3区1次検出面：南西側（北東から）



3．3区1次検出面：東側（西から）



4．3区1次検出面：東側（西から）

3区１次検出面：東側（北西から）

４区１次検出面：西側（北東から）

４区１次検出面：東側（北から）

４区１次検出面：南東側（東から）

写真12

写真13

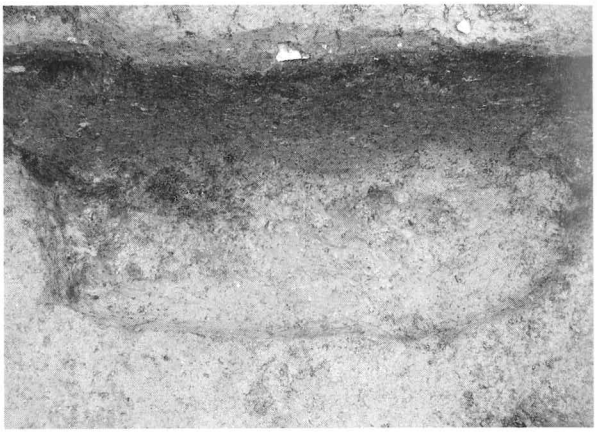
1. 3区1号墓（東から）

2. 3区1号墓：白磁除去後（東から）

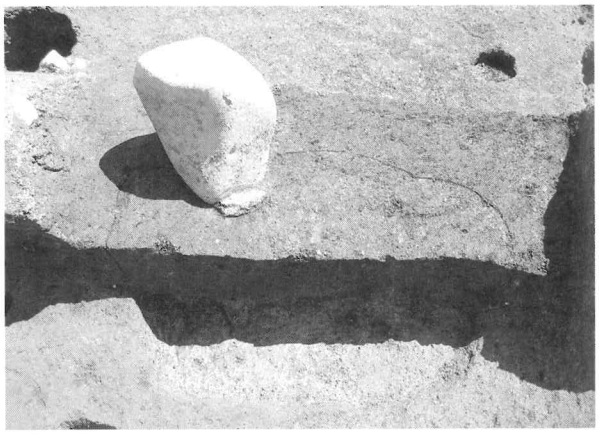
3. 3区1号墓：頭骨（東から）

4. 3区2号墓（東から）

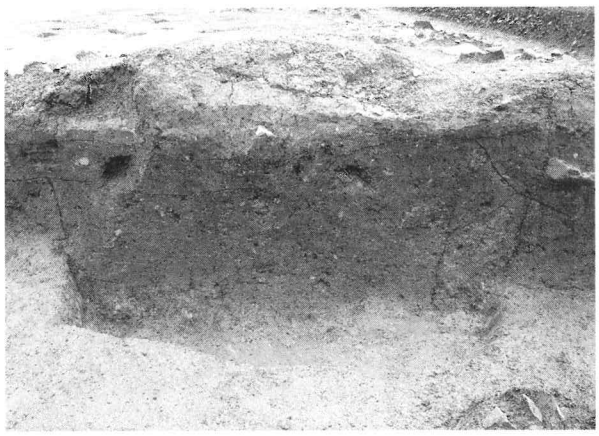
5. 3区2号墓：歯片（東から）



6. 3区9号墓（西から）

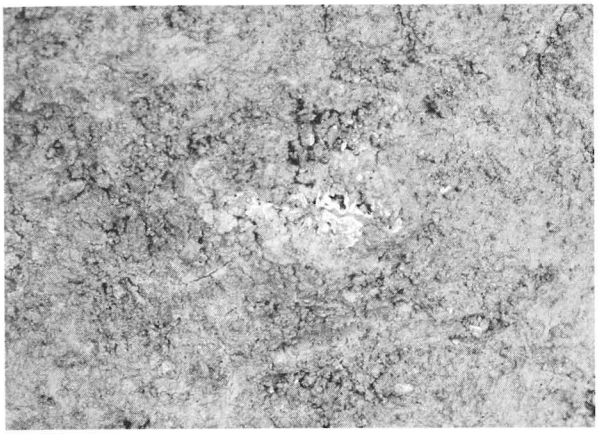


7. 3区9号墓検出状況（西から）



8. 3区9号墓土層（西から）

9. 3区9号墓完掘状況（西から）



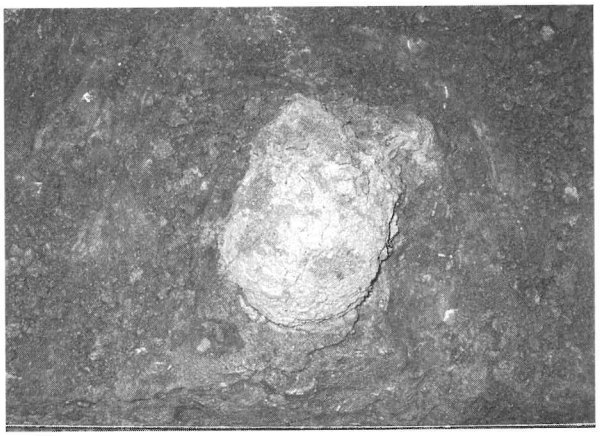
10. 3区9号墓：歯片（西から）

11. 3区9号墓：出土銭貨（西から）

12. 3区10号墓（西から）

13. 3区10号墓：横から（西から）

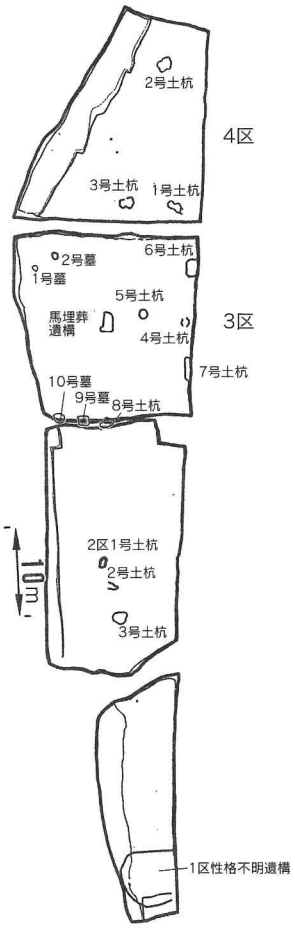
14. 3区10号墓完掘状況（西から）



15. 3区10号墓：頭骨（西から）

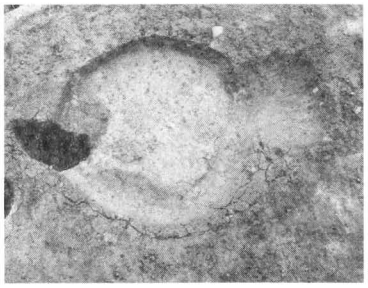
16. 3区10号墓：頭骨除去後（西から）

1．１区性格不明遺構（北から）

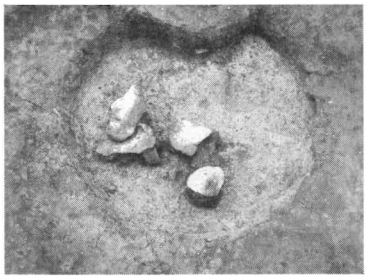


2．１区性格不明遺構（東から）

6．３区８号土坑（西から）

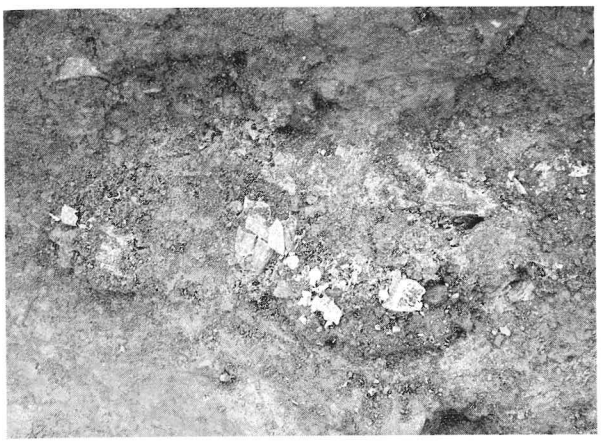


3．３区４号土坑（北から）



4．３区５号土坑（北から）

5．３区５号土坑土層断面（西から）



7. 馬頭骨（東から）

8. 3区馬埋葬遺構（南から）

9. 3区馬埋葬遺構完掘状況（南から）

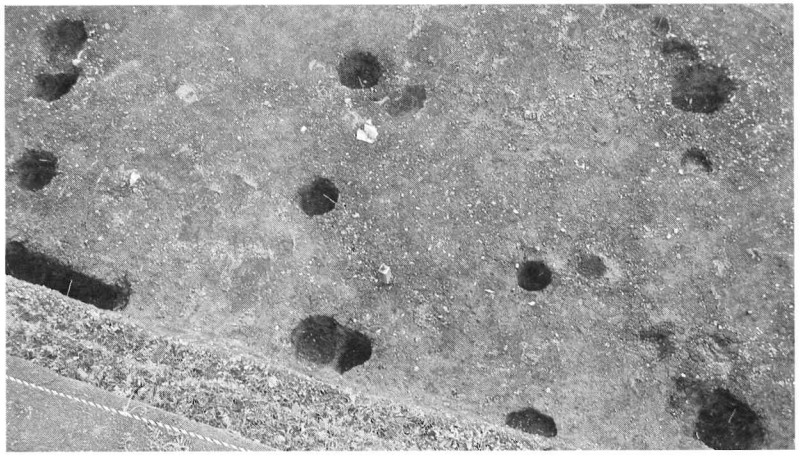
10. 3区6号土坑（北から）

11. 3区6号土坑完掘状況（右）と3区道路状遺構（北から）

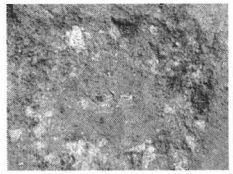
12. 3区道路状遺構（南から）

13. 3区道路状遺構：石抜きとり後（北から）

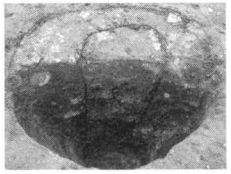
1．１区掘立柱建物（北東から）



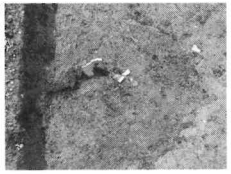
2．１区４号掘立柱建物（北から）



3．柱穴検出状況



4．柱穴断面

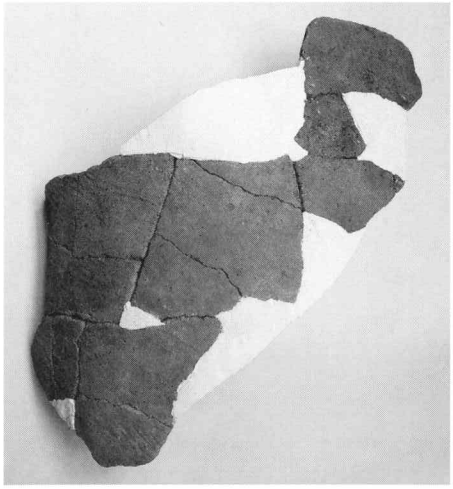


5　唐津溝縁皿出土状況（北から）

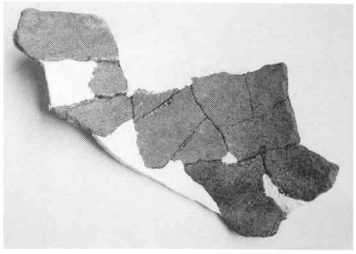
8．新旧道路（東から）

6．１区道路検出状況（東から）

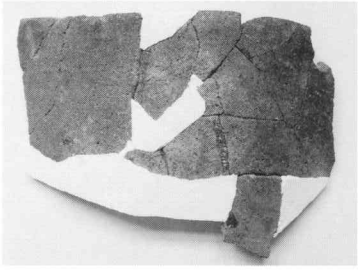
7．１区道路検出状況（東から）



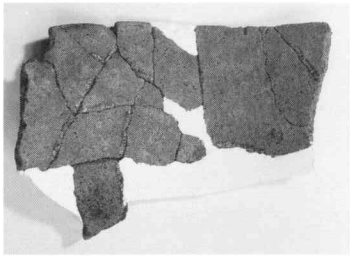
1．４区１号土坑出土土器外面



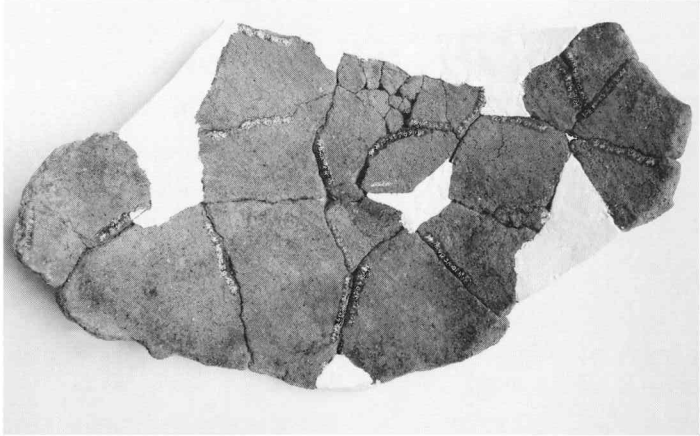
2．４区１号土坑出土土器内面



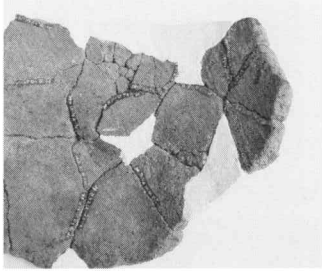
3．４区１号土坑出土土器外面



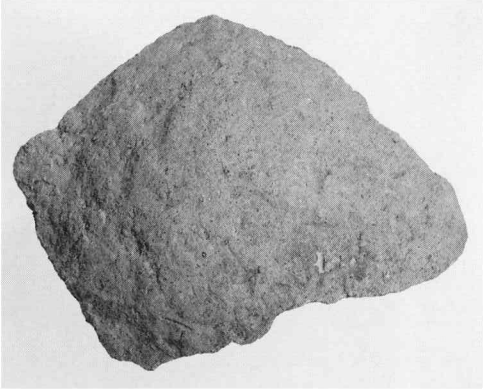
4．４区１号土坑出土土器内面



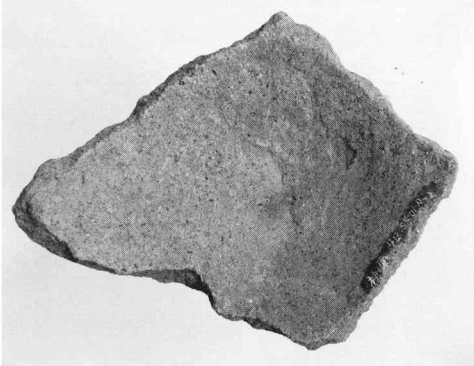
5．４区１号土坑出土土器内面



6．４区1号土坑出土土器内面調整

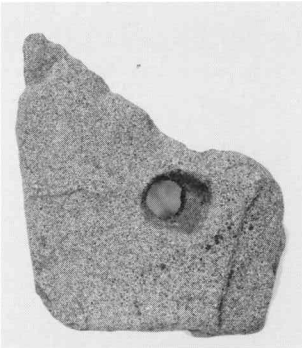


7．４区１号土坑出土土器底部外面



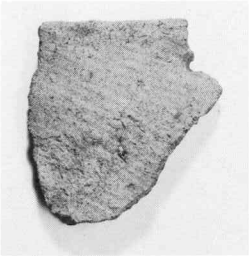
8．４区1号土坑出土土器底部内面

9．4区1号土坑出土石器（北から）

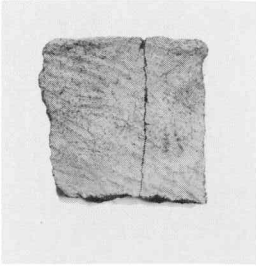


10．4区１号土坑出土石器

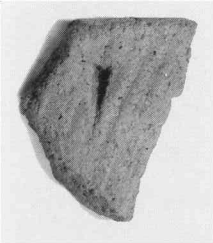
12. 第17図10（条痕文：口縁端部ナデ調整）



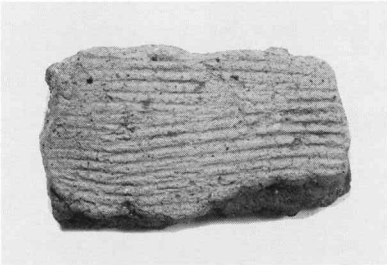
13. 第17図17（条痕文）



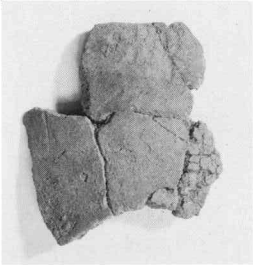
14. 第17図18（条痕文）



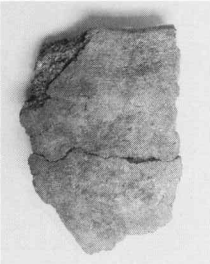
15. 第17図22（条痕文：口縁部直下刺突）



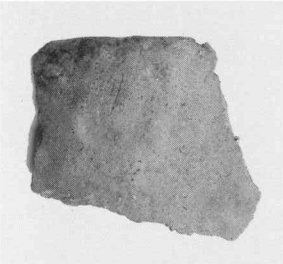
16. 第18図12（溝の深い条痕）



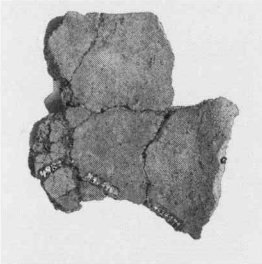
17. 第19図1（無文：外面）



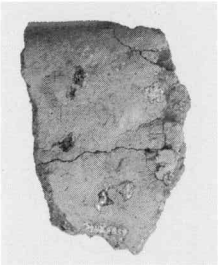
19. 第19図3（無文：外面）



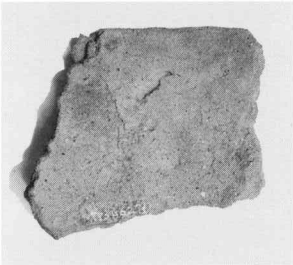
21. 第19図12（無文：外面）



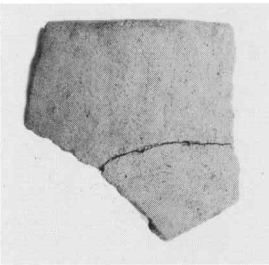
18. 第19図1（無文：内面）



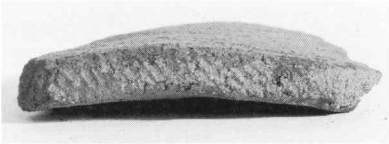
20. 第19図3（無文：内面）



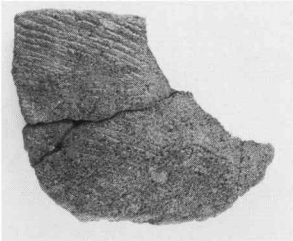
22. 第19図12（無文：内面）



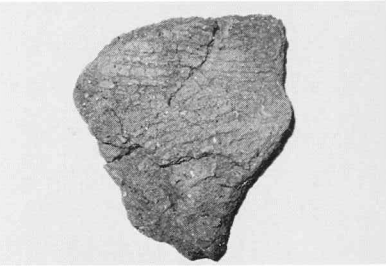
23. 第12図1（無文：工具ナデ）



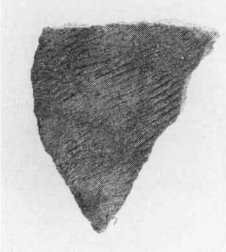
24. 第17図7：口縁端部刻目



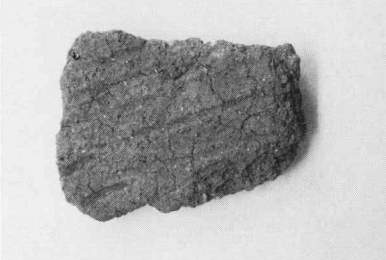
25. 第21図1（撚糸文）



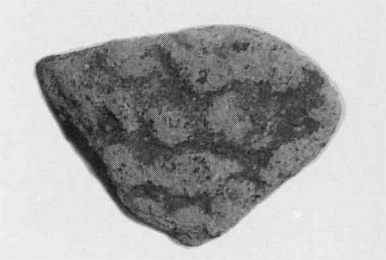
26. 第21図5（撚糸文）



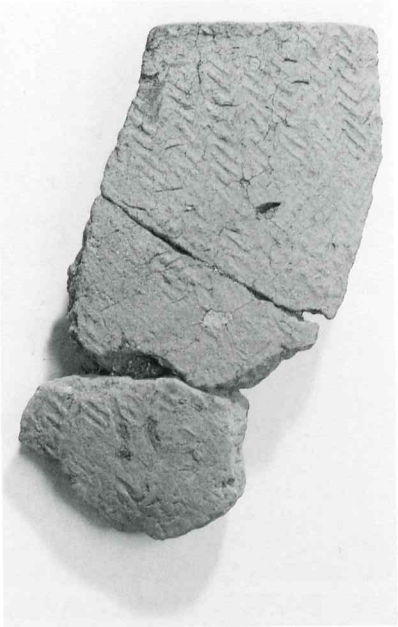
27. 第21図6（撚糸文）



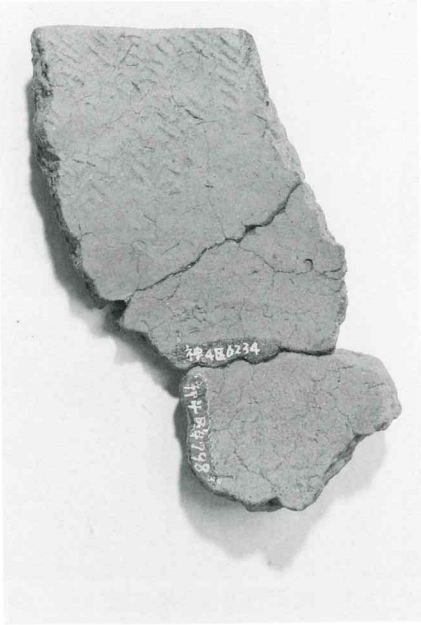
28. 第21図2（撚糸文）



29. 第21図12（押型文：楕円）



30．第21図７（押型文：山形外面）



31．第21図７（押型文：山形内面）

32．第22図１（底部外面）

33．第23図７：有舌尖頭器

34．第23図８：有舌尖頭器

35．第23図９：有舌尖頭器

36．第23図１：小型石鏃

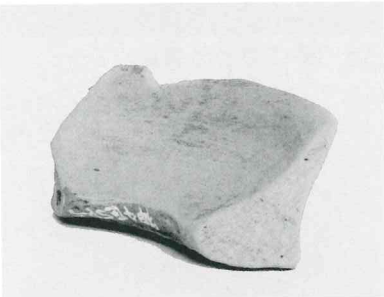
37．第23図５：石鏃

38．第23図６

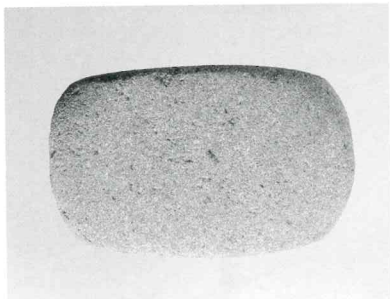
39．第23図10：ラウンドスクレイパー

40．第26図１：片刃礫器

42．第33図６：弥生土器底部

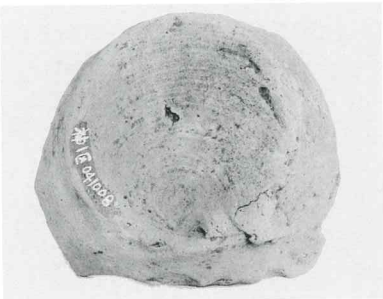


44．第42図６：土師質土器



41．第30図７：石鹸形磨石

43．第33図６：弥生土器底部



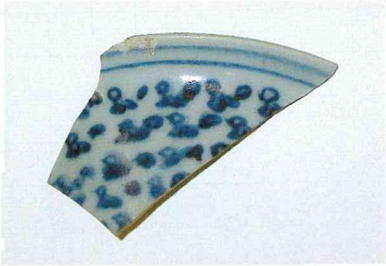
45．第42図４：土師質土器

46. 第20図5：無文（ミガキあり）

47. 第18図3：内面やや白色の縄文土器

48. 第42図1：土師質土器碗

50. 第42図12：青磁底部



51. 第42図19：景徳鎮

49. 第42図1：土師質土器碗内面

52. 第42図20：漳州窯碗

53. 第42図20：漳州窯碗外面

54. 第42図17：白磁

55. 第42図13：青磁

56. 第42図13：青磁（見込みの文様）

57. 第42図13：青磁高台

58. 第42図14：青磁

59. 第42図14：青磁高台

60. 第42図11：青磁（焼成不良）

61. 第37図1

62. 第37図1：高台

63. 第43図7：擂鉢

64. 第43図8：唐津溝縁皿

65. 第43図9

66. 第43図10：陶胎染付

67. 第43図11

68. 第43図13：灯芯押正面

69. 第43図13：灯芯押背面

70. 第43図12：内面

71. 第43図12：外面

72. 第47図5

73. 図化していない陶磁器：外面

74. 図化していない陶磁器：内面

報告書抄録

ふりがな	ごうのはるいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	神ノ原遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	清水宗昭・田中良之・石川　健・加藤久雄・戸高浅生・竹中伸吾・吉田和彦(編集)
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876－8585　大分県佐伯市中村南町４番１号
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村コード	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ごうのはるいせき 神ノ原遺跡	さいきしなおかわ おおあざかみなおみ 佐伯市直川 大字上直見	420	453008	32度 53分 42秒	131度 46分 26秒	2005.06.07 ～ 2005.10.13	1270m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構築	主な遺物	特記事項
神ノ原遺跡	包蔵地 集石 墓	縄文時代早期 中世後期～ 近世初頭	集石 墓・掘立柱物・土壙・柱穴 馬埋葬遺構	縄文土器・石器 (有舌尖頭器など) 陶磁器 (李氏朝鮮系白磁碗・肥前灯芯押など)	・中世後期～近世初頭(上層)と縄文早期(下層)の複合遺跡。 ・県内で出土例の少ない有舌尖頭器出土。 ・墓より李氏朝鮮系白磁碗出土。

神ノ原遺跡報告書

編集・発行　佐伯市教育委員会
〒876－8585
佐伯市中村南町4番1号
電話（0972）22-4059

印　　刷　佐伯印刷株式会社
〒876-0823
佐伯市女島9032
電話（0972）23-0170